七つの弾丸

なーこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
七つの弾丸

【Ｎコード】
Ｎ６９５１Ｕ

【作者名】
なーこ

【あらすじ】
女子大生・岩壁鈴子は、伊佐崎三十郎警部に「撃った者の罪を一切問わないと、約束された弾丸が存在する」という都市伝説を聞かされる。その弾丸に興味を惹かれた鈴子は、伝説の話を聞くために宗教学者の芦木麻子に会うことになった。時を同じくして、伊佐崎警部は、ある殺人事件の捜査が、警察上層部からの圧力で、思うように進まない状況に追い込まれていた。麻子は「殺人事件は、芦木家に保管されていた弾丸で行われた」と打ち明けた・・・。
物語は、警視庁上層部の不審な動き、伝説を信奉する謎の宗教組

織と政治結社の密約が明らかになり、大きく動き出している。元公安課刑事の北爪は、宗教組織の用心棒をしているが、何かを企んでいる様子。ブラック・スネークとは？　伝説の信奉者とは？　弾丸の資格者とは？　二人の推理力が試されている。

第一話　戒めの寓話

世界の権力者たちは、自分たちの権力が隅々まで行き渡るよう、お互いの権力を守るために、力の象徴だった拳銃の弾丸（だんがん）を使って、ある密約を交わした。その弾丸を撃った者の罪は、一切問われない、そして撃った者への報復も、絶対に許されないとの約束だった。権力者たちは、いつでも撃ち殺されて、構わない覚悟と引き換えに、無法者が現れれば、いつでも撃ち殺して構わない権利を得た。

弾丸には、唯一無二となるように、その一つ一つに美しい彫金が施された。権力者たちは、弾丸を拳銃に込めると、お互いの権利を侵さないように誓った。そして、最初の一発目の弾丸は、権力者たちが、破れぬ誓いを試すために、弾丸に装飾を施した彫金師（ちょうきんし）を撃ち殺した。弾丸に込められた秘密とともに、残りの弾丸は各々が持ち帰った。世界の調和は、核兵器が登場するまでの一〇〇年間、権力者が手にした超法規的（ちょうほうきてき）な弾丸によっても保たれていた。

「こんな都市伝説で良かったのかね？」

と、伊佐崎三十郎（いさざきさんじゅうろう）警部は、同僚刑事の妹の岩壁鈴子（いわかべすずこ）に言った。

「すごく参考になったわ、警察にも都市伝説ってあるのね・・・。その伝説の弾丸は、本当に存在するのかしら？　例えば、その弾丸を使った殺人事件があったとしたら、警察は捜査することも、逮捕することも、できないの？」

鈴子は、伊佐崎の話をメモに取りながら、質問したが、彼は厭らしく笑った。

「この都市伝説の面白いところは、その弾丸を実際に見た人間がいないことだ。もしも殺人事件に使われたとしても、日本の警察は『伝説の弾丸』とも気が付かないし、当時の権力者の約束事が、今でも有効かなんて、誰にも証明することができない」

「つまり・・・この都市伝説は・・・嘘（デマ）ってことね」

鈴子は、大学での『デマの広がる人間心理』の論文テーマに、ぴ

ったりの話が聞けたと、伊佐崎を紹介してくれた兄に、心の中で感謝した。
「この話の出所なんだけど、やっぱり話にあるように、時の権力者が、お互いの権力を絶対的な力で補完するために、考えた作り話なのかな。無辜の民を巻き込んでしまう、大量破壊兵器で保たれている世界平和より、お互いの取り決めで作られた弾丸で、権力者が自らの命で、平和を保とうとしていたなんて、なんか歴史ロマンですよね」
　と、鈴子は言った。
「だが、よく考えてごらんよ。権力者であれば、罪に罰せられることや、報復なんて恐れずに、相手の権利を剥奪することを躊躇するかい。この弾丸の話は、権力者自身が作ったことになっているが、実際は、権力者たちを暴走させないために、そんな弾丸が存在しているのだと、民衆が作った寓話と捉えた方が、納得ができないかい？」
　伊佐崎は、人差し指を真っ直ぐに立てると、得意げに自論を聞かせた。
「なるほど、政治的な抑止力を狙った、民衆たちの寓話なら、まさにデマですね。私の論文テーマに、相応しい題材です。扇動した民衆指導者、デマゴーグまで追及できれば、すごく奥の深い論文に仕上がるわ」
　と、鈴子が言うと、伊佐崎は、少し困ったような顔をした。
「それは難しいだろう。この話では、弾丸を作り、その超法規的な行為を担保した権力者たちが、どこの国の権力者たちなのか？　それが何年前の取り決めなのか？　当初の話から語られていないのだ。これが権力者たちを戒め《いましめ》るデマだとしても、その出自まで遡ることは、いささか困難だろう」
「やっぱり、口裂け女とか、ネットロアみたいな、現代的なデマにした方がいいのかしら。都市伝説に潜む人間心理のテーマとしては、どんなことをしても罷免される、弾丸によって、世界平和が保たれ

ていたなんて、すごく大きな話で、遣り甲斐がありそうなんだけどな」
伊佐崎の話を聞いた鈴子は、がっかりしたように肩を窄(すぼ)めた。
「この話の出自を遡るのに、困難なことに変わりはないが、その手立てがないわけではない。まだ、時間があるのなら・・・」
伊佐崎が腕を前に出し、腕時計越しに、鈴子の顔色を窺うと、彼女は目を輝かせて頷いていた。
現役刑事の伊佐崎は、この話を調べるに当たり、彼女に捜査のイロハの『イ』である、裏取りの方法を簡単に説明した。
説明を聞いていた鈴子は、メモを片手に鉛筆を走らせて、
「では、伊佐崎さんは、弾丸の話を誰から聞いたのかしら?」
と、まるで刑事(でか)気取りで質問した。
これが、七つの弾丸に纏(まつ)わるの殺人事件の始まりだった。

第二話　弾丸は罪源

鈴子は、伊佐崎が都市伝説を聞いたと言う、芦木隆文警視正に話を聞くため、彼の自宅がある東京・本駒込の住宅街を歩いていた。彼女は、閑静な住宅が立ち並ぶ街並みに、気圧されてしまって、手土産一つ持たずに訪問することを恥じたが、今更、駅まで買いに戻っては、約束の時間に間に合わないからと、自分に言い聞かせて、先を急ぐことにした。

芦木家の門扉に立つと、手ぶらで来たことを、ますます後悔することになった。吉野杉で誂(あつら)えられた門構えの奥、都内には珍しく広々とした庭があり、木々に遮られて玄関が何処かも分らなかった。

「私がどんな手土産を選んでも、不釣り合いなんだから、変なものを持ってこなくて、正解だったのよ。ご近所で買ったケーキでは、逆に失礼な気がするものね」

鈴子は、自分の無礼に言い訳をすると、芦木家のインターホンを鳴らした。

彼女を出迎えてくれたのは、同い年くらいの少女だった。長い黒髪の彼女は、高級な身形をしていたが、着飾ったような野暮ったさがなく、涼しげに着こなしていた。身長は、鈴子の方が高かったようで、同性の上目使いに、こんなにも狼狽(うろた)えるものかと、目が合うと赤面してしまった。

「は、はじめまして、私は、その・・・」

鈴子は、見透かされたような視線に、思わず声が裏返ってしまった。

「岩壁鈴子さんですよね、『七つの弾丸』の話で、本日いらっしゃると、父から聞いております」

あの都市伝説には、『七つの弾丸』という名前があるようだ。鈴子は捜査開始して早々に、弾丸が七発作られたことが分かった。なぜ、七発なのかは、解らなかったが、この先の話も、トントン拍子

に疑問を解いてくれるに違いないと、目の前に現れた彼女の凛とした、佇(たたず)まいを見て感じた。

黒髪の少女は、芦木隆文警視正の長女で、芦木麻子(あしきあこ)。父親に『七つの弾丸』の話をしたのは、警察官僚だった祖父から話を聞いていた、彼女だった。警察に伝わる都市伝説だったことは、解ったものの、麻子の祖父は数年前に他界しており、口伝を遡る捜査は、麻子が終点になってしまった。

それでも『七つの弾丸』は、警察官僚だった祖父から、麻子に伝わってきたのなら、弾丸の存在も真実味帯びてくる。こうした背景はデマを形作るの重要で、弾丸の存在で権力の暴走を抑止したとの、伊佐崎の自論が正しいのであれば、国家権力に対峙してきた警察がデマの出自に相応しい。

鈴子が話を聞くために、案内されたのは、屋敷二階の奥にあった、祖父の書斎だった。書斎には、褐色にオイルステインされたオーク材で作られた、壁一面の本棚があり、そこには洋古書がズラリと並べてあった。

「お爺様が趣味で集めていたみたいだけど、そこにある本はドイツ語で書かれているので、私に読める本は一冊もないのよ。今から話す『七つの弾丸』は、一八五〇年のヨーロッパを起源とする説があって、お爺様は伝説が真実なのか、警察庁を退官してから、その足跡(せき)を書物で探していたらしいわ」

麻子は、本棚の背表紙を撫でるように、掌を這(は)わした。彼女の手の動きに合わせて、舞った埃は、窓からの木漏れ日で、本棚を照らすスポットライトになった。

「大学では、ドイツ語を専攻しているのだけど、ここにある書籍を読み解く自信がないわ・・・だって、医学書や哲学書、専門書ばかりなんだもの。この本棚に真実が隠されているなら、もうお手上げだわ」

鈴子は、麻子と入れ替わるように、本棚に近づいて、分厚い一冊を手に取った。本の表紙には、何も書かれていなかったが、全編手

書きで書かれた本は、この本棚にある、どの本よりも古めかしい哲学書だった。その一ページ目には、『Ｓｉｅ ｓｏｌｌｔｅｎ ｉｍｍｅｒ ｄｉｅ Ｗａｈｒｈｅｉｔ ｖｅｒｓｔｅｃｋｅｎ．【真実は、常に秘めておくものだ】』と書かれていた。

鈴子は、溜息を吐くと、その本を元の位置に戻した。そして窓の外を眺めると、視界の先に森のような風景が広がっていた。芦木家の庭は、なかなかの広さだったが、森の先に小さく見える高層マンションまで、数百メートルあるのに驚いた。彼女は、窓枠に切り取られた広大な自然と、本段に整然と並んだ難解なパズルを前に、絶望にも似た脱力感に襲われた。

「窓の外の緑は、近くの庭園からの借景なのよ。小さい窓から覗くと、ここが、まるで山の中の一軒家のように感じるでしょう？けれど、本当は木々の生茂りで、そう見えるように、計算されているのよ。私の知識も、お爺様の借物なのだけれど、きっとお役にたてると思うわ」

と、麻子は笑いながら、毛足の長いソファに座るよう、鈴子に手招きした。

鈴子は、彼女に促されるままに、ソファーに腰かけると、羊毛の甘い香りに包みこまれた。

「鈴子さんは、最初の弾丸の犠牲者が、装飾を施した彫金師だったこと、その引金を引いたのが、弾丸を作らせた三人の権力者だったのは、知っているのよね？」

麻子は、書斎机の引き出しから、数冊の大学ノートを取り出して、それを鈴子に手渡した。

「そうね、権力者が三人だったのは、初耳だったけれど、彫金師を撃ち殺して、その秘密と残りの弾丸を、権力者が持ち帰ったと聞いています」

そう言うと鈴子は、受け取った大学ノートが、ずいぶんと古い物だと思った。麻子の祖父が『七つの弾丸』について、調べた内容が書かれているのだろうと、直感した。

「正直に言うと、権力者が三人だったのか、もっと大勢いたのかは、詳しく調べた書物もないし、さして重要な要素ではないの。その後の歴史に、弾丸が二発ずつ登場するので、権力者は三人だった・・・そんな他愛もない話なのよ」

七発の弾丸のうち、彫金師を貫いた弾丸を除けば、残弾が六発となり、権力者が弾丸二発ずつ持ち去ったのなら、権力者は確かに三人だ。それに二発ずつ使われたと言うのなら、最低四発の弾丸が使用済み、残弾は二発しか残っていない。

「ちょっと、待ってください。『七つの弾丸』は、都市伝説なんですよね？　過去に使われた事実があるのなら、それはデマではなくて、史実ですよね？」

鈴子は、麻子に興奮気味に聞いた。

「そうね・・・お爺様は、弾丸の存在を確信していたみたい」

と、麻子は、無邪気に驚いた鈴子を見て、思わず苦笑した。

「この類の伝説には、史実に忠実な体裁で、人々に口伝さていれるのではないかしら？　例えば、本当にあった事件を絡めることで、より真実味が増して『あの噂話は真実だ』と、より多くの心に伝播していく・・・心理学は、鈴子さんの方が専門家でしたね」

麻子は、悪戯な笑顔になると、先ほど手渡した大学ノートを開くように言った。

「お爺様は、伝説の内容よりも、絶対的な力を持つ弾丸に、興味があったみたい。最初の所有者が誰だったのか、それを知るよりも、弾丸に秘められた約束が、本当に履行されているのか？　その大学ノートには、弾丸が使用されたと思われる、事件の詳細が記録されているのよ」

鈴子は、パラパラとページを捲(めく)ると、古い新聞記事や、実在した歴史上の人物の写真が、スクラップされていた。

「弾丸が齎(もたら)した事件が存在するのなら、権力者たちの伝説も実話ということね」

「それは、どうかしら？　弾丸が実在したとして、それを担保して

いるのが、権力者の名を借りた、第三者の可能性だって、十分に考えられる。お爺様に重要だったのは、全ての罪が罷免(ひめん)される、そんな御伽噺(おとぎばなし)のような弾丸、そのものに興味があったのではないかしら」

鈴子は、頭を抱えてしまった。

「鈴子さんは、伝説の真偽について、調べにいらしたのだから、お爺様とは、少し興味の対象が違っているわね」

麻子の言うとおり、弾丸が実在したとしても、実際に権力者たちの取決めなのか、名を騙ったデマゴーグの作り話なのかは、解らなかった。弾丸が実在する？　それも興味深い話だったが、彼女が知りたかったのは、『七つの弾丸』という伝説が、時の権力者たちの密約なのか、民衆が作った戒めの寓話なのか、それをハッキリさせたかった。

麻子が一生懸命に説明してくれるのは、有難かったものの、鈴子としては、権力者を戒めるために、民衆が作った寓話であった方が、論文テーマに最適だった。

麻子は、思い出したかのように、一枚の写真を取り出した。「真偽のほどは解らない」と、前置きして差し出された写真には、口紅ケースのような筒状の物が写っていた。あまりに見事な細工に、それが薬莢(やっきょう)だと、すぐには気が付かなかった。

「もしかして、これが伝説にある弾丸なの？」

「お爺様は、彫金師を撃ち殺した、最初の弾丸の薬莢だと、信じていたのよ。その写真は、スミソニアン博物館で撮影されたもので、貴族たちの愛玩、装飾が施された回転式銃(リボルバー)に込められていた、装飾品として作られた弾丸」

「宝飾品なんて嘘よ、確かに美術品のような、装飾が施されているけれど、つまり、その・・・発砲されているじゃない」

麻子は、薬莢の先端にあるはずの弾丸がないと、鈴子が気が付いたことに、感嘆した。

「そうなのよ、これは既に弾丸を発射した後、弾頭は残っていない」

「それに、装飾にも施条痕が見られるし、これが実弾だったことは

疑いない。物証があるのなら、これが何処で製造されたのか、それを辿っていけば、伝説が何処で生まれたのか、調べることが出来るわ」

と、鈴子は、弾丸を見せられたことより、伝説に辿りつくための糸口が、まだ残っていたことに、安堵した。捜査初日に、迷宮入りでは、捜査の手解(てほど)きをしてくれた伊佐崎に、合わせる顔がなかったからだ。

「お爺様は、弾丸に施された装飾に、宝石が使われているので、フランスが伝説発祥の地と、考えていたみたい」

鈴子は、ドイツが発祥の地ではないかと、本棚を見ながら思っていた。宝石を使った装飾ならば、フランス宝飾の伝統彫金技法だと、ヨーロッパ旅行の際、ツアーガイドから、土産物屋で説明されたことがあった。十八金の地金に、美しい装飾と、ゴマ粒ほどのダイヤモンドが埋め込まれたのオーナメントで、ナポレオン?世の時代に作られたものだと、しつこいセールスを受けたのを覚えている。

「確かに、ジュエリー宝飾が盛んだったのは、当時のフランスかもしれないけれど、お爺様が集めていた本を見ると、ドイツが伝説発祥の地だと思ったわ」

と、鈴子は、ドイツ語の本を眺めながら、素直な感想を言った。

「お爺様が調べていたのは、権力者の持ち帰った弾丸の行方なのよ。フランスの彫金師を撃ち殺した権力者は、プロイセン王国の貴族で、フランス大使だったビスマルク。貴族出身の彼は当時、ドイツ連邦議会のプロイセン王国の代表として、フランスに派遣されていたのだけど、後にドイツ統一で一役買った人物よ」

「ビスマルクと言えば、ドイツ帝国の初代宰相ですよね！　伝説に登場する権力者にも、符合する人物ですね」

ドイツ統一を果たした鉄血宰相の異名を持つビスマルク、世界史が苦手だった鈴子でさえ、名前を聞けばピンとくる歴史上の大人物だ。

「ビスマルクは『七発の弾丸』初期の持ち主と、辿りつけた唯一の

人物でもあるのよ。その本棚にある本は、彼によって、ドイツ帝国に持ち込まれた二発の弾丸が、一世紀近い時を経て、ある青年の手に渡ったことを語ってくれるわ」

鈴子には、ドイツ帝国の権力者と言えば、あの人物しか思い当らなかった。

「アドルフ・ヒトラー・・・弾丸を使った独裁者であり、弾丸の持つ秘密を明かしてくれた、人物でもあるのよ・・・」

と、麻子は言葉を選ぶように、慎重に言った。

「ちょっと、話が凄過ぎて、なんだか気持ちの整理がつかないわ。うーん、私には解らないことが多過ぎて、少し話題を戻しても構わないかしら？」

鈴子は、眉間に手を当てると、麻子の説明するスピードに着いていけない、自分の理解力の低さに、唸りをあげた。

「そもそも権力者によって作られた弾丸は、なぜ七発だと解っているの？　『七つの弾丸』と口伝されたのは、何か根拠があるの？」

と、鈴子は、『七つの弾丸』という名前を聞いて、勝手に「弾丸は七発存在する」と解釈していたが、話を聞くうちに、それでは何も解決できないと感じた。まずは、最初に感じた疑問から、順々に紐解（ひもと）くことにした。

麻子は、先ほどのスミソニアン博物館に収蔵されていた、最初の弾丸が収められていた、薬莢に施されていた装飾を指差した。薬莢には、飾り細工に紛れて、Ｓｕｐｅｒｂｉａとの文字が刻まれていた。

「ここには、ラテン語で『傲慢』と彫られているの」

「傲慢？」

「そして、ヒトラーの所有していた弾丸には、『憤怒』『色欲』と彫られていたと、彼の秘書ゲルトラウト・ユンゲが後に語っているわ」

「・・・七つの大罪ですね」

「この場合、七つの罪源と呼ぶ方が、適切かもしれないわ。キリス

ト教では、人間の『罪』を誘発(ゆうはつ)する源、傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲、七つの欲望や感情があり、それは人の業だと教えているわ」

鈴子は、権力者たちが、七つの弾丸を七つの大罪に準(なぞら)えた理由を考えていた。最初の持ち主だったビスマルクは、フランス大使からドイツ帝国の宰相となり、次に弾丸を手にしたヒトラーは、世界に名を轟かせた独裁者となっている。けれど、それが彼らにとって幸せだったと、けして思えなかった。

権力者たちが、弾丸と罪源を重ねていたのなら、彼ら自身も弾丸を使用することが、罪だと認識していたのでは、ないだろうか。弾丸は、人間が本来持っている罪源を体現したもの。その罪を問われないというのは、まるで自らの罪源を弾丸とともに、解き放ってしまう意味がある。

「最初に使われた弾丸は『傲慢』、まるで権力者たちの罪源を表しているみたい」

と、鈴子は言った。

「この伝説を『七つの弾丸』と呼ぶようになったのは、ナチスのアーネンエルベ（ドイツ古代遺産協会）が、ヒトラー所有の弾丸に付けた呼称で、それ以降は霊的な挿話(そうわ)も語られるようになったわ」

「アーネンエルベ？」

「ＳＳ（親衛隊）の全国指導者ハインリヒ・ヒムラーが設立した、ナチスの公的研究機関で、通称オカルト局。権力者の密約で作られた弾丸だけれど、彼らは七つの弾丸に、ある種の呪いが関係していると、考えていたのね。弾丸が使用された事件は、オカルトめいた能力により、その終息が語られることが多いのも、アーネンエルベを支持する声が大きいと、お爺様の研究ノートには書いてあったわ」

鈴子は、麻子の口から、ようやく都市伝説らしい話が聞けた。彼女の語る弾丸の伝説、それを無条件に信じてしまっては、鈴子自身もデマの伝播を手助けしているだけで、その真意に至れない。冷静に、客観的に捜査を続ける必要があった。

「それ自体が、権力者たちの約束を覆い隠す、デマの可能性は否定できない・・・そうでしょう？」
と、鈴子は言うと、麻子は頷いた。
「それでは、アドルフ・ヒトラーが弾丸を使って、どんな罪を消し去ったのか・・・アーネンエルベが解き明かした弾丸に秘められた、霊的な謎について、そろそろ語ってもいいかしら？」
麻子は、口元に笑みを浮かべた。
その瞬間、鈴子の携帯電話が鳴った。
「もしもし、鈴子さん？」
電話の相手は、伊佐崎だった。
「いま、芦木警視正の娘さんに、この前の話を聞きに来ているのよ」
「あぁ伝説の弾丸の話だね、ちょうど良かった、そのことで昨晩、面白い事件が起きたのだ。ある男が新宿歌舞伎町の人混みで、射殺されたのだが・・・」
「私が人が殺されたことを、面白がるような人間だと思っているの？」
と、鈴子は、伊佐崎が電話越しに、薄ら笑いしていることに、腹が立った。彼は殺人事件の捜査をしている最中に、それを面白がって電話している。刑事という職業は、人の死に直面し過ぎて、鈍感になっているのだろうか。
「べつに君を怖がらせたいわけでも、まして怒らせたくて電話したわけではない。じつは今朝、犯行に使われた弾丸の旋条痕が特殊だと、鑑識官から連絡があったのだが、それで君との話を思い出した」
と、伊佐崎は言った。
「ちょっと待ってよ、もしかして、その弾丸には、彫金が施してあるとか？」
「まだ実物を見ていないので、そこまでは解らないが、弾丸に彫金が施されて、旋条痕が特殊な紋様になった可能性もあるだろう」
「もしも、例の弾丸だったのなら、犯人は捕まったの？」
「白昼堂々衆人環視で行われた犯行で、目撃者も大勢いたから、事

件解決は難しくない思ったのだが・・・様子が変なんだ。捜査本部からは、応援の捜査員の数も少なく、繁華街での聞込みも、儘(ままな)らない状態だ。警察上層部には、この事件を捜査する、気概を感じられないなのだ」

「それでは、まるで・・・」

「そうなのだ、君に話して聞かせた、都市伝説を思い出して、こうして電話したのだ。今、君が芦木警視正の・・・」

伊佐崎は、興奮したように話を続けた。相変わらず電話の声は、薄ら笑いを浮かべているが、冗談を言っているわけでも、茶化しているわけでもなかった。

このとき、弾丸を使った殺人事件に、既に自分が巻き込まれていると、鈴子は気が付いていなかった。

第三話　双頭の黄金卿

鈴子は、東京・新宿のカフェテリアで、伊佐崎が到着するのを待っていた。彼女は、伊佐崎から電話をもらって、事件現場である新宿に駆け付けたが、まだ彼の話を信じたわけではなかった。『七つの弾丸』の伝説を調べ始めた途端、弾丸を使用した事件が起きるなんて、少し変な気がした。もしかすると、彼に担がれているのではないかと、携帯電話でニュースサイトをチェックすると、歌舞伎町の銃殺事件が、確かにアップされていた。

伊佐崎からは、鑑識部で弾丸の写真を取り寄せて、こちらに向かうと連絡があったので、しばらくの間、カフェテリアで時間を潰すことにした。このカフェテリアは、セルフのティーコーナーで、鈴子の好きなアールグレイが飲み放題、長居をしても嫌な顔をされることがない。

ただし、伊佐崎のような四十代のオジサンには、女性客ばかりで気軽に入りにくい店だ。鈴子は、店の入口付近の席で、麻子から借りてきた大学リートに、目を通していた。もしも、熟読してしまっても、彼が入店すれば、周囲の雰囲気で到着が分るだろう。

麻子の祖父は、伝説よりも弾丸の行方について、熱心に調べていたのが、大学ノートを読み進めるうちに、よく理解できた。伝説の内容は、鈴子が聞いていたとおり、権力者が弾丸を作ったこと、最初の一発が彫金師に使われたこと、それ以上に新しい発見はなかった。

大学ノートには、弾丸が使われたと思われる事件の詳細を調べ、その真偽について検証されていた。根も葉もない噂の類、信憑性のある人物の証言、当時の新聞記事、ヨーロッパの伝承まで、無作為に集められており、研究書と言うよりスクラップブックのようだ。確かにヒトラーが弾丸を手にした（らしい）経緯など、詳細に調べられていたが、借りてきたノートには、弾丸をいつ使用したのか？

肝心なことが書かれていなかった。
「麻子さんは、弾丸が二発ずつ使われたと言っていたから、彫金師を撃ち殺した『傲慢』、ヒトラーが使用した『色欲』『憤怒』。残りは四発だけれど、そのうち既に二発が使用されているはずよね・・・麻子さんも一緒に、新宿まで来てくれれば、話の続きが聞けたのに・・・」
と、鈴子は、ぶつぶつと独り言を呟きながら、メモ帳に『嫉妬』『怠惰』『強欲』『暴食』と、七つの罪源の残り四つを書き出した。この四つのキーワードで、弾丸を持ち帰った権力者を推理した。
「『怠惰』と『暴食』はフランスかな？　芸術の都、食の都、花のパリ。フランスは、伝説発祥の地、最初に弾丸が使われた国だから、きっとナポレオン？世が犯人ね」
鈴子は、まるで犯人捜しでも、楽しむように、権力者の消息を想像していた。
「『嫉妬』でイメージするのは女性、女性の権力者と言えば、エリザベス女王かな？　それに『強欲』と言えば、小説『クリスマス・キャロル』に出てくる、吝嗇家（りんしょくか）のスクルージ。一八四八年の作品だもの、うんうん、『強欲』の弾丸はイギリスね」
鈴子は、ベルガモットの香りを嗅ぎながら、イギリスのグレイ伯爵が、アールグレイの名前の由来だったと、ここにも不思議な縁を感じた。
「鈴子さん、なんで独り言を言ってるんですか？」
鈴子が顔をあげると、向かいの席に伊佐崎が座っていた。弾丸の行方を想像しながら、メモを取るのに懸命になっていて、彼に不意を突かれてしまった。
伊佐崎は、モンブランケーキと、煎れ立てのアールグレイをトレイに乗せて、鈴子がメモを取りながら、呟いている様子を、静かに観察していた。彼女の冷めたアールグレイから、ベルガモットの香りはしない。先ほど感じた、ベルガモットの香りは、彼の持ってきたカップからの香りだった。彼女は、趣味の悪い男だと、不貞腐れ

て見せたが、彼は顔色一つ変えずに、質問を続けた。
「芦木警視正の娘さんからは、伝説の弾丸について、何か面白い話が聞けたかい？」
伊佐崎という男は、優秀な刑事かもしれないが、人情の機微（きび）に疎いところがある。鈴子は、カフェテリアに、男一人で入店するのが、照れくさいだろうと思っていたが、そんなことを気にするような、繊細な心の持ち主ではなかった。彼の困った顔を見てやろうと、悪戯心で待ち合わせ場所に選んだはずが、慣れ親しんだ店に、彼女の方が気を許し過ぎて、墓穴を掘ってしまった。
「そうね、伝説の弾丸は、世界に七発存在していること、それぞれに『七つの罪源』に因（ちな）んだ、名前が付けられているの。そして、伊佐崎さんから聞いた話では、弾丸に装飾を施した彫金師が、殺されていたけれど、じつは、残りの六発中、その後に四発が使用されている・・・らしいわ」
と、麻子の家で聞いた話を説明し、ヒトラーの使用した二発を除いた、残り四発の行方を想像していたところ、不意に声を掛けられたと、頬っぺたを膨らませた。
「連想ゲームの邪魔したみたいで、申し訳なかった。しかし、鈴子さんの解釈は、間違っているようだね」
「どういう意味ですか？」
鈴子は、「推理」を「連想ゲーム」と言い換えたことに、彼の底意地の悪さを感じた。
「最初の一発目『傲慢』を撃ったとされるビスマルク、君主主義の保守派政治家だった彼を『傲慢』というには、あまりに謙虚な人物ではないか。そして彼が持ち帰った『憤怒』『色欲』は、当時のドイツを連想させるに、あまり適していなかったと思うよ。弾丸の所有者の条件には、逆転の発想が必要ではないかね」
「けれど、ヒトラーは、多くの愛人を囲っていたし、癇癪（かんしゃく）持ちだったと史実にあるわ」
「そこなんだよ、弾丸を罪源と重ねていたのなら、それは彼が持つ

べき弾丸ではない。彼が『色欲』『憤怒』の弾丸を持っているとしたら、彼が打ち抜いた人物は・・・」

と、伊佐崎は、言った。

鈴子は、冷静になって考えてみたが、伊佐崎の「彼が持つべき弾丸ではない」との意味が、理解できなかった。ヒトラーは『色欲』と『憤怒』を弁えるべきだったと、言っているのだろうか。

「けれど、最初の犠牲者は、権力者の『傲慢』によって殺されていますよ。伊佐崎さんの言うとおり、使われるべき弾丸じゃないのなら、最初の一発目を使用したのは、変じゃないですか！」

鈴子は、撃つ方の人間を戒めているのは、明らかだと語気を荒げた。

「弾丸が罪源だと言うのなら、その罪は貫かれるべき相手に、その罪があると考えた方が、解りやすいと思わないかね。つまり、傲慢だったのは権力者ではなく、彫金師の方ではなかったのかね？　でなければ、傲慢でもない彫金師が、『傲慢』と言う罪に裁かれたことになる」

と、伊佐崎が言うと、鈴子は黙ってしまった。彼の言うとおり、『傲慢』という名の弾丸で、謙虚な男が殺されるのは、間違っている気がした。

「もしも、時の権力者の秘密を握ってしまった彫金師が、その秘密により傲慢な態度を取っていたら？」

「その彫金師は、自らの『傲慢』によって、殺されたと言うのね」

伊佐崎は、頷くと、話を続けた。

「当時のヨーロッパは、政情が不安定で、権力者も目まぐるしく変わっていた。権力者が弾丸を戒めに目指したのは、安定したヨーロッパだったと考えられる。もちろん、結果論ではあるのだけれど、一八世紀後期、フランスやドイツは統一政府を作り上げ、ヨーロッパが安定の歴史を歩んでいる。そんな政情下で、弾丸が持つ役割は・・・鈴子さんが、はじめに感じたことだよ」

「核兵器と同じ、絶対的な力による、相互監視によるヨーロッパの

安定ね」
「たぶん、それが正解じゃないかな。だとすれば、ドイツが持ち帰った『色欲』はA国、『憤怒』はB国を牽制するための弾丸。A国とB国が、何処の国は解らないけれど、残り四発『嫉妬』『怠惰』『強欲』『暴食』のうち、当時のドイツを連想させる二発は、A国とB国に一発ずつあり・・・」
と、伊佐崎は自論を展開しようとすると、鈴子が説明に割って入った。
「A国を連想する二発は、ドイツとB国に一発ずつ、B国を連想する二発は、A国とドイツに一発ずつある。弾丸は、三カ国が相互管理するために、二発ずつ持ち帰られた。弾丸は、そもそも六発で、三竦(さんすく)みになるように、作られたものなのね」
鈴子は、相関関係について、メモに図解した。
「でも、ヒトラーが『色欲』『憤怒』の弾丸を使用したのなら、彼は誰を撃ったのかしら？」
伊佐崎は、話の腰を折られて、不機嫌な顔をしたものの、ピンと来ていない鈴子のために、ヒントを提示した。
「鈴子さんは、自ら答えているのだけれど、気が付かないのかね。麻子さんから、聞いた話を思い出してごらん。ヒトラーは、弾丸を使った独裁者であり、弾丸の持つ秘密を明かした人物だよ」
「解らないわ？」
と、鈴子は即答すると、伊佐崎は咳払いをして、恭(うやうや)しく話をはじめた。
「弾丸は当初、権力者たちが相互関係を保つため、作られたもので、ドイツや、ましてヒトラーの罪源を裁くために、作られたものではなかった。弾丸が作られた背景と、弾丸が使われた背景は、異なっていたと考えるべきだろうね」
「時代を経て、弾丸が持つ意味が変わったということね」
伊佐崎は、頷くと、両手の人差し指と親指を突き立て、二丁拳銃のようにした。そして、右手の拳銃を自分の額に当て、左手の拳銃

を鈴子の方に向けた。
「『傲慢』の弾丸は、傲慢な彫金師に・・・長年の愛人だったエヴァ・ブラウンは、『色欲』の弾丸によって絶命。アドルフ・ヒトラーは『憤怒』の弾丸で自害。かくして、彼の罪を問うことが出来なくなった・・・そんなところではないかね？」
伊佐崎は、撃鉄（げきてつ）を倒すように、左手、右手と順番に、親指を前に倒すと、パン、パンと、悪戯に二発の銃撃シーンを演じて見せた。
「権力を抑制する弾丸が、自らの罪源を断ち切るために、使われたのね・・・」
「死んでしまった人間の罪に、罰を与えることは不可能だからね。ヒトラーが解き明かした、弾丸の秘密が、こんな言葉遊びでは、ないのかもしれないけれど」
鈴子は、伊佐崎の推理を聞いて、拍子抜けしてしまった。麻子の話を聞いて、オカルティックな死を連想していた自分が、すごく恥ずかしいと思った。『七つの弾丸』が史実だとしても、ヒトラーが登場するまで、一〇〇年近い時が経過している。当初の権力者が担保した、「罪に問わない」なんて約束が、機能していると考えるのは、かなりロマンチックだ。
麻子から預かってきた大学ノートには、弾丸が使われたと噂された、殺人事件の記事もあったが、それらは未解決事件で、弾丸が理由で「罪に問えない」のか、犯人が特定できずに「罪に問えなかった」のか、曖昧な結末が多かった。まだ、よく読んでいなかったが、犯人が死んでしまった事件も、あったかもしれない。
「もしも、それが事実なら、弾丸の効力はデマってことね。全ての罪が許される、そんな都合の良い弾丸なんて、この世の中に存在しない」
と、鈴子は、窓の外の高層ビル群を眺めながら、現実に引き戻された気がした。
「鈴子さんは、『デマ』を論文テーマにしていたのだから、むしろ弾丸が本物だったら、使えないのではないのかね？　それとも伝説

の内容よりも、弾丸の持つ魔力に惹かれているのかな」
「まぁ、確かにそうですけど、ちょっとガッカリです」
伊佐崎は、興味を失いかけている鈴子に、一枚の写真を差し出した。それは、歌舞伎町の殺人事件に使われた、弾丸の写真だった。
「この弾丸は、被害者の体から摘出されたもので、特殊な施条痕をしているのだが・・・解るかね？」
鈴子は、施条痕が特殊だと言われたが、とくに変わったところが解らなかった。麻子の家で見せられた、薬莢の施条痕は、彫金細工の装飾の上から、明らかな掻き疵が付いていたので、それが装飾された弾丸の施条痕だと見抜けたが、伊佐崎から見せられた弾丸は、体から摘出された弾頭部のみ、それが特殊だとか、装飾が施されていたのか、素人の彼女に見抜けるはずがなかった。
「うーん、ごめんなさい、私には何処が特殊なのか、ちょっと解らないわ・・・けれど、一つだけ気になるのは、この部分に何か違和感があるわ」
写真の弾頭部には、螺旋状の旋条痕が、秩序良く並んでいたが、一カ所だけ黒ずんだ部分があった。
「うん、そこなのだよ」
伊佐崎は、その部分を指した。
「エックス線で、調べたところ、そこだけ硬度の違うことが解ってね。炭化しているが、ダイヤモンドが、埋め込まれていたらしい」
鈴子は、弾頭部に宝石が使われていたと聞かされて、麻子の言葉を思い出した。伝説発祥の地は、ジュエリー装飾が盛んだったフランス。写真の弾丸に、宝石が使われているなら、伝説の弾丸の可能性がある。
「伊佐崎さん、あの、装飾に宝石が使われているのなら・・・」
と、鈴子が言うと、伊佐崎も黙って頷いた。
「やはり、伝説の弾丸と、符合するようだね。弾丸の持つ魔力が嘘だとしても、伝説がデマと決まったわけではない。昨晩の事件で使用された弾丸は、伝説に出てくる弾丸だとしたら、先ほどの『弾丸』

と『罪源』の関係が、事件を解決する鍵になるかもしれない」
伊佐崎は、弾頭の後面に彫られていたＡｖａｒｉｔｉａが、ラテン語の『強欲』だと、鈴子に伝えた。
「鑑識部では、この刻印をメーカー名だと、考えていたのだが、どうやら違ったようだね」
「伊佐崎さん、私にも推理させてください。殺されたのは、吝嗇家の高利貸し、街金融の男じゃないかしら？　『強欲』を司る悪魔、双頭の黄金卿マンモンのような、男ではないかしら？」
鈴子は自信たっぷりに、自分の推理を披露すると、伊佐崎は目を丸くして驚いた。
「そのとおり、被害者は歌舞伎町で、街金融の元締めをしていた男で、まさに吝嗇家と呼ぶに相応しい」
「きっと、その男は、政治にも強い関心を抱いて・・・」
と、鈴子は言い掛けたが、伊佐崎が狐に摘まれたような顔をしたので、それ以上の推理を披露することを諦めた。あまり的確に言い当ててしまったら、先ほどニュースサイトで調べた、被害者の素性を自慢気に語っているだけだと、気が付かれてしまう。散々、自分の推理力を馬鹿にされたのだから、これくらいの仕返しは、許されるだろう。
「そ、そんなことより、事件現場に行ってみましょうよ。もしかすると、もっと強いインスピレーションを感じるかもしれないわ」
鈴子は、伊佐崎のモンブランケーキに、フォークを立てると、「早く食べてよ」と、彼の口に押し込んだ。

第四話　福音伝道

「伊佐崎さんの話には、夢が無いです」
と、新宿の高層ビル群から、歌舞伎町に向かって歩きながら、鈴子が伊佐崎に言った。
「そうかい？　同期の西田山には、いつも夢想家だと、馬鹿にされているのだけれど。ほら、覚えていないかな、猪俣家の連続殺人事件で、君を犯人扱いした男だよ」
「うん、覚えているわ、チョビ髭のオジサンね。見当外れの捜査で、私のことを犯人扱いした、あの西田山警部。今度会ったら、足でも踏ん付けてやるんだから」
鈴子と伊佐崎がはじめて出会った、資産家の連続殺人事件で、彼女は容疑者として、捜査一課の西田山警部から、執拗な取調を受けたと、苦々しい顔をした。
鈴子は、刑事の妹にも関わらず、被害者の娘との友情を大切にして、偽証行為で捜査妨害をした。西田山は、彼女を重要参考人として、事件から遠ざけたものの、彼の温情がなければ、偽証罪で起訴されても、文句の言える状況ではなかった。伊佐崎は、鈴子が年齢よりも幼く感じることがあった。友情のために罪を犯しても許されると、思っているのなら間違いだ。ただ、彼女を諌めたとしても、本質が変えられないと、伊佐崎にも解っていた。
「あぁ、そのチョビ髭だ」
と、伊佐崎は、そっけなく答えると、急ぎ足になった。「刑事の妹なのだから、その辺の事情は察してほしいものだ」と、彼は、鈴子の言葉に落ち着かない気分になっても、それが彼女を意識している証拠だと、絶対に認める訳にいかなかった。彼女が同僚刑事の妹だからか？　年の離れた彼女に遠慮しているのか？　とにかく彼女に抱いている複雑な心境は、絶対に隠しておきたい事実なのだ。
鈴子は、足早に先を歩く、伊佐崎の後ろ姿を追いかけると、自然

と小走りになっていた。彼は時折、冷たい態度を取るようになった。出会った頃は、兄の上司で、私のことも理解してくれる、本当に素敵なオジサンだった。長野・茅野の実家を離れるとき、兄は「東京もんは冷たい、優しくされても、騙されるなよ」と、忠告してくれたが「そういうことなのかしら？」と、クスっと笑ってしまう。

「伊佐崎さんは、『七つの弾丸』が民衆の寓話だって、そう考えているの？」

と、鈴子は、伊佐崎の後ろから、絡みつくように腕を組んだ。

伊佐崎は、鈴子が突然、腕を組んできたことに、ハッとしたが、悪い気がしなかった。彼女が自分の心を読んで、そうした行動を取ったのだとしたら、むしろ喜ぶべきだろう。

「そうだな・・・よく出来た話ではあるが、権力者が集まって、取決めをした場合、大々的に公表しなければ、誰かが裏切っても、それを証明する手立てがない。約束した当事者は、彼らが権力の中枢にいるとき、そんな戯言を弄したかもしれないが、彼らが権力の座を退けば、約束事を担保することが出来ない。伝説の弾丸が実在したとしても、それが時の権力者たちが作ったのか、デマゴーグが作ったものなのか、解らないだろうね」

「どちらが本当のことか、解らないのなら、伝説が本物だと思わないの？　だって弾丸に装飾をした彫金師は、当時のフランス大使だったビスマルクに、撃ち殺されているのよ」

と、鈴子が言うと、伊佐崎は首を傾げて、彼女の顔を見た。ぴったりと腕組みして、体を引っ付けている彼女の顔を見るのは、聊(いささ)か窮屈だった。

「ビスマルクは歴史の偉人だが、連邦政府に選任された、単なるフランス大使に過ぎない。当時の連邦政府の主導権を考えれば、プロイセン王国よりも、オーストリアが権力を持っていた。誰でも知っているような、ビスマルクを立役者にしているのも、真実味を与えるためのもので、デマゴーグの企みだと思わないのかね」

と、伊佐崎が言うと、鈴子は、組んでいた腕を振り解いて、彼の

前に立った。
「うん、やっぱり、伊佐崎さんの話は、夢がないです」
「鈴子さんは、すっかり伝説の語り部だね」
西武新宿線のガード下を潜り抜けて、歌舞伎町に近づくと、高層ビル群とは違った喧騒が、二人を包み込んだ。ビジネスマンが犇(ひし)めく、西新宿の高層ビル群が昼の顔だとすれば、人々の欲望が渦巻く、新宿の歌舞伎町は、夜の顔だ。彼らが歌舞伎町に着いた頃には、日がすっかり暮れており、派手なネオンが出迎えてくれた。
伊佐崎は、新宿アルタビルの裏、歌舞伎町交差点に立ったとき、鈴子がキョロキョロと、見回していることに気が付いた。彼は、彼女の落ち着かない様子が、夜の街に興奮しているように見えた。
「鈴子さんは、歌舞伎町にくるのは、初めてなのかね？」
「うん、はじめて、人混みに酔ってしまいそう」
鈴子は、上京してから大学とアパートの往復ばかりで、たまの買い物も、近所の総合スーパーで済ませていた。彼女に連れだって遊ぶ、友人がいないわけではない。親友の猪俣美紀子も、混み合っているところが、苦手だったので、わざわざ混み合っている街に、繰り出して遊ぶことがなかっただけだ。新宿なら西新宿、渋谷なら桜丘町、とにかく人混みを避けて、彼女なりに遊び場を開拓していた。
伊佐崎は、田舎暮らしの長かった鈴子が、都会の喧騒に戸惑っている姿が、なんとも愛おしく思えた。同時に、普段からの態度が、こんなに素直なら、自分も素直に接してやれるのにと、心の中で身勝手なことを考えていた。
事件は昨晩、歌舞伎町の旧コマ劇前の広場で、新宿街金融の元締めとされる、田村仁志(たむらひとし)が、人混みの中で射殺された。「元締めとされる」とは、彼が街金融に深い関わりがあったのは、公然の秘密だったが、政治家を目指していた彼は、その手の家業から足を洗っていると、周囲の街金融業者が、口裏を合わせるものだから、警察も確証のない情報として、扱わざるを得なかった。
「でも、ニュースでは、田村を街金融の元締めだと、騒いでいるじ

ゃない？」
　と、鈴子が言うと、伊佐崎は「なるほどね」と、苦笑した。彼女は「何が可笑しいのよ」と、不貞腐れたが、彼は理由を言わずに、ただ口元の笑みを隠していた。
「いや、ご指摘のとおり。彼の生前は、マスコミも表立って、街金融の元締めだと言わなかったが、死んでしまっては、それを秘密にしておく価値がない。政治家を目指した彼には、利用価値があったのかもしれないが、もう義理立てする理由もなくなった。騒ぎ立てた方が金になると、そんなところだろうね」
　と、伊佐崎は言った。
　旧コマ劇前の広場は、今はシネシティ広場と呼ばれており、もっとも人通りの多い、歌舞伎町商店街を抜けた先にあった。
「私が立っている場所に、被害者の倒れていた。事件当日の人通りも、今夜並みだったとすると、この衆人環視の中、犯人は被害者を射殺したことになる」
　伊佐崎は、殺害現場に到着したことを告げると、鈴子は、足元のチョークの跡を避けるように、彼の隣に立った。
「犯人は、どこから被害者を撃ったの？」
「君が立っているところ、ほぼゼロ距離射撃で、被害者の後頭部に銃口を突き付けて、引金を引いたようだ」
「昨日の今頃、私たちが立っている、この場所で犯行が行われたのね？」
　伊佐崎は、頷くと話を続けた。
「被害者の身長は一六五センチ、けして高くないが、銃痕が後頭部の首筋に近いところにあり、弾丸は銃痕より斜め上、額頭蓋骨の内側から摘出された」
「犯人は、背の低い男だったのかしら？」
「発砲時の姿勢は通常、反動に負けないように、腕を真直ぐに構えるのが一般的だ。斜め上に向かって軌道があるのは、犯人の身長が、被害者より低かったと考えるのが、理論的に正しい」

と、伊佐崎は、鈴子に、手を伸ばして、彼の後頭部を指で押すように言うと、
「ちょうど、私と鈴子さんの位置関係が、被害者と犯人の位置関係と、同じぐらいだったのでは、ないかと思うのだが、私の身長は一七五センチ、実際の被害者より一〇センチほど、背が高いはずだ」
「私の身長は、一六〇センチくらいだから、身長差は一五センチ・・・被害者の身長を考慮すると、犯人の身長は一五〇センチかしら？」
「犯人が男とは、まだ決まっていないということだ」
と、伊佐崎が言うと、鈴子の方に向き直った。彼が普段見せないような、真剣な眼差しで、睨みつけるものだから、彼女は少し怖くなってしまった。目の前にいる冴えないオジサンも、やはり兄と同じ、刑事なんだと、感じずにはいられなかった。
「うん、だいたいのことは解った。それで、警察上層部が、捜査に真剣じゃないって、どういうことなの？」
鈴子は、伊佐崎の目線を避けると、彼の背後に回った。まさか、彼女の犯行を疑っていないことは、明らかだったが、刑事の仕事をしているときの目線は、懐疑的で好きじゃなかった。それに、制服警官が二人のやり取りを、遠目に観察しているのが気になって、この場を離れたいと思った。
警官が近付いてくるのに、伊佐崎も気が付いて、胸ポケットから警察手帳出して掲げた。警官は、手帳を確認するように、目を凝らすと、彼に敬礼して立ち去ったが、そのやり取りが、周囲から脚光を集めてしまった。鈴子が、俯いたまま、歩き始めるので、伊佐崎は慌てて後を追った。
「鈴子さん、どうかしましたか？」
犯行現場から離れると、二人の行動に注目する者は、いなくなった。鈴子は、辺りを伺うように、顔をあげると、伊佐崎の胸倉に手を当てて、それ以上は近づくなと、サインを出した。
「あれでは、まるで私が補導されている、家出少女に見えるじゃないの！」

「あっ、なるほど、確かに鈴子さんは、実年齢より若く見えますからね」
と、伊佐崎は、笑いを堪えるのに必死だったが、鈴子の可愛らしい態度に、耐えられるほど、忍耐力を持っていなかった。笑ってしまった償いに、「若い、若い」と連発したのも、彼女の琴線に触れてしまった。
「もういい、私は帰るから、あとは一人で頑張って」
鈴子は、伊佐崎に馬鹿にされるのも、もう限界だと怒ってしまった。彼が「若い、若い」と言っているが事実なら、彼にはキャピキャピした女子高生にしか、思われていないことになる。本当に、人の気持ちの解らない男を、兄は紹介してくれたものだ。
伊佐崎は、鈴子が不貞腐れるのを何度も経験しているが、どうにも理由が不明瞭で、どうすれば機嫌を直してくれるのかと、その度に苦心する。どうせ、大した理由などないと、飯でも奢ってやれば、いいだろうと、軽く考えているのだ。
とはいえ、新宿で知っている店と言えば、伊佐崎に『女』を手解きをしたママのいるスナックだけで、ほかに気の利いた店など、思いつかなかった。あの店なら、落ち着いて話が出来るのだが、女性と同伴するような店ではない。しかし以前に「新宿に行き付けの店がある」と、鈴子に言ったとき「いつか連れて行け」と、興味本位にせがまれたことがあった。
「鈴子さん、ほら、いつか言っていた、私の行きつけの店が、この近くなのだけれど、そこで話の続きをしないかな？　鈴子さんは、スナックで、お酒飲んだことないでしょう？」
と、伊佐崎が言うと、鈴子は「スナックで飲んだことがない」との言葉に、
「ありますよ、スナックで飲んだことぐらい、ありますよ」
過剰に反論してしまった。
それでも鈴子は、ファミレスやハンバーガーショップなど、泣いた子供をあやす様な店に、連れ込もうとしたのなら、取り返しがつ

かないほど、嫌ってやるつもりだった。偶然とは言え、伊佐崎が大人の店をチョイスしたのは、彼女の自尊心を擽(くすぐ)るのに、ぴったりだった。

「いいですよ、もう少しだけ、付き合いますよ」

鈴子は、伊佐崎の提案に、素直に応じると、また腕を組んできたので、彼は「お腹が空いて不機嫌だったのかな？」と、見当外れの答えで、勝手に納得した。

二人がスナックに向かって、犯行現場のある広場に戻ると、先ほどの警官がニヤニヤと、厭らしく笑いながら敬礼したので、鈴子はアカンベーをして、伊佐崎の手を引っ張って、足早に通り過ぎたようとした。

「あれ、麻子さん？」

鈴子は、道の隅で男性に絡まれていた、麻子を見つけた。

麻子は、黒いロードドレスのような服装で、夜の繁華街を素人女が歩くのに場違いな格好をしていた。どうやら犯行現場に向かった、鈴子の後を追ってきたところ、目立つ格好から、商売女と間違われて、酔払いに捕まっていたらしい。伊佐崎が近付いて、警察手帳を見せると、男はすごすごと退散した。

「しつこくされて、困っていたんです。本当に、ありがとうございます」

と、麻子は、酔払いを追い払ってくれた伊佐崎に、甘えた声で言った。

「えーと・・・それは、良かった」

伊佐崎は、麻子の素直に甘える仕草に、思わず言葉を詰まらせた。その様子を見ていた鈴子は、麻子の手を取り、伊佐崎の顔を見て、

「伊佐崎さんの警察手帳は、警官だけでなく、酔払いも追い払えるんですね。私たちも、追い払われちゃいますか？」

と、少し嫌味を込めて、皮肉を言った。これには、伊佐崎も鼻を掻いて、誤魔化すしかなかった。

「歌舞伎町が、こんなに広いとは思わなかったのよ」

「東京生まれなのに？」
「うん、人混みが苦手なので、あまり出歩かないのよ」
麻子の話を聞いていた鈴子は、人混みが嫌いなんて、親友の美紀子と同じで、「仲良くなれそうだわ」と、新たな友人の出現を歓迎した。
「それより、どうして歌舞伎町に、麻子さんがいるの？」
「鈴子さんが家を出て行った後、事件のことが気になって、すぐに追いかけたのだけれど、携帯番号を聞き忘れたものだから、ここに直接来てみたのよ。鈴子さんに、どうやって連絡取ろうかと、そこの隅に座って悩んでいたら、変な人に絡まれてしまって・・・」
麻子は、広場に面した裏路地を指差すと、人気のない階段に、腰かけていたと言う。夜の歌舞伎町で、黒いローブドレスを着て、黄昏ていては、商売女に間違われても、仕方のないことだ。
「目立たない格好をしてきたはずなのに、道行く人にジロジロ見られて、すごく怖かったわ」
「夜の歌舞伎町には、とても似合っていると思うがね」
伊佐崎は、麻子の格好を改めて見た。ここが修道院であれば、彼女のローブドレスは修道女のように、見えるのかもしれないと思った。
麻子は、鈴子よりも更に幼く見えた。伊佐崎が腕時計を見ると、既に二〇時を回っているのだが、こんな時間まで高校生が出歩いても、良いものだろうか。彼女は、芦木隆文警視正の娘、殺人事件の起こった現場を連れ回したと知れたら、責任問題を追及されかねない。
「芦木さん、家族の方に連絡をした方が、良いのではないかね？」
と、伊佐崎は言った。
「あら、私は鈴子さんより、少しだけお姉さんなので、両親の許可なんて要らない年齢（とし）よ。刑事さんには、私が幾つに見えたのかしら？」
麻子は、伊佐崎に、若く見られたことを素直に喜んだが、年上だ

と聞かされた鈴子は、驚いた様子だった。
「わ、私より年上だったの？」
「大学を卒業してから、もう何年も経っているのよ。女子大生の鈴子さんより・・・もう、年齢の話は終わりにしましょう」
と、麻子は、上機嫌で話を切り上げた。
「そんなことより、そこに座っているときに、足元で、これを拾ったのだけれど・・・」
麻子は、そう言うと、ハンカチに包んだ、筒状の物を手渡した。伊佐崎は、手渡されたものが何なのか、解っていない様子で、人差し指と親指で、摘まみあげた。真鍮製の口紅ケースのような、表面に蔦が絡まる装飾が施されていた。鈴子は、これと似た物を見たばかりだ。
「伊佐崎さん、それって薬莢じゃないのかしら？」
と、鈴子が指摘すると、伊佐崎は、指紋を付けないよう慎重に、上着のポケットに仕舞い込んだ。
「確かに、これは薬莢かもしれない。しかし、鑑識の連中が、こんな証拠を現場で見落とすだろうか？　パッと見て薬莢だと、気付かなかったのかもしれないがね」
伊佐崎は、鈴子が薬莢だと見抜いたことを褒めてやった。
麻子は、「やっぱり・・・」と、小さな声で言うと、意を決したかのように、伊佐崎の顔を見据えた。
「殺人事件に使われた弾丸は、芦木家に保管されていた、『強欲』の弾丸で行われたました」

第五話　三賢者の興亡

伊佐崎は、二人の女性を同伴して、スナック『馬小屋』に着くと、ママの桜花が驚いた顔をして、出迎えてくれた。ママは、和服の似合う、美人だったが、ほんの少しだけ口が悪かった。彼は、女性客を同伴したことがなく、いつもカウンターの隅で、ひっそり晩酌をして、帰っていく古い馴染みの客だ。

「サンちゃん、今夜はどうしたの？　両手に花じゃないのよ、まだ二人とも蕾（つぼみ）だけれど」

と、桜花は、カウンター席で、両手に花を愉しむつもりね、と、伊佐崎を茶化したが、彼は、静かなテーブル席に案内してくれと、口数少なく頼んだ。鈴子と麻子は、店の女の案内で一番奥にある、ボックス席に座ると、物珍しそうに、店内を見渡した。薄暗い店の中央には、半円形のカウンターが置かれており、それを取り囲むように、テーブル席が配置されている。広い店ではなかったが、花に彩られた店内や、鼻腔をくすぐる香、趣味の良い調度品など、場末の居酒屋と比べるまでもなく、高級な店だ。

「麻子さん、こういうお店に来るのは、じつは初めてなんだけれど、ここって高いわよね？」

と、鈴子は、桜花と立ち話している伊佐崎に、聞こえないよう、小さな声で聞いた。麻子は、首を横に振ると、「私にも分らない」と、目で合図した。ほかのテーブルは、男性客ばかりで、お酌などで、接客している女性はいなかった。店内で接客しているのは、ママのほかに、カウンターの中で働いている、男が一人と、空いたテーブルを片付けている、女が一人いるだけだ。

「麻子さん、こういうお店では、女の子がお酌していたり、セクハラ親父が騒いでいたり・・・」

「それは、キャバレーとか、クラブじゃないかしら？」

「そうなの？」

鈴子は、伊佐崎の行きつけの店を、風俗紛いの店だと、勘違いしていた。彼女は、照れ隠しに笑うと、麻子もクスクスと笑った。ただ、彼が桜花と話し込んで、なかなか席に着かないことには、「美人を二人も待たせて、ママと何を話しているのかしら」と、厭(いと)わしい気分になった。

「サンちゃん、あの二人とは、どういう関係なのかしら？　私の店に女の子なんか、連れ込んで、次から出入り禁止にするわよ」

と、桜花は、意地悪く伊佐崎を問いただすと、彼は、頭を掻き揚げて、困った顔をした。

「こちらを睨んでいる娘は、去年の冬、店で騒ぎを起こした、岩壁刑事を覚えているかい？　その刑事の妹で鈴子さん。彼女は、東京の大学に進学して、板橋に住んでいるのだけれど、彼に頼まれて、勉強を見てやっているのだ」

と、伊佐崎は、二人の様子を見ている、鈴子を鼻で指して言った。

「ショートカットの子は、イモ刑事の妹なのね。そう言われてみれば、垢抜けてないところが、あのイモ刑事に似ているわね。お兄さんみたいに、店内で騒いだら、本当に出入り禁止だからね」

桜花は、熱血漢の岩壁刑事のことが、あまり気に入っていなかった。彼が、伊佐崎と来店したのは、去年の年末、飲み明かした挙句、大きな声で喚き散らし、ほかの客や店に、多大な迷惑を掛けたからだ。しかし、彼女の「出入り禁止」は、いつも「次は～」と、口ばかりで履行されたことがない。口は悪いが、人情味のあるのが、スナックのママなのだ。

「もう一人の子は、上司の芦木警視正の娘さんで、芦木麻子さん・・・まぁ、二人とも、社会見学みたいなものだよ」

「あんな幼い子に、尼さんみたいな格好させて、夜の街を連れ回すなんて、非常識じゃないの。どんな勉強を教えているのか、知らないけれど、サンちゃんが先生なんて、彼女たちも可哀想ね」

桜花は、麻子の黒いローブ姿を、辛気臭い尼さんだと、せせら笑うと、席に戻るようにと、伊佐崎に背中を押した。彼女は、初来店

の客の素性を聞きだすと、帯に忍ばせたメモに、新規のお客さんとして、名前を書き記していた。
「鈴子さんと、スナック談義をしていたところよ」
と、麻子は言った。
「それは興味深いね、一体どんな話をしていたのかね？」
「うーん、どんな話でしたっけ？　そんなことより、麻子さんには、聞きたい話があるのだけれど、まずは乾杯しましょう、乾杯しましょうね」
と、鈴子は、伊佐崎が運んできた、水割りセットのグラスに、素早くウイスキーを注ぐと、最初の一杯目を、勢いよく空にした。彼女は、喉が渇いていた訳ではなく、麻子が自分の恥かしい勘違いや、桜花に嫉妬していたと、彼に話してしまう前に、話題を変えたかった。
鈴子の飲みっぷりを見た麻子は、唖然としたが、鈴子が酒豪だと知っていた伊佐崎は、落ち着いた様子で、話を始めた。
「さて、大体の話は、鈴子さんから聞いているのだが、二、三質問して良いかね？」
と、伊佐崎は言った。麻子は、彼の質問に、全て答えると約束した。
「犯行に使われた弾丸は、芦木家で保管されていたと、言っていたけれど、それは本当のことなのかね？」
伊佐崎は、ほかの客に聞かれないように、前屈みになった。事件の凶器となった、弾丸の所持を問質している様子を、万一にも警察関係者に聞かれでもしたら、厄介なことだ。
「私が幼かったとき、お爺様から『強欲』を手に入れたと、桐箱を見せてもらいました。中身を見ることは、出来なかったのですが、そのとき『七つの弾丸』の伝説を聞かされて、その一つが『強欲』なのだと。お爺様は亡くなるまで、大切に保管していたので、嘘ではなかったと思います」
「実際には、桐箱の中身が犯行に使われた弾丸だと、証明すること

が出来ないのですね？」
　伊佐崎は、麻子に確認すると、彼女が頷いたので、彼は安堵した。もしも、犯行に使われた弾丸が、芦木家に保管されていたのなら、ここにいる麻子も、その父親である警視正も、容疑者として疑わなければ、ならなかったからだ。もちろん、彼女の話が嘘で、凶器である弾丸が、家にあった可能性はゼロではない。だが、彼女に嘘を吐く必要がないのは、明白だ。なぜなら、そんな嘘を吐くくらいなら、最初から「当家に保管していた」などと、報告する必要がないからだ。
「その桐箱ですが、お爺さんの亡くなった後、どこに保管されていたのかね？」
「お爺様の霊前備えてあったのですが、ある政治結社の方々に、父が引き渡してしまいました」
　伊佐崎は、被害者の田村が、政治家を目指していたことを思い出して、少し怪訝（けげん）な顔をした。
「その政治結社とは、どんな繋がりがあったのかね？」
「私は、詳しく知らないのですが、お爺様が弾丸を手に入れるとき、死後の所有権は、政治結社に寄贈することが、前提だったようです。それに、祖父は『強欲』が、預り物だと言っていましたので、お返ししたのだと思いました。お爺様と、政治結社との関わりは、解りません」
　麻子は、政治結社の名前が、思い出せなかったが、父親なら解るはずだと、言った。彼女の祖父が亡くなったとき、まだ七歳だったのだから、それが曖昧な思い出でも、責めることが出来ない。ともかく、凶器に使われたとしても、芦木家から持ち出されて、二〇年近く経った犯行だ。
「『七つの弾丸』の話なのだが、弾丸は二発ずつ、三人の権力者が保管していたと、聞いているのだが、芦木家に保管されていたのは、一発だけだったのかな？」
「刑事さんは、『七つの弾丸』について、どの程度知っているのか

しら？」
と、麻子が聞き返したので、伊佐崎は、鈴子から聞いた話が、全てだと言った。そして、彼は、『七つの弾丸』が民衆の寓話かもしれない、罪は罷免されることがないと、自論を語って聞かせた。すると、彼女は、伝説の真偽について、彼に同意したものの、伝説の弾丸が持つ効力は、本物に違いないと答えた。
「権力者の三人は、それぞれの戒めとなる弾丸で、三竦みになるように、二発ずつ所有していた・・・その解釈は、とても面白いわ。お爺様は、伝説の弾丸を調べていて、使用された形跡から、弾丸が二発ずつ所有されていたと、結論を出したみたい。ただ、お爺様が所有していたのは、『強欲』だけだったと思います」
と、麻子は言った。彼女の話を訝しげに聞いていた、伊佐崎は、後頭部を三回ほど叩いて、天井を見上げた。頭を強く叩いたところで、考えがまとまるはずもないが、これが彼の物を考えるときの癖だ。
「伝説の弾丸の持つ効力は、過去に弾丸が使われたと、確信に至る二つの事件。その顛末を聞けば、刑事さんも、常識に問われた、自論を疑うはずです」
「弾丸が使われた事件と言うのは、アドルフ・ヒトラーが使った『色欲』『憤怒』のことかね？」
と、伊佐崎が麻子に聞くと、やり取りを黙って聞いていた、鈴子が二人の会話に、滑り込むように割って入った。
「麻子さん、伊佐崎さんはですね、ヒトラーの撃った弾丸は、愛人だったエヴァと、ヒトラーが自殺に使ったなんて、夢のないことを言うんですよ。この人は、『七つの弾丸』のことも、伝説の弾丸のことも、眉唾だなんて言って、信じてないんですよ」
鈴子は、二人の会話に入れなかった間、ウイスキーを飲み続けていたようで、管を巻いてきた。
「やはり刑事さんね」
と、麻子が言うと、「ほら、見なさい」と、鈴子は得意気な顔を

したが、
「お爺様も、同じ結論に至ったみたいです。エヴァは、服毒死とされていますが、エヴァとヒトラーの遺体は、側近らによって焼却処分され、その遺体は酷く損傷していました。お爺様は、二人が罪を許されることを願って、伝説の弾丸を使ったと確信していました」
麻子が感心したように、伊佐崎のことを見つめているのが、鈴子は悔しかった。
「けれど、ヒトラーの自殺には、後日談があるのです」
「後日談とは？」
伊佐崎は、切歯扼腕（せっしやくわん）する鈴子を尻目に、質問を続けた。
「損傷した遺体は、ソ連軍の軍医によって、検視が行われたと、歴史に語られていますが、伝説の弾丸を撃った、エヴァと、ヒトラーは、その罪が問われることなく、その後の余生を添い遂げた。彼らが打ち抜いたのは、彼ら自身ではなく、彼らが背負ってきた、業そのものだったと・・・」
と、麻子が言うと、伊佐崎は額に手を当てて、黙り込んでしまった。もしも、彼女の話が本当だったとしたら、ヒトラーが明かした『弾丸の持つ秘密』とは、何だったのか。
「伊佐崎さんは、ナチスのアーネンエルベが、どんな研究をしていた部署か、ご存知ですか？」
「アーネンエルベは、アーリア人の優秀性を実証し、人種主義における・・・いや、君が言っている研究とは、オカルト分野のことだろうね」
と、伊佐崎は、テーブルに肩肘を乗せると、氷が解けて、薄まったウイスキーを飲み干した。
「あっ、その話の途中で、電話が掛ってきたので、私も話の続きが、聞きたいです」
麻子は、ともかく鈴子までも、伝説の虜になっているのに、女性とは元来、こうした夢物語に、弱いのではないかと、伊佐崎は頭を抱えずにいられなかった。桜花は「男は夢に、女は現実に生きてい

るのよ」と、教えてくれたが、どうも担がれた気がした。
「オカルト研究の成果では、伝説の弾丸の紋様に、ある種の呪詛式が組み込まれており、弾丸を使用した罪だけでなく、それまでの全ての罪が許されると、呪詛式を解読したことです。このことを知ったヒトラーは、ただ空に向かって、弾丸を撃つだけでも、伝説の効力が発揮されると考えたのよ」
「空に向かって撃つだけでも、全ての罪が許される。それでは、エヴァとヒトラーは、自殺したわけではないのかね？」
「なんか、伊佐崎さんの話とは、ずいぶんと違う結末じゃない？」
と、鈴子は、麻子の話を聞くと、息を吹き返したように、伊佐崎に食って掛かったが、彼は黙ってやり過ごすことにした。
「その後、連合軍で生前説が湧き上がると、それを否定するように、イギリスでは、ヒトラーの死を題材にした映画や、テレビ番組が作られたのよ。有名なのは、『ヒトラーの死』と、『アドルフ・ヒトラー最後の日』かしら」
麻子は、鈴子が熱心に聞いてくれるのが、よほど嬉しかったのか、伊佐崎をそっちのけで、話を続けた。
「映画やドラマでは、エヴァがシアン化物で、ヒトラーが愛用のワルサーで、自殺したと、描かれていたのよ。映画のエヴァは、情欲に囚われた『色欲』、ヒトラーは、側近やエヴァを怒鳴り散らす『憤怒』、それらが史実であったかのように、歴史を改竄（かいざん）している」
麻子は、鈴子の腕を取るように、熱弁を振るった。伊佐崎は、二人の話が終わるまで、腕組みをして聞いていた。そして、彼は、次の展開が、見えてきたところで、一つの疑問を呈した。
「その話の流れだと、伝説に出てくる権力者の一人は、イギリス人ではないのかね？　それとも、ヒトラーの遺体を検死した、帝政ロシア（ソビエト連邦）。ヒトラーの死を隠匿し、その罪を消し去ることが出来たのは、連合軍に違いないからね。しかし、その話が事実だとしても、どうやって弾丸の持つ約束事が、代々継承されていくのかね。ヒトラーが、先代の権力者から譲り受けたのなら、弾丸

の約束事についても、アーネンエルベの研究成果を待つことなく、知っていたと考えるべできでは？」
と、伊佐崎が聞くと、鈴子は鞄から大学ノートを取り出した。
「ヒットラーが弾丸を手にしたのは、世界大戦終結後から復員して、政治家を目指した頃、ドイツ労働者党幹部アントン・ドレクスラーから、弾丸を譲り受けて、軍を退役して入党を決めたと・・・つまり、ヒトラーが弾丸を手にしたのは、彼が権力者になる前ということね」
鈴子は、得意気に答えた。
「それに約束事が真実かなんて、弾丸を使った前例が無いのだから、刑事さんの言うとおり、真実なのか、民衆の寓話なのか、真偽のほどが疑わしかったはず。ヒトラーは、アーネンエルベを使って、弾丸の持つ効力・・・呪詛的な力を知っておく必要があったのよ」
と、麻子は、鈴子の話に、少しだけ付け加えた。
「伝説の弾丸の所有者は、必ずしも時の権力者でなくても、構わなかったと言うことか。『七つの弾丸』の伝説の出自と、物語に登場する『伝説の弾丸』は、別々の物語を歩んでいると、君のお爺さんは、考えていたのかね」
「刑事さんの言うとおり、お爺様は、伝説の弾丸を持つ者が、権力者になるのだと、考えていたのかもしれません」
「だとすると、君のお爺さんが、伝説の弾丸を欲した理由や、政治結社との繋がりも、頷けると言うことか・・・そして、政治家を目指していた、被害者の田村も、物語の登場人物と言うことか。『七つの弾丸』は『七つの罪源』、奇跡の弾丸の誕生に立ち会ったのは、キリスト生誕に贈り物を届けた、三賢者と言ったところかな？　この物語は、どこまでキリスト教の模倣を、続ける気のだろうね」
と、伊佐崎が言った。
鈴子が空にしたボトルの代わりに、新しいボトルを運んできた桜花は、彼らの話を聞いて、胸元から聖母子が画かれたシガレットケースのようなものを取り出した。彼女の取り出したケースには、カ

トリックの数珠状の祈り用具、ロザリオが収められていた。
「三賢者は、ヘロデ大王に「新しいユダヤ人の王」について尋ね、ベツレヘムでイエス生誕に立ち会うと、贈り物を捧げた。私は、熱心なカトリック信者なの、東方の三賢者の話なら、混ぜていただきたいわ」
「やっぱり、ママはクリスチャンだったのね」
麻子は、桜花がクリスチャンだったと、最初から分かっていたようだ。長年通っている伊佐崎でさえ、和装の彼女が、胸元にロザリオを忍ばせているなど、想像したこともなかった。
「お店の名前は『馬小屋』、店内を彩るマリーゴールド、焚かれた乳香、ボトル棚に飾られた薬壺と天秤、イエス・キリストの誕生をモチーフにしているのね」
「さすがに、宗教学者さんね。では、この店でイエスを表すのは、何か解るかしら？」
と、桜花は、伊佐崎も知らなかった、麻子の職業を言い当てた。ママには、なんで彼女が、宗教学者だと、言い当てることが出来たのだろうか。それに、先ほどから、お互いに納得しているようだが、馬小屋はともかく、マリーゴールド、乳香、薬壺が、なぜイエスの誕生を表しているのか。
伊佐崎が頭を悩ませていると、意外なことに、鈴子は、ピンと来たようで、
「マリーゴールドは、『聖母マリアの黄金の花』と呼ばれていますよね。花言葉は、『信頼』『生命の輝き』『変わらぬ愛』。つまり、マリーゴールドが飾られている、花瓶がイエス・キリストでは、ないのかしら」
と、鈴子が言うと、桜花は、マリーゴールドの花を持ち上げた。花瓶に描かれた聖母マリアは、イエスを抱いていた。麻子は、マリーゴールドの花に隠されていた、イエスを言い当てた、彼女に拍手すると、ママもニコリと笑った。
鈴子は、花が好きで、夏休みに花に囲まれて、過ごしたいからと、

実家の近くのハーブ園で、アルバイトしていた。伊佐崎は、彼女でなければ、花瓶のイエスが、見つけられないと、桜花の質問は、意地が悪いと思った。
「君たちばかり、盛り上がっているところ、申し訳ないのだが、ママは、どうして麻子さんの職業が、宗教学者だと、思ったのかね？」
と、伊佐崎は、ぶっきら棒に言った。
「そうね、どうして解ったのかしら？　サンちゃんは、知ったかぶりが、過ぎるから、素直に教えて下さいと、言ったのなら、教えてあげるわよ」
桜花は、いつも伊佐崎に、「何も知らないのね」と、色々と手解きをしたがる。彼は、学者になれるほど、物知りだと、図々しいことは言わない。ただ、そこいらの連中と比べれば、博識の方だと、自負心があった。ママに教えられて、感嘆したのは、『男には、女心が永遠に理解できない』と、言うことだけだ。
「この席も、イエス・キリストの誕生を表しているのわね・・・解るかしら？」
と、桜花は、自分も席に着くと、和服に施された金の刺繍に、手を当てた。
「私がメルキオール、乳臭い鈴子さんがバルタザール、修道女の麻子さんがカスパール、差し詰め、東京よりの三賢者ということね。何も知らない、サンちゃんに、色々と知恵を授けて、あげないとね」

麻子は、なかなかのセンスだと、面白がったものの、『乳臭い』と烙印を押された鈴子は、不機嫌な様子だ。
「メルキオールは、三賢者の中で、一番年齢が若いんですよ。ママは、お酒を運んできた、年増なんですから、カスパールがお似合いですよね。伊佐崎さんも、そう思いますよね？」
都合が悪い時だけ、同意を求めるのは、止めてほしかった。それに、伊佐崎には、イエスの誕生に、深い造詣を持ち合わせていない、桜花には、カスパールが似合いだと、同意を求められても、よく解

らない。唯一の救いは、ママが「年増」と言われても、上機嫌で笑っていることだ。

「そう言えば、刑事さんには、生まれ持った十字架が、あるのだから、イエス役にピッタリですね」

と、麻子まで悪乗りしているが、ここの酒には、アルコール以外のクスリでも、入っているのでは？　と疑ってしまう。

「信心深い連中の集まりには、とても見えないね」

と、ボックスシートの上から、伊佐崎たちを覗きこんでいたのは、警視庁捜査四課の黒羽武（くろはたけし）警部だった。彼の所属している部署は、〇暴（まるぼう）と紹介した方が、いいだろう。伊佐崎とは、犬猿の仲だ。

黒羽は、新宿の守護者『八咫烏（やたがらす）』だと、持ち上げる若い刑事もいたが、彼の絡んだ事件は、必ず凄惨な結末を見る。伊佐崎は、彼の出現が、不吉の前触れだと、感じずにいられなかった。

第五話　三賢者の興亡（後書き）

０８／０８／２０１１

【元】鈴子が空にしたボトルの代わりに、新しいボトルを運んできた桜花は、彼らの話を聞いて、首に巻かれた、真珠のネックレスを外した。真珠のネックレスには普通、ペンダントが付いていないのだが、彼女のネックレスには、十字架のペンダントが付いていた。

【改】鈴子が空にしたボトルの代わりに、新しいボトルを運んできた桜花は、彼らの話を聞いて、胸元から聖母子が画かれたシガレットケースのようなものを取り出した。彼女の取り出したケースには、カトリックの数珠状の祈り用具、ロザリオが収められていた。

【元】私は、熱心なクリスチャンなの、

【改】私は、熱心なカトリック信者なの、

【元】長年通っている伊佐崎でさえ、和装の彼女が、胸元にロザリオを忍ばせているなど、想像したこともなかった。真珠のネックレスだと、思っていたのは、カトリックの数珠状の祈り用具、ロザリオだった。

【改】長年通っている伊佐崎でさえ、和装の彼女が、胸元にロザリオを忍ばせているなど、想像したこともなかった。【以下削除】

改稿理由：カトリックの信者（桜花）が、ロザリオを首からかけるのが相応しくないため、同表現を削除。

第六話　黒衣の男

黒羽は、ノンフレームの細い眼鏡に、濃紺のコートを肩に羽織って、まるで新鮮組を気取って、新宿の街を闊歩しているような伊達男だった。彼は入庁したての頃、〇暴で荒事を得意として、血腥い現場で活躍していたが、暴力団の抗争摘発における、強引な捜査方法が問題視されて、悪名の方が高まってしまった。

黒羽は、ここ数年、捜査共助課で、地方巡業に出されていたが、ある事件で功績を挙げて、再び古巣の新宿に、戻ってきたばかりだった。

「覗きが趣味とは、相変わらずだな。八咫烏の異名は、伊達ではないね」

と、伊佐崎は、頭越しに声をかけてきた黒羽を皮肉った。

「俺は、空から見てるからな、いつだって早耳なんだぜ」

伊佐崎は、黒羽の物言いが好きではなかった。彼は、何でも見通せる、特殊な目を持っているわけでも、どんな囁きも聞き漏らさない、特別な聴覚を持っているわけでもない、たまたま店に居合わせただけで、それ以外の理由なんて、あるはずがない。ただ、彼の異名『八咫烏』は、名ばかりではないと、認めざるを得なかった。

八咫烏とは、『日本書紀』や『古事記』に登場し、神武天皇御東征で天皇の軍隊を道案内をした、三本足の烏のことで、日本サッカー協会のシンボルマークとして有名だ。陸上自衛隊中央情報隊では、八咫烏に望遠鏡、鍵、日本刀を併せ持つ、シンボルマークが使われているが、望遠鏡は、情報を見逃さない目。鍵は、情報の保全。日本刀は、戦闘力としての情報を象徴している。彼が〇暴の若い刑事を率いて、新宿を徘徊し、街の情報屋を駆使している様、彼が『八咫烏』と呼ばれる所以だ。

三賢者の話で盛り上がっている女性陣は、店で鉢合わせした、二人の刑事のことなんて、気にする様子がなかった。彼女たちは、事

件のことよりも、面白い話題に夢中なのだろう。鈴子は、半年前の事件で、黒羽にも、会っているのだが、頭すら下げなかった。
「伊佐崎さん、こっちのテーブルに来ないか。女子供の話に付き合わされて、そろそろ飽きている頃だろう？」
鈴子は、黒羽の「女子供」との言葉に、子供扱いされたと思ったのか、彼を一瞥すると、二人の刑事を手で追い払った。彼女は、突然現れた刑事が、半年前の事件でも、自分を子ども扱いしていたと、覚えていて、無視を決め込んでいただけだ。
伊佐崎は、グラスを片手に、黒羽のテーブルに移ると、彼は一人だったが、彼のテーブルには、店で一番高いバーボンが、封も切らずに、真新しいボトルのまま置かれていた。
「寂しく飲んでいる訳でも、ないようだね・・・ずいぶんと高い買い物だったのでは？」
「そうだな、アンタの話次第では、高い買い物になるかもしれないね」
と、黒羽は言うと、テーブルの上のボトルを指で弾いた。彼が、『馬小屋』を訪れたのは、偶然ではなかった。伊佐崎が刑事の妹や、上司の娘を連れてきたと、桜花が彼に連絡したに違いない。ママの得た対価は、店で一番高いボトルを、彼に売り付けたことだ。新宿の女は、若い間男に、長年の友人を売り払うことを、恥ずかしいと思わない。
「なるほど、君の情報網を利用すれば、ママが麻子さんの職業を、言い当てられるはずだ」
伊佐崎は、黒羽の対面に座ると、ボトルの封を切って、グラスに注いだ。良い酒は、水で割らない。氷も入れない。そんな流儀だけは、何も語らずとも、お互いに認めていた。
「アンタが調べているのは、昨晩の殺しの件だろう。あの事件と、芦木警視正の娘は、何か関係しているのか？　先ほどの宗教染みた話・・・奴は、宗教がらみで、殺されたのかい」
黒羽は、鈴子が無関係だと、決めつけていたのか、麻子の話を聞

いてきた。彼の嗅覚は、優れているが、効き過ぎる鼻は、余計なことまで感じ取るようだ。
伊佐崎は、『七つの弾丸』の伝説と、今回の殺人に使用された凶器が、謎めいた弾丸で行われたと説明し、麻子から受け取った、薬莢をポケットから取り出した。
「これが、もし芦木家に保管されていた弾丸ならば、事件と芦木家が無関係では、ないと思うのだがね。今のところ、両者を結び付けているのは、警察官僚だった彼女の祖父と、政治結社の繋がりだけだ」
黒羽は、突拍子もない話を聞かされて、毒気が抜けたのか、伊佐崎から薬莢を受け取ると、ソファーに深く腰掛け、黙ってしまった。
「もちろん、そんな秘密の力の存在は、有り得ないと思っている」
と、伊佐崎が、慌てて否定したものの、黒羽には届かなかった。
「アンタは、いつも夢みたいな捜査対象（フィクション）に、踊らされているのだな・・・前回の事件も、あのガキに、どれだけ振り回されたと思っているのだ」
黒羽は、後ろの席で談笑している鈴子に、事件を掻き回されるなと、忠告してきた。伊佐崎も、これには苦笑するしかなかった。
「彼女たちの話がフィクションでも、事件は現実に起きている。被害者を貫いた弾丸は、彼女たちの伝説の一部かもしれないが、犯人が空想の怪人でないことは、君に指摘されるまでもない」
黒羽は、伊佐崎の言い分を理解したのか、前屈みになると、被害者の田村が所属していた、政治結社について語り始めた。
「街金融の元締めだった田村に、政治結社への入党を勧めた人物は、『新宿の老人』と呼ばれている、南方義嗣（みなみかたよしつぐ）だ。被害者が所属していた、政治団体は、南方の主催していた『正南会』のことだろう」
「南方と言えば、政権与党の幹事長だった・・・」
「彼は政界引退後、多くの政治家を輩出している『正南会』を主催し、政界のフィクサーとして君臨している。しかも、この街で怪しげな宗教団体にも、傾倒している。宗教を隠れ蓑にした、非合法の

暴力組織との噂もあるが、表向きは、新宿の教会にヤクザ者を集めて、更生の手助けをしている団体だ」
「もしかして、田村も宗教団体に・・・」
「俺は、伝説や呪いの類を信じないが、この事件が宗教絡みだったとしても、ちっとも驚かない。アンタの話を聞いていると、田村が殺されたのは、その伝説を利用した、なぞらえ殺人の可能性があるな」
「なぞらえ殺人？」
伊佐崎は、田村が殺されるのに、伝説を模倣する必要がないと思った。被害者を殺すのが目的なら、引金を引けば済むことだ。殺人事件に、伝説の弾丸が登場しても、そんな伝承が、現実の捜査に影響するはずがない。まさか、警察が伝説を信じて、犯人を罷免するとでも、思っているのだろうか。
「ヤクザの鉄砲玉は、刑務所を出所したら幹部にしてやる・・・そんな口約束が、引金を引かせる動機になるのだ。田村を撃ち殺した奴、撃ち殺せと命じた奴が、伝説の信奉者だとしたら、伝説の弾丸を使用した犯罪は『罪に問われない』と、伝説になぞらえた可能性がある。事件の背景には、そうした外伝が、存在するのかもしれない」
「なるほど、犯人が伝説の信奉者ならば、自らの犯罪が『罪に問われない』と、殺人を正当化している」
「この事件には、非合法集団が関わっていると、考えているのだ」
と、黒羽は、十八番（おはこ）の暴力団絡みの犯罪に、事件を見立てた。
「非合法集団とは、南方が傾倒している、宗教組織のことかね、それとも『正南会』のことかね？」
「その二つの組織は、『新宿の老人』の表裏だよ」
「情報通の君のことだ、既に被害者が殺された理由も、見当が付いているのでは、ないのかね？」
伊佐崎が言うと、黒羽は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。
「街金融の元締めをしていた田村が、政治家を目指したからと言っ

て、その利権を誰かに譲ると思うか？　お綺麗な体と、強欲に塗れた心は、相容れないと言うことだ。この街の金脈も手放さず、名声も手にしようとした男が、道先案内人に寝首を掻かれた」
「田村を政治結社に取り込んだのは、彼の持つ資金力だった・・・『新宿の老人』は、当てが外れたと言うことかね」
「彼の遺産は、お布施（ふせ）として、宗教団体に寄付される。彼の信心だけは、本物だったというわけだ。自分を殺した相手に、お布施する奴が、最後に夢見たのは、天国だったのかと思うと、笑えないか？」
黒羽は、面白い冗談でも言うように、被害者の死を愚弄した。
伊佐崎は、黒羽のことが、好きではなかった。それは、下品な冗談でも、暴力的な言動でも、まして容姿でもない。彼の生まれ持った、品性を感じさせない、存在そのものだ。辛うじて、嫌いだと突き放さないのは、彼ほど有益な情報をもたらす刑事を、ほかに知らないからだ。
伊佐崎は、黒羽の下卑（げひ）た笑いを横目に、隣のテーブルを見た。鈴子が、こちらをチラチラと見て、大笑いしていた。どうやら、桜花が、彼女に余計なことを言ったようだ。
「く、黒羽刑事は、八咫烏と、呼ばれてるのですよね？　あの三本足の烏ですよね？」
と、鈴子は、笑いを堪えきれないほど、面白い話を聞いたようだ。桜花は、鈴子の腕を抑えていたが、そんな力では、酔っぱらっている彼女を制止できるはずかない。
「伊佐崎さんは、黒羽刑事が八咫烏と呼ばれる理由を知ってますか？　ママが教えてくれたの、黒羽刑事の足の間には、三本目の足があるって！」
伊佐崎は、どうしてスナックでは、下品な話で盛り上がるのかと、鈴子に苦笑いで返した。
話に水を差された黒羽は、鈴子の冗談に耳を貸さずに、手で追い払うと、〇暴の捜査状況が芳しくないと、心情を漏らした。
「この事件には、不可解なところも、いくつかある。新宿のど真ん

中で起きた、銃殺事件に関わらず、目撃証言が一致しないことだ。大勢の人間が、発砲音に気付いて、犯行直後の犯人を見たはずなのに、犯人の性別すら不明とは、なぜなのだ？　まさか捜査一課の連中が、手柄を奪われまいと、計略をめぐらせているのか？」

殺人事件の捜査は本来、伊佐崎の所属する捜査一課の担当だが、繁華街で銃が使われており、〇暴も独自捜査をしていた。黒羽が、情報の隠匿を疑うには、横断的な捜査を認めていない、警察組織の体質を知っているからだ。課名に割り振られた数字には、何の意味もないが、捜査の花形、殺人事件を取り扱う捜査一課は、警視庁の中でも、取り分けてエリート意識が強かった。今回の事件のように、組織犯罪を背景にした、捜査では各課が、競い合う傾向にあり、手の内を明かさないことも、よくある話だ。

ただ、今回の事件では、縄張り意識で説明できない、警察上層部に不審な動きがあると、伊佐崎も、捜査状況に不満があった。そのことを思い出すと、彼は、無意識に険しい表情をしており、黒羽は、その表情から、証言の一致しない情報が、捜査一課の企みではないと、察知した。

「アンタらの妨害工作でないのなら、疑うべきは、偽証言者の存在だな。証言者には、宗教の信者か、『正南会』の会員が紛れている」

「偽証言者には、どちらも『新宿の老人』が関与している・・・それが事実ならば、この事件に圧力をかけているのは、政治的な力と言うことだ」

黒羽は、伊佐崎に、現場で拾った薬莢を渡せと、手を出してきた。普段の彼ならば、政治的背景のある、厄介な駆け引きには、興味を示さないのだが、今回の事件に、警察上層部に不穏な動きがあるのなら、その正体を暴いてやるのも一興（いっきょう）だと、伊佐崎に共闘を申し入れた。

「アンタのことだから、馬鹿正直に、芦木警視正の娘さんが、現場で薬莢を見つけたと、報告するつもりだろう。この事件に、警察上層部の関係者が、関わっていると知れば、ますます捜査の腰が重く

なる。その薬莢は、俺の街で、俺のシンパが持ち込んだとしても、何の不思議もない」

伊佐崎は、薬莢を手渡すと、黒羽の提案に従うことにした。彼の言うとおり、警察上層部の関係者である麻子から、重要証拠になる薬莢を、受け取ったものの、扱いに困っていた。彼は、『伝説の弾丸』の存在なんて、信じていなかったが、偶然に彼女が発見したことに、懐疑的な見方をしていた。彼女に凶器が発見できたのは、仕組まれていたのではないか。犯人は、薬莢の存在により、恰(あたか)も伝説の弾丸による殺人だと、誇示したかったのではないか。

伊佐崎は、麻子の犯行を疑っているわけではない。彼女や鈴子が、伝説の信奉者だったから、装飾の施された筒状の物体を、薬莢だと見抜いた。彼女たちの存在が、事件に仕組まれているのなら、事件に巻き込むことが、犯人の狙いかもしれない。それは、長年培った刑事の勘だ。

黒羽の人間性は、信用に値すると言い難いが、警察組織の裏事情に精通している彼が、伊佐崎の心情を察して、取り計らってくれるのなら、断る理由がなかった。

「芦木警視正の御嬢さんには、事情を説明しておけよ。これは俺が見つけた、事件の重要証拠だと、アンタらを守るために、俺は偽証罪を犯すんだからな」

と、黒羽は、薬莢をポケットに仕舞い込むと、伊佐崎の空いたグラスに、バーボンを注いでやった。彼は、彼から薬莢を渡されて、上機嫌になったようだ。

「このバーボンが、高い買い物にならずに、良かったと言うことかね」

伊佐崎の言葉に、黒羽は不敵な笑みを浮かべると、彼に席に戻って「女子供と飲み直せ」と、嫌味を言って、追い払った。

伊佐崎は、黒羽の横柄な態度を見て、やはり好きになれないと、改めて思った。彼が、鈴子たちの席に戻ると、桜花が立ち上がって、席を譲った。

「ママは、どうして伊佐崎さんのこと、サンちゃんと呼ぶの？」
と、鈴子は、立ち去ろうとする桜花に聞いた。
「三十郎（さんじゅうろう）だから、サンちゃんに決まっているじゃないのよ」
桜花は、言った。伊佐崎は、席を外していたとき、話題の中心が自分だったのかと、ウンザリした顔をしていた。
「どこぞの芸人みたいで、あまり好きではないのだが、名前だから仕方がない」
と、伊佐崎は、照れて耳を赤くした。
鈴子は、彼を名字で呼んでいたので、『三十郎』の響きが、新鮮な気がした。いつか、名前で呼んでみたいと、そのときまで胸に秘めておこうと思った。それまでは、彼の嫌がる「サンちゃん」と、呼んでやろうと、アルコールで冴えない頭で、考えていた。

第七話　魔女の企み

鈴子は、まだ昨晩のアルコールが、抜けていなかった。彼女は、兄や父親に似て、どんなに深酒をしても、二日酔いになることはなかったが、飲んだ翌朝に、元気よく目覚めるほど、体がアルコールに慣れていなかった。大学に進学してからは、板橋のアパートに一人暮らしで、いつまで寝ていようと、母親が起床を急かすこともない。彼女は、心地よい眠りに、微睡んでいた。

ただ、鈴子は、先ほどから寝室のドアをノックする音が、気になって仕方なかった。彼女のアパートは、１ＤＫで玄関を開ければ、すぐにベットが置かれており、寝室なんてあるはずがいない。それに、普段はＴシャツに下着で、寝転がっている彼女だが、今朝は手足を伸ばせば、文字通り糊（のり）の効いたパジャマが、涼しげな音を立てる。

鈴子は、恐る恐る目を開けると、天蓋付きベッドのレースが、窓から吹き込んだ風に揺れていた。彼女は諦めて、ノックに応えるしかなかった。

「昨夜は、かなり遅くまで、お酒を飲まれたようですね？」

「は、はい・・・えーと」

事情を呑み込めていない鈴子は、突然現れたエプロン姿の女性に、何を聞けば良いのかも、思いつかなかった。ここは、芦木家の寝室に、間違いないだろう。来客用に天蓋付きのベッドが置かれ、新品のパジャマを気前良く着せてくれる、そんな場所、ほかに思い当らない。

「そこのタンスに、お嬢様の見繕った服が掛けてありますが、丈の合う服がなかったので、スカートになってしまいますが、宜しかったですか？」

「・・・私の服は」

「お酒臭かったので、昨夜のうちに、クリーニングを手配しました

が、いけませんでしたか？」
　鈴子は、麻子と伊佐崎の三人で、『馬小屋』の前からタクシーに乗ったまで、記憶にあるのだが、その後は、寝てしまったのか、酔って覚えていないのか、ここまでの顛末が思い出せない。どちらにせよ、まだ知り合ったばかりの麻子に、醜態を晒したことだけは、確かだ。
　芦木家の家政婦は、鈴子が頭を掻きあげながら、パジャマの上から、下着を確認している様を見て、
「パジャマには、ご自分でお着替えになりましたよ」
　と、言って、苦笑しながら部屋を出て行った。
　鈴子は、慌ててタンスに用意された、服に着替えると、スカートを穿くのは、親友の美紀子に着せられた、フォーマルドレス以来で、久しぶりだと思った。上着のブラウスは、スェットパーカーを羽織って、うまく誤魔化せたものの、小柄な麻子のスカート丈は、彼女には短くて、部屋を出るのに躊躇してしまう。膝丈のタックスカートは、羞恥心を感じるほど、ミニではないのだが、羞恥心の度合いには、個人差があり、普段スカートを穿き慣れていない、彼女が極端に照れているだけだ。
　鈴子は、ベッドサイドに置かれた姿見鏡に、全身を映すと、スカートの裾をたくし上げた。
「うん、酔っていても、最後の砦だけは、守り切ったのね。うん、それなら良かった」
　と、鈴子は、自分を鼓舞するように、口に出して確認にした。
　鈴子の部屋のドアに、再びノックする音が響いたが、着替えが済んだことを確認する声の主は、先ほどの家政婦ではなかった。
「鈴子さんが宜しければ、朝食の後にでも、伝説の弾丸が使われた、もう一つの歴史的な事件について、話を聞かせたいのだけれど、お時間はあるかしら？」
　と、麻子は言った。彼女の申し出は、鈴子にとって、願ったり叶ったりだ。『七つの弾丸』の伝説が、もしもデマだとしたら、伝説

に登場する弾丸は、人々の信じる気持ちを、悪用した存在のはずだ。新宿の殺人事件の捜査は、刑事である伊佐崎に任せて、自分たちは、『七つの弾丸』の伝説が、どのような意図で、誰が伝えてきたのか、それを捜査するのが先決だ。

結果的に、新宿の事件も解決するのなら、それも喜ばしいことだ。少なくとも、犯人は、伝説の内容を知っている人物で、伝説の弾丸を入手している。鈴子と麻子で、弾丸の行方を捜査していれば、いずれは犯人に行き当たるのは必然。伊佐崎から殺人事件には、深入りしないように、釘を刺されていたが、不可抗力で、犯人探しに参加するのは、仕方ないことだ。彼女は、論文のことより、伝説を解き明かして、自分を小馬鹿にしている、刑事達の鼻を明かしてやろうと考えていた。

鈴子は、芦木家で遅い朝食を取ると、麻子の仕事部屋に案内された。彼女の部屋は、古めかしい祖父の書斎と一転して、シンプルな本棚と、机に置かれたパソコン、機能的な事務机と椅子、現代的な書斎といった具合だ。それでも、パステル調の家具や小物が、華やかなアクセントになっており、彼女らしい可愛い部屋に仕上がっていた。

麻子は、目が覚めるからと、家政婦が作った紫蘇（しそ）ジュースを勧めてくれた。濃い紫色の甘酸っぱい液体は、見た目ほどの粘度がなく、一気に飲み干してしまった。紫蘇ジュースは、爽やかな酸味が特徴なのに、アルカリ性なので、体に程よく吸収されて、疲れを癒してくれるのだと、彼女は教えてくれた。

「やっぱり、麻子さんは、博識ですね・・・あ、麻子先生ですね」

自分の通う大学の神学部に、芦木准教授と呼ばれる『魔女』がいると、噂を思い出したのは、麻子の仕事部屋に吊るされた、校章の刺繍された白衣を見たからだ。昨晩、スナックの桜花ママが、彼女を「宗教学者さん」と呼んでも、気が付かなかったのは、一生の不覚だった。

「あら？　今更、先生は止してね」

麻子は、小さくて可愛らしい姿と、目尻の落ちた大きな目、同性の鈴子さえ魅了する仕草、お嬢先育ちの社会性の乏しさも手伝って、実年齢より遥かに若く見える、ゼミ生たちが「芦木准教は年を取らない」との証言が、彼女が『魔女』と呼ばれた所以だ。

「麻子先生・・・さん、えーと、私は心理学部の学生なので、ウチの先生だって、気付きませんでした」

鈴子は、出会ったばかりで、自己紹介もする前に、「心理学は、鈴子さんの方が専門家ね」と言っていた。麻子は、最初から自分の通う大学の学生だと、知っていたのだろう。彼女は、迂闊なことばかりで、自己嫌悪になりそうだった。

「ウチの大学の神学部は、お飾りみたいなものだから、あまり気にしないで。私は、アメリカの大学で、神学を研究していたのだけれど、日本に戻っても研究を続けたいからと、学長にお願いして、研究室を頂いたのよ」

麻子は、机の引き出しから、写真入りの大学教員証明書を取り出した。

「神学関係の資料収集には、教会などで非公開になっている資料を閲覧する必要があるから、研究を続けるのに、これが欲しかったの。でもね、教員証明を胸に付けていても、キャンパスでは、いつも学生に間違われてしまうわ」

と、おどけた様に、舌を出して笑った。

鈴子は、幼く見られるのを嫌がっているのに、麻子の容姿を羨ましいと思った。それは、彼女が若さだけでなく、異性も同性も惹きつける、魅力的な女性だからだ。

鈴子は、椅子に腰かけた、麻子のフレアスカートから覗く、細い脚に見惚れていた。男子学生が、彼女を『魔女』と呼んでいるのに、ほかの理由があるのなら、惚れ薬でも飲まされたのではないか。自分が男子学生で、先ほどの紫蘇ジュースに、そんなものが混入されていたら、魅惑的な女教師を、この場で押し倒してしまうと思った。

「さて、話の続きは、白衣を着た方が良いのかしら？」

「いいえ、せっかくの休日ですから、そのままで結構です」
麻子は、パソコンを起動させると、弾丸の持ち主を調べた、資料フォルダーを開いた。
「お爺様が伝説の弾丸について、その所在と効力を調べていたことは、昨日の話した通りなのだけれど、その調査の中で、弾丸の使用が疑われる歴史的な事件が、いくつもあって、そのほとんどが、真偽の特定できていないのが、現状なのよ」
「ヒトラーが持ち主だったと、特定できる証拠は、あるのですか？」
「弾丸には、『罪に問われない』との呪詛式と、別の呪詛式も組み込まれていたと、考える方が解りやすいかしら。単なる復員兵だった男が、稀代の独裁者に成り上がったのは、権力者が弾丸の持ち主ではなく、弾丸の持ち主が権力者になる。彼の経歴によって、所持していた弾丸が、本物であると推測されるの・・・もちろん、結果論でしかないのは、解っているので、弾丸の効力が『現実ならば』との但書（ただしがき）が必要ね」
「つまり、フランス大使のビスマルクは、弾丸の力で宰相になり、復員兵だったヒトラーは、弾丸の力で独裁者になった」
「それに、ビスマルクより弾丸を預かっていた、ナチスの前身ドイツ労働者党も、国家権力を掌握しているわ。鈴子さんは、弾丸を核兵器に例えていたけれど、個人が核兵器を手に入れたとしたら、国家権力を掌握することさえ、他愛もない話ではないかしら？」
麻子は、デスクトップに、歴史上を人物の写真を並べると、その中の数人をピックアップした。彼女の見せてくれた写真には、自宅前で射殺された往年のポップスターや、自動車パレード中に暗殺されたアメリカ大統領など、銃殺された有名人がいた。
「麻子さん、彼らは、弾丸に纏わる事件の犠牲者なの？」
と、鈴子は言った。
「そうね、彼らが弾丸の持ち主だったのか、単なる犠牲者だったのかは、鈴子さんに預けた、お爺様の研究ノートでは、追及がされていなかったでしょう？　あの研究ノートは、いわば問題編と言うべ

きで、その解答編となる研究ノートは、当家に保管していた『強欲』とともに、政治結社の方が持ち去ってしまったのよ」
「確かに、ヒトラーが弾丸を所持していると、書いてあったけれど、どのように使用されたのか。肝心なところは、書かれていなかったわ」
　鈴子は、大学ノートに挿まれていた写真に、先ほどの写真の人物もいたが、彼らの輝かしい軌跡が記されているだけで、弾丸の所持や使用を感じさせることは、書かれていなかった。麻子が幼い頃に、政治結社が持ち去られた、もう一つのノートに、事件の詳細が書かれているのなら、その内容を彼女は、どうやって知り得たのだろうか。
「ヒトラーが弾丸の所有者だと断定できるのは、アーネンエルベの研究書に書かれた、弾丸所有者の系譜が存在するからなの。彼らのオカルト研究の題材は、弾丸を所持することで、その霊的な力により、所有者が権力者になり得るのか？　そして『罪に問われない』とは、どのようなメカニズムで、履行されているのか。私は、アーネンエルベのオカルト研究と、同じ方法を用いて、これら膨大な事件の登場人物から、弾丸の所有者を割り出しているのよ」
　と、麻子は、デスクトップに乱雑に並んだ写真、それらを一つのフォルダーに放り込むと、ブラウザを起動した。どうやら、ブラウザベースで開発されたソフトのようだ。画面には、オフラインのまま、写真の人物の年表が、時系列に配置されていた。
　ジョン・レノンは一九四〇年年～一九八〇年、ジョン・F・ケネディは一九一七年～一九六三年、それぞれ生きた年代が縦軸にあり、お互いの年表が重なる一九四〇年年～一九六三年が、正面で見るとクロスしている。それに、グラフの角度を変えると、彼らが活動していた地域、彼らが活躍した時代が、解るようになっていた。
「もしも、彼らが弾丸の正当後継者なら、弾丸が行き来したのは、このクロスした年代と地域になるわ・・・こうやって、伝説の誕生した一八五〇年代まで、遡っていければ、彼らが弾丸の所有者だっ

たと、証明にもなるし、もしも、空白の時があり、そこに所有者候補が現れなければ、彼らの成功や死に、伝説の弾丸が使われた可能性は、限りなくゼロになるのよ」
「麻子さん、これ凄いじゃないですか」
鈴子は、麻子の見せてくれたデータベースの完成度に、感嘆するしかなかった。
「アーネンエルベでは、一九四〇年以前の弾丸の所在を、この法則に基づいて、持ち主を割り出していたのよ。当時は、高性能なコンピュータはなかったから、全てを手作業で行ったと思うと、本当に凄いわよね」
「ち、違いますよ、こんな凄いプログラムを組めるなんて、アーネンエルベより、麻子さんの方が、凄いですよ」
「私は、プログラムなんて組めないわ。ゼミの男子学生に、この手のプログラムを作るのが、得意な子がいるのよ。その子が人脈照合サイトに、時間軸と地域を入れれば、簡単に作れると言うから、お願いして作ってもらったのよ。鈴子さんが、感心していたと、彼が聞いたら喜ぶわね。今度、紹介してあげましょうか？」
と、麻子は、涼しい顔をして言ったが、人脈照合サイトは、単純なもので、名前と経歴を繋いでいるだけの二次元データベースだ。彼女の教え子は、歴史上の人物の経歴を入力して、三次元データで構築してみせるなんて、かなりの技術と時間を要したに違いない。
「やっぱり魔女なんだ」
鈴子は、彼女が教え子に、どんな魔法をかけたのかと、想像して、思わず口に出した。
「でもね、このデータでも、伝説を解き明かすことは、出来なかったのよ。どんなに遡っても、『七つの弾丸』の伝説に登場する、三人の権力者に結びつかなかった。本来ならば、弾丸の系譜は、一八五〇年代に収束するはずなのに、伝説をオーバーランする弾丸、伝説の発祥の地に辿りつかない弾丸、それらが意味するものは・・・」
「伝説は、嘘（デマ）ですね。少なくとも、お爺様や麻子さんは、伝説の真

実性を疑っている」
　と、鈴子は言うと、麻子が小さく頷いた。
「でも、伝説が嘘なら、どうして弾丸が存在するのかしら？　それにアーネンエルベは、伝説の弾丸の系譜を完成していたのでしょう？」
「宗教では、史実が物語に姿を変えて、伝承されるのは、珍しいことではないの。『七つの弾丸』が夢物語だとしても、その主体となった史実が、存在する可能性は否定できない。その物体の所有者は、「罪に問われない」「権力を手に入れる」が重要で、それが『弾丸』に形を変えたのが、『七つの弾丸』の本質と考えればいいのよ。その物体は、一八五〇年以前にも、違う形で存在していた。この物語は、宗教上の挿話に酷似しており、銃火器の誕生に符合しない弾丸の系譜を考えれば、この伝説は『七つの弾丸』に名を変えた、ある種の宗教上の戒めを具現化したものだと、私は考えているのよ」
「例えば、『七つの罪源』の外伝とか、そういうことですか？」
「それだけでは、説明が付かないので、あくまで私見なのだけれど」
「そんな・・・伝説の弾丸が持つ力って・・・」
「イエス・キリストの奇跡と同等、霊的な力によって、約束された「神のシステム」と、アーネンエルベでは、定義していた。彼らは、弾丸の所有者が権力を得る代わりに、もう一つの約束された力、「罪に問われない」を履行しない限り、その結末に非業の死が待つと、ヒトラーに進言しているわ。弾丸は、他人に譲渡するか、弾丸を解き放つか、それが非業の死を回避する手段だったのよ」
　麻子は、祖父の書斎に置かれたドイツ語の本が、アーネンエルベの研究に関するものだと、教えてくれた。彼女の祖父は、それらの資料から、ヒトラーの持っていた弾丸が、伝説に登場する、本物の弾丸だと考えていた。彼女も、その考えに賛同しているようだ。
　麻子は、オカルティックな事象を鵜呑みにするほど、純粋ではないと否定したが、鈴子には、彼女がオカルト信者に見えていた。それでも、黙って頷いたのは、神学部の准教授に、学生風情が議論を

挑むことが、時間の無駄に思えたからだ。
「弾丸の持ち主が、三人の権力者だったとの根拠、弾丸が二発ずつ所有されているのなら、ヒトラーが使用した二発のほか、残り四発の行方は、どうなったの？」
と、鈴子は、モニターに映し出されている、歴史上の人物を見ながら、質問した。
「お爺様は、パレードの最中に暗殺された、ケネディ大統領を疑っていたみたい。衆人環視の中、二発の弾丸で暗殺された彼は、伝説とも符合する。ケネディが弾丸の所有者で、アメリカ大統領になってなお、弾丸に固執していたなら、その死が非業であったことも」
「真犯人が弾丸を使用していたのなら、射殺されたオズワルドは、冤罪ってことですか？」
「そうした陰謀説もあるし、民衆に絶大な人気があったケネディは、伝説の登場人に相応しい人物ね・・・ただ、彼が弾丸の所有者だったとしても、暗殺に弾丸が使われたとしたら、計算が合わないのよ」
麻子は、パソコンの画面に、大樹のように広がっている、その枝先が三本以上あることに、納得がいかなかった。その枝の一本は、鉄血の宰相ビスマルクから、ドイツ労働者党幹部ドレクスラーを経由して、独裁者のヒトラーが枝先にいる。弾丸の系譜が、三本以上あるのは、『七つの弾丸』を模倣した事件が含まれているからだと、分析していた。
「お爺様の手元に、弾丸が残っているのだから、これらの系譜のほとんどが、模倣による事件か、私たちの思い込みでしょうね」
「パソコンにあるグラフですけど、銃弾で暗殺された人物に、次の所有者がいるのも変ですよ。だって、伝説の弾丸が使われてしまったら、その系譜は、そこが先端じゃないと、説明が付かないですよね？」
鈴子は、麻子の理論が破綻していることに、気が付いて指摘した。弾丸を手放さない限り、非業の死が齎（もたら）されるのなら、これほど多くの弾丸の所有者が、銃弾に倒れるのは、そもそも計算が合わない。

「弾丸を手渡すには、正式に譲渡する必要があって、このデータベースの人物の中には、そうして非業の死を回避した人物もいるのよ。例えば、このマフィアのボスは、野心家の政治家に、金で弾丸を売り払ったことで、難を逃れている。それに、弾丸を手放さなかった人物は、伝説の弾丸で殺されると、決まっていないわ」
「つまり、権力の座にしがみついると、天罰が下るってことですね」
「それも、弾丸が持つ戒めということかしら。ヒトラーは、伝説の弾丸で、空を打ち抜いたと同時に、その所有権を正式に放棄したから、罪にも問われずに、生き残れたのね」
と、麻子は同意した。
「お爺様は、ＣＩＡの陰謀説を信じて、ケネディが暗殺されたのは、伝説の弾丸が使用されたと、考えていたみたい。ＣＩＡは、ケネディから奪った弾丸で、暗殺に使用した。ケネディは、ＣＩＡに正式に譲渡していないし、ＣＩＡの真犯人も罪に問われていない・・・とても、良く出来た話だと思うわ」
麻子は、祖父の調査結果に、納得していなかった。鈴子は、ケネディとマフィアが浅からぬ関係だと、近親者の証言もあり、マフィアから弾丸を金で買ったのが、ケネディだと言うのなら、彼女の祖父が調べた、弾丸の系譜が間違っていると、言い切れないだろう、と考えていた。
「麻子さんは、何が腑に落ちないのですか？」
麻子は、少し躊躇していたが、
「アーネンエルベの研究対象だった人物が、弾丸の持ち主と考えているわ・・・彼は、ヒトラーが弾丸を手にする前に、弾丸の持つ力を、世に知らしめた人物であり、彼の死には、伝説の弾丸が使われたと、信じているのよ・・・お爺様が生涯をかけた調査より、ナチスの研究を支持するなんて、気が進まないのだけれど、彼の死と、ヒトラーが罷免されたと考えれば、その後のケネディ暗殺に、伝説の弾丸が使用された可能性は、限りなくゼロに等しいわ。彼が弾丸の所有者だったとしても、弾丸が使用されてしまっては、当家に保

管されていた弾丸の説明が出来ないでしょう？」
麻子の言うとおり、ヒトラーの二発より以前に、弾丸が使われているのなら、残り二発をケネディ暗殺で使い切ってしまったら、計算が合わなくなってしまう。伝説の弾丸は、昨晩の事件でも使用されており、七発以上の弾丸がなければ、説明が付かない。
「彼の死際は、壮絶な逸話があるのよ・・・」
麻子は、ヒトラーが歴史から姿を消す、少し前で途切れているグラフをズームアップした。写真の男は、痩せこけており、キリストのような長髪に長い髭、神父や牧師が着る丈の長い服を着ていた。それに、神経質そうな視線は、撮影者を睨みつけて、脅しているようだ。聖職者にしては、人相が悪く、まるで獲物に食付かんとする、蛇を思わせる風貌だ。
「アーネンエルベでは、彼を弾丸の所有者のモデルケースに、様々な研究を行っていたのよ。彼は、巡礼の旅先で、弾丸を手に入れた。奇跡の力によって、人々の病気治療を施し、信者を増やして『神の人』と呼ばれるまでになった・・・」
「まるで、キリストの再来ですね」
麻子は、鈴子の顔を見据えると、真剣な眼差しで応えた。
「彼は、弾丸の力によって、血友病だった帝政ロシアのアレクセイ皇太子を治療し、ロシア皇帝から『我らの友』と呼ばれた男・・・帝政ロシア末期の怪僧ラスプーチン」
「怪僧ラスプーチン？」

第八話　無信心の信徒

北新宿百人町には、新宿駅よりも大久保駅から歩いた方が近いのだが、北爪正也（きたづめまさや）は、通い慣れた新宿大ガードを通り抜けて、教団本部へと向かっていた。彼を呼び出した、教団は『真理の道』や『教心会』など複数の名前で呼ばれていたが、『新宿の救いの手』が、歌舞伎町界隈の住人に、定着した呼び名だった。

北爪は、いつも厄介事の処理係りとして、教団本部の仕事に携わっていた。彼の仕事は、世間的にみれば、クレーム処理なのだが、信者にヤクザ者も多い教団の厄介事は、そこいらのお客様係りに務まるような、簡単な仕事ではなかった。

百人町の教団本部は、バブル期に地上げ屋が買い上げて、何年も放置していた雑居ビルで、宗教建築らしい荘厳さも、有難さも感じさせない造りだった。北爪は、教団本部の前に立って、胸の前で小さく十字を切ると、二回頭を下げて、二回柏手を打った後に、祈るような仕草をした。

「アイカワラズ、テキトウナ、オイノリデスネ。マサヤサン、ソロソロ、ホンカクテキナ、シュギョウヲ、スルベキデス」

北爪の祈る様子を見ていた、ロシア人牧師のチェコフは、片言の日本語で話しかけた。

「てめーみたいな、偽外人の偽牧師に、俺の祈りを馬鹿にされたくねーな。俺は、カトリック教徒で、神道信者で、仏教徒だと、何度教えればいいんだよ。俺の中の神様は、てめーの神様とも喧嘩しないのだから、教義を押し付けるんじゃねーよ」

「ホントウニ、マサヤハ、クチガワルイ・・・」

チェコフは、彼のために、教団の入口の重い扉を開けると、北爪にロザリオを手渡した。ロザリオは本来、首にかけるものではないが、教団本部では、身内の者と、外部の者を区別するため、信者には、ロザリオを首に下げることを義務付けていた。教団の教義も解

さない彼は、そんな特異なロザリオを持参するはずがなく、いつも借物で済ませていた。教団では、ロザリオが宗教的位を表していたため、彼が借物で済ませることが、どんなに変則的な行為か、ロザリオを貸したチェコフも心得ていた。ただ、彼の仕事は、その振る舞いを赦すに匹敵する、重要な役割を担っていた。

北爪は、教団の礼拝堂を抜けるとき、数人の牧師と信者にすれ違った。牧師たちは、すれ違い様に頭を下げていたが、返礼するような礼儀を持ち合わせていない彼には、牧師の姿が見えていない素振りだ。

「北爪様、お待ちしておりました・・・」

と、出迎えてくれたのは、高僧牧師の世話係りとして、教団幹部の部屋で門番をしている男だ。

教団幹部の部屋では、既に五人の宗教指導者と、『新宿の老人』と呼ばれる教団オーナーの南方が、彼の到着を待っていた。老人を宗教指導者ではなく、教団オーナーと紹介するのには、老人と教団の関わりにあった。

南方が、新興宗教『新宿の救いの手』に入信したのは、まだ政治家として駆け出しの頃、当選祈願にと友人に紹介されたのが、きっかけだった。彼は、熱心な信者ではなかったものの、教団の持つ力で、成功を収めた政治家や著名人の話を聞かされ、多額の寄付とともに、自分も教団の力を得ることになった。いつしか彼は、政権与党の幹事長の座まで登り詰めると、教団の力を背景にした、政治的野心を叶えた成功者として、熱心な信者に祭り上げられた。彼が、地上げ屋から教団本部をせしめたのも、神の見えない恩寵を具体的に見える形で表すこと、機密（きみつ）の一環だと考えていた。

だが、それらは老人の信心を表すものではなく、教団の力で齎された恩寵の代償だと考えていた。老人は、教団の熱烈な信奉者だが、教義に熱心な信者ではなかった。政界のフィクサーと呼ばれた老人は、政教分離の建前から、教団のスポークスマンにもならなかった。熱心な信者にも、広告塔にもならなかった彼だが、出資者として教

団を支える存在になっていた。
「礼拝堂に集まっている奴ら、いつもより多くないか？　あれだけの人数なら、俺のギャラも弾んでもらえないと、割に合わねーぜ」
北爪は、礼拝堂にいる信者が多いと、愚痴を零したが、五人の牧師は、彼の言い分に耳を貸す様子がなかった。彼は、牧師たちが遠巻きにしていると、不貞腐れて椅子に座り、「ふぁ～」と大きな欠伸をした。
「今日の礼拝では、静岡の宇佐美支部からイコンが戻ってくるので、異教徒の見物客も多いのだろう。異教徒の彼らにとっても、ロシアの遺産は興味深い物のだから、仕方のないことだ。それに大勢の異教徒が紛れ込む、今日の礼拝は、君の仕事に打って付けではないのか？」
南方は、北爪の態度を諌めることなく、仕事に精を出すように言って、彼の前に放り投げた報酬と、別に臨時報酬を用意することを約束した。
北爪は、報酬の入った茶封筒を、中身も確認せずに鞄に仕舞い込むと、代わりに黒いスカーフを取り出して、口元を隠すように巻いた。そして、教団入口でチェコフに借りたロザリオを外すと、部屋にいた牧師から受け取った、銀色のロザリオに付け替えた。
「服装は、このままでも構わないのか？」
と、北爪が言うと、牧師たちと同じ、丈の長いローブが渡された。
「貴様は、我々の最後尾に着いて来て、礼拝の時間が始まる前に、仕事を済ませてくれたまえ。礼拝の時間までは、チェコフ牧師がイコンの講話会を行うので、集まった者の顔を見るには、十分に時間が取れるだろう」
牧師の一人は、北爪と話だけで魂が穢れると、彼の仕事を蔑むように言った。
牧師たちは、額から胸に向かって、小さく三回の十字を切ると、経典を抱えて礼拝堂に向かう準備をした。老人は、牧師たちの支度が整うと、満足そうに笑った。北爪は、牧師たちが部屋を出ていく

のを見送ると、南方が車椅子に座っていることに、はじめて気が付いた。老人は「もう、杖では支えきれなくなった」と、ズボンの裾から痩せ細った脛を見せたので、彼は見よう見まねで三回十字を切って、牧師たちの後を追いかけた。

『新宿の救いの手』では、ロザリオが宗教的位を表しており、最高位の金色のロザリオを持っているのは、先ほどの五人の高僧牧師と、チェコフ牧師の六人だけだ。彼らの下には、全国各支部をまとめる銀色のロザリオを持つ牧師がいるが、北爪が教団の支部長でもなければ、牧師ですらないのは明らかだ。彼は、仕事の時だけ支部長クラスの権限を発動するため、銀色のロザリオを渡される。

「解っているだろうが、君のロザリオに宗教的な徳は関係ないからな・・・仕事が済んだら、すぐに返却したまえよ」

胸に付いたロザリオを手で弄んでいた北爪に、牧師の一人が忠告したが、そもそも彼には、この新興宗教に興味すらないので、宗教的な徳があるなんて、期待すらしていなかった。宗教関係者は、教義の絶対感により、自分たちの常識を疑うことすらしない。

北爪は、礼拝堂に入ると、背筋をピンとして姿勢を正した、そこが彼の職場だからだ。大勢の信者たちが、チェコフ牧師の講話を有難がって、羨望の眼差しで見つめていた。彼は、牧師たちの背後から、信者たちの顔を眺めて、一人一人の人相を自分の記憶と照らし合わせていた。

北爪は、元警察庁公安部の刑事で、宗教関係者、暴力団員、テロ集団などの非合法組織の構成員、もちろん警察関係者まで、頭に叩き込んでいた。礼拝に紛れ込んでくる異教徒を見つけ出して、布教活動の妨げとなる人物のリストアップと排除が、彼に与えられた仕事だった。

北爪の黒いスカーフには、二つの意味があった。一つは、新興宗教の信者に成りすました、古巣の警察庁の刑事から素性を隠すため。そして、もう一つの役割が重要で、牧師姿に黒マスクの奇異な井手達は、教団の礼拝に足を運ばない、新しい信者たちの視線を集める。

古くからの信者や、本当に信仰心のある信者ならば、礼拝中に怪しい牧師がいても、正体を探ろうと考えないものだ。心疾しい者は、黒いスカーフの隙間から眼光鋭い男に、見張られることに平常心を保つのが難しい。

そして、北爪が信者を選別するのに、ロザリオも役に立っていた。黒色のロザリオは、入信して日の浅い信者が掛けており、白色のロザリオは、一定期間以上の信者か、入信してから一人以上を勧誘している信者だ。ほかにも礼拝などの準備や牧師たちの身の回りの世話をする信者は、『導き手』と呼ばれて一般信者の宗教的指導も行っており、役割に応じて赤色、緑色など使い分けていた。彼が注視しているのは、黒色ロザリオを付けた挙動不審者で、彼ら新しい信者には、早期に適切な対処を行う必要がある。

北爪は、警視庁捜査部の刑事だった頃、指名手配書の写真を丸暗記して、非常に高い検挙率を誇っており、その能力を買われて警察庁公安部に転属となった。警視庁から警察庁の転属は、縦割り行政の特殊事例だが、公安部の捜査対象を考えれば、身内との癒着を避けるためだと理解できる。それに、首都圏警備が任務の警視庁公安部より、全国規模の警察庁公安部が、彼のずば抜けた能力を欲していた。

「一人、二人・・・三人・・・四人。今日は、珍しいお客さんも、紛れ込んでいるじゃないか・・・ブラック・スネークが動いているのなら、歌舞伎町の事件(やま)だろうな・・・」

と、北爪は、呟いて、黒いスカーフを視界ギリギリに引き上げて、顔のほとんどを覆い隠した。チェコフの講話が佳境に入ると、彼は五人の牧師に頭を下げて、早々に礼拝堂から出て行った。彼の予想以上に早い退席に、牧師の一人が礼拝堂の外まで追いかけてきた。

「おい、こんな短時間で、ちゃんと確認できているのか？」

「あぁ、てめーらのお頭(つむ)とは出来が違うからな、リストアップ作業が終わったから、A六、D一三、J四の三人を懺悔室に連れてこいや、俺が直々に説教してやるからよぉ」

北爪は、信者たちの座席番号を指定すると、彼らが異教徒だと言った。
「やはり異教徒が紛れ込んでいたのだな。その三人は、どんな奴らなのだ？」
「A六は、暴力団『賢剃会』キム・ボムスで、熱心なカトリック信者だ、奴が改宗するはずがない、彼らの導き手（紹介者）を調べてみれば、奴が異教徒の差し金だと解るはずだ。D一三の人相が悪い男は、『新宿の虎狼』と呼ばれた吉田秀雄、毒にも薬にもなる男だ。彼が入信を希望するのなら、早めに教団の教義を叩き込んでおいた方が良いだろう・・・」
「J四は？」
「彼女は、警察庁公安部の新米刑事で、いつもの研修だろうが、なかなかの美人じゃないか、世間知らずの後輩刑事に、公安捜査の指導してやるのも一興だと思わないか？」
と、北爪は、舌なめずりをして、ニヤリと笑った。
公安部の刑事は、新人の頃に潜入捜査の研修として、手近な新興宗教の集まりや、非合法な政治集会などに参加しているが、J四の若い女性は、そうした公安部の慣習で参加した刑事だと、北爪は直感した。彼女は、黒いロザリオを付けているにも関わらず、チェコフの一語一句を逃さぬようにメモを取っており、熱心な信者でも着込んでいない、喪服のような黒いパンツスーツ姿で集会に参加していた。独創性のない信者らしい服装は、潜入取材の記者でないなら、警察関係者を疑うのが鉄則だ。彼女が潜入取材の記者ならば、教団施設内の撮影を試みるとか、礼拝堂の造りなどにも興味を持つが、そういった行動はなく、周囲の信者たちの行動に気を配っている様子は、刑事特有の鋭い目をしていた。
北爪の説明を聞いた牧師は、三人を懺悔室に連れて行くことを約束すると、チェコフが講話を終えて、二人の元に現れた。
「Он и четыре человека язычника говорит он.【彼は、四人の異教徒がいると言っ

ていた。】」
と、チェコフは、北爪に会話内容を悟られないように、ロシア語で牧師に話しかけた。
「Четыре человека?【四人いる?】」
と、牧師が聞きなおすと、チェコフは頷いた。
「Не могу доверять своему слову.【彼は信用に値しない。】」
「Было понято.【それは、解っています。】Но старик, который представлен.【しかし、老人の推薦した観察者です。】」
「И черная змея, пожалуйста, прошу.【黒い蛇の正体を確認してください。】」
北爪は、自分の理解できないロシア語で、どんな会話がされているのか、理解出来なかったが、牧師の表情が強張っていくのを見て、あまり愉快な話でないと思った。
「チェコフ、ここは日本なんだぜ、日本語で話そうじゃないか」
と、北爪が、おどけた様に言うと、チェコフも笑顔になった。
「マサヤハ、ムシンジンデ、コマリマス。カレニ、キビシク、シドウスルヨウニ、タノミマシタ」
チェコフは、礼拝用のローブに着替えるため、その場を立ち去った。
牧師は、北爪と『修行の間』と書かれた懺悔室の置かれた小部屋に入ると、部屋の内鍵を閉めた。教団の懺悔室は、カトリックのそれを模しており、彫刻の施された壁に囲まれていた。壁の向こう側では、信者と機密の告白を受ける牧師が、顔を合わせることなく会話できるように、淡いブルーのカーテンで仕切られていた。懺悔室で、教団の司教に値する高僧牧師が、信者の後悔や過ちの告白を赦すのも、カトリックの七件機密(ななけんきみつ)の一つを模していた。
「本来、七件機密を執行できるのは、教団の高僧牧師である我々だけであり、君が行っているのは、単なる尋問でしかない・・・この

懺悔室で、本来執行されるべきは、君のような者の告白が望ましい」
牧師は、北爪を信者の入口に立たせると、そっと背中を押した。
彼が抵抗するのは、簡単なことだが、牧師の神意を探るため、黙って従うことにした。牧師は、カーテン越しに、彼に黒マスクとロザリオを外して、椅子に掛けるように指示した。
「・・・これは、尋問じゃねーのかよ」
と、北爪は言ったが、牧師は黙ったままだった。信者側の席は天井が抜けており、眩いばかりの光が注がれているが、牧師側の席には天井があり、カーテンの向こう側が暗くて、よく表情が読み取れない。まるでマジックミラーに囲まれた、威圧的な取調室のようだと思った。一方的に視姦されるのは、不愉快な気分になるものだ。
北爪は、しばらく黙っていたが、沈黙に耐えかねた牧師が「君は、隠し事があるのではないかね？」と聞いてきたので、先ほどのロシア語の会話が、彼の裏切りを疑うものだと理解できた。
「あぁ、異教徒なら四人いたぜ。最後の一人は、この俺自身のことを独白しただけだ。俺が異教徒なのは、てめーらだって知っていて、雇っていると思ったけどな」
北爪は、講話会での呟きを聞いたチェコフが、三人の異教徒しか報告しなかったことを不審に思っているのだろうと、四人目が自分だと説明した。首実検の際、声に出して確認する癖は、早々に治した方が良かったと考えていた。
「確かに、君が教団の教義を信奉していないことは、我々も理解している・・・では、黒い蛇とは、なんのことなのかね？」
牧師の口調は、罪の告白を促すものではなく、完全に尋問となっていた。彼らは、自ら聖職者を偽っていることに、気が付かないと思うと、北爪は笑うしかなかった。
「正確には、ブラック・スネークだよ。スネークは、潜入工作員を指すネットスラングで、ブラックは・・・黒い服を着た潜入工作員、つまり公安部のお嬢さんのことだ」
「Ｊ四の若い女のことか？」

と、牧師が確認すると、北爪は頷いた。彼の言葉に、暗闇の向こうにいる牧師が納得したのかは、窺い知ることが出来なかったが、「いいだろう」と呟く声と、内鍵を解錠する音が聞こえたので、尋問は終了したようだ。彼は、誰もいなくなったのを確認すると、カーテンの仕切りを持ち上げて、暗闇の中に身を置いた。仮にも、ここは神に仕える牧師が、信者の罪の告白を聞く場所であり、盗聴器の類は設置されていないだろう。

「それでも、ついつい疑って、探しちまうものなんだよ・・・」

北爪は、懺悔室の電気系統に盗聴器が仕掛けられていないか、確認しながら客を待つことにした。彼が、部屋中のコンセントと、照明を見て回っていると、予想以上に早く一人目の客が訪れたので、慌てて懺悔室に戻った。彼が、ドアをノックする音に応えると、J四の若い女が懺悔室に入ってきた。

「チェコフ牧師に、懺悔室で告白することがあるだろうと、霊視されてきました・・・その、私には、告白するべき罪が、なんのことか解らないのですが・・・」

これから何が行われるのか、不安の表情を浮かべる女性は、とても魅力的である。彼女は、座りの悪い小さな椅子に下半身を預けているが、正体を問質されるのではないかと、落ち着かない様子で腰をくねらせていた。

「ここでは、汝の罪を裁くための告白と、汝に神の恩寵として赦し賜うものであり・・・」

と、北爪は、聖職者の真似事をしてみたが、魅力的な女性を前に祈りを捧げても、少しも面白くないと、本題を切り出すことにした。女性に名前を聞くと、「相田康子(あいだやすこ)です・・・」と答えたが、偽名なのは明らかだ。彼は、咳払いをすると、カーテン越しに彼女の上半身の膨らみを指差した。

「上着を脱いで、身に付けている物を晒してもらおうか?」

康子は、その言葉を咀嚼するように、上着のボタンをゆっくりと外した。彼女は、黒いスーツタイプジャケットを脱ぐと、それをカ

ーテン越しに手を伸ばしてきた、得体の知れない男に渡した。
白く透けたブラウスに浮き上がった鎖骨、鍛えられて肩の張った体格は、武道の嗜(たしな)みを感じさせる。どうやら、北爪の期待した物は、そこにはなかったようだ。
北爪は、康子に椅子から立ち上がって、カーテンに尻を向けるように指示をした。
「パンツも脱いだ方がいいのかしら？　ロシア正教を源流とした宗派だと聞いていたのだけれど、とんだセックス教団だったのね・・・」
康子は、戸惑い気味に言って、上着を返すようにと、カーテンに手を突っ込んできた。
「ＩＣレコーダーは、腰に携帯しているのか・・・ベルトにピンマイクを仕込んでいるのか。銃や通信機の類は、身に付けていないのなら、やはり公安部の人間だな、それも警視庁公安部の刑事だ」
康子が警察庁の刑事なら、北爪の再就職先を知らないはずがない、それを知らないのだから、彼女が警視庁の刑事の証拠だ。彼女が腰をくねらせていたのも、上着を脱いだ後ろ姿を見られたくない理由も、彼の指摘したとおり、ＩＣレコーダーの発覚を嫌がったためだ。彼女は、観念してＩＣレコーダーを取り出すと、彼に手渡す代わりに、上着を受け取った。
「ここでの会話を記録することは、赦すわけにいかねーんだわ。康子くんは、公安部の刑事として失格だと、上司に進言しておこう」
と、北爪は、康子を嘲笑した。
「さて、礼拝堂でブラック・スネークを見たのだが、てめーらが捜査しているのは、歌舞伎町の事件だな？」
康子は、上着に袖を通しながら頷いたが、ブラック・スネークの意味を聞いてきたので、北爪は、笑い声を殺すのに必死だった。彼女は、まだ若い女性だ、警視庁公安部の刑事で、彼の古い名前を知らないのなら、素人も同然だ。ＩＣレコーダーに何かを呟いて、ＳＤカードを抜き取ると、上司に渡すように言った。

「ブラック・スネークには、近付くな・・・これは、アドバイスじゃない、警告だよ」

第八話　無信心の信徒（後書き）

０８／０８／２０１１

【元】教団本部では、身内の者と、外部の者を区別するため、信徒にはロザリオの着用を、義務付けているのだが、祈りも満足に挙げられない彼が、ロザリオを持参するはずがなく、いつも借物で済ませていた。

【改】ロザリオは本来、首にかけるものではないが、教団本部では、身内の者と、外部の者を区別するため、信者には、ロザリオを首に下げることを義務付けていた。教団の教義も解さない彼は、そんな特異なロザリオを持参するはずがなく、いつも借物で済ませていた。

改稿理由：ロザリオの用途が、『新宿の救いの手』独特であると強調するため。

第九話　策謀する蝙蝠

歌舞伎町の事件は、黒羽の言っていたとおり、多くの目撃証言が得られたものの、目撃証言が一致せずに、それ自体が捜査を混乱させていた。繁華街での殺人事件、善意の目撃者は、大勢の悪意ある目撃者の中に埋没している。木の葉を隠すなら、森の中ということだ。

伊佐崎は、田上明彦（たがみあきひこ）捜査一課課長が、事件の調書に目を通す振りをして、自分の顔色を伺っているのが、気に食わなかった。

「伊佐崎くん、そろそろ聞込みに出かけた方が、良いのではないかね？」

と、田上は、腕組みをして睨みつけている伊佐崎を追い払おうと、ほかの捜査員と聞込みに行くように促してみたが、彼は黙ったまま動こうとしなかった。彼の上司なのだから、もっと命令口調に追い払えば良いのだが、そんなことをすれば、この偏屈者のことだ、さらに不貞腐れるに決まっている。

「君の言いたいことは、解っているつもりだが、上からの命令なのでね・・・目撃証言の真偽は、公安部が捜査することに決まってしまった。歌舞伎町の殺しは、政治的に複雑な背景があるみたいで、捜査一課では、便宜上の捜査態勢しか取れないのだよ」

と、伊佐崎の視線に耐えかねた田上は、上層部の圧力があると認めた。

「首都圏で起きた殺人に、我々が介入できない道理がないはずだ。政治的な背景があるとしても、諜報と警備活動が主体の公安部に、殺人事件の捜査ができると思っているのか？　上層部から、聞込み捜査を宛行扶持（あてがいぶち）にもらっても、事件解決に結びつくような、重要証言が得られるはずがないだろう。縦（よし）んば証言が得られても、その真偽の判定を公安部に譲り渡して、どうやって犯人を逮捕するのかね？」

伊佐崎は、思うようにならない現状に、不満を爆発させていた。上司の田上は、年上の彼の憤りに、若い自分が捌け口に使われていると、ウンザリしていた。それに、捜査一課の刑事たちは、歌舞伎町の聞込みに出払っていて、広い室内に二人きりの状況だ。彼は、周囲の目を気にすることなく、上司の無能さを嘆いてくる。

「捜査一課課長と言えば、警視正の中でもエリートだったはずが、いつから上層部の顔色を伺うようなポジションに成り下がったのかね？　殺人捜査が主たる捜査一課課長が、公安部の台頭を黙認してしまうのは、あまりに情けないことだ」

「あのな、君は、私のことを少しでも敬っているのか？　捜査一課課長といえば、警視正の中でも捜査員三〇〇余名の指揮権を有する、重要なポジションなわけだよ。本来なら、一介の警部風情が、タメ口で愚痴なんて言える相手じゃないわけだ」

「私が肩書きを敬うような人間だと、思っていたのかね？　私が問うているのは、君の肩書が持つ意味を、君自身が自覚していないのでは？　そう問うているのだがね」

田上は、一回り歳の違う伊佐崎に、いつも小馬鹿にされていると感じていたが、キャリア官僚の田上の肩書は、実力以上の権限だと、彼の言い分に一理も二里もあった。

「確かに、私の捜査一課課長の肩書と、芦木さんの参事官の肩書では、同じ警視正でも、実力の差があるのは認めるよ。ただ、私の権限と、内閣府に直結した彼の権限では、その性質が違うのだから、政治的な駆け引きで、後ろを取られても仕方ないだろう。芦木さんが優秀なのは、研修を受けたこともある君だって、知っているだろう？」

「ちょっと待てよ・・・芦木警視正は、特殊組織犯罪対策部の参事官ではないか？　なぜ彼が、公安部の指揮権を執行しているのかね？」

と、伊佐崎が問質すと、田上は口を塞いで、不味いことを話してしまったと、慌てたものの、一度吐いた唾は飲み込めないとは、よ

く言ったものだ。公安部の指揮権を、キャリア官僚の参事官が行使するのは、異例のことだと緘口令を敷かれていた。それに、特殊組織犯罪対策は、主に暴力団、銃器や麻薬犯罪などの国際犯罪組織を取締り対象に、捜査四課から独立した組織であり、警視庁では近年、設立したばかりの新しい部署だ。芦木の率いる特殊組織犯罪対策部と、公安部が蜜月だとすれば、警視庁の組織図には公表されていない、秘密組織が存在することを意味していた。

「いいか、君が何を考えるのも勝手だが、警視庁にＣＩＡのような秘密組織は、存在してはいけないのだ。いいな、そんな秘密組織は、存在しないのだよ・・・俺の話を理解しているよな」

と、田上は、自分の不手際が露呈しないように、懇願するような態度で、伊佐崎に言い聞かせた。

「・・・あぁ、そうだな、そんな秘密組織が、法治国家に存在することは、許されるはずがない」

伊佐崎は、田上の言葉を繰り返すように呟いた。

「しかし、政治家でもない、単なる金貸しの殺人事件に、芦木警視正が現場指揮を執る必要があるのかね？」

「公安部として出張ってきたのだから、被害者の田村仁志の後ろ盾だった、『正南会』の南方総帥が本丸なのだろう。南方の警護が目的なのか、犯行を疑っているのか、それは解らないけれど、政治家志望の成金が殺されたくらいで、芦木さんが現場に降りてくるとは考えられない・・・まぁ、これは独り言ってやつだが、被害者の死に政治的な策謀があったのなら、事件の結末には、組織の論理が優先されるのかもしれない。証言情報の錯綜も仕組まれたものなら、汚名は公安部の闇の中ということになり、結果的に警察組織が傷付くこともない」

「君は、そこまで理解した上で、事実上の更迭（こうてつ）を受け入れているのか。そうまでして、捜査一課の威信は、守る価値があるのものかね」

「私は、君たちにとって良い上司であれと、常々考えているのだが・・・」

田上は、己の迂闊さを棚に上げて、恨めしそうな顔をした。歌舞伎町の聞き込み捜査にも参加せず、こうして喧嘩腰で絡んできた伊佐崎が、何を望んでいるのか知っている。煮え切らない上司に、罵詈雑言を浴びせると、必ず貰えるご褒美があった。正しくは、気弱な上司を脅して勝ち取っていた、と表現した方がいいかもしれない。

「わ、分ったよ、君の勝ちだ。私から適当な理由を報告するから、君がしたいように捜査すればいいさ・・・いつものように、事後処理だけは、こちらに任せてくれるのなら・・・」

田上は、伊佐崎の追及に負けてしまい、単独捜査の権限を与えてしまった。

「事後処理は、いつものように任せるよ」

伊佐崎は、ニヤリと笑うと、田上の肩を叩いて立ち上がった。『事後処理』とは、犯人逮捕の手柄を譲ることを意味した、二人だけの隠語である。伊佐崎は、「犯人を検挙ができない駄目刑事」とのレッテルが貼られており、『検挙率ゼロの男』という、不名誉な名前で揶揄(やゆ)されていた。彼の活躍を知るのは、彼と仕事をした捜査員と、事件の当事者だけだ。彼は、いつも不名誉な烙印と引き換えに、組織から外れた単独捜査の権限を手に入れているのだ。

「君は、何から調べようと考えているのだ？　もしも芦木さんの組織について詮索するつもりなら、俺が話したと言わないでくれよ・・・」

と、田上は聞いたが、彼は何も答えずに捜査一課を後にした。

「どいつも、こいつも、俺の立場なんて、どうでもいいと思ってやがるんだ！」

捜査一課には、伊佐崎と同格で同年代の西田山という優秀な男もいた。彼は、田上の指示を黙って聞いて、今は捜査員を大勢率いて、歌舞伎町界隈の聞込みに出払っていた。彼は、組織を優先させる男で、伊佐崎のように噛みつくことがなかったが、彼も食えない男だった。二人の優秀な部下に囲まれて、胃薬を手放せない田上が、幸せな人生を歩んでいるのかは疑問だ。

伊佐崎は、麻子の父親の芦木隆文が、この事件で現場指揮をしていることに、違和感を感じていた。警視正の彼が、今回のような個別事案を捜査することは稀だ。彼が登用されたことで、事件の背景に政治絡みの後ろ暗さが、見え隠れしている。

隆文は、数年前まで警務部人事第一課に所属しており、伊佐崎に昇格試験を受けることを勧めた男で、何度か会食の機会もあった。彼が、特殊組織犯罪対策部の参事官に就任したとき、「いつまでも、殺人課の刑事でいるつもりか？」と、同部への誘いがあったほど、執心してくれたのは、秘密組織の捜査員に、目立った功績のない捜査一課の刑事が、適任だと考えていたのかもしれない。

伊佐崎は、隆文が主催する研修会にも参加したが、組織犯罪や外敵工作員に対する、捜査権の適法範囲を問題視する、かなり刺激的な内容だった。彼の作り上げた秘密組織が、そうした過激な内容の実行部隊なら、確かに日本版ＣＩＡであり、彼は初代長官のロスコー・ヒレンケッターになるつもりだ。

伊佐崎が、隆文の研修会に参加したことで、二人の関係は近付いたものの、お互い日々の仕事に埋没して、それ以上の間柄に発展することがなかった。立場の違いを超えて、世間話程度ができる関係にあったが、今回は、世間話の度を逸脱した、彼の隠しておきたい、闇の部分に踏み込まなければならなかった。組織の根幹を揺るがしかねない用件で、いきなり警視庁幹部の彼に謁見を申し入れても、お目通りが叶うはずがない。

それに伊佐崎は、公安部が秘匿している証言者のリストを手に入れるのが、先決だと思っていた。しかし、公安部は情報管理が厳重で、そこに手を付けることも難しい。秘密組織の存在、公安部の徹底した秘密主義は、この事件に近付くことすら、困難にしていた。

「まるで、公安部の存在が、事件を隠蔽しているようだ」

と、伊佐崎は、『七つの弾丸』の伝説のように、このままでは犯人の「罪に問えないのでは？」と、嫌な予感が過った。彼は、自分の考えを否定するように首を横に振ると、正面突破を諦めて、南方

の主催する政治団体『正南会』や、彼が傾倒している宗教団体と、被害者との関係を探ることから、捜査を始めることにした。
伊佐崎は、被害者の周辺を探るため、歌舞伎町に出払っていた西田山の携帯に連絡を入れて、『正南会』の住所を手に入れた。彼には、聞込みの成果が「やはり芳しくない・・・」と愚痴を零され、毎度のように単独捜査の権限を掠め取る手法を、嫌味を交えて賞賛された。
「お前のことだから、事件と関係のないことまで、暴くつもりなのだろう。そのとき組織は、お前をトカゲの尻尾みたいに、切り捨てるぞ」
と、西田山は、身を案じているのか、突き放しているのか、どちらにも取れる言い方をしたが、彼が組織論者である以上、後者として受け取る方が自然だ。「私は、トカゲの一部ですらないと自覚している」と、強がって見せたものの、伊佐崎が手にしている捜査権も、トカゲの一部なんだと実感していた。
伊佐崎は、『正南会』に向かおうと、エレベータに乗ろうとすると、目の前に件(くだん)の人物と鉢合わせした。エレベーターには、隆文と、それを囲うように何人かの捜査員がいた。いつもなら、幹部の巡回に道を譲って、エレベーターで同席するのを諦めるが、彼の方から左手を挙げて、呼びこんでくれた。つい先ほど、謁見を諦めた人物と、思い掛けずに同席することになった。
「捜査一課の捜査員は、歌舞伎町の事件で出払っていると、田上課長に聞いていたのだが、君は、相変わらず捜査から外されているのか？」
隆文は、片方の手をポケットに入れたまま、挙げた左手を胸に当てていた。よほどの心労があるのか、目の下に隈(くま)まで作っていた。伊佐崎に「相変わらず」と言ったのは、彼の不名誉なレッテルが、知れ渡っている証拠だった。
「お疲れのご様子ですね・・・」
と、伊佐崎は言った。ほかに、聞きたいことは、山ほどあったが、

早々に手の内を晒して、捜査から外されるのは得策ではない。
「そうだな、私は、疲れているな。君が手伝ってくれていれば、少し楽が出来たのかもしれない」
隆文は、過去形で惜しんでいたので、秘密組織の定員募集は、締め切られているようだ。どんな人物が、捜査員に選ばれているのか、まさか田上のような、うっかり者は間違っても選ばれないだろう。
エレベーターが一階に到着すると、警視庁の正面入り口には、隆文の顔を見つけて敬礼をする女がいた。黒いパンツスーツの身形で、精悍（せいかん）な顔つきの女は、新人の婦人警官のような鋭い目をしていた。近付いてくる足運びや、真一文字に結ばれた唇、きっちり躾けられた所作は、警察関係者を疑うのに十分だ。
「あれでは、私服の意味がないな・・・」
伊佐崎は、ゆっくりと歩いて、隆文の後ろの捜査員に紛れて、何気ない顔をして立った。
女は、絹のハンカチに包まれたＳＤカードを見せると、そのまま隆文に渡した。
「報告した記録メディアで、上司に渡せと言われたので、中身を確認していません」
隆文は、捜査員の一人にＳＤカードを鑑識部で、中身を検証するように伝えると、彼女に労いの言葉をかけて、捜査員らと用意された車に乗って立ち去った。
伊佐崎は、一部始終を確認すると、入れ違いにエレベータへ向かう女を呼び止めた。
「ちょっと、待ちたまえ・・・あのＳＤカードだが、例の組織から持ち帰った物かね？　君は、あれには何が記録されていると思う？」
と、伊佐崎は曖昧な言葉で、彼女たちの捜査内容に探りを入れた。
「貴方は？」
彼女も、流石に訓練された刑事で、安易に捜査情報を口にするはずがなかった。それでも、隆文と同じエレベーターから降りてきた、伊佐崎の言葉を疑っている様子はなかった。

「こんなところで、お互いの素性を語れる身分ではないだろう・・・・それより、どうなんだね」
と、胸ポケットから、閉じたまま警察手帳の表紙を見せたが、所属部署とバッチを確認させることはしなかった。
「SDカードには、『新宿の救いの手』の牧師から、私たちの上司宛にメッセージが、吹き込まれているはずです。私には、聞き取れませんでしたが、警告のようなものだと思われます」
「君は、相手の牧師に素性を明かしたのかね？　潜入や囮捜査は、この国で認められていないのだから、我々の組織の存在が表に出れば・・・」
「いいえ、公安特課の存在は、気づかれていません。警視庁公安部の刑事だと、見抜かれてしまいましたが、それ以上の詮索もされませんでした。教団の名簿には、『相田康子』と偽名を名乗っていますので、私に繋がる秘密は、彼らに漏らしていません」
と、彼女は、誇らしげな顔をして否定したが、彼女の上着の裏地に刺繍された、『A・M・』のイニシャルが、腕を上げる度に覗いていると、新人らしい初歩的なミスを指摘した。伊佐崎は、彼女の照れ隠しの笑顔を見ると、偽りの身分で接していることに、罪悪感が芽生えた。
「『新宿の救いの手』には、公安部の内情に詳しい者がいるようです」
と、伊佐崎を見据えるように、報告する姿は、彼を上司だと信じていた。
彼女のような新人刑事に、潜入捜査を任せているのなら、隆文の作った公安特課も、まだまだ手探り状態なのだと、窺い知ることが出来た。彼女の本名は、前田明子（まえだあきこ）で、今年の春に警察学校を卒業したばかりだと、教えてくれた。
「君の服装は、もっと年齢に見合ったものにした方が良い。公安部の刑事ならば、慎重に行動することだ。公安部の刑事は、身内にも名前を明かさない・・・それから、君は二度目のミスを犯している・

・・すまなかったね」
と、キョトンとする明子に、先輩風を吹かせて、追い払った。彼女からは、『公安特課』と呼ばれる秘密組織について、もっと聞き出せたかも知れないが、それが彼女の将来を傷付ける行為だと、追求することを躊躇ってしまった。
首を捻ったまま、エレベーターに乗る明子を見送ると、深い溜息を吐いた。
「しかし、教団の牧師が、警視庁公安部に警告とは・・・宣戦布告でもしたのか？」
伊佐崎は、『正南会』『新宿の救いの手』の二つの組織、そして公安特課が、どんな策謀が張巡らされているのか、想像も出来ない事件に発展すると、溢れ出す期待感に胸躍る気分だった。黒羽の暴力性を嫌う彼だが、殺人事件の捜査に、胸の高まりが収まらないとき、自分も人の道を外れた外道だと、再認識する瞬間でもあった。

第十話　揺れる花冠

鈴子は、アパートに戻ると、たった一日留守にしただけなのに、日常の風景が懐かしかった。玄関脇に置かれた冷蔵庫からは、茹だるような熱気が常に放出されており、玄関のドアを二、三回、バタバタと大きな音を立てて開け閉めして、部屋の熱気を逃がすのが、帰宅時の恒例となっていた。山育ちの彼女にとって、都会の纏わりつくような暑さは、耐えがたい拷問だ。

鈴子は、部屋に入ると電気も点けずに、夕暮れの薄明かりの中で、エアコンのリモコンを手探りで探した。エアコンが静かに起動すると、汗ばんだ肌を冷気が駆け抜けて、一気に体温を奪った。冷暖房の効率だけは、１ＤＫの狭い間取りにも利点があるものだ。エアコンの吹き出し口を独り占めすると、十分に涼んでから、足元の小さなテーブルに置かれたラップトップを起動した。

鈴子のゼミの論文テーマ『デマの広がる人間心理』について、その序論だけでも書き始めようと、ラップトップの前に座り込んだ。

『―デマは善因の口伝により蔓延する―』

デマは、人々の口伝されることで、現実社会を都合よくモディファイ（修正・変更）して、歴史さえも歪めている。短命なデマは、政治的背景を以て、扇動的民衆指導者の謀であるのに対して、神話や民話の総称として伝説に代表される、長く語り継がれている物語は、それ自体がデマであるとの認識を超えて、ある種の戒めとして、人々に支持されている。また、前者のデマゴーグが特定の人物を差すのに、後者には扇動的な役割を人の魂願（こんがん）が担っている。『七つの弾丸』という伝説をデマと定義して、それらを考察した場合・・・■

・・・■

・・・■

ラップトップの画面を閉じると、鈴子は、目を瞑って考え込んでしまった。『七つの弾丸』は、果たしてデマと言い切ってしまって

良いものだろうか。その結論が出ないまま、論文を仕上げるのは、やはり無理があった。麻子は、伝説の真実性を疑っていると言ったものの、『弾丸』に約束された効力は、本物だと信じていた。それは『桃太郎』はデマだが、桃太郎の持ち帰った『鬼の宝物』は本物だと、言っているようなもので、矛盾していないのだろうか。割り切れない感情は、彼女も善因の扇動者たる証拠でもある。

鈴子は、麻子が弾丸の所有者だと言っていた、ラスプーチンについて、帝政ロシアのニコライ皇帝の寵愛を受けた怪僧、ロシア崩壊の引き金を引いた謎の男、そんな曖昧な記憶しかなかった。

「怪僧ラスプーチン？　そもそも怪僧って何者なのよ、怪しい坊主？　牧師の怪人？　異能の神父？」

鈴子は、目を開けることなく、部屋に寝転んで、麻子の仕事部屋でのやり取りを思い出していた。

「そうよ、弾丸の系譜を辿れば、帝政ロシアの怪僧ラスプーチンこそ、弾丸で権力を手中にして、弾丸により罪を罷免された男だと、私は考えているのよ」

と、麻子が真顔で言うものだから、鈴子も黙って聞いていたが、ラスプーチンと言えば、超能力者のような逸話と、人たらしの術に長けた、オカルト分野の有名人だ。

「ラスプーチンが弾丸を使用しているのなら、彼は、罪を罷免されて、その後どうなったのですか？」

「彼の最後は、皇族らによる暗殺で幕を閉じているわ。保守的なロシア皇族は、彼のような得体の知れない力で、成り上がってきた者に批判的で、ニコライ皇帝を傀儡にして政治の世界に、大きな影響を与えようとした、彼の暗殺を計画したのね・・・暗殺者の晩餐に招待された彼は、青酸カリ入りの食事とワインを平らげると、食事に祈りを捧げて、立ち上がって帰り支度をはじめたそうよ」

「ラスプーチンは、毒で死ななかったの？」

「えぇ、青酸カリの毒では、彼を殺すことが出来なかった。彼が起こしてきた奇跡、死生を操る怪僧と呼ばれた所以ね。それで、立ち

去ろうとする彼の背後に、二発の弾丸を撃ち込んだけれど、それでも平然と反撃までしてきたので、さらに、彼の正面から二発の銃弾を撃ち込んだのよ。最後には、こん棒で殴り倒した後、簀巻きにして川に放り込んだそうよ」

麻子は、ラスプーチンの不死性を強調していたのに、彼の最後が簀巻きにして川に放り込んだとは、なんとも締まりが悪い結末である。それに、肝心の弾丸が四発も登場した上、その弾丸で絶命しないのも、納得がいかない話だ。

「契約不履行による死の制裁は、必ずしも伝説の弾丸で執行されると限らないと、説明したはずだけれど・・・」

と、不信な表情を浮かべている鈴子に、麻子が言った。

「うーん、でも、ラスプーチンは、弾丸を使用しているんですよね？」

「彼は、晩餐会の主催たる暗殺者に反撃をしているのよ、伝説の弾丸『暴食』を使ってね」

と、麻子は言った。

「ラスプーチンが反撃に使用したのが、伝説の弾丸だとしたら、少し変ですよね。だって、反撃に弾丸を使用したのなら、彼の罪が罷免されるのだから、その後に殺されるなんて、約束を違(たが)うことになりますよ？」

鈴子は、話の矛盾を見逃さなかったが、麻子は、冷静に話を続けた。

「私は、弾丸が二発ずつ託されたのに、刑事さんと違った解釈をしているのよ。弾丸を二発ずつ所有する理由は、所有者が弾丸を使用した際に、さらに手元に弾丸が残るようにね・・・彼が『暴食』により罪が赦されても、彼を裁く力として、暗殺者の手には、もう一発の弾丸『怠惰』が残っていた」

「つまり、肉欲に溺れて地に堕ちた聖人は、『暴食』で応戦して罪を罷免された直後に、晩餐会の主催たる暗殺者に、もう一発の『怠惰』で殺されても、構わないと言うことですよね。そんなレトリッ

クが通用するのなら、弾丸を放った者は、報復されないとの約束が、守れないでは？」
麻子は、少し考えていた。鈴子の指摘したとおり、弾丸により罪が罷免されるのなら、同じ効力を持つ弾丸で裁かれるのは、矛盾した考えだからだ。
「刑事さんは、ヒトラーが生存するのに、約束を担保したのが、遺体を検死したソビエト連邦だと、言ったのを覚えているかしら？」
鈴子は、スナックでの記憶を正確に覚えていなかったが、確かに「伝説に出てくる権力者は、イギリスと帝政ロシアだ」と言っていた。伊佐崎は、ヒトラーの逃亡を手助けしたのに、ソビエト連邦が関与していると、そう考えたのだろう。
「伊佐崎さんは、イギリスやソビエト連邦が、弾丸の約束事を知っていたのなら、彼らも弾丸の所有者だと、疑っていましたね」
と、鈴子は、頷きながら言った。
「けれど、よく考えてみて、弾丸の所有者は、政治の権力者に限定されていない、往年のポップスター、マフィアのボスでさえ、その約束が履行されているのよ。もちろん、その中には、宗教指導者も含まれているわ」
「もしかして、麻子さんは、伝説の権力者を・・・」
「私は、伝説が宗教的な逸話に酷似しており、弾丸が強い呪詛式に加護されていると知ったとき、弾丸に約束された誓いを履行しているのは、国家権力でも及ばない、もっと普遍的な組織が関与していると気付いたのよ。当時のヨーロッパやロシアは、国家としての枠組みが非常に脆いもので、刑事さんの言っていたとおり、弾丸の約束事が刹那的にならざるを得ないわ。国家の枠組みを超えて、世界規模で暗躍している、伝説の信奉者がいるのならば、それは宗教そのものではないかしら」
「弾丸の『罪に問われない』は、宗教の赦しを具現化したもので、それを手にしていた権力者は、時の宗教指導者や信者だったのね」
「伝説では、三人の権力者と口伝されているけれど、もっと大勢の

伝説の信奉者が関与していた・・・それも国家の枠組みを超えた、機密の具現化を望む宗教として、秘密裏に現代まで受け継がれている。『七つの弾丸』の伝説が、キリスト教の逸話を模しているのは、その源流が同じだった・・・弾丸は、鞭身(フリスト)派の信者だったラスプーチンの手に渡り、彼は、弾丸の効力を確かなものにするため、伝説の弾丸の信奉者たちを集めた新興宗教の開祖となった」

「それが本当なら、教祖を殺したのは、信者ということになりますよ」

「彼は、権力と肉欲に溺れており、聖人君子ではないと知られているわ。彼の暗殺を命じた皇族は、彼らの教義に忠実な方法で、教祖の死を願ったのよ・・・伝説の弾丸による罪は、それが何であれ赦される。そして、鈴子さんが感じた矛盾は、相手よりも後に弾丸を使用することで、解決できると考えたのよ」

「彼に弾丸を使用させることで、暗殺者が教義に反することなく、相手を殺せる・・・でも、撃った者への報復が許されないのなら、先んじて弾丸を放った彼が、その報復により殺されるのは、やはり変ですよ」

「弾丸が機密を具現化したものであれば、過ちを赦すことが重要なのよ。弾丸の使用者が、弾丸により殺されたとしても、それは教義に準じたことになり、彼らは双方とも天国に行けるわ・・・そして、アーネンエルベの研究で、彼らの教義を知っていたからこそ、連合軍がベルリンに進行したとき、敗戦を悟ったヒトラーが、躊躇なく弾丸を使用できた」

「ヒトラーが『色欲』『憤怒』を使用したことは、彼らが知り得るはずもないのに、ソビエト連邦の兵士や軍医が、その事実を知ることが出来たのかしら？」

麻子は、スミソニアン博物館の写真を取り出した。

「スミソニアン博物館の収蔵品が本物ならば、約束の履行するには、薬莢が残されていることも重要なのよ。ヒトラーは、教団幹部に弾丸を使用したことを告げると、彼を収監に訪れたソビエト兵士に、

自分とエヴァの二発の薬莢を手渡した・・・もちろん、このときソビエト兵が、伝説の弾丸を持っていれば、返り討ちされる可能性もあったけれど、彼らの手には弾丸が残っていないと、アーネンエルベの研究で知っていた」

「ヒトラーは、ラスプーチンの暗殺に、ロシアの所有していた『怠惰』『暴食』が使われ、既に存在していないと確信していた」

鈴子は、麻子がラスプーチンの暗殺に使用された弾丸が、本物だと信じている理由が解った。

「イギリス映画では、ヒトラーが死の間際に、自らの命を捧げて、神に赦しを請う台詞があるのよ。同じ台詞をソビエト連邦の兵士たちは、どのように解釈したのかしら」

「稀代の独裁者を追い詰めた、ソビエト連邦の兵士が、薬莢を見せられたときですね。どんな台詞なのかしら？」

「Ｇｏｔｔ，ｅｒｈａｌｔｅｎ Ｓｉｅ ｍｅｉｎ Ｇｅｓｃｈｅｎｋ ｂｉｔｔｅ．Ｕｎｄ ｖｅｒｇｅｂｅｎ Ｓｉｅ ｍｅｉｎ Ｖｅｒｂｒｅｃｈｅｎ ｂｉｔｔｅ．【神よ、捧げ物を受け取りたまえ、そして私の罪を赦したまえ】」

麻子は、窓から吹き込んだ風に、髪を巻き上げられた。

鈴子は、早まる鼓動に、言葉を詰まらせていた。

弾丸の信奉者は、約束された誓いを実行している。

「そ、そうですよね、薬莢が見つからなければ、伝説の弾丸が使われたか、解らないわけだし・・・伝説を知らない異端者にとって、弾丸の効力を担保する必要がないのだから・・・ヒトラーや、その収監に来たソビエト連邦も、弾丸の信奉者がいるはずですよね」

鈴子は、足先から筋肉が強張っていくのを感じた。それは、蛇に睨まれた蛙のようだと、覚醒する意識の中で思った。身が竦んで、上手く言葉が出てこなかった。麻子の話では、被害者も加害者も伝説の信奉者だ・・・歌舞伎町の殺人事件で、伝説の弾丸『強欲』の

薬莢を見つけ出したのは・・・。あっ、このメロディは『ＡＩしてるＫＯＩしてる』、私は、この曲が好きで、携帯の着信音にしているのよね・・・。

「！」

鈴子は、エアコンの冷気で、足元からの冷えを感じた瞬間、真っ暗な室内に広がる天井の木目に、目を凝らした。見慣れたアパートの一室だった。彼女は、柱に掛けられていた時計を見て、いつの間にか寝入ってしまったことを知った。彼女は、携帯の着信音に起こされたものの、『※公衆着信※』の表示を見ると、しばらく取らずにいた。電話の秘匿性が失われてから、相手の解らない『※非通知※』や『※公衆着信※』は、必要以上に緊張するものだ。アイドルグループＡＲＡＫＩの『ＡＩしてるＫＯＩしてる』は、鈴子のお気に入りの曲だったが、得体の知れない相手からの着信音だと思うと、心地の良いメロディに聞こえなかった。

「もしもし・・・岩壁です・・・どちら様ですか？」

携帯電話が普及してから、相手の名前を確認する習慣が無かったので、自分の名前も名乗らずに、相手の名前を問うことに抵抗があった。鈴子は、相手に動揺を悟られないように、努めてを礼儀正しく挨拶したつもりだったが、素性の知れない相手に、先に名乗ったことを後悔した。

「岩壁さん・・・岩壁さんですね・・・貴女は、芦木麻子という宗教学者から、ある伝説に纏わる夢物語を聞かされたと思います。彼女は、ある宗教団体に入信しており、夢物語の内容は、彼らの経典に書かれている教義なのです。貴女が、夢物語に興味を持っていて、彼女の言葉を信じているのなら、それが彼らの巧妙な洗脳であると、気付くべきです」

「はい？　どちら様ですか？」

鈴子は、何度も聞き直したが、相手の男は、名乗ることなく、一方的に自分の用件だけを伝えてきた。

「芦木麻子が、貴女に物語を聞かせたのは、布教活動の一環であり、

相手に興味を持たせて、宗教団体への入信を勧めるのが、彼らの手口なのです。彼らの教義は、全ての罪人や野心家にとって、魅力的ではありますが、その力を得るためには、多大なるお布施と忠誠心が必要になるでしょう」

電話の男は、メモを読み上げているような、抑揚のない口調で言った。鈴子は、携帯電話に録音機能があることを思い出して、携帯の側面『ボイスメモ』と書かれたボタンを押した。

「もしもし・・・まだ、繋がってますか？　貴方は、私の電話番号を何処で手に入れたの？」

「・・・」

「貴方の言っている『力』とは、伝説の弾丸のことでしょう？」

「・・・」

男は、都合の悪い質問に答える気配がなかった。せっかく、録音しているのに、相手が無言になってしまっては、何の証拠も掴むことが出来ない。

「解りました、ご忠告有難うございます。だけれど、私は興味を持ってしまったし、麻子さんが勧めてくれる宗教なら、入信しても構わないと思っているわ」

「・・・貴女のような人は、宗教勧誘と聞くだけで、毛嫌いするはずだと思っていましたが、やはり弾丸の魔力は、若いお嬢さんにも魅力的ですか？」

「えぇ、貴方より先に弾丸を手にしてみせるわ」

鈴子は、電話の男に鎌をかけてみた。

「それは無理だよ、貴女には、弾丸を手にする資格がない。弾丸は、浄配（じょうはい）を必要としない。貴女が娼婦のように振る舞っても、肉欲に溺れた聖人、何百万人の命を奪った独裁者、彼らに遠く及ばない」

男の声は、明らかに感情的になっていた。

「私は、娼婦になれないけれど、貴方には、どんな資格があるの？」

「・・・」

「貴方は、罪を犯しているのね。弾丸を欲する理由は、罪を罷免さ

れるためでしょう？」
「彼女も罪人だ・・・芦木麻子を信用するな」
電話の男は、電話を切った。
鈴子は、『ボイスメモ』を再生して、男の声を聞き直してみたが、まるで聞き覚えがなかった。彼は、公衆電話から掛けてきたのか、頻繁に車の通る音が聞こえたが、それだけで場所を特定できるほど、彼女の推理力は高くない。ただ、最近、携帯電話の番号を教えた相手は、麻子だけだったので、番号の入手先は、彼女に間違いないだろう。
「麻子さんに確認すれば、電話の相手を調べられるけれど・・・」
鈴子は、電話の忠告を思い出すと、この件を麻子に相談するのは、もうしばらく後にしようと思った。それに、彼女は、歌舞伎町の事件現場で、凶器の薬莢を見つけたのが、麻子だと思い出すと、背筋に走る悪寒が、エアコンの冷気のせいではないと感じた。

第十一話　いざり車の男

伊佐崎は、世田谷区九品仏にある『正南会』が入居するマンションの一階に着くと、そこには、同僚の西田山警部が、数人の捜査員と、彼の到着を待ち構えていた。

「西田山警部殿、聞込み捜査を放り出して、どうしたのかね？」

伊佐崎は、同僚の肩書に『殿』と付けて、からかった言い方をしてみたが、捜査主任が現場を離れて、自分を付け回していることが、良い気分ではなかった。それに、彼の連れている捜査員の中に、神谷徹警部補がいるのも煩わしかった。

「伊佐崎警部は、自分だけが捜査をしていると、勘違いしているのではないですか？　我々は、聞込み捜査で、『正南会』の南方総帥を現場で目撃したと、情報が得られたので、こうして来ているだけですよ。自意識過剰は、いい加減にしてほしいですね」

と、伊佐崎の嫌味に真っ先に食付いたのは、やはり神谷だった。彼は、西田山の子飼いの部下で、上司のライバルの伊佐崎に、何かにつけて噛み付いてくる。彼は、細身の優男だったので、頼りがいのある上司に阿（おもね）るのに、抵抗がないのだろう。

「お前さんが、『正南会』の住所を聞いてきたから、現場で衝突するのも、お互いに都合が悪いだろうと、ここで待っていたのだ。我々が先回りして、お前さんの捜査を邪魔するのは、本意ではない」

西田山は、品の良い眼鏡と、口髭こそ立派な紳士を装っているが、くたびれたスーツや、耳に挟んだ赤鉛筆は、一見すると競馬の予想屋を彷彿（ほうふつ）とさせる。彼は、実際の年齢以上に老けてみられることに、コンプレックスを感じたことがなかった。むしろ、自分よりも年長者の刑事たちを前にしても、命令口調で指示する態度が、ふてぶてしく見えないのは、「この容姿のおかげ」だと考えて、感謝しているほどだ。

「それに、被害者の田村は、『正南会』のメンバーだったのだから、

南方総帥に話を聞くのは、捜査の定石だ・・・悪く思わんでくれよ」
西田山は、歌舞伎町での聞き込み捜査に見切りをつけると、伊佐崎が目を付けた『正南会』に先回りして、彼の掴んでいる情報を掠め取ろうとしていた。
伊佐崎は、西田山が大人しく上層部の言うことに従って、聞込み捜査だけで満足する男ではないと知っていた。捜査一課課長が、伊佐崎に単独捜査を許可したのなら、当然、自分にも同等の捜査権が、認められるはずだと、解釈したに違いなかった。
「君は、相変わらず、私を人身御供（ひとみごくう）にするのだな・・・これは、貸しと考えて良いのかね？」
と、伊佐崎は言った。
「いいや、伊佐崎、これは借金の取り立てだと、思ってくれたまえ」
西田山は、口元の髭を厭らしく撫で付けると、神谷たち捜査員に待機するように命じて、伊佐崎と二人で『正南会』の入居するマンションのインターフォンを押した。相手は、政界を引退したとはいえ、政権与党の幹事長を務めた、大物政治家だった男だ。大勢の捜査員で押しかけては、捜査令状でも要求されたら、厄介事になる。二人は、インターフォン越しに身構えながら、丁寧な言葉使いで面会を求めると、彼の秘書と名乗る女性が「先生は、お会いになるそうです」と即答した。まるで、二人の来訪を知っていたようで、薄気味悪い気がした。
『正南会』は、住居用マンションの最上階にあったが、広いバルコニーには、庭石や草木が配置された和風庭園があり、高層階だと思えない造りだった。それに閑静な住宅街の九品仏では、下階の喧騒もないので、遠く眼下に広がる街明かりが、ここを人里離れた山寺と錯覚させた。
「ここが東京のマンションの一室だと、信じられるかい？」
伊佐崎は、落ち着かない様子の西田山に話しかけたが、彼は何も答えなかった。西田山は、組織捜査の優秀な指揮官だったが、組織論者の彼にとって、社会的ステータスの高い相手との面会は、粗相

がないかと緊張するのだ。その点、常に孤軍奮闘している伊佐崎の方が、どんな肩書の相手にも、動じない強さがあった。
「そういえば、事件現場で南方の目撃情報があったと、君の子飼いが言っていたが・・・」
と、伊佐崎は、事件の話を切り出すと、西田山は、ジロリと睨みつけてきた。
「あぁ、神谷が言っていたのは、事件直後の旧コマ劇前広場で、車椅子の老人を見たと、近くの飲食店の店員が証言したのだが、それが南方総帥と同一人物か、特定できていないのだ。お前は、余計な質問をして、南方総帥とのパイプを切ってくれるなよ。田上課長に、捜査令状なんて請求していたら、上層部からの圧力がかかるからな」
西田山は、子供を諭すように言った。
「南方は、足が悪いのかね？」
「彼が議員だったときに、大腿部の腫瘍を手術したんだが、奇跡の力ってやつで、歩けるまでに回復したそうだ。もっとも議員に当選したのも、その奇跡の力ってやつが、無関係ではなかったと、もっぱらの噂だ」
「その奇跡の力とは、『新宿の救いの手』という宗教団体のものだろう。宗教が、彼と被害者を繋ぐ、もう一つの接点ということか」
西田山は、教団名を聞いても、驚いた様子がなかった。田村が多額の遺産を残した教団は、彼らの捜査線上にも、既に挙がっていたからだ。
「彼の当選を支えたのが、教団の下部組織『真理の道』という市民団体で、実質上の運営は、『新宿の救いの手』と同義だったらしい。『新宿の救いの手』という教団名も、つい最近のもので、彼らは幾つもの教団名を使い分けている。彼が現役の議員だったときは、集票効果の高い団体との付き合いが、お互いに利するところもあり、宗教に傾倒していたらしい。政界を引退して、車椅子生活になったのは、奇跡の力も息切れしたんだろうよ」
「あるいは、奇跡の力を手放したためか」

「彼の出身地名でも、住居でもない『新宿の老人』と呼ばれているのは、『新宿の救いの手』の老人という意味だ・・・間違っても、そんな話を聞くんじゃないぞ」
「新宿界隈を徘徊している老人では、目撃情報の言い逃れに、上手く使われてしまうところだったな」
と、伊佐崎が言うと、南方は、車椅子を秘書に押させて、二人の待っていた応接室に入ってきた。
「お待たせしてしまって、すまなかったね」
車椅子に乗った南方は、急な来訪にも関わらず、きっちりしたスーツ姿で現れた。彼の車椅子を押している女は、先ほどインターフォンで応えた女性秘書で、山越房江（やまこしふさえ）と名乗り、名刺を渡してきた。西田山は、名刺を受け取ると、伊佐崎にも名刺を出すように言った。名刺を出せと催促する様子は、上司が新入社員にビジネスマナーを指導しているみたいで、あまり格好の良いものではなかった。やり取りを見ていた南方は、彼を格下だと思ったのか、大理石が天板のテーブルには、西田山と向かい合わせに座った。
「歌舞伎町の事件は、ご存知かと思います。被害者の田村さんのことで、聞きたいことがあって、お邪魔しました。彼は、ここのメンバーで、貴方に師事していたと聞いています」
西田山が聞くと、南方は「如何にも」と頷いた。
「ここは、政治家を目指す者だけでなく、経営哲学の修学を目的にした私塾で、もともと田村君は、金融関係の会社の経営者として、ここの門を叩いたのです。出入りする者には、現役の議員も少なからずおり、彼らとの交流しているうちに、政界への関心が高まったようですな」
南方は、秘書から書類の束を受け取ると、それを投げ出すように、西田山の前に置いた。それは、田村のプロフィールや『正南会』での修学状況、そして東京選挙区内での後援会設立の要綱だった。彼は、国政選挙の立候補準備をしていた。
「田村さんは、もう自分の後援会まで作っていたのですか？」

「彼には、政治基盤がないから、名ばかりの市民コミュニティです。彼は、まだ若かったが、経営者としては、一角の人物だったので、その能力を発揮して、我が国の経済を立て直すような、政治家になれると思っておりました。本当に、有望な男を亡くしたものです。彼の死は、私としても残念なもので、これからも捜査には、全面的に協力させてもらいます」

と、南方は言ったものの、話を早々に切り上げたいのか、全ての資料を持ち帰ることを許可した。西田山は、テーブルの上の資料を片付けると、ここまで用意周到にされると、これ以上の話を引き出すのが困難だと思った。案の定、彼は「それでは・・・」と、二人の刑事に頭を下げたので、西田山は「お前も、何か聞くことがあったのだろう？」と、伊佐崎にも問質すことを許可した。

「殺された被害者も、貴方も『新宿の救いの手』という宗教の信者だったと、我々の捜査で分っています。それに被害者も、貴方も教団に多額の寄付をしていますが、その目的はなんですか？」

伊佐崎は、立ち去ろうとした南方に聞くと、彼は、車椅子を押している秘書に、席に戻すように手で合図した。彼にとって、教団との関わりを追及されるのが、看過できないようだ。

「私の後援会は、ご指摘の教団が母体だとご存じで、その質問をしているのなら、もう答えを知っているのでしょう。田村君の講演会にも、教団の後ろ盾が必要だったということです」

「なるほど、政治基盤のない被害者の入信を後押ししたのは、貴方だと考えて良いのですか？　しかし、彼は、遺産のほとんどを教団に寄付するほど、熱心な信者だったようです。死後の寄付では、彼の入信して、後ろ盾を欲していたというのが、矛盾しているのではないのかね？」

と、伊佐崎が言うと、南方は、車椅子の背もたれに沈み込んだ。

「いや、彼は自らの意志で入信していた・・あの教団には、権力を欲する者にとって、是が非でも手に入れたい、法具がありましてな・・・彼の信仰心は、その魔力に惹かれていたのでしょう。それは、

教団に対する忠誠心のような、強い信念のもとに、与えらる密教秘術に近い存在なのですよ」
「法具？」
「田村君は、教団関係者から秘密の力を与えると、唆（そそのか）されていたのでしょう。彼が教団の教義を妄信のは、それだけ政治的な野心が強かった・・・経済的に満たされていた彼が、オカルトに妄信したのは、満たされない野心があったのでしょうな」
「なぜ被害者は、そんな得体の知れないの力を信じられたのか。貴方自身も、その法具の力を得ていたのではないのかね？」
南方の言っている法具は、事件現場で発見された『強欲』の弾丸だと、伊佐崎が考えた。弾丸が権力者の所有するものなら、芦木家に保管されていた『強欲』は、誰の手元にあったのだろうか。目の前の老人は、政権与党の幹事長まで成り上がった男だ。彼自身が、弾丸の所有者ではなかったのか。
「私のような成功者がいることは、彼ら教団の良い宣伝になるようで、それが田村君の信仰心を後押ししたのは、否定することができない・・・。私は本来、無信心な人間なので、教団の教義を信じて、妄信するようなことがない。彼には、そのことを伝えるべきだったかもしれないと・・・後悔をしているよ」
「貴方は、教団の教義に関心がなかったと、言い切れるのか？」
「宗教は、心の拠所ではあるが・・・」
南方は、深く息を吸い込むと、たった一言を発するのも、ぐったりと疲れた様子だった。その様子は、自分を偽っているようにも、言葉に重い足枷（あしかせ）を付けているようにも見えた。伊佐崎は、息絶え絶えに話す、南方の容体を気に掛ける秘書の房江に、「もう少しだけ、話を聞かせてください」と言った。彼女は、図々しく質問を続ける刑事に、引き取ってもらいたいと思ったが、老人が車椅子のブレーキを外さないので、申し出を受けざるを得なかった。
「その法具を欲していたのは、被害者だけなのだろうか？　その法具を手に入れるためには、教団への忠誠心と、多額の寄付が必要な

のかね？」
　伊佐崎は、事件が『七つの弾丸』の伝説を信奉している者たちの犯行なら、残された『伝説の弾丸』を巡る事件だと確信した。
「それを欲しているのは、彼一人ではないだろう・・・ただ、その法具を手にするための資格者は、人として最も重い罪源に、神に赦しを斯う必要がある。それには、教団の教義を強く信じること、彼らの信頼を得ること・・・」
「その法具は、この世に一つしか、存在しないのかね？」
　伊佐崎は、弾丸が権力を得るための鍵ならば、なぜ『強欲』の弾丸が使われてしまったのか、疑問が感じたが、西田山の目の前で、それを確認することは、さすがに躊躇われた。彼らの教義を信じているような言動は、発言の信憑性を損なうことになるからだ。
「無信心の私には、彼らの教義など理解できるはずが、ないと言っているのだ・・・」
　南方は、もう十分に話したと、二人に退席することを告げて、秘書の房江に玄関まで遅らせた。伊佐崎は、彼の秘書が「教団の話は、公言を控えてほしい」と言うので、軽く頷いた。そして、彼らが玄関を出ると、彼女が外まで着いてきて、辺りの様子を確認していた。
「・・・お話したいことがあります」
　と、房江は言った。
「じつは、田村さんのことで、ほんの数時間前にも警察の方が、ここに来られたのです」
　伊佐崎と西田山は、この事件で捜査一課を出し抜いて、南方を訪れた者がいるのなら、それは公安部の捜査員だと思った。
「警察では、この事件に教団が関わっていると言って、南方には、教団に近付かいないよう、忠告していました・・・もしも、田村さんを殺したのが、教団関係者ならば、もう犯人の目星がついているのでしょうか？」
　西田山は、捜査情報を口にできないと、房江の質問をあしらったが、伊佐崎は、首を横に振って、

「犯行現場では、被害者を貫いた弾丸の薬莢が発見されました。私は、そのことで事件を暴いても良いのか、神の御心に背く行為ではないかと、悩んでいるのです」
と、彼女の質問に答えた。房江は、薬莢が発見されたと聞いて、少し動揺した。
「刑事さんは、その意味を知っているのですか？」
「貴女は、伝説をご存じだからこそ、我々が訪問したことに、教団への不信感を募らせているのでしょう。貴女の主人たる南方は、無信心な方だから、全てを話してしまわないかと、心配しているのが解ります・・・ですが、我々の教義は絶対です」
伊佐崎は、房江自身も『新宿の救いの手』の信者だと、確信していた。彼は、『正南会』が『新宿の救いの手』が持っている、多くの名前の一つだと、南方の言葉で解っていた。
房江は、安心したのか、伊佐崎に十字を切ると、頭を下げて戻っていた。
「お前も、その教団の信者だったのか？　まさかな、また悪い癖がでたな、お前は人が悪い・・・『正南会』が教団組織の一部だと、いつ気が付いたんだ？」
西田山は、捜査員の待っていたマンションの前に着くと、用意されたパトカーに乗り込み、後部座席の窓を開けて言った。
「老人は、被害者が教団に『入信していた』と言っていたが、それが本当なら、被害者は『正南会』の塾生である前に、信者だということだ。政治家を目指した彼が、教団から『新宿の老人』を紹介されたのなら、ここが教団の出先機関なのが明らかだ」
「お前は、『新宿の救いの手』の関係者に、犯人がいると考えているのか？」
伊佐崎は、西田山の問いかけに、答えを窮した。田村も、南方も教団関係者だったが、それが単なる遺産目当ての犯行なのか、伝説の弾丸を巡る騒動なのか、犯行動機を計り兼ねていた。犯人が伝説の信奉者で、狙いが伝説の弾丸なら、被害者を殺すため、伝説の弾

丸を用いたことが、説明が付かない気がした。
「回転式銃（リボルバー）の薬莢が、現場に落ちていたのだから、彼らの報復だと考えるべきだろう。あの薬莢には、彼らにしか解らない、秘密の伝言があるに違いない。被害者が教団関係者に狙われた理由が、金のためだったのか、何らかの裏切り行為があったのか・・・」
西田山は、伊佐崎の説明に納得したのか、運転席にいる神谷に、歌舞伎町に戻るように指示した。
「・・・人として最も重い罪源が、被害者の死を意味するものなら、弾丸の生贄になった可能性もある」
伊佐崎は、聞込み捜査に戻っていく、西田山のテールランプを見ていた。自分の推理が、現実離れしているのを感じて、目を細めてマンションを見上げた。そして、老人の話が真実か、確かめる方法を思いついた。弾丸の資格者たる条件が、事件の闇を照らす、唯一の手掛かりだった。

第十二話　魔法使いの弟子

鈴子は、中野区・早稲田通り沿いのファミリーレストランで、遅めの朝食を食べていた。朝食セットは、パンが食べ放題、ソフトドリンク飲み放題で九八〇円。一人暮らしの大学生にとって、一食の食事代には、大きな出費だったが、午前一一時まで注文できるので、お腹を空かせた朝昼食（ブランチ）に、ちょうど良い選択だった。彼女は、アルバイト先の本屋まで自転車で、五分もあれば駆け付けられる、この店を月に数回訪れていた。

この店のパンは、全て一口サイズにカットしてあり、色んなパンを少量づつ選んで食べられるのが、鈴子の欲求を満たしてくれた。彼女は、実家が和風旅館のため、食卓にパンが並ぶのが年に数回、学校でも母親の手作り弁当で過ごしていたので、パンを口にするのは、学校帰りに通った地元のパン屋だった。陸上部の部活を終えて、友達と通ったパン屋は、格別な思い出がある。彼女は上京してから、甘い菓子パンを食べると、そうした高校時代の思い出に浸れて、一人暮らしの寂しさも紛れて、幸せな気分に浸れた。

彼女のお気に入りは、何層にもなったパイ生地が、チョコレートクリームを包んでいる、チョコデニッシュ。チョコデニッシュは、コンビニでも買えるのだが、普通サイズだとパイ生地が零れるわ、チョコレートクリームが飛び出すわ、食べるのに気を遣う。この店では、一口で頬張れるので、美味しさを損なうことなく、煩わしさを気にすることもない。女子高生だったときは、チョココロネが大好物だったから、チョコ味のパンなら、何でも良かったのかもしれないが、パン生地のチョココロネは、子供の味だと思っていた。

鈴子が住んでいる板橋から、落合の本屋までは、山手通りを自転車で通っていた。数キロの道程を自転車で通うのは、けっこうな体力を使うが、山道の自転車通学で鍛えた彼女には、鼻歌混じりに、何の苦も無く通える距離だ。アルバイトの予定は、毎週三回ほど入

っており、彼女の仕事は、書籍の整理と返品作業で、正午から初めても夕方に解放される、お気楽なものだった。
鈴子は、無類の読書家で、新刊旧作問わず隠れた名作を発見して、平置きに整理していた。店長も手書きのポップや、本の配置などで、彼女の意見を尊重してくれた。そんな彼女の仕事ぶりは、同じバイト仲間からも評判が良かった。彼女の本の整理が良いのか、彼女目当てで本屋通いの客がいるのか、彼女の勤務時間の売り上げが、跳ね上がるので、店長は「本屋が天職に違いない」と、太鼓判を押してくれる。
鈴子は、そんな楽しい仕事場に向かう途中、気分転換にファミレスで食事するのが、悩み事や考え事をバイト先に、持ち込まないための儀式でもあった。とくに今週は、論文が思うように進まなかったこと、得体の知らない男からの電話など、頭を悩ます問題が山積していたので、いつもより多めに糖分を摂取する必要がある。
鈴子は、得体の知らない男から、電話で忠告されて以来、麻子に誘われても、適当な理由を付けて会うのを拒んでいた。忠告を真に受けたわけではないが、あの男が携帯番号を手に入れたのは、どう考えても麻子しか思い当らなかった。彼女は、それを論理的に否定できない限り、麻子と接するのを控えようと思った。
「悔しいのは、あの男の忠告通りに、麻子さんを疑っていることよね・・・」
と、鈴子は、思わず呟いてしまったが、隣席のサラリーマンは、ヘッドフォンで音楽に夢中で、向かいの席の家族は、自分に背を受けて談笑していた。ただ一人、彼女が顔を上げると、視線を避けるように横を向いた男を除いては、誰も気にしている様子がなかった。
店内で唯一、鈴子に注目していた男は、バイト先の本屋でも見掛ける常連客だ。この店にも通っているのなら、ここの近所に住んでいるのだろう。常連客が、本屋のアルバイトと、たまたまファミレスで遭遇して、どんな女か素性を探ろう企んでいるのか。心の中で「デリカシーのない男」と、勝手にレッテルを貼ったが、彼がバイ

ト先の近所に住んでいるのなら、邪険にも出来ないと思った。
男は、鈴子の顔を頻繁に覗いているようで、その後も何度か目が合ったので、彼女から笑顔で会釈した。それは、単なるお愛想と、牽制の意味を込めたのだが、彼は、何を勘違いしたのか、こちらに向かってきた。そこまでは、面倒が見きれないと思ったものの、相手は知り合いの顔で近付いてきた。
「岩壁さんですよね。えーと、そこの本屋でアルバイトしている」
「えぇ、そうですけど、ウチのお客さんですよね・・・」
「えーと、僕は、緒方稔（おがたみのる）と言います。同じ大学の四回生なのだけれど、校舎でも何度か顔合わせてるんだよ」
「そうなの？　けれど、食事中だから、ごめんなさい」
鈴子は、なるべく穏便に引き返してほしくて、話すことを拒んだものの、緒方は「ごめん、ごめん」と、図々しく向かい合わせの席に座った。彼女は、彼の立ち話や行儀を責めた訳ではない、デリカシーのない男には、素直に退席を命じるべきだったと後悔した。
「岩壁さんは、えーと、心理学部の二回生だよね。僕のゼミで君のことが、ちょっとした話題になっていて、声をかけるチャンスを窺っていたんだ。でも、こんなところで会うなんて、本当に奇遇だね」
緒方は、鈴子に声を掛けたことに、自分でも興奮していたのか、彼女が迷惑に感じていることが、あまり理解できていなかった。
鈴子は、緒方が「えーと、えーと」と、慌てた話し方が、馬鹿みたいだなと思った。彼女は、年の近い男が、あまり好きではない。彼女が上京して、知り合った男は、肉体関係が目当ての底の浅い馬鹿ばかりだった。彼女は試しに、言い寄ってきた男の一人と、三カ月ほど彼のアパートで同棲して、『女』の真似事をしてみたが、ちっとも愉快な気分になれなかった。今では、同棲生活で自分の『女』を試したのが、良い経験になったと考えていた。大人にもなれた。彼女は、相手にプラトニックな関係を望むほど、幼稚でもなければ、不感症でもないが、若い男のガツガツした態度は鬱陶しい。彼女は、素朴な外見と裏腹に、シニカルな行動原理に支配されている。

「私の知らないところで、自分の話題で盛り上がられて、喜ぶと思っているの？」
鈴子は、はしゃいでいる緒方を一喝するように、冷たい声で言った。
「あっ、そ、そうだよね。僕としたことが、君と話せて浮かれてしまって・・・えーと、突然話しかけられて、気味が悪いよね・・・」
さすがの緒方も、鈴子に拒否されていると、気付いて項垂(うなだ)れてしまった。彼女は、叱責されて落ち込んだ彼の様子に満足すると、悪戯心が疼いてきた。彼女は、一人称で『僕』を連発する男が、マザコンだと決め付けて、そんな子供の機嫌をとる術を心得ていた。
「それで、どんな話題なのですか？」
緒方は、最初の勢いがなくなっていた。男女の会話では、先に主導権を奪った者が勝者で、これに負けてしまうと、なかなか取り戻すことが出来ない。鈴子は、彼の好意を感じたので、先手を打っていた。こうした駆け引きは、女が自然に身に付けている能力で、彼女も例外ではなかった。
「君のことを芦木准教は、自分に弟子が出来たと、話してくれたので、自分勝手に親しみを感じてしまって・・・だけれど、ごめんよ」
上目使いで鈴子の表情を覗き込む緒方は、理系タイプの神経質そうな顔をしていた。見かけで判断しては、彼が神学を追及している者だと、気付くことがないと思った。実際、彼は、学問上の興味から神学を学んでいるが、専攻は情報処理だと教えてくれた。
「もしかして、『弾丸の系譜』のプログラムを組んだ学生って、先輩のことですか？」
「うんうん、そうそう、あのプログラムは、かなり出来が良かったでしょう。芦木准教のオーダーは、教団のデータベースから、アレの所有者リストをハッキングして、それを３Ｄ処理で視覚化するって・・・えーと、こんな話は、興味がないよね」
緒方は、息を吹き返したかのように、自慢話を展開したが、鈴子が技術的な話に興味を示さず、腕組みで考えているので、自慢する

ことを諦めた。彼は、彼女のペースに、すっかり捉まっていた。
「その教団って、なんて名前なの？」
「教団は、『新宿の救いの手』と呼ばれて、ロシア正教の宗派を名乗っているけれど、そもそもロシア正教は、宗派や分派を認めないので、これは眉唾だと思うんだ。それに、カトリックにも、精通した教義もあるし・・・僕は、いわゆるキリスト教を模した新興宗教だと、解釈しているんだ」
緒方は、今度こそ自分の得意分野で、鈴子の興味を惹く話が出来たと、聊か得意気になった。
「『新宿の救いの手』の信者は、『七つの弾丸』に出てくる弾丸が、本物の力を持っていると、信じているのかしら？　論文テーマには、伝説の真実性について、信じる人の意志が、どのように介在するのか、その過程を調べる必要があって・・・」
鈴子は、会ったばかり緒方に、弾丸の話をするのに抵抗があった。目の前の男が、伝説の信奉者だとしたら、上手く情報を引き出したかったものの、彼こそが真の弟子ならば、ここでの会話も麻子に筒抜けになってしまう。心の何処かで、電話の忠告に、惑わされていることが嫌になる。
「僕には、アレが奇跡を象徴する物で、それが器を限定しない物ならば、彼らの信仰心は本物だと思うよ。アレは教団にあって、熱心な信者だからこそ、与えられる奇跡の力なのだから」
緒方は、頑なに『弾丸』と呼ばないが、名前を言ってはいけない戒律でも、あるのだろうか？
「先輩は、『新宿の救いの手』の信者だったりします？」
「そうだな・・・ここだけの話だけれど、僕は、教団の戒律に触れてしまってね、元信者の心境なんだよ。彼らの教義には、改宗という手段がないので、年数回の礼拝にだけ、義理で参加している異教徒だね。これは、芦木准教に秘密にしてほしい・・・彼女の心を傷付けるのは、僕としては心苦しい」
鈴子は、緒方の願いを聞き入れたと頷いた。少なくとも彼の言葉

は、嘘を付いている気がしなかった。彼女の質問には、真摯に受け答えしてくれた。
「岩壁さんが、教団のことを詳しく調べたいのなら、僕の知り合いの牧師を紹介するよ」
緒方は、教団の牧師を紹介すると言うと、鈴子が首を横に振って拒否したので、「牧師も異教徒なんだ」と言った。彼が改宗を望んでいると懺悔したとき、その牧師は「罪を赦す」と言ったこと、自分も異教徒だと告白したことを説明した。
「ただ、彼とは、連絡を取る手段がないんだ・・・毎週日曜日に行われる、礼拝に参加すれば、彼と懺悔室で話すことが出来るのだけれど・・・」
「伝説の真偽を調べるために、教団に入信するつもりはないわ」
鈴子は、少し不貞腐れたような、言い方をした。彼が教団の信者なら、言葉巧みに宗教勧誘されていると考えたからだ。彼の明るく接する態度は、新興宗教の勧誘をする信者のそれと、同一に感じられた。
「えーと、声をかけたお詫びに、僕のロザリオを貸してあげるよ。教団では、ロザリオが通行手形のようなもので、それを付けていれば、呼び止められることもない。それに紹介したい牧師には、良い目印になるだろう」
緒方は、自分の席に戻ると、黒色のロザリオを持って戻ってきた。鈴子は、彼から黒色のロザリオを受け取ると、店の紙ナフキンに、教団住所と礼拝時間をメモしてくれた。そして彼は、彼女に携帯番号を聞こうとせず、自分の携帯番号もメモに記して、「もしも緊急の時があれば」と渡してくれた。
「ありがとう・・・失礼な態度で、ごめんなさい」
と、鈴子は言うと、緒方の印象から軽薄さがなくなったと感じた。彼女は、自分が騙され易い性格だと思って、必要以上に疑り深くなっていると反省した。親身になって考えてくれた麻子のことも、電話一本で疑ってしまった。彼女の事情も考えずに、すぐに疑ってし

まった。それが、突然現れた異性なら尚更だ。彼の行為に甘えたとき、彼女にも会って確かめようと、心に誓っていた。
「それは入信が浅い信者が付ける、黒色ロザリオなんだけど、僕は白色ロザリオを持っているんだ・・・えーと、ペアネックレスだと思うと、ちょっと恥かしいよね」
緒方は、照れくさそうに言った。
「先輩！　もうバイトの時間なので、お先に失礼します！」
鈴子は、「前言撤回だわ」と、聞こえないように呟いた。色々と教えてもらったことには、感謝しても良かったが、それ以上に、チョコデニッシュを食べ損ねた悔しさで、涙が出そうだった。

第十二話　魔法使いの弟子（後書き）

０８／０８／２０１１

【元】「・・・教団では、ロザリオが通行手形のようなもので・・・」

【改】「・・・あの教団では、首から下げるロザリオが、通行手形のようなもので・・・」

改稿理由：ロザリオを首から下げるのが、教団の独特な用途だと強調するため。

第十三話　偽りの五体投地

鈴子は、週末を迎える昨晩、久々に夜更かしをせずに、早めにベッドに潜り込んだものの、寝付きが良くなかった。教団の礼拝時間は、日曜日正午から始まり約一時間、懺悔室を利用できるのが、礼拝後の二時間と決められていた。一般信者が懺悔室を利用するには、礼拝が始まるまでに番号札を受け取る必要があり、十枚の札が用意されるが、後ろに並べば時間切れもある。彼女は、『七つの弾丸』の話を聞くために、緒方の勧めてくれた牧師に会うことにしたが、何度も礼拝に出かける気がなかった。だから、一番の札を得るには、札の配布が始まる早朝に、列の先頭に並ぼうと考えた。

緒方は、「札は要らないと思う」と、牧師から鈴子に声をかけてくると、奇妙なことを言っていた。牧師とは、連絡が取れないと言っていたのに、多くの信者の中から、自分の心を読み取って、声を掛けてくるのなら、それこそ奇跡ではないかと思った。

鈴子は、静まり返った部屋で横になると、麻子に連絡を取らずに、自分勝手に教団に潜入するのが、裏切り行為になると胸が痛かった。それに、身を案じてくれる伊佐崎には、事件に深入りしないと約束したのに、身勝手な衝動の赴くまま、伝説の真偽を追及している。

麻子は、伝説を研究していた学者だし、伊佐崎は、刑事として捜査を続けている。自分だけが、興味本位で二人に迷惑をかけているのに、その二人に隠れて、こっそりと調査や捜査を続けていることが、とても図々しい気がしていた。彼らの手柄を横取りするつもりがないのなら、目を瞑り、耳を塞げば済むことなのに、それが出来ないのは、心の何処かに、彼らを出し抜いてやろうと、意地汚い考えがあるに違いないと思った。

「私は、嫌な女なんだろうな・・・」

と、鈴子は、声に出してみたものの、そこに答えてくれる人がいないと、暗い室内に虚しさが木霊した。二人の手助けなくして、伝

説の謎に近付くことが出来るのか、本当は自信がなかった。彼女は、時計を見ると、午後九時を回ったところ、普段なら読書でもしている時間だ。
鈴子は、携帯電話を手に取ると、液晶表示に『※サンちゃん※』を呼び出した。
「こんな時間に、どうしたのかね？」
電話の相手、伊佐崎が言った。
「歌舞伎町の事件のことだけれど、捜査の進展は、どうなっているのかと思って・・・」
「君には、事件に関わってほしくない」
「うん。けれど、麻子さんと話していて、気付いたことがあったから、伝えようと思って電話したのよ」
「事件の捜査をしているのなら、これ以上の話を聞く訳にいかない。事件の捜査とは、君が考えるよりも、危険と隣り合わせなのだ・・・君を事件に、巻き込みたくないのだよ」
と、伊佐崎は、鈴子の話を聞く素振りも見せずに、軽率な行動を慎むように言った。
「伊佐崎さんの気持ちは、解っているわ。だから、私の知っていること、全て伝えたいのよ・・・これで終わりにするから、私の話を聞いてください」
鈴子は、ラスプーチン暗殺に纏わる弾丸の話を聞かせた。伊佐崎は、話に相槌を入れていたが、何処まで本気で聞いてくれたのか、彼女には解らなかった。それでも、彼が耳を塞いでいないのなら、自分の気持ちを整理できた。彼の息遣いを電話越しに聞きながら、赦されるための告白、それは彼女の懺悔だったのかもしれない。
「・・・弾丸は、最初の一発のほか、四発が使用されており、使われた弾丸は『傲慢』『憤怒』『色欲』『怠惰』『暴食』・・・そして、歌舞伎町で使われたのが『強欲』だから、残りの一発は『嫉妬』のはずよ」
「・・・」

伊佐崎は、何かに書き留めているのか、無言のままだった。
「それで、伊佐崎さんの話を思い出して、『七つの弾丸』が罪源を裁いているのなら、秘密を握った彫金師が『傲慢』、ヒトラーが『憤怒』、エヴァが『色欲』、ラスプーチンが『怠惰』、晩餐会の主催者(さいしゃ)が『暴食』、街金融の元締めの田村が『強欲』」
「・・・『嫉妬』の所有者は、嫉妬深い人物？　いや、二発ずつ使用されるのなら、次に裁かられるのが、嫉妬深い人物ということかね？」
「弾丸は、『罪を赦す』ことが優先されるので、『報復されない』との約束より、『弾丸による報復は赦される』と解釈されているのよ。ヒトラーとエヴァは、ソビエト兵が弾丸を持っていないと、知っていたから、自分たちの弾丸を使用して、罪を罷免されたと言っていたわ。犯人が、伝説の信奉者なら・・・」
「最後の一発に報復できる弾丸は、この世に存在しなくなる。田村が殺された理由は、その絶対的な力を欲したため、犯人が、自分の権力を得る生贄にした」
「私は、『嫉妬』の所有者が犯人だと思う・・・それが誰なのかは、解らないのだけれど」
鈴子は、伊佐崎が責めることなく、話を最後まで聞いてくれたのに、胸の痞(つか)えが楽になった。
「なるほど、これで犯行の目的が二つ解った。犯人は、被害者を殺さなければ手に入らない、絶対的な権力を欲していたこと。もう一つは、この事件により、犯人が所有者たる資格を手にすることだ・・・有難う。さっきは、乱暴な言い方をして、すまなかったね」
伊佐崎は、それでも「私に任せたまえ」と、鈴子が伝説の謎に挑むことを許さなかった。
「勝手なことばかりして、ごめんなさい」
鈴子は、謝って電話を切ると、ここ数日の重荷が嘘のように軽くなった。ただ、明日の礼拝に参加することで、再び彼を欺くことになるのだが、今夜一夜限りの充足感と、安寧(あんねい)の眠りが約束された。

麻子のことは、気にかかるものの、それも明日には、解決できると信じていた。彼女は、枕を抱きかかえると、絡ませた足に力を入れて、たおやかな仕草で、自分を慰めることができた。

鈴子は、久々に穏やかな気分になると、身をすくめるような生活から、こんなに解放されるのなら、もっと早く伊佐崎に告白すれば、良かったと思った。彼は、冴えないオジサンだったが、彼女のことを心配してくれるのが、唯一好感が持てるところだ。

礼拝当日の朝は、蝉の声が騒がしく、鈴子は、目覚ましが鳴るより先に起床した。彼女は、どんなに熱帯夜でも、寝るときにエアコンを切っていた。標高一五〇〇メートルにある、蓼科高原で生まれ育った彼女は、エアコンの冷気を一日中浴びるなど、ほとんど経験がなかった。彼女は、上京して人工的な冷気の恩恵より、翌朝の気怠さ、照りつける太陽との無駄な争いを避け、深夜の快適さを手放すことにした。

鈴子は、汗ばんだTシャツや下着を脱ぎ捨てると、洗濯機に放り込んで、熱いシャワーを浴びた。彼女は、生まれて初めて、礼拝という行事に参加するので、それが偽りの信仰心だとしても、なるべく清い体で臨みたかった。

部屋に戻ると、持っている服を並べたが、どの服装も場違いな気がした。そもそも東京に親戚のいない彼女は、礼服の類を持ってきていなかったし、そんな堅苦しい服を着て参加するほど、形式ばった集いなのか。ラフ過ぎずに、相応しい服装を考えると、ますます着る物が選べなくなった。夏っぽいノースリーブのVネックシャツと、藍色のサマーカーディガンを取り出したが、デニムパンツを穿くと、物見遊山の観光客みたいで、巡礼者にそぐわない格好だ。

「そうだ！」

鈴子は、デニムパンツを脱ぐと、麻子から借りたままのタックスカートに穿き替えた。スカートに合わせただけで、聡明感と清楚感の漂う夏らしい装いになった。彼女は、自分の選んだ組み合わせに満足したが、それが借物の服だったので、素直に喜べなかった。彼

女は、バイト代が入ったら、スカートも何着か揃えようと思った。
鈴子は、正午の礼拝に、まだ早過ぎる午前八時半、山手線の新大久保駅に着いた。西武池袋線から乗り継いで来たが、自転車を乗り回している彼女は、東京の路線網は便利だけれど、何処に行くにも遠回りしている気がした。彼女は、教団ビルまで歩きながら「下落合を抜ければ、ほとんど直線なのに」と、愚痴をこぼすほど、都内の道を走り込んでいた。
教団ビルの前では、白色のロザリオを付けた信者が、箒を手に道を掃いていた。彼らは、道を行き交う人々に「おはようございます、おはようございます」と、笑顔で挨拶していたが、挨拶された方は、複雑な表情を浮かべていた。
鈴子は、彼らの行為が押し売りだとしても、そこに悪意がないと思っている。挨拶された人は「笑顔くらい見せればいいのに？」と、いつも感じていた。彼女は、宗教組織の信者が愛想良くするのに、挨拶を無視する人の方が、よほど違和感あると思うのだが、都会の人間の心が狭いのか、自分の脇が甘いのか、解らなかった。「それは、君の脇が甘い」と、伊佐崎がいたなら注意しただろう。
「うん。私は、脇も甘いし、詰めも甘い」
鈴子は、ＣＫのバスケットバッグから、黒色のロザリオを取り出して、教団ビルの入り口にいた、外国人牧師のチェコフに会釈して、何食わぬ顔で入った。彼女は、一階ロビーに入ると、懺悔の順番を決める、番号札の配布所を探した。緒方は、事務テーブルに座っている信者が、札を配ると言っていたが、早すぎたのか、まだ事務テーブルも壁際に片付けられたままだった。
「オジョウサン、ナニヲ、サガシテイルノ、デスカ？」
チェコフは、エレベータホールで不審な行動をしていた鈴子に、話しかけてきた。
「礼拝後に懺悔したいので、その札が配られていると聞いたのですが・・・まだ、早かったみたいですね？」
「マダデスネ・・・アナタノ、ミチビキテハ、ドナタデスカ？」

鈴子は、正式な手続きを経ていない異教徒で、緒方の名前を出せなかった。彼女は、異教徒だと知られれば、伝説の真偽に近付けず、エンドロールを観ることになる。彼女は「私の導き手は、芦木さんです」と、麻子の名前を告げた。もしも、教団の潜入が失敗するなら、彼女の潔白を信じたかった。この牧師が、首を横に振れば、不信感が払拭できる。

彼女の名前を聞いたチェコフは、鈴子の全身を舐めるように見ると、「ウケツケハ、モウスグデス」と、笑顔で答えた。それは、麻子を教団の関係者だと認めたのか、名前を聞いてもピンと来ないのか、曖昧な態度で判断が出来なかった。少なくとも外国人の牧師は、彼女が異教徒だと疑う素振りがなかった。

「では、時間になるまで、私も掃除の手伝いをしますよ」

「ソウデスカ、ソレハ、ヨイコトデス」

と、チェコフは、自分の持っていた箒を渡して、信者のところに案内した。鈴子は、我ながら上手く機転を利かせたと、ほくそ笑んだ。

鈴子は、エレベータ前に、事務テーブルが出されたので、札を取りに行こうとすると、彼女を後ろ手に強く引く者がいた。そいつは、体をピタリと寄せて、周囲の人間に気付かれぬように、彼女の左手首を肩甲骨まで捩じりあげた。

「芦木の名前を出したそうだな・・・てめー、どこの組織の人間だ？」

鈴子は、胸を軽く逸らす状態で、声の主が誘導する方に、体が浮くような感覚で進んでいった。彼女は、二基あるエレベータの左側に、乱暴に押し込まれた。そのとき、振り返って、はじめて声の主を見た。鋭い目つきと、顎の無精ひげ、ミディアムヘアが印象的な北爪だった。彼は、首元の黒いスカーフを引き上げると、顔の覆って人相を隠した。

「もう一度聞くぞ・・・てめーは何者だ？」

鈴子は、ここが既に敵の手の内で、大声で助けを呼んでも、北爪

を激昂させるだけだと、身を震わすことしか出来なかった。ただ怯える彼女を見て、彼は、溜息を吐いて、エレベータの緊急停止ボタンを押した。室内の照明は、非常灯のオレンジ色に変わり、彼の目に赤く反射して、悪魔のようだった。

「このビル設備は、俺の手中にあるんだわ。エレベータが緊急停止しても、表向き点検中のサインしか、外には伝わらねーんだよ・・・ここが奴らの根城である限り、助けを呼んでも無駄だと、理解視しているようだが、念のため忠告しておくぜ」

北爪は、鈴子が頷くの確認すると、彼女のボディチェックをした。彼は、全てを確認しても、盗聴器や銃器の類が見つからないことに、首を捻った後、彼女の下顎骨を念入りに、耳の後ろまで指を這わせて確認した。

「おい、てめー、カプセルを仕込んでねーだろうな、こんなところで、てめーに自殺されたら、俺の計画が台無しだからな」

北爪は、鈴子の舌を引っ張ると、歯に治療痕が全くないので、思わず笑ってしまった。

「てめーは、健康優良児かよ」

「へ、へぇんこうゆーりょじ？」

鈴子は、舌に親指を押し当てられて、上手く発音が出来なかった。それに健康優良児の表彰制度は、一九九六年に完全廃止さており、当時六才の鈴子が知るはずがない。

「俺も、ここで醜態を晒したかねーんだわ、素直に話すなら、穏便に済ませてやる・・・いいか、てめーは何者だ？　なんで芦木の名前を出した？」

「私は、学生です・・・神学部の芦木麻子准教授とは、教団の教義を調べていて、知り合いました。私は、信者ではないので、麻子さんの名前を勝手に借用しました・・・彼女には、何の罪もありません」

鈴子は、言葉を選んで、簡潔に伝えることだけに集中した。ここで緒方の名前や、弾丸のことを話せば、周りに迷惑をかけるし、事

件を嗅ぎまわる不審者と思われれば、命の危険もあると考えた。それに、説明には、嘘がないのだから、これで納得してもらえれば、穏便に済ませてもらえる。
「おいおい、まさか嘘だろう？」
北爪は、黒いスカーフを下すと、耳朶を指で抑えつけて、空中に頬杖を突くような格好をした。
「つまり、てめーは、学校先生の名前を騙って、教団を嗅ぎまわっている、単なる学生なのか？」
北爪は、鈴子が頷くのを確認して、ウンザリした表情を見せた。彼は、彼女が組織の人間ではないと解って、気が抜けたようだった。
「そ、れに教団には、異教徒の牧師がいるから、私の知りたいことが聞けると、友人から聞いたのよ」
鈴子は、北爪が教団ビルを『奴らの根城』と呼んだので、彼こそが、緒方の言っていた、異教徒の牧師だと考えた。この鋭い目をした、悪魔のような男が、異教徒の牧師なら、
「ちょっとだけ、考える時間をくれや・・・」
北爪は、目を瞑ると、しばらく黙っていた。ほんの数秒の沈黙にも関わらず、鈴子は、死刑宣告を待つ囚人の気持ちが理解できた。彼が次に開眼したとき、首を絞められるかもしれないし、もっと凄惨に殺されるかもしれない。彼女は、こんな狭いエレベータが、終焉の地になるかと思うと、涙が流れそうだ。
「・・・わかった、そうしよう」
北爪は、独り言のように呟いて、目を開けた。鈴子は、どんな手段で殺すのか、それが決まったのだと、半ば諦めていた。
「お願いだから、痛くしないでね・・・苦しいのも嫌だから・・・」
鈴子は、目を閉じて、北爪に懇願した。
エレベータの駆動音が聞こえると、視界に見慣れた風景が飛び込んできた。
「いいか、良く聞きけよ、俺が異教徒の牧師だ。聞きたいことがあるのなら、何でも答えようじゃないか、鈴子くん」

北爪は、落ち着いた様子で言った。
「あっ、は、はい。宜しくお願いいたします・・・」
鈴子は、あまりの変わりように、呆気にとられた。
「ただ、俺も教団で仕事を請け負っている身でな、騒ぎを大きくしたくねーんだわ。だから、質問を受けるのは、これ限りってことで良いよな？」
「はい、そ、それで麻子さんは、ここの教団の信者なんですよね？」
「礼拝が終わったら、俺が懺悔室に招待してやる。それまでは、他の信者と同じように、最上階のラウンジで、景色でも見ながら、お祈りでもしてろ」
北爪は、礼拝堂の階に着くと、鈴子に「芦木麻子は、信用するな」と、言ってエレベータを降りた。
鈴子は、極度の緊張から解放されると、口元で涙の味がした。
「あれ？　私、泣いてたんだ？」
最上階のラウンジには、宗教画が展示されており、信者たちが手を合わせ、十字を切って祈りを捧げていた。化粧気のない鈴子は、涙をハンカチで抑えると、こんなとき化粧崩れを気にせず、本当に良かったと思う。彼女が周囲も気にせず、涙を拭っていると、すれ違う信者に、肩を抱かれて慰められたり、励ましの言葉をもらうので、少し笑ってしまった。
「ラスプーチンのイコン？」
鈴子は、ラウンジの宗教画の一段高い位置に、ガラスケースに守られた、ラスプーチンの聖像を見つけた。彼は、奇跡の力を持った、帝政ロシアの怪僧で、その奇跡の力で死生を操り、帝政ロシアを陰で操った男だ。イコンに描かれた彼は、まだ青年期の巡礼の様子で、どことなく、目つきの悪い異教徒の牧師に、面影が似ていた。
「そういえば、あの牧師に、名前なんて名乗っていないわ・・・」

第十四話　ペテン師の考察

「奇跡の力なんてものは、存在するはずがない」

伊佐崎は、昨晩の鈴子との会話を思い出して、思わず口に出して否定した。彼は、事件に漂う『七つの弾丸』の物語と、捜査が難航している現状を鑑みて、事件に隠された真実を見出そうと必死だった。事件に使用された弾丸の魔力が、仮に本物だとしたら、犯人の罪は、誰にも問えないはずだ。だが、犯人を追っている彼は、魔力の影響を受けていないことになり、物語が破綻している。そもそも彼は、伝説や魔力など、オカルトを信じていないので、自分が物語の登場人物ではないと、断言できる。

しかし、鈴子は、伊佐崎のオカルトを否定する心が、事件の盲点となっていると、教えてくれた。彼女は、伝説を追及することで、被害者の田村が殺されるのに、伝説の弾丸『強欲』が使われた理由や、犯人が田村を殺して、手にする権利を解明かした。それは、彼女が少なからず、伝説を信じていたからだ。彼は、彼女のように、伝説に正面から向き合わなかったので、彼ら信奉者の心情を理解できなかった。彼は、犯行動機が「弾丸の所有者たる資格を得るため」なんて、非現実的だと、無意識に否定していた。

「私にとっては、馬鹿げた理由も、伝説の信奉者にとっては、それが世界の理になっている。奇跡を信じる者には、弾丸の資格者という身分が、値万金ということだ」

伊佐崎は、『正南会』の南方が「資格者は、人として最も重い罪源に、神に赦しを斯う必要がある」と、言っていたが、それが本当ならば、弾丸の所有者は『人として最も重い罪』を犯している。彼は、老人の言葉を『殺人者』に置き換えて、事件の背景を探っていた。

麻子の祖父は、『強欲』を保管していたが、前科者ではない。そして伊佐崎が調べた限り、警察官僚として大きな功績もなく、退官

後もひっそりと暮らしており、伝説の力を得た、権力者に相応しい人物ではない。彼は、『強欲』を保管をしていたが、所有者ではなかった。『強欲』は、政治結社からの預り物で、それが『正南会』だとすれば、正当な所有者は、南方に違いなかった。政権与党の元幹事長、政界のフィクサーと呼ばれる老人は、伝説に出てくる権力者にも、見劣りしない経歴だ。

南方は、弾丸の所有者で『殺人者』なのか。伊佐崎は、車椅子の老人の言葉を裏付けるため、老人が資格を得るために犯した罪、そのことを捜査していた。老人の経歴を調べるため、『正南会』が季刊発行している会報誌『救国の友』を、老人の秘書・房江から取り寄せた。彼女には、教団の信者を装っていたので、「獄苦代受の精神、南方総帥の半生に学びたい」との言葉に、何の疑いもなく会報誌を送ってくれた。それも南方の寄稿文やインタビュー記事には、丁寧に付箋まで挿んでくれた。

会報誌は、南方の政治心情のほか、宗教活動を通じたボランティア精神、彼を称える美辞麗句が溢れていた。その中には、麻子の祖父・芦木文征（あしきぶんせい）の死を悼んで、「当選に導いてくれた、真の導き手だった」との弔辞が紹介されていた。

「なるほど、導き手・・・南方を教団に入信を勧めたのが、芦木文征だったのか」

伊佐崎は、会報誌の目を通して、そこに南方が『殺人者』だったとの告白が、掲載されるはずがなかった。しかし、彼の半生を紹介する記事には、外交官だった両親と巻き込まれた、ある歴史的事件が、弾丸の資格者たる条件を満たしていた。

一九六〇年、当時一〇歳の南方は、外交官だった両親とともに、ラオスに在住していた。同じ年、隣国のベトナムでは、反米主義を主張する南ベトナム解放民族戦線が結成され、ベトナム戦争に発展する軍事衝突がはじまっている。南方は、政治家を目指した背景について、多感な時期を東南アジアで過ごし、貧富格差や腐敗政治、異端者への迫害を実体験して、為政者の欺瞞と闘うために、自ら政

治の道を歩んできたと、『救国の友』に寄稿文を掲載していた。
伊佐崎が注目したのは、同会報誌に『真の親米保守派政治家、銃を手に戦ったベトナム戦争！』と、一九七一年、ベトナム軍と米軍のラオス侵攻時、当時二一歳の南方が米軍とともに、共産主義者との戦いに参加したとの記事だった。
南方は、記事の中で「外交官だった両親は、東南アジア情勢を見守りたいとの願いを聞き入れて、戦線が拡大する前に、私を残して帰国した。その後、共産主義勢力の勢いが増して、ラオス侵攻時までは、あっという間だった。周辺諸国との国交断絶状態にあった、ラオスから出国は、想像以上に困難なもので、米軍に従軍する形で、戦火から逃げ遂せた・・・」と、戦争参加は否定していた。戦火の中で、弾丸の資格者となったと考えるのは、憶測でしかなかったが、これ以上の事実はなかった。
伊佐崎は、鈴子の話から、ある仮説を立てた。ヒトラーは、志願兵として第一次世界大戦を経験している復員兵で、敵兵士を殺していただろう。ただ、彼が戦時中の階級は、伍長止まりで、上官は「指導力が欠けており、配下を持つ事には相応しくない」と証言していた。彼が独裁者となったのは、弾丸の資格者である彼に、ドイツ労働者党幹部ドレスクスラーが弾丸を譲り渡したからだ。
ドレスクスラーは、何処から弾丸を手に入れたのか。彼は、オカルト的な秘密結社トゥーレ協会の協会員だ。弾丸の入手先が、トゥーレ協会だとすれば、復員兵だったヒトラーを独裁者に仕立てたのは、トゥーレ協会の弾丸の信奉者、つまりドレスクスラーや、思想家ディートリヒ・エッカート。権力を欲したのは、弾丸の所有者ではなく、彼に弾丸を授けた秘密結社ではなかったのか。
そして、ラスプーチンは、聖母マリアの啓示を受けて、聖地エルサレムまで巡礼の旅に出る。その旅路で、神がかり的で狂信的な鞭身派（フリスト）に影響を受け、自らも鞭身派の苦行を経て、霊感を身に付けた。多くの信者を霊感により治療し、死生を操る怪僧と呼ばれたからには、患者を死に至らしめた経験もあり、彼も弾丸の資格者となった。

彼に弾丸を授けたのは、異端として禁止されていた修道僧派の鞭身派だろう。鞭身派の全貌は、今もって明かされていない。帝政ロシアのニコライ皇帝を傀儡とし、為政者を操ったのは、彼が欲した権力だったのか。彼もまた、自ら欲した権力ではなく、権力を欲していた鞭身派の傀儡に過ぎなかったのではないのか。

ラオス侵攻で、弾丸の資格者となった南方は、自らの意志で権力を欲していたのか。老人は、あの夜、突然の来訪者に、教団の教義に関わる秘密を打ち明けた。あの老人の独白には、教団の教義を隠すような素振りがなかった。

「彼は、何かを伝えようとしたのでは？」

伊佐崎は、伝説を否定せず、魔力を肯定する信者として、彼らの思考を読み解く必要があった。ヒトラーや南方が、弾丸の資格者であり、所有者だとすれば、信者にとって、彼らは、単なる成功者なのか。少なくとも、トゥーレ教会や『新宿の救いの手』は、彼らの成功の陰で、何か得る物があったはずだ。トゥーレ教会のオカルト研究は、親衛隊の全国指導者ハインリヒ・ヒムラーの設立した、アーネンエルベに継承され、彼の下で三〇〇人だった隊員数が、たった三年間で一万人に規模を拡大した。

『新宿の救いの手』は、ロシア正教の宗派を名乗っているが、南方が初当選した当時、数ある新興宗教教団の一つで、政治結社を配下にするような、組織力を持っていなかった。かの教団も、老人の威光の下で、財政界に多くの信者を送り込み、全国支部を展開する大組織になっている。

「これでは、弾丸の所有者が得る物より、弾丸を授けた者が得る物の方が、大きいのではないかね？　まるで、弾丸の資格者を憑代に、何者かが、組織の拡大を狙っているようだ」

伊佐崎は、自分のデスクに積み上げた、捜査資料を片付けると、今朝から連絡が付かない、鈴子の動向が気になった。昨晩の彼女は、思い詰めた雰囲気を感じさせたのに、彼は、その真意を汲取ることなく、邪険にしてしまった。事件は、彼らが考えていた以上に、深

い闇の中にあり、彼女のような素人が、不用意に近付くのが、最も危険だと解っていた。彼女には、面と向き合って、そのことを理解させる必要があった。

捜査一課長の田上は、捜査資料を読みながら、時たま携帯電話とにらめっこする、伊佐崎の様子を不思議そうに、眺めていた。彼に「何をしているのか？」と問質すのは、簡単なことだが、面倒事に巻き込まれたくない。それに、この偏屈者のことだから、何を言っても適当な言葉で、はぐらかすに決まっている。

「うん？　私の顔に何か付いているのかね」

「あ、あぁ、事件の捜査は、進んでいるのか？」

田上は、いきなり声を掛けられて、つまらない事を聞き返してしまった。西田山たちは、歌舞伎町の事件の捜査を調書にまとめて、公安部に提出してしまうと、他の事件に駆り出されてしまった。捜査一課で、歌舞伎町の事件を捜査しているのは、彼だけになってしまった。

「今回の事件は、組織犯罪の可能性があり、そいつが、政治的な圧力をかけている・・・と言ったら、課長は、どうするのかね？」

伊佐崎は、不敵な笑みを浮かべた。

「君のことだから、捜査を止めろと言っても、私の命令に従わないのだろう。事件の捜査は、勝手にやってもらって構わないが、上層部に楯突くのだけ、気を付けてくれよ・・・君のためだ」

「私のため？」

伊佐崎は、聞き返した。

「四課の連中は、公安部と事を構えるつもりで、色々と嗅ぎ回っているみたいだが、ウチらが、〇暴と〇暴ＯＢの間に入って、無傷で生還できると思えない。歌舞伎町の事件が、組織犯罪なら、奴らの縄張り争いに、手を突っ込んでも怪我をするだけだ」

「それでも、一課が捜査を打ち切っていないと、ポーズが必要だろう？」

田上は、伊佐崎に単独捜査を許可したときから、西田山たち捜査

員を早々に捜査を切り上げさせた。体面を取繕うだけの捜査なら、彼一人で十分だと、割り切っていた。
「君は、本当に人が悪い・・・」
田上が遣り切れないと、追い払おうとしたとき、公安部から内線で、伊佐崎に呼び出しがかかった。
「ほら、君が余計なことしてるから、芦木さんから呼び出しだ・・・余計なことは、喋るなよ」
と、田上が言うと、伊佐崎は「余計なことはしていない」と、苦笑いをするしかなかった。
警視庁公安部は、その構成員についても、情報公開されていない。捜査四課の捜査員や、人事部の事務方で組織された、警察を取締る警察と呼ばれている組織だ。警視庁公安部といえば、組織犯罪を専門に捜査する部署で、非合法組織に対抗して、諜報活動や扇動活動など、様々な手法を用いて捜査することで、闇の権力とも恐れられている。
隆文警視正は、警視庁公安部内に、さらに秘匿性の高い組織『公安特課』を組織している男だ。ただ、伊佐崎は、そんな秘密組織が実在するのか、未だ計り兼ねていた。
「よく来たな、ここに掛けたまえ」
隆文は、伊佐崎に席を勧めると、自分は立ち上がって、彼に背を向けて、窓から皇居のお堀を眺めていた。
「伊佐崎、君を呼び出した理由は、解っていると思うが・・・どういうつもりで、ウチの捜査員に近付いた」
「捜査員？　誰のことかね」
伊佐崎は、身分を偽って、前田明子を名乗る、公安特課の女性捜査員に接触していた。彼女から、被害者が傾倒していた宗教『新宿の救いの手』の教団名と、警視庁の秘密組織が、教団に潜入捜査を行っている事実を掴んでいた。
「捜査一課には、歌舞伎町の事件のことで、そこまでの捜査権限を与えていない。君の行動は、捜査権を逸脱した、越権行為だと思わ

ないか？」
「芦木警視正こそ、我々警視庁の本懐を、お忘れではないですか。首都圏管内の殺人事件は、捜査一課に捜査権があり、そこに割り込んできたのは、捜査四課と公安部ですよ。貴方が、警視庁幹部たる矜持を持ち合わせているのなら、捜査一課の存在意義を忘却すべきでない」
「警視庁の改革には、現状の縦割り組織が、機能不全に陥っていると考えている。今までの捜査でも、殺人事件を扱う捜査一課、組織犯罪が専門の捜査四課、君らの上司は、牽制し合い、睨み合いを続けてきた。上部構造にある公安部が、君ら部課に指揮権を発動して、現場の刑事たちに混乱を与えたようだが、私は、一元化された捜査態勢が、警視庁が本来有るべき姿だと、考えているのだ」
「それが、公安特課の矜持ってやつですか・・・貴方は、我々を道具のように考えている」
伊佐崎は、隆文の「一元化された捜査態勢」を総べるのが、彼の作り上げた公安特課だと、秘密組織の正体を突き付けた。彼は、上層部の人間だけが知り得る、秘密組織の名前を出したが、背を向けたままの隆文が、どんな表情をしたのか解らなかった。
「君は、田上捜査一課課長と組んで、華々しい事件解決の裏で、どんな活躍をしてきたか、私が知らないと思っているのか？　昼行燈の夜の顔、公安部の長である私が、田上課長の小賢しい企みを、見抜けぬはずがない。君のような奥床しい刑事は、私の意見に賛同してくれると、考えていたのだがね」
隆文は、伊佐崎が手柄を譲る代わりに、上司から単独捜査の権利を得ていたこと、それを知っていた。ただ、捜査一課の田上が、現場刑事を狡猾に利用していると、知将扱いなのが、納得がいかないところだ。あの昼行燈は、太陽が沈まない、真夏の南極大陸にある。
「私たちは、貴方の考えているような刑事ではないと、断言できますよ」
伊佐崎は、「少なくとも田上は・・・」と、小さく呟いた。

「まぁ、いいだろう。ただし、君たちの行動は、常に監視されていると、考えておきたまえ」
隆文は、向き直ると、公務机に腰かけて、左手に持ったボールペンで、机を小刻みに叩いた。彼は、強気に恫喝したが、既に秘密組織の存在が露呈し、伊佐崎に先手を取られたことに、苛立ちを覚えていた。カツ、カツ、カツから、カッカッカッと、彼の処遇を考えると、机を叩く音が早くなり、その音がピタリと止むと、判決が決まった。
「伊佐崎、君は、我々の同志になりたまえ。警視庁の現行法では、我々の組織は、非合法活動をしており、その存在を公言できない。だが、この状況は、君が考え付かない方法で、一変するだろう。歌舞伎町の事件は、警察組織の在り方を改革するための序章に過ぎない」
隆文の出した結論は、伊佐崎を困惑させた。
「私は、捜査一課としての矜持を持っている・・・貴方の組織には、私のような孤高を志す刑事が、邪魔になるだろう」
伊佐崎の言葉を聞くと、隆文は「もっと、早くに誘うべきだった」と答えた。
「私も、質問していいかね。公安特課の捜査員が、教団を潜入捜査している理由は、歌舞伎町の事件に関係しているのか？　父親の芦木文征は、教団の信者だったが、貴方自身はどうなんだ？」
「私も、刑事としての矜持を忘れていない。そして、父親を唆した教団を毛嫌いしているが、指揮権を発動したことは、私怨と無関係だと信じてもらいたい」
「私怨？」
「私の父親は、教団の教義に殺されたようなものだ・・・」
隆文の口からは、それ以上の答えを聞けなかった。
「それから、捜査員から受け取ったＳＤカード、中身は何だったのかね？」
伊佐崎は、言った。

「伊佐崎、例え意味など無くても、捜査一課の君に教えることは出来ない。公安部が掴んだ情報、公安部の長である私がリークすると、本気で思っていたのか？　情報開示出来ない理由に、疑問を持っているのなら、それが私の答えだ」
隆文は、伊佐崎の質問に答えられない理由に、横断的な捜査態勢の組めない、現状の縦割り組織の問題点を挙げた。
「それは、上層部が押し付けた規則か？　私なら、乗り越えて見せるね。上の人間は、現場の苦労を知らないから、それを制度として押し付けようとする」
伊佐崎は、退席しようと立ち上がると、
「警視正の人事権は、内閣府の国家公安委員会にあるが、君たち警部クラスの人事権が、私の古巣である警視庁人事部に、その任があることを忘れるな」
と、隆文は、脅すように言った。
「君たち？」
「そうだ、ブラック・スネークだ。君なら解るだろう」
隆文が言うと、伊佐崎は、ニヤリと笑って、「ずいぶん懐かしい名前だ」と、手を挙げて部屋を出た。
伊佐崎は、捜査一課に戻る長い廊下で、携帯電話の留守電が残っているか、確認をしたが、ゼロ件のままだった。彼は、鈴子が昼下がりまで、携帯の電源を切ったまま「何をしているのか・・・」と、考えて不安になった。

第十五話　再誕

信者たちは、礼拝の時間が近付くと、礼拝堂に向かって集まり、入口で渡された座席表に従って、席に着いた。黒色のロザリオを身に付けた、入信の浅い信者は、前の席から案内された。そして、彼らを見張るように、白色のロザリオの信者が、後ろの席に着席した。入信の浅い信者は、背中に刺さる視線に、異様な緊張感があった。

鈴子は、G一の座席番号で、中央の一番前の席に案内されたが、これが意図的に割り振られたのなら、異教徒の牧師の仕業に違いない。彼女は、須弥壇のような一段高い場所から、信者たちの着席を待っている、牧師のチェコフにウィンクされて、落ち着かない気分になった。礼拝堂の高い天井には、宗教画が曼荼羅のような紋様で配されており、和洋折衷で無節操な宗教観が、新興宗教らしい空間を醸し出していた。

礼拝が始まると、チェコフの後ろには、彼と同じ金色のロザリオの牧師が五人と、末席に銀色のロザリオを身に付けた北爪がいた。彼は、他の牧師と同じ服装だったが、黒いスカーフで人相を隠し、険しい視線で、信者たちを威嚇していた。その形相は、笑顔を絶やさない天使の中、一人だけ死神が立っているようだ。

「キョウハ、ワレラノトモ、カノヒトノ、ハナシヲ、シタイト、オモイマス」

と、チェコフが言うと、五人の牧師の一人が、彼らの経典らしき本を開いて、一歩前に出た。

「入信の浅い方々は、我々の教団を新興宗教だと、誤解されているのでは、ないのでしょうか？　私たちの教義は、とても古く、四世紀、エジプトの修道士、エヴァグリオス・ポンティコスが『スケンマタ』で説いた、正教要理（カテキズム）に基づいた教の実践であり、現代のキリスト教修道制にも劣らない、長い歴史を持っています。我々の正教要理は、修道の教えの実践を意味しており、それは、ロシア正教な

どに代表される東方教会と、理を供するものです。ただ、我々の修道制は、彼が異端宣言をしてなお、宗教史に影響を与え続けた、その根源的な理を以て、機密を得るものですが、それを偽りの奇跡だと、袂を分かった人々は、我々を嘲笑しています。それこそ大きな誤解です・・・」

鈴子は、牧師の話を理解しようと、必死だったが、彼女は「自分たちは、東西キリスト修道制と同じ歴史を持つ、伝統的な宗教だと説明しているのね」と、自己流に要約した。その後も、難解な説法が続いたが、彼女は、音の響きに特徴があった、『スケンマタ』という単語だけが、印象に残った。

「・・・さて、我々の友は、幼少期より奇跡の力を開花させ、馬泥棒の名前を言い当てたり、手を翳(かざ)すだけで治療を施すなど、人々の救い手となった。我々の宗派は、かの人と共に歩み、かの人の再誕たる聖人と共に、永久の繁栄を約束されています。皆様方も、いわれなき誹謗中傷に負けぬように、そんなときは、かの人、グリゴーリィ・イフィーマヴィチュ・ラスプーチンの精神で、闘ってほしいと思います・・・」

牧師が紹介した、奇跡の力を持つ聖人の名前を聞いて、鈴子は「ラスプーチン！」と、立ち上がって、叫びそうなになった。彼女が思い留まったのは、話の終盤から北爪が、彼女を睨み付けていたからだ。彼は、騒ぎを起こすなと、諌めているようだった。

礼拝は、牧師の話が終わると、ロシア語で讃美歌の合唱が行われた。鈴子は、ロシア語の歌詞『ヌェィィ』『チュァ』の調音が、礼拝堂に木霊して鳴響くと、瞑想状態に近い感覚を覚えた。彼女の周囲にいた、黒色のロザリオを付けた信者は、讃美歌に合わせて、体を左右に揺らしていた。建物も揺れていたのは、彼女の錯覚かもしれないが、不思議な現象にも関わらず、畏怖の念はなかった。

「なんでだろう・・・私、疲れてるのかな？・・・」

讃美歌が続く中、信者たちで結成された舞踊団が登場し、牧師たちと信者たちの間で、足を踏み鳴らして踊りだした。最初は、タン、

タン、タタンと、歌に合わせていたが、ダン、ダン、ドン、ドン、ドタン、ドタンと、踏み鳴らす音が大きくなり、ドドン、ガン、タダダタドドガガガ。讃美歌の歌声を掻き消すように、頭を振り乱して、もう踊りとも呼べない、ただただ騒音を奏でるが如く、演者たちは、不旋律に暴れ回っていた。

鈴子は、鼓膜を刺激する轟音に、耳を塞ごうかと思ったが、信者たちの恍惚の表情を見て、それを我慢した。彼女は、心の怒号を抑え込むように、奥歯を食い縛り耐えていたが、一瞬の油断で全身の筋肉が弛緩して、轟音のうねりに、喉の奥の方を鷲掴みにされた。心臓の上、肺の上の方、鎖骨の裏側、胸腺の辺り、そこを刺激されるのは、こそばゆい。指と指の間に、綿毛を添えられた感じで、拳を握ることもできなかった。それは、刹那の出来事だったが、大きく足を踏み鳴らす音が、読経のような一定のリズムを刻んだ。それが宗教的な開眼だと、誰が諭したのなら、彼女は奇跡の一端に触れたと、歓喜したかもしれない。

ダン！ダン！ダン！ダン！ダダンッ！

彼らの舞踏は、なんの予兆も合図もなく、讃美歌の歌声とともに、一斉に止んだ。

体の芯を揺るがした歌は、礼拝堂に広がる静寂とともに、幽玄の彼方へ消え去った。

鈴子は、確かに感じるものがあった。

礼拝堂は、自然と湧き起った拍手喝采に、包まれており、涙する者もいた。

先ほどまでいた牧師たちは、礼拝堂から消えており、代わりに背広を着た男が、信者たちを見送るため、誘導を開始していた。礼拝が始まる前に、陰鬱とした表情を浮かべていた信者たちは、明るい笑顔となり、感謝の言葉を口にしながら、礼拝堂を出て行った。

鈴子は、人波に流されるように、礼拝堂を出ると、先ほど会場で誘導していた背広の男が、声をかけてきた。彼は、懺悔室に案内すると、信者の群れを掻き分けるように、彼女の手を引いた。信者た

ちが列をなす懺悔室は、礼拝堂の正面に左右対であったが、彼女の案内された懺悔室は、礼拝堂の裏手の薄暗い廊下の突き当たりにあった。部屋の前には、『修行の間』と書かれており、干藁(ほしわら)のような饐(す)えた臭いがした。彼女は、拷問室の入口のようだと、入室を拒むように立ち止まった。

「貴方は、クシーベロ牧師のところに、お連れするように、言われております」

背広の男は、三回十字を切ると、部屋の隅にある懺悔室を手で指示した。

鈴子は、恐る恐る懺悔室の戸を開けて、中を見渡した。懺悔室には、眩しい光が降り注ぎ、彼女は目を細めた。

「鈴子くん、遅かったじゃないか」

声の主は、北爪だった。

「教団の礼拝は、ずいぶんと刺激的だったようだな」

「讃美歌の意味も、ダンスの意味も、何一つ理解できなかったけれど、宗教儀式的な荘厳さを感じたわ」

「そうか、そうか、俺も教団のお遊戯には、チベット仏教の読経にも通じる、神秘的な力を感じるんだわ。奴らの教義はともかく、あの通過儀礼(イニシエーション)には、一目置いているんだぜ。あの通過儀礼は、異教徒の踏み絵でもあるんだわ・・・讃美歌は、西方教会で一種の信仰問答(カテキズム)、それを原始宗教的なダンスで、打ち消していくわけだ。異教徒からすれば、あれほどの恥辱に塗れた、通過儀礼はないぜ」

北爪は、カーテン越しに、膝を打って笑っていた。鈴子は、彼が異教徒なら、なぜ笑えるのかと首を捻った。

「さて、てめーの質問に答える前に、ルールを伝えておく。てめーの疑問に、全て答えてやるから、俺の聞くことにも、嘘を吐くんじゃねーぞ。てめーが嘘を吐いたと、俺が感じた場合は、そこで手仕舞いにする」

「・・・貴方の勘違いで、手仕舞いされても困るわ」

と、鈴子は、言ったものの、北爪は、何も答えなかった。

「そして、もう一つ、これが重要だ・・・教団には、てめーが異教徒だと、既に報告済みだ。だから、次回はない。次に会うときは、俺も教団の仕事をしないわけに、いかねーんだわ。ここでの話が済んだら、教団には、一歩も近付くんじゃねーぞ。てめーは、俺好みの体してるから、殺りたくねーのよ。せっかくなら、犯りたいわけよ。いいか、教団には、近付くんじゃねーぞ」

「わ、わかったわよ」

鈴子は、下品な口調で「教団に近づくな」と警告する北爪が、伊佐崎に似ていると思った。もちろん、あの唐変木は、下品な話し方をしないし、私の体が好みだとも認めない。

「芦木麻子は、てめーが教団に来たこと、本当に知らないんだな？」

「信者だと疑ってからは、教団の入信を勧誘されるのが嫌で、一度も会っていないわ・・・そんなことより、私の質問には、何でも答えてくれるのよね？」

鈴子は、北爪の声のする方に問質した。

「あぁ、何でも答えてやるよ。ただし、俺が答えられるのは、教団の教義に関することだけだ」

「それで構わないわ」

北爪は、鈴子の返事を確認すると、信者と牧師を仕切っていた、カーテンを開けて、暗闇から顔を覗かせた。彼の足元に降り注いだ光は、下から顔を照らしており、薄明かりだったが、彼の表情をはっきり確認できた。礼拝堂やエレベータで見た彼は、禍々しい形相をしていたが、向き合って座っている彼は、穏やかな表情を浮かべて、本物の牧師のようだ。

「自己紹介は、要らねーから、なんでも告白してみなよ」

北爪は、少しカールした髪に手を当て、後ろに撫で付けると、先ほどより低い声で言った。年齢は、伊佐崎より若く、鈴子の兄と同年代（三十代前半）だろう。彼は、強面のような話し方をしているが、鼻筋の通った、端正な顔立ちをしていた。彼女は「黙っていれば、女に不自由しないだろう」と、彼を値踏みしていた。彼女は、

乱暴な扱いを受けた男の牧師姿に、しばし見惚れてしまった。
「信者たちは、『七つの弾丸』の伝説を信じているのかしら？」
「『七つの弾丸』・・・あぁ、あの伝説は、奇跡の力を欲する信者が入信のとき、教団の力を誇示する物語として、牧師から聞かされている。歴史上の成功者は、教団の奇跡の力を持っていた、その力を与えたのが教団であり、奇跡の力を手にしたければ・・・まぁ、そうやって勧誘するんだよ。伝説を聞かされて、入信を決めた信者なら、伝説を信じていると、考えていいだろうな」
「この教団には、権力者になりたい人が、信者になっているの？」
「そんな欲深い人間ばかりが、宗教に縋って、集まるわけねーだろう。教団の教理指導書では、多くの奇跡の力が語られている。超能力に目覚めた聖人の話もあれば、一つのパンを分け合って餓死する兄弟の話、教訓めいた話が沢山あるんだよ。『七つの弾丸』は、権力志向の強い信者向けに、お布施集めの宣伝みたいなもんだ・・・伝説を信じている奴らは、奇跡の力によって、手っ取り早く贖罪を済ませて、早々に恩恵に預かりたい愚か者だよ」
北爪は、鈴子の顔を見て、少し意地悪く笑った。
「てめーも、奇跡の力を手にしたいのか？」
鈴子は、首を振って否定した。
「奇跡の力は、紛い物なの？　ラスプーチンや、ヒトラーの成功は、弾丸によるものではないの？」
「うん？　どういう意味なんだ。なんで、彼らがアレを持っている？」
北爪は、歴史上の人物の名前を聞いても、何のことか理解できなかった。鈴子が、初めに聞かされた『七つの弾丸』では、「残りの六発の弾丸を権力者が持ち帰った」とされ、人物を特定していなかった。彼女は、麻子から聞かされた話と、緒方が作った弾丸の系譜について、簡単に説明した。
「なるほど、確かに教団では、彼らもアレの所有者だと、謳い文句になっているかもな。ラスプーチンは、教団の開祖のような存在だ

から、有り得ねー話じゃない」
「緒方くんは、弾丸を『アレ』と呼んで、奇跡を象徴する物だと言ったわ。それが『器』を限定しないなら、彼らの信仰心が本物だと・・・弾丸が持つ者が、奇跡を起こすって意味よね？　なぜ、貴方たちは、弾丸を『アレ』と呼ぶの？」
「教団の正教要理は、四世紀の修道僧が記した、『スケンマタ』に基づいた修道制だと、礼拝のときに説明してたろ、てめーは、四世紀のエジプトに、鉄砲の弾があったと思うか？　『スケンマタ』書かれた枢要罪・・・あれだ、キリスト教の『七つの罪源』ってやつだが、弾丸は、罪源の比喩表現ってやつだよ。そんな目に見えない、神の御業だから『アレ』としか、言いようがねーんだわ」
「弾丸ではないの？」
「俺は、浦島太郎の実在を信じても、そいつの持ち帰った『玉手箱』が、本物だと信じられない。物語を妄信する者は、『玉手箱』が奇跡の力の似像であり、比喩表現だと理解できない。俺らは、太郎の持ち帰った物の本質が、奇跡の力だと、考えちまうんだな・・・俺は、こー見えて信心深い人間で、てめーみたいに、弾丸が本物だと、鵜呑みにできねーんだわ」
　北爪は、鈴子を見下すように言った。彼は、彼女を御伽噺を信じる少女だと、馬鹿にしていた。彼は、弾丸が似像であり、伝説の本質が、奇跡の力にあると言った。
「私は、理念と現実との不可分性と、理解しているだけよ。一応、心理学部の学生で、哲学書なら読み漁っているもの。弾丸も『玉手箱』も、「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的（ヘーゲル『断片』）」と、解釈しているのよ」
　と、鈴子は、薄ら笑いを浮かべる北爪に、思慮の浅さを指摘されて、恥かしくなった。彼の言うとおり、奇跡の力の真偽が重要で、弾丸の真偽は関係なかった。
「・・・アレは、キリスト教の神の言葉（ロゴス）のようなもので、本、アクセサリー、法衣など様々に形を変えて存在しているが、その本質は

変わらない。この教団では、『七つの弾丸』の伝説が誕生した、一八五〇年以降、アレが『弾丸』に形を変えたのは、間違いないだろう。だが、鉄砲の弾を追いかけているなら、てめーは、真実に辿り付かねーよ」

「真実？」

「伝説の裏側に潜む、真の姿（イデア）のことさ。なぜ、アレが人の命を奪う弾丸になった？　なぜ、権力者の手元に弾丸が必要なんだ？　自ら火を欲すれば、業火に焼かれ、他者に与（くみ）すれば、力を欲する。アレを持つ者が、奇跡を起こすんじゃねー、奇跡の力はアレのものだ。アレこそが浄配・聖母マリアで、それを持つ者は、浄配の夫ヨセフだ。緒方の『器』を限定しないとは、奇跡の代行者が、凡夫でも構わないなら、聖母に対する信仰心も本物だ、と皮肉を言ったのさ。アレを欲するため、凡夫になろうとするのは、愚か者だと忠告しているんだよ」

「なんで、遠回しに言わなくても、いいじゃないのよ」

「おいおい、てめーは、自分のことが、客観的に理解できてねーんだな。緒方は、『七つの弾丸』の話をしてきたから、てめーが奇跡の力を欲していると、誤解したわけだよ。奴は、教団の脱会を願っているから、教団の伝説に興味をもっている、てめーを煩わしく思ったんだよ・・・」

「か、勘違いだわ！　私は、奇跡の力なんて望んでないし、伝説に帰依するつもりもないわ」

鈴子は、心の何処かで、緒方から宗教勧誘を受けたら、面倒だと思っていた。しかし、脱会を望んでいる彼には、伝説に心奪われている彼女の方が、信者に近い存在に思えたのだろう。彼が「・・・芦木准教には秘密にしてほしい」と言ったのは、彼が異教徒であり、彼女たちを教団の伝説を信じる愚か者だと、軽蔑していたからだ。

「そーだろうな、デリカシーの無い女だが、アレを欲する愚か者には、見えねーよ。まぁ、俺や、緒方のように信仰心のある者には、神の御業を人殺しの道具に例えたり、信心もないのに奇跡を願う輩

は、憐みの対象なんだよ。この教団の神の御業は、紛い物で、『弾丸』に奇跡の力が、あるはずがない。教団には、奇跡の力を欲する愚か者と、凡夫を聖人の再誕と呼んで、信奉する愚か者しかいない。そんな愚者たちが、自分たちの信じる教義、奇跡の力を支えているのさ」

北爪は、相変わらず口角を上げて、笑っている。それは、鈴子を見下した態度だ。

「だけれど、現実に『奇跡の弾丸』で、殺人事件も起きているし、犯人の捜査だって進んでいないのよ？　弾丸の力が紛い物なら、そこまでして欲している理由は、なんなのかしら？　それに最後の『弾丸』が、教団の手にあるのなら・・・」

「やっぱり、てめーは、歌舞伎町の事件で、教団を嗅ぎ回っていたようだな・・・そうか、奴に頼まれて、潜入捜査をしてたんだな」

鈴子は、思わず口を手で塞いだ。

「てめーみたいな、小娘に頼らなくては、ならないほど、捜査が行き詰っているのか？」

「だ、誰のことを言っているの？」

「てめーの雇い主、警視庁捜査一課の伊佐崎三十郎のことだ！」

鈴子は、目の前にいる牧師姿の男に、心を読まれている気がした。彼女は、いつ彼の名前を呼んだのか、思い出そうと必死だった。エレベータの中で襲われたときは、彼の名前を呼んで、助けを求めただろうか。建物が揺れるほど、荒れ狂った礼拝の時間では、彼の名前を叫んでいたのだろうか。教団には、念のため身分を知られぬよう、学生証や携帯電話の類を持ち込まなかった。

「彼も関係ないわ・・・」

北爪は、顎に手を当てて黙ったまま、鈴子を見据えていた。その表情は、礼拝の始まる前に、最上階で見たイコンに描かれた男と、よく似ていた。イコンに描かれた人物は、馬泥棒の名前を言い当てた、青年期のラスプーチンだった。

第十六話　受託告知

教団幹部の部屋では、チェコフと五人の牧師が、歌舞伎町の事件で、田村の殺された理由を考えていた。彼らは、田村の死により、新たな弾丸の資格者が、誕生した可能性を探っていた。

「田村が殺された事件では、老人のところへ刑事が来て、我が教団と田村の関係を調べていた。老人は、我々との密約について、話さなかったようだが、刑事の一人が、教団の教義に興味を抱いており、事件現場で『浄配の契り』があったと、そう言ったらしい・・・その刑事の素性は、報告してきた老人の秘書に、調べを任せているのだが、問題なのは、なぜ、信者でもない現場の刑事が、我らの教義に精通しているのか？　もしも、裏切り者が、我々の中にいるのなら、今後も密約を守るべきだろうか」

「そもそも『強欲』は、老人が所有しており、それを田村に譲渡したはずだ。田村が『強欲』で殺されたのなら、まず疑うべきは、『強欲』の所有者だった老人だろう。老人が譲渡を拒んで、田村を撃ち殺したのではないか？　彼は、教団の教義に縋っておいて、我々教団の執行者と、一線を引いている恩知らずだ。老人が過去の清算に、『強欲』を解き放ったとすれば、合点のいく話だ」

「しかし、老人が田村を殺したのなら、『浄配の契り』を我々ではなく、警察に届けた理由は？　密約を知らぬ者にとって、それを手にしたとしても、『浄配の契り』の意味が解らないはずだ」

「いいや、我々が目にせずとも、『浄配の契り』が行われた、その事実だけは、こうして伝わってきた。田村が殺されて、その事実を知ってしまった今、密約を反故できない。老人が『強欲』を解き放ったのなら、我々には、老人の罪を暴くことも、報復することさえ出来ない・・・老人が残りの『乙女』を手にしているのなら、真に恐れなければならない、我らの敵である」

「老人は、奇跡の力を放棄したのではないのか？　『強欲』との婚

姻を放棄したなら、凡夫ヨセフは、新たな『乙女』との婚姻を望んでいるのか？」
牧師たちが『浄配の契り』と呼んでいるのは、弾丸を解き放った後に残される、弾丸の薬莢のことだ。彼らは、未使用の弾丸を『浄配』『乙女』などと呼び、奇跡の力を発揮している状態を『浄配』、奇跡の力を発動する前の状態を『乙女』と呼び、使い分けていた。
「田村を殺した犯人が、新たな『浄配』を欲しているのなら、見届け人である教団に、婚姻を届け出ぬわけにいくまい。ただの『乙女』を所有しただけでは、奇跡の力の誕生は、叶わないのだからな」
「我らに託された聖杯、それを全て老人の手に委ねず、慣例に従い『乙女』を教団で管理すべきだった・・・『浄配』に嫉妬し、夫ヨセフを忌むべき存在『乙女』。教団が、それを手放したとき、このような事態は、免れないと解っていたはずだ」
「なぜ、老人は『浄配』『乙女』ともに、手にしていたのですか？」
牧師たちの中で、最も若い牧師は、慣例を破って重婚を認めた、その経緯を知らされていなかった。彼は、牧師のみに与えられる教義指南書で、『浄配』を持つ夫ヨセフが、恩寵に背いたとき、『乙女』を持つ者が、真の奇跡の力を得ると、教えられていた。南方が『浄配』『乙女』を手にするのは、どういった経緯なのか、それを若い牧師は知らなかった。
「彼が教団から託された『浄配』は、そもそも『強欲』ではなかったのだ。彼に『強欲』を託したのは、我ら牧師の五人公会議メンバーだった男で、君の前任者だった牧師だ。『強欲』は、我らが同志が亡くなるとき、彼の遺言によって老人に託された・・・我らが同志だった男は、イコノスタシスの門を飾らず、自らの使命を忘れた堕天使だよ」
長老の牧師は、事件に使われた『強欲』が、牧師の裏切りにより、南方の手に渡ったと言った。そして、東方教会のイコノスタシスの門とは、イコンで覆われた壁のことで、マリアに受胎告知する、天使ガブリエルが画かれている。彼は、既に『浄配』との婚姻をすま

せた老人に、『乙女』を愛人に斡旋した外道、堕ちた天使だと愚弄した。
「我ら五人公会議にも裏切り者は、過去に存在したと言うことだ・・・今回の事件では、このメンバーの中に、そうした堕天使がいないことを願っている」
と、長老の牧師が言うと、若い牧師が目を逸らした。
「田村を殺したのが老人で、彼が望んでいるのが、過去の清算だとすれば、望みを叶えるのは容易い。ただ、田村を『強欲』で殺したのが、老人だと断定できず、教団に正式な譲渡も放棄も報告していない。老人が教団を裏切ったのなら、我々も教義に従って、行動するのが正しい選択だと思う」
牧師たち全員一致で、老人に罰を与えることに賛同したが、若い牧師は、あることに気付いた。
「しかし、老人が『強欲』を使用したのが、自分だと告白した場合、我々は教義を破ることになりませんか？」
「『浄配の契り』を履行した凡夫が、誰だか解らぬのなら、老人に遠慮する必要は、ないと考える。それに私は、老人の連れてきた男、クシーベロ牧師が『乙女』を所有していると、考えているのだ・・・彼のような野心家は、老人から『強欲』を奪って、後継者たる田村を殺し、その後釜に座ろうと、そう考えているのだ」
長老の一言に、そこにいた全員が動揺を隠せなかった。牧師たちの話を黙って聞いていた、チェコフは、胸に手を当てて、立ち上がった。
「ミナサンノ、ハナシハ、ワカリマシタ。ダケド、モンダイガ、アリマス」
「我々の手に、『乙女』がないことですね」
「ソウデス、ワレワレニハ、カミノユルシガ、アリマセン」
チェコフは、南方に罰を与えた者に、免罪符を与えられないと言った。
「我々は、神の御業を執行する者です。老人が『強欲』を手放して

おり、第三者による殺人なら、彼の教団を裏切った罪は、罷免すべきではありません。クシーベロ牧師・・・北爪が己が野心のため、老人から『浄配』『乙女』を盗み出し、教団の正当後継者である田村を殺害した。彼は、異教徒でありながら、教団の力を欲する愚か者ですが、彼の野心が本物ならば、我々にとって利用価値があります」

長老の牧師は、北爪の犯行を確信していた。そして、南方の手に弾丸がなければ、教団が罰を与えるのも、教義の実践に必要だと言った。

「ダレガ、カレニ、バツヲ、アタエルノデスカ？」

「老人の秘書は、教団の熱狂的な信者です」

長老の牧師は、散会のための祈りを捧げ始めた。

祈りの言葉の冒頭、教義指南書の最初ページにある、言葉を読み上げた。

「Ｓｉｅ ｓｏｌｌｔｅｎ ｉｍｍｅｒ ｄｉｅ Ｗａｈｒｈｅｉｔ ｖｅｒｓｔｅｃｋｅｎ・・・【真実は、常に秘めておくものだ・・・】」

彼らが教団幹部の部屋で、話し合いをしているとき、その中心人物の北爪は、鈴子と懺悔室で睨み合いをしていた。彼は、伊佐崎の名前を出すと、何も喋らずに、両肘で足に頬杖をついて、彼女を見つめていた。彼女は、読心術の秘密を暴こうと、彼の一挙手一投足に注目していた。静寂の中、お互いの手の内を探ろうと、必死だった。

「・・・わかった」

静寂を破ったのは、北爪だった。

「伊佐崎の考えているとおり、アレは一八五〇年以前、六個で三竦みになっていた時期もある。それは、キリスト教、イスラム教、仏教の三大宗教で、信仰発展のために結ばれた、不可侵な協約にあったと、俺は考えている」

「一八五〇年以前？」

「アレが弾丸なんて、野暮な物に置き換えられる前、世界各地で起きていた宗教戦争。ヨーロッパでは、民族間の戦争だけでなく、宗教改革後の一六世紀から、カトリックとプロテスタントで宗教戦争が勃発した。そんな中、宗教指導者が集まり、信仰の自由と共に、お互い『過去の罪を赦す』と、ある協約が秘密裏に結ばれている。協約は、宗教指導者の命と引き換えに、絶対に破れぬ誓いとなり、その協約を履行するための組織が、それぞれの宗教に組織された。その協約こそ、てめーらが追いかけている、『伝説の弾丸』の前身だ」

「宗教戦争は、宗教上の対立だけでなく、政治的利権も絡んでいたため、西ヨーロッパでは、政教分離が行われているわ」

「そのとおり。宗教上の協約は一八世紀、彼ら宗教指導者の手から、形を変えて政界へ・・・いいや、様々な世界での約束事に変質していった。『伝説の弾丸』と呼ばれるアレを手にした者、その信仰の拡大と、その所有者の罪を赦すことが、協約を履行する組織の絶対的な教義になった。教義の拡大を恐れた西ヨーロッパでは、逸早く政教分離が叫ばれることになっている。それでも、アレが三大宗教や大国にあったときは、馬鹿な使い方を考える奴もいなかった」

北爪は、相変わらず頬杖をしていたが、片方の手で鉄砲を形作った。そして、その手で作った鉄砲が、鈴子の胸に狙いを定めた。

「ここで、てめーを『伝説の弾丸』で撃ち殺しても、その協約を履行するため組織が動く・・・その罪は、問われない」

北爪は、そう言って笑うと、両手を挙げた。

「つまり、今回の事件では、そうした組織が捜査を妨害しているのね？」

鈴子は、言った。

「てめーの言うとおり、ラスプーチンやヒトラーが、弾丸を使ったとしたら、こーいうことだ。奴らは、自分の持っているアレが、そうした宗教指導者の密約に守られた、弾丸だと知っていたのだろう」

「それが鞭身派であり、トゥーレ教会であり、この教団なのね？」

「信仰の拡大に出遅れた、新興宗教やオカルト組織が、彼らの協約を模倣したのか、本物の協約を手に入れたのか。それは、俺には解らないが、少なくとも今回の事件は、彼らの密約によって、行われたと考えて間違いない」
「協約を履行する組織は、その協約を守ることで、何を得るの？」
「彼らの信仰の拡大と、新たなる指導者を得る」
北爪は、椅子に深く腰掛けると、懺悔室のカーテンの向こう側に消えた。
「ちょ、ちょっと待って、なんで六発しかないの？　『七つの弾丸』が、彼らの模倣した伝説だとしても、協約が三大宗教の持つ六発では、一発足りないじゃないの？」
鈴子は、カーテンの闇の奥に問いかけた。
「アレは、神の御業だ。七つの弾丸なんて、彼ら信奉者の外典に過ぎない」
「一八五〇年を境に、弾丸に姿を変えたのなら、そのとき追加されたのね」
「七つの罪源は六世紀後半、グレゴリウス一世により、『嫉妬』が追加されている・・・『嫉妬』の悪魔、旧約聖書の悪魔レヴィアタン。レヴィアタンは本来、雄雌のつがいだったが、あまりに危険な生き物だったため、繁殖しないように雄が殺され、残った雌は、不死身となった。ユダヤ教では、アダムを女の姿で、イブを男の姿で誘惑した両性具有のドラゴン・・・よく調べてみることだ」
「最後に、もう一つ教えてください！　麻子さんは、弾丸が二発ずつ所有されたのが、二発ずつ使われたからで、意味がないと言っていたわ。今の話が本当ならば、二発ずつ所有されるべきで、彼女が嘘を吐いているの？」
「・・・キリスト教徒は、姦淫するなかれだ」
北爪は、手元のハンドベルをけたたましく鳴らすと、部屋の扉を開けた、先ほどの背広の男が、鈴子に懺悔室から出るように言った。
「姦淫するなかれ・・・浮気をするなってこと？　答えになってい

ないわ」
鈴子は、懺悔室に向かって叫んだが、北爪は、その声に答えなかった。
鈴子は、背広の男にエスコートされて、教団ビルの入口まで来ると、チェコフ牧師が待ち構えていた。彼は、背広の男から、彼女の手を取ると、手荒なエスコートを叱責した。
「スミマセン、ゴカイガ、アッタミタイデス」
「誤解ですか・・・」
「スズコ、アナタニ、オネガイガアリマス」
教団は、鈴子が異教徒だと、知っているはずなのに、チェコフの眼差しは、今朝ほどと変わらなかった。
「ココノ、ボクシタチハ、キョウギヲ、リカイシテイマセン。アナタノ、ミチビキテ、アシキハ、タダシイ。ワタシハ、アナタノ、ミカタデス」
「は、はい、確かに、伝えます」
鈴子は、足早に駅に向かうと、電車の中で、今日の出来事を振り返った。クシーベロ牧師と呼ばれる異教徒の牧師は、不思議な力で鈴子の心を読んでいた。彼は、教団の奇跡の力が紛い物で、密約を守るために組織された集団がいると、教えてくれた。それが『新宿の救いの手』だと、断言をしなかった。そして、帰り際に声をかけてきたチェコフ牧師は、教団で特別な位を持つ牧師のはずだ。彼は、自分が味方だと言ったが、その意味が解らなかった。
最寄駅に着く頃には、辺りは暗くなっていた。今朝は、教団の秘密を暴いてやろうと、意気込んでいたのに、一日が終わってみれば、後悔の念しかなかった。街灯が点いた道の物陰には、教団関係者が潜んでるようで、気味悪く怖かった。自宅アパートが見えてくると、ホッとして涙が出そうになった。
「こんな時間まで、携帯も持たずに、何処に出かけていたのかね？」
アパートの玄関の前には、見覚えのあるオジサンが、ハンカチで汗を拭いながら、鈴子の帰宅を待っていた。彼は、いつでも彼女を

心配してくれるのが、唯一好感が持てるところだ。
鈴子は、伊佐崎に抱き着きたい衝動を抑えきれなかった。

第十七話　雲海の果て

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

伊佐崎は、謝るだけの鈴子を抱きしめて慰めたが、彼女が何を詫びているのか、見当がつかなかった。ただ、いつも違う彼女の服装を見て、詫びねばならぬ場所に出向いたのなら、それが事件に関係した場所だと思った。彼は、先手を打って頭を下げる彼女に、鞭を振るうような真似はしなかった。

しばらくすると、鈴子は、伊佐崎に待つように伝えて、部屋に戻って荷物を持ってくると言った。彼女は、人混みを縫うように歩いた街中や駅前で、汗を拭うことさえしなかったが、自分の安否を心配してくれた彼に、襟元が濡れたまま、抱き着いたことを恥かしいと思った。

鈴子は、熱気がこもる部屋で、ラップトップを手早くバック詰めると、タンスから下着を取り出して、スカートを脱がずに履き替えた。彼女は、上着を脱いでTシャツに着替えると、無香料の制汗スプレーで体臭を消した。部屋を出るとき、玄関先に置いて行った携帯電話を持つと、不思議な安心感を取り戻せた。玄関扉を開ける前に、頬を軽く叩いて「うん、いつもどおりね」と、平常心に戻るように、自分に言い聞かせて扉を開けた。

「今夜は、何処に連れて行ってくれるのかしら？」

鈴子は、明るい声で言った。

「そうだな・・・鈴子さんが話があるのなら、駅前の喫茶店にでも行こう」

伊佐崎は、連絡が付かない鈴子の身を案じて駆け付けたが、彼女を何処かに連れ出そうと、考えていなかった。だが、彼女の動揺する姿を見て、事件に関わることで、何かを知ってしまったのなら、ここで立ち話で済ませるわけにもいかなかった。

「伊佐崎さん、車で来ているの？」

「あぁ、車で来ているが・・・あの車だからね。君を乗せて、ちゃんと走ってくれるか、解らないよ」
伊佐崎の愛車は、一九八〇年製の名車アストンマーティン・ラゴンダ。ロングノーズに低い車高は、販売当時、近未来的なデザインと言われたが、三〇年以上が過ぎて、その頃の先進性も失われており、今では立派な旧車扱いだ。イギリスの大物スパイが愛用していたため、今でも世界的な人気車種だが、国内での評価は、あまりパッとしない。それに彼の愛車は、いわく付きだ。
道楽者で女好きだった彼の父親が、乗り回していた車は、父親が亡くなる日に、遺品として伊佐崎の持ち物となった。彼の整備が悪いのか、母親の呪いなのか、助手席に女性を乗せると、エンジンが回らない。以前、鈴子を家に送るために、車を出したときも、全くエンジンが回らなかった。これが、母親だと何処まで運転しても快調だから、始末に負えない。
「あの車でしょう・・・うん、私に任せてよ」
「何か名案があるのかい？」
アパートに隣接する駐車場の一番奥、薄暗がりに伊佐崎のラゴンダは、ひっそりと息を殺していた。そう表現するのに相応しいほど、停車時のラゴンダは大人しくて、手入れの行き届いた車体は、静かな貴婦人のようだ。だが、五三四〇ＣＣのエンジンが回れば、Ｖ８の咆哮とともに、英国女王の騎士が如く振る舞う。
「伊佐崎さん、車の鍵を貸して」
鈴子は、声をひそめると、伊佐崎からカギを受け取って、こっそりと運転席に乗り込んだ。彼女がイグニッションスイッチを回すと、ラゴンダは軽快なエンジン音を鳴らした。
「驚いたな・・・いや、当たり前なんだけど」
「ねぇ、このまま私の知っている店に行きましょう。チョコデニッシュが、美味しい店があるのよ」
「構わないが、君の運転で行くのかい？」
「うーん、そうね、彼女が許してくれるのなら、助手席に移っても

いいわ」
　鈴子は、ラゴンダの機嫌を損なわぬように、慎重に伊佐崎と運転を変わった。彼女は、助手席のシートを撫でると、「小娘相手に、本気を出さないでね」と言った。二人を乗せたラゴンダは、いつもより快調な足回りで、中野にある彼女行き付けのファミレスに向かった。
「さて、そろそろ訳を聞かせてもらっても、良いと思うのだが」
　伊佐崎は、運転に集中しながらも、彼女の話を聞く準備を整えた。走っている車の中は、二人だけの空間で、彼の一言で懺悔室にもなる。彼女は、今日二度目の罪の告白をしなければ、ならないと思うと、急に気が重くなった。
「じつは今日、『新宿の救いの手』の礼拝に参加したのよ。昨日の夜、事件には関わらないと、約束したばかりなのに・・・ごめんなさい」
　鈴子は、頭を下げると上目使いに、伊佐崎の表情を見つめた。彼は、一瞥もくれることなく、真直ぐ前を見たまま、大きなため息を吐いた。
「だいたい、そんなことじゃないかと、思っていたけれど。鈴子さんは、やっぱり事件の捜査が、どれほど危険か解っていない」
「・・・解ってますよ」
「相手は、銃を持った殺人者なのだよ」
「だけれど、もう残りの弾丸を使うことは、ないでしょう？」
　鈴子は、当たり前の顔をして言うので、伊佐崎は「そう願いたいね」と、調子を合わせた。彼女の言うとおり、権力者になるには、犯人が最後の一発を使うはずがない。ただ、それは『伝説の弾丸』を使わないだけで、その銃に込められた別の弾丸が、彼女の命を奪う可能性はゼロではない。
「それに私は、伝説の真偽について調べていて、別に事件のことなんて・・・ううん、そんなことないわね。じつは、麻子さんのことで、どうしても確かめたいことがあったのよ」

「麻子さんが、どうかしたのかい？」
「麻子さんには、私たちに嘘を吐いてまで、隠したいことがあるみたい。私は、彼女が教団の信者ではないかと、疑っているのよ。けれど、本当は、彼女を疑いたくないから、自力で解決したくて」
「それで、教団に単身で乗り込んだのかね？　君らしい行動力だが、褒められたものではないね。しかし、どうして彼女を疑ったのかね」
「じつは、麻子さんを信用するなと、警告する電話があったのよ・・・」
「警告？」
「『七つの弾丸』の伝説は、物語に興味を惹かれた人を勧誘するため、教団で利用されているの。麻子さんは、私に伝説を聞かせて、教団に勧誘する気だと言われたわ」
「君は、その人物の警告を信じたのかね。その警告をした人物とは、いったい誰なんだい？」
「電話は、非通知だったので、誰だか見当もつかないわ。けれど、教団の牧師・・・牧師と言っても、偽牧師なんだけれど、彼も同じことを言っていたわ」
「なるほど、素性を隠した人物や、教団の偽牧師の警告を信じたのか」
「よく解らないけど、少なくとも彼女は、私たちに隠し事があるのは、事実だと思うわ。彼女は、事件現場から『強欲』の薬莢を探し出したけど、あれが発見されなければ、事件が『伝説の弾丸』で行われたと、私たちが確信しなかったのは確かよ」
　鈴子の言うとおり、伊佐崎も薬莢を麻子が発見したことに、疑問を持っていた。彼女は、初めて来た歌舞伎町で、事件に使われた『強欲』の薬莢を手にしたが、偶然にしては出来過ぎていた。回転式銃は、オートマチックと違って、弾丸を発射しても、薬莢をリジェクトしない。薬莢には、犯人の意図的なメッセージがある。
　彼女は道中、電話の男からの忠告や、『新宿の救いの手』での出来事を説明し、クシーベロ牧師という男が、ラスプーチンのような

読心術を使ったと、興奮気味に語った。
「なるほど、権力を求める人間にとっては、『七つの弾丸』の伝説は魅力的だろうね。ただ、それは権力を求める人間であって、君や私のような人間に、果たして効果的だろうか。電話の男は、君に教団に近づくことを警告し、同時に麻子さんに近づくことも警告した。君は、電話の男の思惑通り、麻子さんを疑って、彼女を遠ざけてしまった」
「彼は、善意の第三者なのかしら？」
「いいや、彼の話を思い出してごらん」
「そうね、電話の男は、自分こそ弾丸の持ち主に相応しいと、言っていたわ」
「彼が伝説の信奉者ならば、君はライバルってことだ。その彼が、麻子さんに近付くなと、警告した理由は、彼女が残りの弾丸の在処を知っている・・・事件の犯人とは、まだ言えないが、少なくとも、彼女が『嫉妬』に近付く鍵になっている」
「まさか！」
「犯人の身長は、弾丸の軌跡から考えれば、一五〇～一五五センチ。目撃証言では、男か女か解らなかった。私は、『強欲』の薬莢を見つけ出した彼女も、容疑者の一人だと考えている」
「そんなこと、よく言えるわね？　麻子さんに、どんな権力欲があると思っているの？」
　鈴子は、ソビエト軍に『憤怒』『色欲』の弾丸を差し出した、ヒトラーの話を聞いたとき、麻子の犯行を疑わなかったと言えば、それは嘘だった。それでも彼女は、麻子を信じたいから、教団まで忍び込んだのだ。彼女は、自分が秘めていたことを、伊佐崎が口に出してしまったことに、酷い憤りを感じた。
「弾丸に約束されているのは、罪を赦されることだ。彼女の贖罪が解れば、この事件も解決するかもしれない」
「弾丸は、人を撃たなくても、罪が罷免されるのよ！　麻子さんが、人を殺す理由なんて、あるはずがないじゃない！」

と、鈴子は、伊佐崎を怒鳴りつけた。彼女は、声を張り上げて否定しなければ、彼の言葉を信じて、麻子を殺人者だと、疑ってしまう気がした。狭い車内は、緊迫した空気に包まれた。

「そうだね、彼女が人を殺す理由はないね、君の言うとおりだ」

伊佐崎は、自分の言葉を否定したが、奇跡の力の発動条件が「人として最も重い罪源に、神の赦しを得る」と、南方の話を思い出していた。彼は、奇跡の力を得られるのが、殺人者だと考えていた。だが、麻子の無実を信じる鈴子には、まだ伝えるべきではないと判断した。

「そうよ、麻子さんが人殺しのはずがないわ」

伊佐崎が、麻子の犯行を疑えば、無実を願う鈴子が、無茶な行動をとるからだ。彼女は、半年前の事件で、親友の無実を証明するため、自ら命を盾に行動した前科者だ。

ラゴンダが目的地に着くと、鈴子は「先に行って」と、誰かに電話をかけていた。伊佐崎は、彼女の電話の相手が気になったが、笑顔を交えて話しているので、麻子や教団関係者ではなさそうだ。

ファミレスでは、窓から駐車場を照らす、低圧ナトリウムランプの明かりが見える、入り口付近の席に座った。窓からオレンジ色の明かりが差し込む席は、アメリカのドライブインのような雰囲気で、鈴子のお気に入りの場所だ。ディナータイムでは、食べ放題サービスが期待できない反面、人も少なく落ち着いた食事ができる。彼女は、先日食べ損ねたチョコデニッシュと、コーヒーを注文した。

「君のことだから、もう事件を忘れることが、出来ないのではないかね？」

「私は、とっくの昔から、事件に巻き込まれていた気がするのよ。あの日、伊佐崎さんから都市伝説を聞いたとき、事件は始まっていた・・・そんな気がするわ」

「確かに、君を事件に巻き込んだのは、私だったかもしれないね」

「これは、私の事件かもしれないと、考えているのよ。私が、伊佐崎さんを巻き込んでしまった。この事件の始まりは、私が論文の手

伝いを頼んだのが、始まりだと思うのよ」
　鈴子は、運ばれてきたチョコデニッシュが、一口サイズではなかったので、少し不満だった。チョコレートソースの口溶けや、パリッとしたパイ生地は、いつもどおりだが、飛び出すソースや、崩れたパイ生地の処理が手間だった。伊佐崎の前で、口からパイ生地を零すのも、子供ぽくって嫌だった。
「教団の話だが、詳しく聞いてもいいかい？」
　伊佐崎は、チョコデニッシュを急いで片付けようと、頬張っている鈴子に言った。彼女は、頷いて口の中に残っていた、パイ生地をコーヒーで流し込んだ。
「君に襲い掛かった異教徒の牧師は、君に「どこの組織の人間だ？」と、聞いてきたのなら、彼自身も何らかの組織に属した人間で、一人で行動しているわけではない。たぶん、彼の言っている『芦木』は、芦木麻子ではなく、父親の芦木隆文警視正のことだろう・・・つまり、芦木警視正の名前を出した君は、警視庁公安部の捜査員か、公安部に対抗する組織の人間だと、彼が勘違いした」
「あっ、確かにそうだわ。最初に声をかけてきた、チェコフ牧師に「導き手は芦木です」って、麻子さんの名前を出さなかった！　それなら麻子さんは、信者ではなかったのね！」
　鈴子は、大きな声で歓喜したので、伊佐崎は唇に人差し指を当てて、興奮しないように言った。
「麻子さんが信者だと考えるのは、君の思い違いかもしれないと、その程度のことだ。彼女が信者ではないとは、まだ限らない・・・それに、彼女の祖父は、ある政治家を教団に勧誘した導き手であり、チェコフ牧師や、異教徒の牧師が『芦木』という名前に、反応しているのだから、彼女が信者である可能性は高いと思うがね」
「うん、解っているわよ。けれど、彼らの『芦木』が、警視庁のお父さんを指すなら、彼らが教団の信者だと、疑うのが矛盾するじゃない？」
「どういう意味かね？」

「異教徒の牧師が慌てた理由は、警視庁公安部が教団を捜査していると、そのことを教団に知られたくないから、私がチェコフ牧師に、芦木・・・芦木隆文の名前を出したことに、慌てたわけよね？　もしも芦木隆文が信者だったら、そんなことで慌てるかしら？」
鈴子は、上手く表現できなかったが、芦木と言う名前を聞いた、異教徒の牧師の慌てた様子は、教団の関係者に、芦木の名前を知られるのを恐れていた。芦木親子が信者ならば、異教徒の牧師が、私を襲ったのは、矛盾していると思った。
「なるほど、君の言うとおりだ。教団の信者ならば、君が芦木警視正の名前を出しても、そんなことは、無視すれば良い話だ。教団の偽牧師・・・クシーベロ牧師は、君が教団の関係者だと思ったなら、君を襲ったのは、矛盾した行動だね」
伊佐崎は、鈴子の本質を見抜いた言葉に、感嘆するとともに、そこまで理解できるのに、普段は、他人から騙され易い性格なのが、不思議だった。
「けれど、チェコフ牧師は、芦木の味方だとも言ったわ。つまり、教団は、警視庁公安部の味方だと言ったのよね。それだと、彼らは、信者ってことになるのかしら？」
鈴子は、再び首を捻ったまま、考え込んでいた。
「偽牧師の使った、超能力のことだけれど・・・」
伊佐崎は、鈴子の心を読んで、彼女の名前や、彼のことを言い当てた、トリックを解きはじめた。
「君の名前を言い当てたのは、確かに読心術を使ったのかもしれないが、君の背後にいる私の存在を言い当てたのは、やり過ぎだったのではないかな」
「伊佐崎さんと、私の関係を言い当てたことが、やり過ぎだった？」
「そうさ、君は、偽牧師のことを異能者だと、誤解したみたいだけれど、それは、彼の本意ではなかったと思う。彼は、超能力の正体を隠す気が、なかったかもしれないね。私は、現場を見ていないから、君の話を聞いても、別に不思議だと思わなかった。彼は、携帯

電話や通信機で、外にいる仲間と会話していたのさ」
　伊佐崎は、ポケットから警察無線を取り出すと、イヤホンを耳に当てた。彼は、鈴子を襲ったエレベータの中で、クシーベロ牧師がしたポーズと同じ、片手を耳に当てて、空中に頬杖を付いた。
「君は、薄暗いエレベーターの中で、イヤホンコードを見失っただけだろう」
「けれど、懺悔室で見たときは、イヤホンをしてなかった・・・少なくとも、カーテンを超えたときには、してなかったわよ」
　と、鈴子は否定したが、伊佐崎の存在を言い当てたとき、彼の顔を見ていたのか、あまり自信がなかった。警察無線のイヤホンは、小さく肌色で目立たないので、見落としていた可能性はある。
「それに、偽牧師は、君の持ち物を検査したとき、下顎骨から耳の裏も念入りに調べたね。彼は、自分と同じタイプの通信機を、君が持っている疑ったのだろう。もしかすると、彼の所属する組織は、国家規模の組織と言うことだ」
「下顎骨に何があるの？」
「警察には、最新のスパイ道具の勉強会があるのだが、そこで東欧のスパイが使っている、皮下組織に埋め込む骨振動通信機があった・・・イヤホンがなかったのなら、彼は、下顎骨に骨振動通信機を仕込んでいたのだろう」
　伊佐崎は、クシーベロ牧師が骨振動通信機という、最新スパイ道具を使っていると断定した。彼の言った「警察の勉強会」とは、隆文の行っている研修会だ。彼が、口内に毒薬が仕込まれていないか、骨振動通信機を持っていないか、それらを疑う理由は、彼が警察組織の人間か、警察組織の人間だったからだ。
「体に通信機を埋め込んでいる？　充電はどうするの？」
「携帯電話のような非接触型の充電器、振動充電なんてものもある、彼が警察関係者ならば・・・そうか！　偽牧師の裏にいる奴は、ブラック・スネークだな。奴なら、私たちの行動に詳しいはずだ」
「ブラック・スネーク？」

「彼が新人刑事だったとき、その暴力的な摘発行為を恐れて、新宿のヤクザ者が呼んだ、彼の通り名だよ。今でこそ、表立った行動を控え、その名前を呼ぶ者は、いなくなったがね・・・そんなことより、偽牧師の正体は、解らないけれど、彼が組んだ相手は、我々の敵ではないことは確かだ。偽牧師の話は、信用に値すると、考えていいだろう」

鈴子には、伊佐崎が勝手に納得しているのが、あまり面白くなかったが、無鉄砲な行動で迷惑をかけたばかりで、自分から問質すのは、控えることにした。

「これで、残りの弾丸を持つ者は、限られてくる・・・」

伊佐崎は、駐車場の暗がりから、男が二人の席を覗き込んでいることに気が付いた。まだ若い男は、二人を探るように、背伸びをしたと思うと、電柱の陰に身を隠したり、忙しそうに動き回っている。あの男が教団の間者なら、あまりにも間が抜けている。

「鈴子さん、誰かを呼び出したのかい？」

と、伊佐崎が言うと、鈴子は、男に向かって愛想良く手を振った。

「大学の緒方先輩で、麻子さんのゼミ生。それに、教団の元信者なのよ」

緒方は、鈴子に手を振りかえすと、二人の待つ席に走ってきた。彼は、神経質そうな視線で、伊佐崎を見つめると、彼女に「彼は何者？」と、小さな声で呟いた。彼女に呼び出されて、喜んでファミレスに来たが、見慣れない男といたので、彼女が教団関係者と一緒に、裏切り行為に罰しにきたと勘違いして、駐車場から様子を見ていたのだ。

「芦木准教が、教団の信者だって！　ぼ、僕は、そんなこと言ってないよ」

鈴子から話の顛末を聞かされた緒方は、麻子が信者ではないと、首を大きく横に振った。

「だって、先輩は、麻子さんには、教団を脱会していること、内緒にしてくれって・・・言いましたよね？」

「えーと、確かに言ったけれど、それは、君たちみたいに、教団の教義に興味を持つ人に、「僕は、教団の信仰にも、弾丸にも興味ありません」と言ったら、傷付けるじゃないか。芦木准教は、お爺さんの件もあるし、弾丸の行方について、命がけで探してるんだよ・・・僕が、手を引きたいなんて言ったら、悲しむに決まっている」

「異教徒の牧師が、言ったとおりなのね。先輩には、私たちも奇跡の力を欲する、愚か者に見えていたのね。先輩には、私が魔法使いの弟子に、見えていたわけね」

「僕は、君たちが愚か者だと思っていないよ。えーと、夢を追いかけるって、素敵なことじゃん」

緒方は、取繕おうと、落ち込んでいる鈴子を励ました。原因は、彼の勝手な思い込みにも関わらず、軽薄で厚顔無恥な男だ。そんな様子を黙ってみていた伊佐崎には、彼女が元信者の彼を呼び出した理由が、解らなかった。

「先輩、あの弾丸の系譜が見られるソフト、これでも呼び出せますか？」

鈴子は、自分のラップトップを緒方に差し出した。麻子の部屋で見たソフトは、オフラインの状態で起動していたが、ブラウザベースで開発しているのなら、本来はオンライン上で呼び出せるはずだ。彼女の考えが正しければ、元々のデータベースは、教団のクラウド上にあるはず。

緒方は、ネット経由で自宅サーバーから、ソフトを起動した。

「データベースが更新されたから、これが最新版だね。ハッキングをするのは、今回限りにしてくれよ」

緒方は、現職の刑事の前で、違法行為をしているのに、少し緊張していた。

「やっぱりだわ・・・伊佐崎さん、弾丸の持ち主が解ったわよ。弾丸の持ち主は、『正南会』総帥の南方義嗣、彼が田村を殺した犯人だわ」

鈴子は、麻子の見せてくれた弾丸の系譜が、麻子の祖父から先に、

伸びていないことが疑問だった。彼女は、弾丸を持ち去った政治結社の名前を知らないと、言っていた。教団データベースをハッキングしているのなら、政治結社『正南会』が弾丸の持ち主だと、弾丸の系譜に表示されていたはず。それを意図的に伏せたのは、やはり彼女に隠し事があるからだ。

「南方は、車椅子に乗っているので、弾丸の軌道を考えても、容疑者ではあるのだが・・・」

伊佐崎は、考え込んでしまった。

「あら？　先輩、この系譜には、四本の赤い線がありますよ」

「この赤線は、弾丸の系譜を表していて、古い物から彫金師の一発、怪僧ラスプーチンの二発、独裁者ヒトラーの二発、ケネディ大統領の一発、南方総帥の一発、その四本に集約しているんだ」

「ケネディ大統領の暗殺も弾丸が使用されたの？」

「いいや、本来は、ケネディ大統領以降も赤線が続くはずだけれど、イギリスのポップスターから、アメリカ大陸に渡った弾丸は、ケネディ大統領を最後に所在が掴めなかった。だから、ケネディ大統領の弾丸は、歴史上ロストした弾丸だね」

「麻子さんのお爺さんは、ケネディ大統領の暗殺で使用されたと・・・違うのね、麻子さんのお爺さんは、歴史上ロストした弾丸を探していたのよ！　そのことを麻子さんは、隠したかったんじゃないかしら？　日本にあった南方の一発の弾丸、二発揃えるには、ケネディ大統領が持っていた、もう一発の弾丸が必要だった。クシーベロ牧師は、弾丸が協約ならば、二発ずつ所有されるべきだと、そう言っていたわ」

鈴子は、パズルのピースが埋まったと、興奮して緒方の手を握った。これには、彼も喜んで応じた。若い彼らが、事件が解決したかのように、はしゃいでいたが、伊佐崎は、ますます考え込んでしまった。

「伊佐崎さん、何を考えているの？」

「この話が本当ならば、信者を殺された教団にとっては、南方の行

為は裏切りだ。しかし、弾丸による罪は、報復が許されないから、教団は、南方を罰することも、警察に通報することもできない」
「それが、彼らの教義だから、仕方ないのでは？」
緒方は、言った。
「『新宿の救いの手』と『正南会』は、表裏だと言っていた。彼らの組織に疑念を持たせ、宣撫工作をしている奴が、何処かにいるのではないのかね・・・そいつが犯人だとは、限らないけれど」
伊佐崎の疑問に、緒方が恐る恐る手を挙げた。
「異教徒の牧師は、色々な宗教に精通しており、両方の組織にも、出入りしていましたよ」
緒方の話を聞くと、伊佐崎は、ニヤリと笑った。
「彼は、バチカンのエクソシストかもしれないよ」

第十八話　林檎

南方の秘書をしている房江は、大学の政治研究会のメンバーで、学生運動にも参加していた。ただ、彼女が大学入学した九五年、学生運動は、既に左翼学生にとって闘争目的を失っており、その活動も反戦平和を訴える、デモ参加やビラ撒きくらいで、燃えカスのような存在だった。それでも彼女は、政治研究会の活動で、日本全国の革命同志との会合や、反戦集会に参加していると、世界を動かしている気になれた。彼女の過ごした学生生活は、七〇年安保闘争に挫折し、連合赤軍の起こした浅間山荘事件により終焉した、革命の灯とともにあった。

房江が『真理の道』に出会ったのは、彼女が卒業後の進路が決まらず、社会に対する不満が募っていたとき、反戦集会の運営の手伝いをしていた彼女は、政治研究会の卒業生から、政治家・南方の後援会だと紹介された。当時の南方は、総理候補に名前を連ねる大物政治家だったが、初当選以来の後援会『真理の道』や、支持母体『新宿の救いの手』という宗教組織、彼自身も反戦活動に熱心だった。彼女は、保守政党の大物政治家が、自分のような左翼学生の参加する、反戦集会に顔を出していることに、強く興味を惹かれた。彼女の青臭い正義感が、『新宿の救いの手』に向かうのは、それほど珍しいことではなかった。

房江は大学卒業後、地方銀行に就職できたものの、それまでのエリート意識の反動から、強い劣等感を持つようになった。彼女は、興味本位で入信した『新宿の救いの手』で、奉仕活動や布教活動のとき、ほかの信者にはない、高い志を持っていると感じていた。彼女は「教団には、弱い人間しかいない」と、信者たちを見下すことで、社会に対する不満を解消していた。彼女にとっては、教団での様々な活動が、欲求不満の捌け口になっていた。

「房江さん、あんまり他人を馬鹿にしない方がいいよ」

房江の心を見透かすように、話しかけてきた男は、新宿の街金融の元締めをしていた田村だった。彼は、教団でも数少ない支部長クラスの信者だ。教団には、チェコフ牧師と五人の牧師、それに次ぐ支部長クラスの信者がいた。

「房江さんは、自分が特別な人間だと、思っているでしょう？　房江さんは、学歴もあるし、仕事もある。教団に縋っている信者たちは、そんなものを持っていない。だから、自分が彼らより上部階層の人間だと、そう思っているでしょう？」

田村は、房江の顔を見る度に、そんなことを言った。彼女は、心の闇を見抜いたような言葉に、辱められると、自分が弱い人間だと気付かされた。彼の言葉に反発をすることさえ、恥かしい行為だと思うようになった頃、彼から南方の選挙スタッフとして、『真理の道』の仕事を依頼された。

「僕は、特別な人間ではないけれど、南方先生の奇跡の力は、本物だからね。房江さんが、特別な人間に興味があるのなら、彼の奇跡の力が、どんなものか観察してみるといいよ」

田村の一言がきっかけで、房江は、地方銀行を退職すると、翌日から南方の選挙スタッフとして、大勢の人間のまとめ役となった。選挙スタッフの仕事は、学生時代の経験を活かして、とても充実した時間を過ごせた。彼女は、南方の選挙だけでなく、教団関係者の選挙スタッフにもなった。彼女が立ち会った選挙では、候補者のほとんどが、選挙区でトップ当選を果たした。教団からの信頼は、エリート意識の強い彼女に、人生の大きな励みとなった。

房江は、南方の政界引退の年、政策秘書に格上げしてもらったが、敗戦処理のような秘書仕事は、野心的に彼女にとって、退屈で屈辱的な仕事だった。彼は、そんな彼女の気持ちを察しており、自分の後任となる政治家が現れれば、彼女を政策秘書に推薦すると、口癖のように言った。

南方の後援会『真理の道』は、彼の政界引退を以て『正南会』と看板を掛けかえて、財界人や政治家の政策勉強会の場となった。房

江は、政界引退した彼の秘書として、彼の後継者が現れることを願って、『正南会』で働いていた。そのとき、彼が教団から譲り受けた、奇跡の力『浄配』の存在を知った。

「私とマリア様は、教団から婚姻の許しを得られなかったが、私は、幼い頃からの信念に基づいて、我が国の政治腐敗と闘うために、彼女と添い遂げると決めた。私は、総裁候補と呼ばれながら、その地位を欲せずに、我が国の礎にならんと、平和であらんことを願ってきた。その結果が現状だとすれば、この国の平和は、私のマリア様の恩寵だ。そう考えると、我が国の国民は、私の子供たちだと、そう錯覚するのだよ。そんなこと、余生の無い老人の戯言だと、思っているのだろう？」

南方は、飲めない酒を口にすると、普段より饒舌（じょうぜつ）になった。房江は、老人が『浄配』を得たことで、教団の信者を総べる力、政界を総べる力、それらを手にしたと、考えているのだと思った。老人は、彼女にも『浄配』を見せてくれたが、そんな玩具に奇跡の力が宿っていると、本気で考えているのなら、老人も宗教に魅せられた、単なる操り人形だと、心の何処かで馬鹿にしていた。

「教団から婚姻を許されなかったのなら、どうして教団の方々は、貴方への支援を続けているのですか？　私がお世話をしているのも、教団の教義なのですよ」

「君が教団の教義に、準じている？　違うな・・・君は、それほど愚か者ではない。それに、私だって、教団を信じていない。私は、自分が成すべきことのため、彼らを利用していたのだ」

「貴方は、教団の奇跡の力を持っており、その力によって、ここまで成功を収めております」

「私の手にしているのは、彼らの妻であり、娘であり、人質だよ。私が『浄配』を握っている限り、彼らは、自らの教義に従うしかないのだ。それに、君は誤解している」

「誤解ですか？」

「私が育ったラオス・・・そして、ベトナム戦争を経験し、大陸に

おける領土的野心を持った大国の動静が、その矛先に我が国もあった。私が保守政党にあって、親中派と揶揄されながらも、その思いに去来するのは、東アジアの平和にあった。かの国は、信仰心の乏しい国となったが、それでも傍らに『浄配』がいることが、どんなに心強かったのか、君には解らんだろうね。彼ら大国の指導者は、信仰を持った人間に対する恐怖心があり、それが、どんなに大きいか、君には解らんだろうね」

南方は、車椅子を乗るようになってから、常に行動を共にする房江に、自らの心情を吐露していた。その言葉の意味は、理解することが難しかったが、革命戦士に憧れていた彼女に、闘争に身を投じた半生を語って、余暇を過ごしていることは解った。

「『浄配』を手にした権力者は、その力を己が野心のため利用した。マリアの夫でありながら、「汝姦淫するなかれ」の十戒を忘れ、告解による神の赦しに縋る。私は、この力を手に入れてから、ある誓いを立てた・・・解るかな？　今まで私は、男性として愛されることなく、『浄配』に童貞を捧げていたのだよ」

年寄りの性的欲望（リビドー）を聞かされるのは、房江にとって耐え難い屈辱だった。彼は、政治家として一流だが、男性的な魅力を感じさせなかった。だが、老人の嗅覚は、彼女が自分と同じ呪縛の中、その神聖を保っていると、感じ取っていたのだろうか。彼女は、手を振れることさえ、拒まれた老人の告白に、一度だけ応じてしまった。彼女は、女として成長したが、老人の持つ奇跡の力は、急速に衰えていくのを感じた。

房江と南方の関係は、以前と変わらなかったが、老人の関心事が『浄配』から離れ、後継者を探すようになった。老人の心変わりが、一夜の出来事に関係しているのなら、彼女の払った犠牲も報われた。老人の下には、教団から後継者候補が送り込まれてきたが、そんなときに彼女は、田村と再会することになった。

「南方先生の奇跡の力・・・君には、理解できたかな？」

「えぇ、私には、奇跡の力が理解できたわ」

「本当に？」
「南方の奇跡の力は、金と人を動かす力のことよ」
「僕は、金なら持っているよ」
田村は、ニヤけた笑顔で言った。
「貴方の金で、世界は動かせないわ」
「そうだね・・・けれど、教団を動かすための力・・・老人の持っている力が、もうすぐ僕の物になる。そうなったら、信者の君は、僕を愛してくれるのかな？」
房江は、田村の最後の一言が煩わしかった。彼女は、自己欺瞞を崩した男に、「愛してくれ」と言われて、断ることがなかった。男とは、いつまでも愛の言葉を口にせず、遠回りが好きな生き物だ。彼は、南方の奇跡の力『浄配』を手にしなければ、愛の告白もできない男だ。最初の出会いからは、もう何年も経っていたのに、そんな玩具を手にしなければ、愛の言葉も言えない可愛い男だ。
「私は、南方の後継者の政策秘書になるわ。それが、私の夢だったし、老人の世話をしていた理由だもの・・・そのために、色々と我慢してきたのよ？」
「僕が、老人の後継者だよ」
「私、何年も待っていたのよ？」
「うん。長いこと待たせちゃったね」
「誰のせいだと思っているの？」
田村の笑顔は、房江の心の鬱蒼とした闇を祓ってくれた。彼は、街金融の元締めで、世間的に見たら汚れた男だ。女の扱いも上手い。彼は、教団の支部長クラスだが、行動が野心的で、信仰心も疑わしい。断る理由なら、何個でも思いついたのに、彼の思うがままに、抱きしめられてしまった。
田村は、汚い男だったが、老人を許してしまった房江は、自分も汚れた女だと自覚があった。彼女が、大学を卒業したばかりの青臭い女だったら、彼を拒絶していただろう。彼女の過ごした数年間は、女として成熟するのに、何か役に立っていたのだろうか。世界を変

えることは、出来なかったかもしれないが、彼女自身を変えるに、十分な時間だったのかもしれない。
房江は、南方の目を盗んでは、若い男との密会を重ねて、新たな主従関係を深めていた。それは、老人の枯れゆく記憶を吸い上げ、希望に満ちた未来を開花させる、彼女の大切な時間だった。彼女は、老人の嫉妬に歪んだ視線に、後ろめたい気持ちにもなったが、車椅子の老人に何が出来るのかと、視線を振り切ることにした。それに彼女は、彼の地位が教団の借り物で、返済期限が迫っていると知っていた。
「房江さん、南方先生が『浄配』の所有権を手放すと、連絡をしてきた。彼は、教団での婚姻を届け出る前に、所有する『乙女』たちも、全て譲ってくれるそうだよ」
喜びを隠しきれない田村に、房江は「おめでとう・・・」と言ったが、『浄配』との禁欲的な生活に、彼も魅了されてしまうと、考えると素直な気分になれなかった。教団の教義では、色々な解釈があったが、『浄配』との婚姻が結ばれたとき、夫となった者の重婚が禁止されていた。多くの愛人を囲っていた、独裁者ヒトラーでさえ、『浄配の契り』を交さぬまで、エヴァ・ブラウンとの結婚を拒んだのだ。革命戦士に憧れていた彼女が、結婚という概念に縛られていると、彼は見抜けなかった。彼女は、長年の望みが叶えられる一方、僅かに芽生えた女の部分が摘み取られた。彼女は、老人に身を委ねてから、『浄配』に嫉妬できる身分にないと、心得ていたつもりだった。
「僕は今夜、南方先生から彼女たちを譲り受ける・・・君の主人から、全てを奪ってみせるよ」
「そう、本当に良かったわね」
「僕は、君も手に入れたいと思っているんだよ。『強欲』の所有者には、それが赦されるはずだ」
その日、房江は、南方との同行を断った。彼が『浄配』や『乙女』を手にして、喜ぶ顔など見たくなかったからだ。老人は、彼女の気

持ちを察して、田村との待ち合わせ場所、歌舞伎町交差点の手前から、車を降りると、車椅子で一人で向かった。老人を見送った彼女は、田村の喚起する姿を想像すると、涙が零れそうになった。そして、彼は、殺された。

「誰に？」

房江の望みは、何一つ叶えられることなく、呆気なく終焉した。田村を貫いた弾丸は、あれほど欲していた『強欲』だった。彼女は、何かの冗談みたいで、嗚咽に咽びながら、大声で笑ってしまった。彼女の相反する願いが、彼を死に追いやったのなら、自分を責めずにいられなかった。

南方は、房江に何も語らず、教団からの呼び出しにも、平然と応じていた。彼女は「彼が殺した？」と、老人を疑いながらも、そのことを追及しなかった。全ての罪が赦される『伝説の弾丸』。彼女は、当初、この一件に無関心を装っている、教団の牧師たちも、信用することが出来なかった。愛する人の命が奪われた彼女に、容疑者である老人は、以前と変わらぬ愛情を求めてきた。彼女が、老人の世話を続けたのは、復讐の機会を探っていたからだ。老人の手には、残りの『乙女』が握られており、その力を欲する者こそ、真犯人だと考えた。彼女は、老人の犯行を強く疑いながら、犯人が新たな『浄配』を欲する瞬間を待っていた。

事件から数日後、警視庁の捜査員を名乗る男は、南方に面会を求めると、老人に「犯人は、教団関係者だ」と忠告した。彼は、教団の意向に背いて見せしめに、田村を『強欲』の犠牲にしたと、事件の見立てを聞かせた。彼ら警察関係者が、教団の教義を知っていたことに驚き、老人が彼らの話に耳を傾けた事実は、彼女を大きく困惑させた。政権与党の幹事長を務めた老人は、教団以外の組織にも精通していた。国家権力を笠に着た警察は、我ら教団と相反する理念で、私たちを迫害してきたはずだ。老人は、私や教団を裏切っている。やはり犯人は、『乙女』を手放さなかった老人だと、確信した。

その夜、別の刑事が二人、南方を面会に訪れたが、彼らも教団の教義を探っていた。彼らの一人は、信者を騙っていたが、教団の教義の本質を理解せず、彼女の心を悪戯に弄んだ。国家権力の犬には、教団への不信感を言い当てられたが、物事の本質を理解できない男だ。教団は、老人の秘書だった彼女に、新たな使命を与えた、犯人は教団関係者ではなかった。それに教団は、田村と『強欲』の婚姻を認めており、彼が正当な後継者となることを望んでいた。彼女は、復讐と言う強い信念で、教団への不信感を抑圧した。

「同志よ、教団の仕事を頼みたい…」

房江は、牧師の『同志よ』との呼びかけに、懐かしい響きを感じた。彼らは、田村を殺した裏切り者を探していた。そして私たちの関係を知らずに、彼の復讐する機会を与えると、約束をしてくれた。彼女は、蔑むだけの教団から、犯人を捜す方法を教えられた。弾丸を装填できる回転式銃は、コルト社の製造した一八五一年製コルトＭ１８５１だと、教えてくれた。教団は、老人がＭ１８５１を所持していれば、田村を殺した張本人で、老人が『浄配の契り』を交しているのなら、裁きを下すことが出来るのは、老人の持っている『乙女』だけだと言った。

房江は、田村が殺された日、南方が長年秘密にしていた、『浄配』の在処を知らされた。そこに今でも『乙女』が眠っているのなら、銃があるのなら、老人は、後継者である田村に、彼女たちを譲渡しなかった。それは、彼への裏切りであり、老人に尽くしてきた、彼女への侮辱だ。

房江は、シャワーを浴びて身を清めると、教団より預かった、三六口径の弾丸を一発握りしめた。それは、『伝説の弾丸』と同口径で、Ｍ１８５１に装填できる、現存する数少ない実弾だ。南方は、この時間帯なら書斎に籠っており、『乙女』の寝室から離れている。彼女は、寝室に『乙女』と眠るＭ１８５１を見つけたとき、血が逆流するのを感じた。

教団からの選択肢は、二つだった。一つ目は、老人の持っている

『乙女』を使って、老人を射殺し、罪を問われることなく、全てを終わらせること。二つ目は、教団からの名も無い弾丸で、老人を射殺した後、『乙女』を使って全てを終わらせること。二つの選択肢は、どちらも同じ結果を齎すが、二つ目の選択肢では、『乙女』を使う相手が、彼女自身だと暗示していた。教団は、彼女が自殺することを予見し、そのための弾丸を用意していたのだ。

「生きて虜囚の辱めを受けず・・・戦後生まれの私には、辱められることなんて・・・」

房江は、田村の笑顔を思い出しながら、Ｍ１８５１に二発の弾丸を込めた。南方に抱かれた、その体に染みついた臭いは、彼と出会った頃の神聖を失っていた。彼が死んでからは、その匂いを消すことが出来なくなった。彼女は、自分を弄んだ二人の男とともに、舞台から降りるのも、この馬鹿げた話の終幕に相応しいと思った。

房江は、南方の書斎の扉を開くと、老人は、薄暗い室内から、庭園を眺めていた。

「・・・房江か？　そうか、君も来たのか・・・」

南方は、部屋に侵入した房江に振り返らず、項垂れていた。

「・・・私が後継者に、あの男を選んだのは、君が彼を愛していると、知っていたからだよ・・・『浄配』の譲渡は、君への贖罪のつもりだった・・・」

「田村は、喜んでいたのでしょうか？」

房江は、何も語らずに引金を引くことも、出来たはずなのに、そうしなかった。彼女は、死を悟った南方の言葉が、遺言だと理解した。

「・・・あぁ、彼は、喜んでいたよ・・・若い男に、嫉妬したなんて・・・思わないでおくれ・・・最後に、君と話せて良かった・・・君には、辛い思いばかりさせて、すまなかったね」

「私も話せて良かったわ・・・それに、銀行員の人生なんかより、ずっと楽しかったですよ」

カチッと、撃鉄を起こす音は、思ったよりも小さかった。

「・・・私たちと逝くつもりだね」
房江は、黙ったまま頷くと、書斎の扉を閉めた。
数分後、南方の車椅子に縋るように、房江は泣いていた。
血にまみれた手には、携帯電話が握られていた。房江は、M１８５１の撃鉄を指で下すと、彼女を弄んだ刑事に、別れの言葉を伝えようと思った。南方の素性を調べていた彼なら、何かを知っているかもしれない。
「もしもし、君は南方の秘書だね」
電話の男は、この惨状を知らなかった。
「南方は、死にました・・・私の目の前で、死んでしまいました」
「君が殺したのかね？」
電話の男は、房江の懺悔を聞くと、呆然とした様子で聞き返した。
「・・・私も死ぬつもりです」
「ち、ちょっと待ちたまえ！　君に南方を殺す理由は、ないはずだ！　本当に、君が殺したのかね！」
「私に南方を殺す理由がない？　えぇ、そうね、貴方みたいな男には、何年経っても解らないわね」
房江は、電話の向こうで慌てている、あのペテン師が、どんな顔をしているのか想像した。彼は、国家権力の犬だったが、少し変わり者だ。きっと、彼女の死でさえ、謎解きのピースにしか、考えないと思っていたのに、本気で慌てている。私のことを少しは、気にかけてくれていたのだろうか。
「『七つの弾丸』の伝説は、神様の物語かも知れないけれど、私には、関係のない話だわ・・・私を騙した男なら、貴方にも復讐が必要ね・・・私には、もう何もないと思っていたのに、貴方は、本当に変わり者だわ・・・でも、貴方なら、この事件の謎を解いてくれる、そんな気がするのよ」
房江は、携帯電話を切ろうとした。
「房江さん、よく聞くんだ・・・南方は、田村を殺した犯人じゃない」

「・・・南方は、彼を殺していない？」
「君の神様に誓ってもいい。田村は、弾丸の資格者でさえなかった。だから、南方も、君も死ぬ必要はないんだよ」
「そ、そんなはず・・・」
房江は、携帯電話を切ると、死んでしまった南方の膝に、顔を乗せて泣いていた。
死んでしまった南方は、慰めの言葉の代わりに、穏やかな顔を見せた。

第十九話　善悪を知る果実

伊佐崎は、電話を切ると、親指の爪を噛みながら、落ち着かない様子だった。

「どうしたの？」

鈴子と緒方は、父親ほど年の離れた男が、狼狽える姿に、ただならぬ気配を感じた。先ほどまでは、冗談交じりで、『七つの弾丸』の謎解きにも興じていたのに、今は話しかけることさえ、許されない雰囲気だ。電話の相手は、彼らの知らない女性の名前だったが、生死に関わる重要な内容だったのは、彼の会話だけでも伝わった。

「僕らのことは、構いませんから、急用ならば駆けつけてください！」

「あぁ、そうだな」

伊佐崎は、気が動転してしまい、緒方の言葉に急かされねば、現場に急行することさえ、気が回らなかった。それほど房江の告白は、彼にとって不測の事態だった。彼は、鈴子の手を取ると、緒方に自分の連絡先を渡して、二人で店を飛び出した。

残された緒方は、鈴子のラップトップを片手に、大きなスリップ音とともに、駐車場から走り去るラゴンダのテールランプを見送った。彼は、彼女の残り香を嗅ぎながら、「後は、若い二人にまかせましょう・・・だよな」と、悔し紛れを言った。

伊佐崎は、手早く警察無線のイヤホンを装着すると、本庁の田上を呼び出した。

「課長、西田山は戻っていますか？」

「あぁ、どうした伊佐崎？　彼なら別件の捜査で、渋谷にいるが・・・何かあったのか？」

「『正南会』の南方総帥が殺（ヤ）られました。被疑者は、彼の秘書だった山越房江で、『新宿の救いの手』の信者の女です。詳しい話は、現場で合流してから話します」

「よし、解った。西田山を現場に手配しよう」
田上は、伊佐崎の連絡を受けて、別件の捜査をしていた西田山たちに、世田谷九品仏『正南会』へ向かうように指示した。
伊佐崎は、一通りの用件を話し終えると、警察無線を外した。
「どういうことなのよ？　説明くらいしてよ・・・電話してきた相手は、誰なのよ？」
鈴子が、事件の話を聞かせろと、せがむのも無理がなかった。彼女は、『七つの伝説』を捜査していたが、歌舞伎町の事件の捜査状況は、聞かされていなかった。
「電話の相手は、南方総帥の秘書をしていた山越房江だ」
「嘘でしょう？　さっき田上課長に被疑者だって、報告していたじゃない？」
「当事者から、南方が死んだと連絡があった。それで、自分も死ぬと言った」
「南方を殺した理由は？」
「よく解らないが、私みたいな『男』に解らないと・・・それに彼女は、私が『正南会』で話したとき、わざわざ南方の目を盗んで、「犯人は教団関係者なのか」と尋ねてきた。そのとき、彼女と被害者の関係を直感し、私は、彼女に教団の信者を装って、無茶なことをしないように、釘を刺したつもりだったのだが・・・しかし、これは間違いだった」
「うーん、つまり房江は、田村の恋人で、恋人を殺された復讐を果たしたのね」
「彼女は、南方が犯人だと考えたのだろうが、先ほどの電話で、老人が犯人ではないと伝えた。それで自殺を思い留まってくれれば、良いのだがね」
「南方は、田村を殺した、犯人じゃないの？」
「少なくても、私の考えている犯人の条件には、当てはまらない」
伊佐崎は、信号機に捉まる度に、パトランプを積んでいなかったことを後悔した。鈴子は、「チョビ髭も向かっているわ」と、彼の

シフトレバーに置かれた手に、そっと手を添えた。彼女の冷たい手の感触に、彼の苛立つ気分は、幾分か和らいだ。
「もしも彼女が『嫉妬』を使って、南方を殺したのなら、そのとき警察はどうするの？」
鈴子は、『伝説の弾丸』を使用した犯罪なら、罪が罷免されるのではないかと、心配していた。
「まさか。私は、教団の事情を察してやるつもりなんて、最初（はなっ）からないよ」
「そうね、犯人が解っていて、逮捕しないなんて、有り得ないわよね」
「本当に彼女が、南方を殺しているのならね」
二人を乗せたラゴンダは、高円寺の手前から、環状七号線に出ると、一気に加速した。多少のスピード違反は、人命が掛っているのだから、止むを得なかった。伊佐崎は、ラゴンダのアクセルを踏み込むと、車内は体の芯に響くような、エグゾーストノートに包まれた。
鈴子は、伊佐崎の苛立ちを感じて、全身が震える気がした。助手席に深く座ると、彼の横顔を斜め後ろから覗き込んだ。
「なぜ、その女は、伊佐崎さんに、電話してきたのかしら？」
「それも、よく解らない。彼女は、私に対する復讐だと、言っていたが、思い当たる節がない」
「その女は、絶対に自殺なんて、しないと思いますよ。彼女は、伊佐崎に助けてほしいんです・・・人生最後に話た相手が、伊佐崎さんなんて、有り得ませんよ」
鈴子の声は、排気音に掻き消され、伊佐崎の耳に届かなかった。
「これは、女の直感ですけど、彼女は、絶対に自殺なんてしませんよ！」
運転に集中していた伊佐崎に、鈴子は叫ぶように言った。
「そう願いたいね。私の不注意で自殺されては、刑事を続けることが出来ない」

ラゴンダが『正南会』に到着すると、マンション前の道路が、世田谷署の所轄刑事たちに『ＫＥＥＰ　ＯＵＴ』の黄色いテープで、既に封鎖されていた。伊佐崎は、警察官の誘導に従って、マンション駐車場に、車を停めると、鈴子にも白い手袋を渡した。

「いいかい、君も私の後について来るんだ。これから事件が解決するまで、出来る限り一緒に行動しよう。こんなオジサンと過ごすのは、少し窮屈かもしれないが、君の安全のためだ」

二人は、車を降りると、封鎖線の警察官に敬礼し、現場に向かった。鈴子も彼の見よう見真似で、敬礼して封鎖線を突破した。エレベータの前には、西田山と部下の神谷が、待ち構えていた。

鈴子と初対面の神谷は、彼女に向かって敬礼したが、半年前の事件で煮え湯を飲まされた西田山は、彼女の顔を見ると、伊佐崎を呼び止めた。

「おい、アレは、長野県警の岩壁刑事の妹だろう？」

「あぁ彼女は、岩壁刑事だが、どうかしたのかね？」

「岩壁刑事？　いつの間に彼女が刑事になった」

「彼女は、犯人に命を狙われている可能性がある・・・何者からか警告を受けている」

伊佐崎が言うと、西田山は、鈴子の顔を見た。彼は口元の髭を撫でながら、素性も知れない、犯行動機さえ曖昧な犯人に、命を狙われるなんて、相変わらず厄介者だと思った。しかし、彼女の命が狙われているのなら、伊佐崎は、犯行動機を掴んでいるに、違いなかった。

「岩壁刑事だな・・・解った認めよう。その代りに、お前さんの知っていることは、全て話すことが条件だ」

「今度は、邪魔をさせない」

伊佐崎は、西田山の肩を叩くと、エレベータに乗ろうとしたが、神谷が「伊佐崎警部、ここで現状待機です」と手を広げて、行く手を阻んだ。

「どういうことだ？」

「今は、公安部の連中が、現場に入っています」
神谷は、悔しそうに言った。
「本庁の捜査一課が、管内の事件現場に入るのに、捜査の順番待ち？　君は、そんな捜査権の侵害が、許されると思っているのかね？」
「し、知りませんよ。でも、西田山警部も、待機命令に応じているのだから、伊佐崎警部も黙って従ってくださいよ」
「彼女は？　秘書の房江は、無事なんだろうね？」
伊佐崎は、西田山に言った。
「まだ、誰も現場から降りてこないが、死亡者は一名だ・・・今のところ、生きていると思う」
「今のところ？」
「現場の状況が降りてないのですよ。南方を殺した女が、現場に立て籠もっているなら、公安部の連中が、どんな行動に出るのか解らない。公安部の連中が犯人を狙撃したら、そのツケは、捜査一課に回されるのに・・・上層部は、何考えてるんだか、僕らにも教えてもいたいですよね」
二人の間に割って入った神谷は、憤りを隠さなかった。彼のような小物にも、捜査一課の面子が大事と見えて、普段なら近寄りもしない伊佐崎に、共感を求めてきた。彼の話が本当なら、事態は思っていたよりも、深刻さを増していた。
伊佐崎は、現場フロアで停まったまま、動かないエレベータを確認すると、事態がなお進行中だと考え、非常階段に向おうとした。
「駄目だ、駄目だ！　非常階段が施錠されていて、内側からしか解錠できない。アンタの事だから、同じことを考えていたのだろう？
四課の若い連中に、付近のマンション屋上を調べさせているから、狙撃なんてもんは、俺たちが止めてやるよ」
捜査四課の黒羽は、裾の長い黒のジャケットを羽織って、数人の捜査員を引き連れて現れた。彼は、被疑者の狙撃を止めてみせると、豪語すると、伊佐崎たちのところへ近付いてきた。
「しかし、事件現場に来てみたら、公安部と捜査一課が、睨み合い

とは、どんな冗談なんだよ」
黒羽は、笑いながら言った。
「君は、どちらの味方なんだね？」
「俺は、いつだって正義の味方さ」
神谷は、八咫烏の登場に、緊張した顔になっていた。西田山は、彼に鈴子をパトカーに案内させると、その場での待機を命じた。エレベータの前には、三人の刑事だけが残って、事態の進展を見守ることになった。
「しかし、烏の手際が良いのは、毎度のことだが、公安部の連中が一番乗りとは、どういうことかね？」
「我々は、渋谷の事件現場から直行したから、てっきり先着だと思ったが、既に公安部と所轄署で、封鎖線が貼られておったよ。世田谷署からは、五分で到着する距離だが、デスクワークの公安部が、ここに到着するには、首都高を使っても三、四〇分かかるだろう。アイツらより早く到着するのは、不可能なはずだ」
西田山は、マンション入り口に立っている、所轄の警察官を鼻で指した。
「奴らの事だから、この辺のマンションでも借り上げて、『正南会』の諜報活動でもしてたんだろう。予算を持っている部署は、俺たちみたいな泥仕事、地回りなんてしないだろう。所詮、奴らから見れば、四課も一課も子供の使い走りだ」
「公安部は、歌舞伎町の事件の犯人が、南方だと睨んでいたのかね？」
「いいや、奴らの本丸は『新宿の老人』だ。カルト集団『新宿の救いの手』の最大出資者、南方ということだ」
黒羽は、眼鏡のノッチ押し上げると、二人の耳元の顔を近づけた。
「公安部の狙いは、『新宿の救い手』掃討だ。奴らは、この事件を最大限に利用して、政界に圧力をかけるつもりだ・・・俺たち捜査課は、そろそろ手を組むぺぎじゃないのか？」
「我々は、犯人確保が出来れば、それで構わないのだよ」

黒羽の提案に、西田山は、素っ気なく答えた。
「伊佐崎さん、アンタはどうなんだ？」
「公安部に逆らうのなら、他の捜査課の協力は、得られないだろう・・・それでも、私は、君の話に乗っても構わないがね」
伊佐崎は、西田山の刺すような視線を睨み返した。
「アンタの言葉だけでは、俺も協力出来かねる。西田山さんを説得したら、どうなんだい？」
黒羽は、そう言うと、一歩下がった。
「お前は、烏の言っていることが、信じられるのか？」
「奴は汚い男だが、頭が切れることは確かだ。たぶん、この事件は、捜査一課の通常勤務で、解決できない。公安部にパイプを持っている、捜査四課の情報は、事件解決の鍵となるだろう。ここは、彼の提案に乗ってみるべきだ」
西田山は、伊佐崎の意見を聞くと、大きなため息を吐いた。
「事件が政治や宗教絡みの組織犯罪なら、政財界を巻き込んだ、大きな事件に発展するぞ。公安部から見れば、烏も、お前も独善的だから、真っ先に潰される。それに捜査二課に、そっぽを向かれたら、我々も烏と一緒に、共倒れになるんだ。そうなったら、公安部の暴走を止める者がいなくなる・・・この国の正義が、死に絶えることになる」
西田山は、政治犯罪や贈収賄を取り扱う警視庁捜査二課が、捜査協力を拒んだ場合、首謀者の逮捕起訴が難しくなり、その責任から捜査一課の権限が縮小されると、黒羽の提案に危惧していた。事件が政財界絡みになれば、その時点で捜査一課は、捜査から外されるかもしれない。公安部の御膝元、政財界を取締る捜査二課の横に座るのが、組織犯罪を取締る捜査四課となれば、その暴走を誰も止められなくなる。
「この状況を見てみろよ、烏の提案に乗らなくとも、既に我々は蚊帳の外だ。このまま現場にも、顔を出せないまま、事件が幕引きになっても構わないのかね？」

伊佐崎の言葉に、西田山も唇を噛締(かみし)めた。
「わかった・・・お前の言うことも一理ある。ただし、この件は、我々だけで進めて、田上捜査課長は、温存するぞ。それで良いのなら、烏の提案に乗ろうじゃないか」
西田山は、黒羽の顔を見ると、彼の嘲笑するような笑みに腹が立った。
「よし決まりだな。俺たちは、今からパートナーだと、忘れずに行動しようぜ」
黒羽は、手を伸ばすと、二人の意思と関係なく握手をした。
そのとき、現場フロアからエレベータ下りて、数人の捜査員と鑑識員が、三人の前に現れた。彼らの中には、伊佐崎の知った顔が二人いた。一人は、鑑識の相場拓哉(あいばたくや)。彼には、事件で何度も世話になっており、愛想の良い男だ。もう一人は、あまり会いたくない女だった。
「あら、伊佐崎警部ですね。先日は、どうもお世話になりました！」
と、女は頭を下げずに、伊佐崎を殴ろうとしたが、黒羽が間に入って、その手を止めた。
いきなり殴りかかった女は、公安特課の捜査員の前田明子だった。
「前田くん、ちょっと過激な挨拶では、ないのかね？」
「前田？　どなたかと、お間違えじゃないですか・・・私は、目黒川敦子(めぐろがわあつこ)です」
彼女は、三度目の名前を名乗ると、捜査員たちを引き連れて、マンションの外に出て行った。
鑑識の相場は、事態を呑み込めずに、伊佐崎に無言で詫びると、彼女の後を追った。
「不味いな・・・若い捜査員を現場から、逃がしたのなら、被疑者を殺す気かもしれない」
黒羽は、捜査四課の捜査員たちに、マンション周辺に狙撃班がいないか再度、捜索させた。
「・・・黒羽警部、磯川です」

黒羽の警察無線に、捜査員の一人から連絡が入った。
「現場マンションの向いの屋上ですが、狙撃班と遭遇しました・・・次の指示を下さい」
その言葉を聞いた、伊佐崎と西田山は、先ほど公安部の捜査員たちが乗ってきた、エレベータに飛び乗ると、現場フロアを向った。
「磯川！　そいつらに職質かけろ！」
「しょ、職質ですか？」
「そいつら全員、銃刀法違反および公文書偽造で、本庁まで連行れ！」
黒羽の無茶な指示に、動揺していると、
「磯川！　○暴の意地を見せろ！　男を見せろ！」
激を飛ばした。
エレベータでは、伊佐崎が扉に手を当てて、祈るような気持ちでいた。房江の命を奪うため、狙撃班が投入された事実は、彼を追い込んでいた。
「もしも、彼女が殺されたなら、私は、どうすれば良いのかね？」
「他人の行動の結果に、お前が責任を感じる必要はない」
伊佐崎の普段見せない弱音に、西田山が言った。
「房江さんが、私ではなく、お前さんに連絡してきたのなら、そこに彼女の想いを感じることだ。お前さんの人の弱みに付け込むような態度は、正直言って褒められたものではないが、我を通してまで、真実を追求する姿勢には、真直ぐに突き進む誠実さもある。彼女が復讐すると言ったのは、自分に吐いた嘘だろう」
「西田山、いつも気を遣わせて悪いな。必ず、彼女を救い出してみせるよ」
伊佐崎は、同僚刑事の慰めに気持ちを切り替えた。
「いいか、私が公安部の現場指揮官を抑えているから、お前さんは、現場に直接踏み込んで、房江さんを救出してやれ。彼女は、拳銃を持っているが、お前に使うことはないだろう」
西田山の言葉に、伊佐崎は頷いた。

エレベータの扉が開くと、玄関までの廊下に数人の捜査員が立っていたが、西田山が伊佐崎の盾となって玄関まで、半ば強引に進んだ。現場主任の刑事は、捜査一課のベテラン刑事の襲来に、何事かと書斎入口から、顔を出したので、その隙に伊佐崎は、殺害現場に滑り込んだ。不意を突かれた公安部の捜査員が、書斎入口に駆けつけると、伊佐崎は後ろ手に扉の鍵をかけた。

「房江さん？　私と一緒に警察に投降してください」

「い、伊佐崎さんね」

房江は、車椅子の陰に隠れていたが、伊佐崎の呼びかけに、窓に背を向けて立ち上がった。ベランダの窓には、弾痕による傷がなく、狙撃班の足止めに成功したようだ。それに書斎の外でも、二人のやり取りに注視しているようで、二人が対峙する書斎は、静まり返っていた。

「はじめて会ったとき、貴女に「犯人は教団関係者か」と聞かれた私は、すぐに否定してしまったが、正直に「解らない」と答えるべきだった。貴女は、私の不用意な一言で、疑いの目を南方総帥に向けてしまった」

「伊佐崎さんは、人の気持ちが解らない男だわ・・・貴方の言葉で、私が南方が犯人だと疑った？　いいえ、違うのよ刑事さん。私は、彼が殺された日から、南方の犯行を疑っていたわ」

房江は、血で汚れた銃を伊佐崎に向けた。

「私には、南方を殺したいと思う理由が、いくらでもあったのよ。南方は、私の純潔を奪い、教団の教義を裏切り、慰み者にしたわ」

「いいかい、君が誰に唆されたか知らないが、南方は、君のために田村に殺されても、構わないと思っていたはずだ。弾丸の資格者は、人殺しでなければ、その正当な所有者になれない・・・私は、田村の前科や周辺を洗ってみたが、彼が人殺しに加担した事実など、なかったことは確かだ」

「どういう意味？」

「南方は、君のために、君の愛した男を後継者に選んだ。田村は、

弾丸の資格者でもないのに、教団が後継者に選ぶはずがない。田村を後継者に選んだのは、弾丸の所有者だった南方だ。そう考えないと、田村が後継者に選ばれたことに、説明が付かないのだよ」
伊佐崎は、男女の機微に疎かったものの、田村のために追い込まれている房江が、愛し合っていたことくらい察しがついた。そして、南方も教団の教義に背いてまで、田村を後継者に選んだのなら、彼もまた房江を愛していると思った。
「そうだよ、南方も君を愛していた。南方は、田村を弾丸の資格者にするために、殺されるつもりで、弾丸を運んでいた。彼は、自分の死を以て、君の幸せを望んでいたのだよ」
伊佐崎は、言った。
房江は、車椅子の遺体に手を当てると、胸元の血が渇き始めたことに気が付いた。
「犯人は、誰なの？」
「田村を殺した犯人は、事件当夜に二人が密会して、弾丸の受け渡しが行われると、知っていた人物だ。それが教団関係者なのか、ほかの誰なのかは、まだ解らないけれど・・・」
「解らないのね？」
「あぁ、それに・・・南方を殺した犯人も・・・」
伊佐崎は、房江の南方を見る目に、憎しみがないと思った。彼女は、本当に南方を殺したのだろうか。彼女を愛した二人の男の死に、動揺しているだけではないのか。
「刑事さん・・・伊佐崎さんとは、もっと早く出会いたかったわ」
房江は、銃口を喉元から上に当てると、引金を引いた。
その刹那に、銃声が鳴響いた。
銃声に驚いた伊佐崎は、房江に抱き着くように押し倒すと、公安部の捜査員や、西田山が部屋に雪崩れ込んだ。
「伊佐崎！　房江さんはどうした！」
西田山は、倒れ込んだ二人を見て言った。
「ふ、房江さん・・・」

伊佐崎は、房江の銃を手に立ち上がると、首を横に振った。
「そうか・・・」
西田山は、伊佐崎の後ろから肩に手を置いた。
「ふ、房江さん、シングルアクションの回転式銃（リボルバー）は、撃鉄を起こさなければ、弾丸は発射されない・・・」
伊佐崎は、震える声で言うと、倒れている房江の手を持って、引き起こした。彼は、ベランダの窓に開いた、弾痕の後を見ていた。割れた窓を見ると、西田山も、銃声の正体に気付いた。彼らは、書斎のベランダから、向いの屋上を見ると、黒羽が手を振っていた。
「二人とも悪いな・・・俺の部下が止め切れず、狙撃班の連中に、一発だけ威嚇射撃を撃たせちまった。上層部の狙撃命令を無視しては、奴らの面子もないらしい・・・奴らも人殺しは、ごめんだとよ。それなりの収穫もあったから、許してやってくれよ・・・」
警察無線からは、黒羽のニヤけた声が聞こえてきた。

第二十話　割れた聖杯

伊佐崎は、神谷のパトカーで待っていた鈴子に、ラゴンダの鍵を渡すと、車を乗り換えるように指示した。彼は、マンションの駐車場入り口まで戻り、西田山と黒羽に、今までの捜査状況を伝えた。三人の刑事は、房江の身柄を確保したので、事件に進展がないだろうと、解散することにした。

「上で何があったの？　鉄砲の音が聞こえたわ」

鈴子は、ラゴンダの運転席に乗り込んだ、疲れ切った伊佐崎に、不安な表情で聞いた。

「発砲音は、狙撃班の威嚇射撃だよ・・・大丈夫、彼女に危害はなかった」

「良かった」

と、鈴子は、胸を撫で下ろした。現場に着くまでの伊佐崎は、被疑者が死んでしまったら、辞表を出す勢いだった。彼女は、現場で働いている、彼の精悍な顔付きを見て、彼は、刑事が天職なんだと、改めて思った。彼が刑事を辞めるなんて、想像も出来なかったので、被疑者の無事を聞いて安心した。

「今夜は、もう遅いから、このまま直帰する。ご両親には、しばらくアパートを離れること、私から連絡するかい？」

伊佐崎は、鈴子の顔を見った。

「ど、どうして？」

「自分で伝えるなら、それでも構わないが、君の家族も心配するから、私からも説明した方が、安心するだろう」

伊佐崎は、鈴子を自宅に呼び寄せて、電話で忠告してきた正体不明の男から、警護するつもりだった。

「確かに、出来る限り一緒にいようとは、言ってくれたけれど・・・そ、その、伊佐崎さんと、一緒に暮らすとか、有り得ないですよ・・・私のアパートを警護するとか、そういう話だと思ったから」

鈴子は、伊佐崎の提案を慌てて否定した。
「安心したまえ、私の家は、ボロ屋だが、家族と住んでいたからね。部屋数だけは、独り者が持余すほどで、十分に確保できるのだよ。君には、姉さんたちが住んでいた、一番いい部屋を割当ててあげよう」
伊佐崎は、「安心したまえ」と言ったが、鈴子は、何を安心すれば良いのかと、複雑な顔をした。
「伊佐崎さんって、お姉さんがいるの？」
「姉さんは、二人いたけれど、嫁いでしまってからは、ほとんど会っていない」
「お母様は？」
「母は、一番上の姉さんと暮しているよ・・・長男の私は、こんな仕事をしていて、いつまでも独り者だから、母に家族を作ってやれない。母は、家庭の中でしか、生きられない人だから、私との生活から逃げ出したのさ。私は、父の残した車と、古い家とともに、家族に捨てられたのかもしれないね」
「・・・良かったじゃないですか」
「何が良かったのかね？」
「伊佐崎さんは、都内で一軒家に住んでいて、お姑さんがいなくて、安定した公務員ですよ。女性が結婚相手に選ぶなら、これほどの好条件はありません」
「確かに、結婚をするのなら、好条件ではあるね。けれど、それだけが結婚相手の条件では、ないことも確かだよ。嘘だと思うのなら、私を見てごらんよ」
と、伊佐崎が笑うと、鈴子は、馬鹿にされた気がした。
「お家を持ってるとか、安定した職があるとか、それだけじゃないですよ。伊佐崎さんは、頭も良いし、背だって高いし、それに、年齢の割に若く見えます・・・」
鈴子は、余計なことを言った気がして、急に恥ずかしくなった。
「伊佐崎さんは、臆病だし、嘘吐きだし、いつも汗臭いです。それ

に、私のことを子供扱いしています」
「後半は、悪口ばかりだね。私は、君を子供扱いしてないよ」
「ほら！　嘘吐きじゃないですか！」
鈴子は、不貞腐れて、頬を膨らませた。
「鈴子さん、もう大丈夫だから・・・房江さんは、死ななかった」
伊佐崎は、鈴子に気を使わせたことに、頭を下げた。
鈴子は、伊佐崎に「この唐変木（とうへんぼく）」と、心の中で罵った。
「私、この車も好きですよ」
ラゴンダのエンジン音を聞いた鈴子は、助手席に沈み込んで、革シートの感触を楽しんだ。伊佐崎は、彼女の無邪気な態度を愛おしく思った。彼が車をアパートの前に停めると、彼女は、一人で荷物をまとめに行った。
鈴子は、部屋で荷物を整理していると、ファミレスで緒方に、ラップトップを預けたままだったと、思い出して、慌てて彼に電話をした。
「もしもし、先輩？」
「あぁ、ラップトップのことでしょう。僕が預かっておいたから、近いうちに届けに行くよ・・・えーと、何処まで届ければ、いいのかな？」
緒方は、鈴子からの連絡に、興奮していた。
「ハードディスクの中身をチェックしてないですよね？　メールとか見てないですよね？」
「う、うん。君のプライベートなんて、見てない、見てないよ」
「怪しいです、見ましたよね？」
鈴子は、答えに窮した一瞬を見逃さなかった。
「ごめん、シャットダウンしようと思って、開いてたテキストファイルを保存しようと思ってさ。ほら、上書きで消しちゃ悪いから、別名で保存しておいたよ・・・ほかは、誓って見てないよ」
緒方が見たのは、論文の資料用に書いた、『七つの弾丸』の捜査ファイルだった。鈴子は、論文を書いていたとき、デスクトップに

開いていた。
「先輩のこと、信用してあげます」
「えーと、有難うございます。・・・ところで、告白ついでに、そのファイルに、気になることが書いてあってね」
「読んだんですか？」
「信者だった僕にも、興味深い内容だったので、悪いとは思ったけれど。それでね、君たちは、アレの持ち主が神の恩寵を得ると、そう考えているのなら、間違っていると思うよ」
「間違っている？　弾丸の持ち主は、絶対的な権力を手に入れるのよね？」
「教団の奇跡の力は、神が与えた恩寵ではなく、教団が与えた役割なんだ」
「うーん、どこが違っているの？」
「権力を持つことは、けして奇跡じゃないでしょう？　権力者っていうのは、地位を表す記号であって、誰しもが成り得るものだ。権力を欲する者には、奇跡だと思うかもしれないけれど、教団では、アレを『浄配』と呼んでいるし、所有者を浄配の夫ヨセフと呼んでいる」
「『浄配』って何のこと？」
「『浄配』とは、処女のまま子を宿した、聖母マリア様のことだよ。権力を欲する者には、彼女との婚姻が、神の恩寵だと考えているけれど、神の恩寵の本質は、その子供を得る教団の物なんだ」
「教団には、イエス・キリストが与えられる？　ラスプーチンやヒトラーの話には、そんな物、どこにもなかったわ・・・いいえ、弾丸を使用した彼らには、イエスが生まれなかったのね」
「神の子を生み落せるのは、浄配マリア様だけだから、彼ら(ヨセフ)が子を授かるはずがない」
　鈴子は、懺悔室の牧師の言葉を思い出した。彼は、「・・・姦淫するなかれだ」と言っていた。ヨセフが弾丸を解き放った瞬間、聖母が神聖を失ってしまう。あの牧師は、最後に何を伝えたかったの

か。
「神の子は、ブッタであり、イエスであり、ほかにもいるけれど、各宗教で秘密裏に行われているのは、自らの手で救世主を誕生させようとする、神の恩寵を得るための儀式。アレを手にした人間が、神との約束事を破らぬように、権力というエサを与えて、それでも逃げ出すときには、全てを赦すという約束事なんだよ。僕は、教団が与えている権力や赦しが、偽物だと思っている。本物の神の恩寵は、僕らのような人類が、目にすることが出来ないはずだ」
「先輩の言ってること、解る気がするけれど・・・それが本当なら、宗教指導者たちは、独占しようとせずに、なんで他宗教と協約を交したのよ」
「宗教指導者は、人類の血塗られた宗教戦争の終焉、人類を総べる信仰の誕生を願ったのさ。新たな聖人が生まれたとき、争いのない世界には、『浄配』から誕生する聖人による、新たなる世界秩序に支配されるだろうね」
「教団・・・世界中の宗教は、信仰を総べる聖人の誕生を願っている？　鉄砲の弾から、聖人が生まれるって、どういう意味なの？」
「そこまでは、僕にも解らないけど、例えば、アレで撃たれても、無傷の超人とか・・・いいや、本当に、よく解らないけれど、過激な平和信仰だと思うよ」
「そうね・・・」
「教団が『浄配』の婚姻を続けている理由、ヨセフに権力を与えている理由、彼らは、新たな聖人の再誕を願っている、カルト集団なんだ・・・だから、君も変なことに巻き込まれる前に、手を引いた方がいいよ。君みたいな、女の子は、彼らのターゲットにされ易い」
緒方は、鈴子の身を案じていたが、その想いは伝わらなかった。
「先輩は、私が処女だって言ってるんですか・・・違いますよ」
「えっ？」
鈴子は、震える手で電話を切ると、タンスから着替えを旅行鞄に、無造作に移し替えた。彼女は、伝説に近付くなと、忠告した電話の

男が、自分のことを見張っている気がした。
鈴子は、ドアをノックする音に、思わず悲鳴を上げてしまった。
「ずいぶんと、長いこと待たせるね・・・どうか、したのかね？」
伊佐崎は、玄関で腰を抜かしている鈴子に言った。
「な、なんでもありません」
「玄関の前で待っているとき、話声が聞こえたけれど、誰かと電話で話していたのかね？」
「両親に、しばらく伊佐崎さんのお宅に、お邪魔するって、電話しました。両親が心配すると、いけないから、勉強を手伝ってもらっていると、言い訳をしておきましたよ」
「命を狙われていると言うよりは、マシかもしれないが、泊り込みで勉強なんて、余計に心配するのではないのかね？」
鈴子には、緒方の話を隠したい理由がなかったものの、伊佐崎を待たせて、別の男と話していたと、思われたくなかった。
荷物を詰め込んだ旅行鞄は、伊佐崎が車まで運んでくれたので、鈴子は、携帯電話だけを手に持って、彼の背中を追った。彼女は、荷物を軽々と運ぶ、彼の背中を見て「思ったより力があるんだ」と、妙なことに感心した。
伊佐崎は、ラゴンダのトランクに、旅行鞄を仕舞うと、振り返って鈴子の携帯を指差した。
「その男の話だが、君には、弾丸を手にする資格がないと、言ったのかね？」
「そ、そんなこと有りませんよ・・・私、まだ『したこと』ないですし・・・」
「何を『したこと』がないのかね？」
「だから、その、男の人と・・・セクハラじゃないですか？」
鈴子は、緒方に『伝説の弾丸』の所有者が、純潔を求められると、聞かされていたので、『資格がない』を『非処女』と考えてしまった。
「君に電話で忠告した男は、そんなことを確認したのかね？」

「いいえ・・・そんなことは、聞かれてませんよ。むしろ、逆だったような、気がします」
鈴子は、勘違いしていたことに、気が付いて顔を真っ赤にした。
伊佐崎は、理由が解らなかったが、質問を続けることにした。
「君が弾丸の資格者でないのは、理解できるのだが、手にする資格もないとは、どういう意味なのか、考えていたのだ。君が資格者（つみびと）でないことは、明らかなのに、わざわざ忠告をした理由が、どうにも理解できなかったのだ」
「電話の男は、弾丸を聖母マリアに、例えていたわ。弾丸は、『浄配』を必要としないと、言っていたわね」
「キリスト教の原理主義者は、同性愛を固く禁じている。弾丸を聖母マリアに例えているのなら、弾丸の資格者は、自ずと男性に限られてくる。つまり、女性の君は、弾丸を手にする資格すらない」
「そういえば、過去の弾丸の所有者は、全員が男性でしたよね。私が娼婦のように振る舞っても、彼女の心を射止めることが出来ないわ」
「電話の男は、弾丸に近づこうとする君に、何を伝えたかったのだろう」
伊佐崎は、鈴子の顔を見ると、まだ幼さの残る視線に、どんな秘密が隠されているのか、惹きつけられる。彼女の瞳は、彼の遠い記憶にある、穢れを知らない少女のようだ。
「その男の言うとおりなら、麻子さんも弾丸の資格者には、絶対になれませんよね。それでも、彼らに私たちが必要な理由は、子供です。子供を生めるのは、女の特権ですよ」
「彼らは、君たちを弾丸の資格者の妻にする、そういう意味なのかね？」
「彼らは、メシア再誕を望んでいるのよ・・・麻子さんを生贄に、メシアを誕生させようと、企んでいるのではないかしら？」
鈴子は、あくまで麻子を被害者として、考えていた。
「忠告の真意は、解らないけれど・・・本当に、聞き覚えのない声

だったのかね？」
伊佐崎は、トランクを勢いよく閉めると、眠そうな鈴子に言った。
「そういえば、彼の声を録音していたわ」
鈴子は、携帯をハンズフリーにすると、外部スピーカーに男との会話を流した。伊佐崎は、なんで早く教えなかったのかと、叱責したかったが、自分の部下でも、刑事でもない彼女を強く責めなかった。会話の内容は、彼女から聞いた話と、寸分違わなかった。
「この電話の声は、ボイスチェンジャーで、巧妙に加工されているね」
「どうして解るの？」
鈴子は、眠たい目を擦っていた。
「男の周囲に聞こえている音は、周波数を加工しているため、僅かに揺らいでいる」
伊佐崎に言われた鈴子は、耳を澄ませたが、よく解らなかった。彼女は、ボイスチェンジャーを使っているのなら、もっと低い声や高い声にすれば、テレビや映画で見る誘拐犯の電話みたいに、すぐに身構えただろう。
「この男は、君を脅かす目的で、忠告したわけではない。善意の第三者を気取って、なるべく穏便に、君が手を引くことを願っていたようだね。それでも、自分の正体を掴ませたくない・・・誰なんだ？」
伊佐崎は、携帯の音声ファイルをマイクロSDカードに移すと、自分の携帯から、鑑識の相場にメールした。そして、鑑識に実音声の復元を依頼すると、鈴子の睡魔が限界だと悟って、自宅へと向った。
鈴子は、助手席に座ると、窓の方を向いて、丸まっていた。
伊佐崎は、エンジンの回転数を落として、静かな運転に努めて、FMのラジオを小さくかけた。ラジオからは、ピアノの調べとともに、物悲しい男の歌声が聞こえてきた。

『Ｂｅｔｒａｙａｌ』
Ｙｏｕ ａｒｅ ｍｙ ｇｏｄｄｅｓｓ ｅｘｔｅｒｎａｌｓ.
Ｙｏｕｒ ｖｉｒｇｉｎ ｗａｓ ｍｙ ｔｈｉｎｇ.
Ｗｈｙ ｄｉｄ ｙｏｕ ｂｅｃｏｍｅ ｈｉｓ ｔｈｉｎｇ?
（Ｌｙｒｉｃｓ：ｎａｃｏｃｏ）
「伊佐崎さんには・・・私が聖母マリアに見えますか？・・・」
「そうだな・・・」
鈴子は、車に揺られると、眠りに落ちそうな意識の中で、寝言のように言った。
伊佐崎が、なんと答えたのか、その答えを聞く前に、鈴子は、眠ってしまった。

第二十話　割れた聖杯（後書き）

【ご注意】歌の歌詞は、私の作詞です。念のため。

第二一話　ペテロ

伊佐崎の自宅は、日本橋浜町の下町風情が残る街並みに相応しい、木造平屋の和モダン建築だった。彼は、庭の植え込みで、車体を傷付けないのように、窓から顔を出して、後ろ向きに駐車していた。鈴子は、運転席から吹き込んだ、生暖かい風に、目的地に到着したことを知った。

「伊佐崎さん・・・私、寝てました？」

「どうだろうね、運転に集中していたから、君が寝ていたのか、解らなかったけれど」

伊佐崎は、運転しながら、事件のことを考えていた。ただ、今夜は、もう遅かったので、これ以上、事件のことを話すのは止めた。彼は、鈴子の荷物を持って、玄関扉を開くと、家に発熱球の黄色い明かりが灯った。彼女は、玄関扉に埋め込まれた、ステンドグラスに画かれた、薔薇の紋様を見ていた。

「玄関扉にガラス細工なんて、今どき不用心で見掛けないから、ちょっと珍しいだろう。この家は、明治時代に油売りをしていた、私の爺さんが建てたが、その頃は、ハイカラな建物だったらしい。せっかくの家も、私の手入れが良いから、すっかりボロ屋になったがね」

「お爺さんも、油を売っていたのね・・・お孫さんも、油ばかり売ってるわ」

鈴子は、たまに辛辣な冗談を言って、伊佐崎を困らせた。彼女は、家の中を案内され、最後に大きな窓がある洋室を紹介された。部屋には、クリーム色で足の細いドレッサー、ピンクのドレッサーチェア、薔薇模様の画かれたローチェスト、ナチュラルウッドの大きなベッドが置かれていた。彼は、姉の部屋だと言っていたが、アンティーク調にまとめられた、趣味の良い部屋だと思った。

「どうだね、仮住まいの様子は、気に入ってもらえるかな？」

「ローチェストの薔薇の絵が、すごく可愛いわ」
「その絵は、薔薇だったのかね。私は、てっきり牡丹かと、思っていたよ」
「この薔薇は、玄関のステンドグラスと、同じクウォータ咲の品種で・・・黄色系のモナリザですね。お姉さんは、玄関のステンドグラスと同じ、オールドローズの絵柄を選んだのね」
鈴子は、ローチェストに描かれていた、薔薇の品種を言い当てた。
「あぁ玄関のガラス細工も、薔薇だったのかね」
関心のないことに、興味さえ示さない伊佐崎は、四十年以上暮らしてきた、家のシンボルを知らなかった。鈴子は、何事にも無関心に見える彼が、事件のことになると、常人以上の集中力を発揮するのかと、考えると不思議だった。彼の無頓着さに呆れて、大きな溜息を吐くと、再び睡魔に襲われた。
「掃除だけは、母が通ってくれるので、そのまま使えると思う。もしも、足りない物があれば、隣の納戸を探して、勝手に揃えていいよ。しばらくは、窮屈な生活になるが、事件が解決するまでの辛抱だ」
伊佐崎は、足元がおぼつかない鈴子に、もう寝るように言った。
鈴子は、彼に促されるまま、ベッドに倒れ込んだ。
伊佐崎は、服も着替えずに、ベッドに横になった鈴子を確認すると、部屋を出て行った。彼は、庭に張り出した、石造りの応接室の椅子に腰かけ、捜査情報をまとめた手帳を開いて、サイドテーブルに置いた。彼は、腕時計のアラームを三時間後にセットすると、椅子に座ったまま目を瞑った。
伊佐崎は、事件に没頭しているとき、椅子に座って浅い眠りを繰り返す。彼は、多くの情報を頭に詰め込むと、そこから閃きを得るため、常に事件のことを考えていた。それは、悪夢のような作業で、とくに今夜のように、自分の不手際で、第二の殺人が起きた日には、自責の念も手伝って、寝ることさえ難しい。彼は、アラームをセットした三時間、虚ろな状態を保ちながら、巻き込まれていく人のこ

とを考えていた。手帳を近くのテーブルに置いたのは、そこに書かれている、彼らを強く想うための儀式だった。

伊佐崎の特異行動は、一種の強迫性障害だと、上司の田上課長から、医療機関での診察を勧められたが、彼は、事件解決まで続く不眠状態が、病的だと認めずに、悪習を変えなかった。夏の夜は、思索にふけるには短く、アラームの鳴る前に夜が明けた。それでもアラームが鳴るまでは、体力を維持するために、彼が目を開けることはなかった。

朝日が頬を照らすと、目を覚ました鈴子は、レースのカーテン越しに、二羽のツバメが飛び交うのを見ていた。番(つが)いのツバメは、忙しそうに雛の餌を探している。彼女は、弾丸のように飛び交うツバメに、指で狙いを定めた。

「バン！」

一発目は、歌舞伎町で殺された、街金融の田村を思い浮かべた。

「バン！」

二発目は、政権与党の元幹事長、政界ドン南方を思い浮かべた。

鈴子は、自分の指先を見つめて、寝ぼけた頭で考えていた。彼女は「二発？」と、首を捻ったものの、大きな欠伸をして、再び目を閉じた。木造平屋の家は、床下を抜けていく風と、高い天井が部屋の熱気を奪って、心地よい暖かさだった。それに、部屋に用意されていた、シルクの寝具も涼やかだ。

鈴子が二度目に起きたのは、夏の日差しに負けた、正午過ぎだった。彼女がベットに腰かけて、旅行鞄から洗面道具と着替えを取り出すと、レースのカーテンが、風に揺れていることに気が付いた。寝ている間に、伊佐崎が窓を開けたのなら、ルール違反だと思った。この部屋は、彼女の聖域のはずで、寝ている隙にオジサンが、踏み込んでいいはずがない。明確なルールは、決めていなくても、独身女性の寝室に、無断で侵入するのは、常識的にみて問題がある。

「うー、猛抗議してやる！」

鈴子は、洗面道具と着替えを持ったまま、洋室のリビングに向っ

て、廊下を突き進んだ。
「おっ！　鈴子、やっと起きたのかや？」
「お兄ちゃんは、黙ってて！　伊佐崎さんは、何処にいるのよ！」
「い、伊佐崎警部なら、シャワー浴びているら・・・」
「なんで、私より先に、お風呂入ってるのよ！　レディーファーストでしょう？・・・お兄ちゃん？」
鈴子は、伊佐崎に文句を言おうと、飛び込んだリビングで、長野にいるはずの兄・岩壁健吾（いわかべけんご）と、思いがけずに鉢合わせして、頭が混乱していた。
「お、おはよう」
「お兄ちゃん、何やってるだえ？」
「やいやい、おめ、こんな時間まで、寝ててたるくさい。伊佐崎警部が優しいからって、ちょんこづいてるけ？」
「おえ！　ちょんこづいてないでえ・・・調子になんか乗ってないわよ」
鈴子は、久々に再会した兄の言葉に、方言で応えてしまったが、旅館で育った兄妹は、普段から方言で話すことが少なかったし、彼らの年代で方言を使うことは、友人同士でもほとんどなかった。彼女は、わざと方言で話しかけた兄に、からかわれたと、彼のニヤニヤした顔を見て気付いた。
「もう、お仕舞かや？」
健吾は、鈴子の不貞腐れた顔を見ると、咳払いをして、つまらない冗談で、妹を怒らせたと後悔した。
「お兄ちゃんは、今年から長野県警捜査共助課に、異動になったんだよ」
「それって、出世したってこと？」
「巡査部長になりました」
「部長って、伊佐崎さんより偉いの？」
「巡査部長は、警部補より下です・・・だけど、所轄署から県警の異動は、異例中の異例なんだよ。その点は、凄い出世だと思うよ」

「けど、捜査共助課って、使い走りじゃないの？　以前、暴力沙汰で左遷されていた、黒羽警部も捜査共助課にいなかった？」
鈴子は、兄の心をへし折った。健吾の所属する捜査共助課は、県外の警察と連携して、広域捜査を行っている。彼女の言うとおり、黒羽が厄介払いに、異動させられた部署でもある。
捜査共助課の健吾が、東京に出張してきた理由は、南方総帥が殺されたことで、長野県にも支部がある『新宿の救いの手』と、教団信者の田村が殺された事件の関係性が深まり、長野県警と警視庁の連携のため、先遣隊として送り込まれた。田村が殺されたとき、今後の捜査次第では、教団各支部に家宅捜索の必要がありと、捜査一課の田上課長が打診しており、捜査協力を渋っていた長野県警も、昨晩の急展開に重たい腰を上げざるを得なかったようだ。
田上課長に健吾の起用を進言した伊佐崎には、鈴子の世話係を任せようと、下心があった。そんな事情を知らずに、警視庁捜査一課の課長に名指しされ、大きな事件の先遣隊に選ばれた彼は、深夜の出動要請にも関わらず、深夜の高速道路を飛ばして、東京に駆け付けた。長野県警は、彼を全権大使にして、南方殺害の捜査権を主張するため、早々に現場入りさせたのだ。
「しかし、警視庁が僕を指名するなんて、何かあるとは思ったんだよ。けれど、まさか自分の妹が、事件の渦中の人とは、ちょっと想像できなかったな。現場に着いたとき、伊佐崎さんに電話をかけたら、鈴子を保護していると、聞かされて驚いたよ」
健吾は、眠い目を擦りながら、言った。
「ごめんね、お兄ちゃん・・・」
「しかし、どんな理由で鈴子が、ストーカー被害に遭うなんて、面倒くさいことになったんだ？」
「ストーカー被害？」
「伊佐崎警部から話を聞いたけど、事件絡みでストーキングされているって・・・違うのかい？」
健吾は、伊佐崎から捜査状況を聞いて、鈴子が事件に巻き込まれ

ないように、保護しているとの説明を誤解していた。
「べつに、ストーカーなんて、されていないわよ。事件に首を突っ込むなと、変な電話をもらっただけだよ。電話の相手が犯人だとしたら、ストーカーの方が、良かったかもしれないけれど・・・」
鈴子は、電話での挑発的な行動を思い出して、男が犯人だとしたら、自分も殺されるのではないかと、急に不安になった。健吾は、肩を抱いて視線を落とした妹に、想像以上の事態が起きていると感じた。
「とにかく、お兄ちゃんが来たからには、もう安心していいんだぞ」
「うん。お兄ちゃん、ありがとう」
鈴子は、兄が優秀な刑事だと、思っていなかったが、誰よりも彼女の身を案じてくれたのが、嬉しかった。捜査に忙しい伊佐崎は、兄に比べれば、何処か他人事のように感じる。彼は、誰にでも優しいのではないか、昨晩の事件現場にいた女より、自分に特別な愛情を持っているのか。彼女は、嫉妬にも似た感情で、胸が苦しくなった。
「お兄ちゃんが来てくれて、本当に良かったわ。伊佐崎さんと二人っきりでは、身の危険を感じていたのよ」
と、鈴子が言うと、バスタオルを肩に掛けた伊佐崎が、彼女の後ろに立っていた。
「鈴子さんは、昼過ぎまで寝ていて、どこに危険を感じていたのかね？」
伊佐崎は、バスタオルで髪を掻き揚げると、濡れた髪を手で後ろにやった。鈴子は、その仕草が危険だと、言い返したかった。彼女は、異性が無造作に髪を梳かす仕草に、とても弱かった。人目も気にせず、髪を撫でまわす姿には、説明のできない色気を感じる。
「そうだわ。伊佐崎さん、私が寝ている間に、部屋に入って窓を開けましたよね？」
鈴子は、リビングに乗り込んだ目的を思い出して、伊佐崎に言い返した。

「それは、ウチの母だよ」
「お母さん？」
「隣の部屋に、食事の支度がしてあるから、食べるといいよ」
伊佐崎が指を指した食卓には、確かに食事の用意がしてあった。彼と健吾は、捜査情報の交換をしながら、先に食事を済ませており、彼女の分だけが取分けられていた。彼は、母親と同居していないと、言っていたはずだ。
「私が休みのときは、掃除や食事を作りに、母が世話を焼きに来るのだよ。まぁ、今日は休日返上だと、追い返したがね」
伊佐崎は、当たり前のように言ったが、四十過ぎの息子の世話を焼く母親は、子離れできていないと、鈴子は思った。彼も、母親の愛情を当たり前に、受け取っているのなら、相当のマザコンだとも思った。
「・・・私、先にお風呂入ってきます」
鈴子は、子離れしていない母親が、存外厄介なんだと考えて、意気消沈した。
「やっぱり、鈴子のやつ、落ち込んでますね」
「事件に巻き込まれて、元気がなくなるのも無理もないことだ・・・君を呼んで正解だったな」
二人の刑事は、肩を落として出ていく鈴子の後ろ姿に、見当違いの心配をしていた。彼らは、女心が解らないという点で、よく似ていた。
「それで、事件の捜査状況ですが、伊佐崎警部の睨んでいたとおり、警視庁公安部の連中が、県警の捜査協力も拒んできました。街金融の田村はともかく、南方総帥が殺された件では、ウチの県警本部長も目の色が違っています。このまま警視庁公安部が、警察庁の出先の介入を拒み続ければ、ウチの県警本部長が、霞ヶ関に乗り込んできますよ」
「そうなったら、私と君が対立することになるね。公安部も、警察庁との対立を避けると、そうした事態を読んで、田上課長を焚き付

けて、各県警に捜査協力を送っていたのだが、彼らは警察組織の対立も辞さないようだ」
　伊佐崎は、芦木警視正に呼び出されたとき、警視庁公安部の暴走を予見して、教団の支部を所管する各県警に、捜査協力を呼び掛けていた。彼は、公安部の手が届かない、警察庁の介入は阻止できないだろうと、考えていたからだ。だが、公安部が県警の介入を拒むのなら、事態は最悪の方向に動き始める。
「僕のところで時間稼ぎは、少しなら出来ますが、県警の本陣が動けば、誤魔化すのが難しいです。しかし公安部が、この事件に固執する理由は、なんでしょうか？」
「彼らの目論見は、警察庁との戦争が始まれば、明らかになるのだが」
「警察の敵が警察だなんて・・・もしも戦争が始まれば、警視庁公安部の暴走を止めても、手遅れの可能性がありますよ」
「そんなことは、解っている。公安部は、警察庁との争いを雑事のように扱うことで、もっと大きな秘密を守っている。それが『新宿の救いの手』掃討を意味するのなら、そこまでして教団を壊滅させる理由は、なんだろうか？」
　伊佐崎は、隆文が「私怨と無関係だ」と、言っていた理由に、関係していると考えていた。公安特課という秘密組織は、歌舞伎町の事件を利用して、組織の躍進を狙っているような口振りだ。政界とのパイプを持っている教団を壊滅することで、公安特課の力を誇示する目的ならば、その力を誰に見せつけたいのか。そもそも教団の壊滅や、他の捜査課との軋轢は、公安部の総意なのか、隆文の言葉が引っかかる。
「僕の地元でも『新宿の救いの手』は、市議会や県議会議員の支持母体として、幅を利かせているので、敵の多い宗教団体です。政界にパイプを持つ宗教組織には、生理的な嫌悪感も否めません。ですが、公安部が政治的な圧力を嫌っているのなら、彼らに圧力を加えることは、自殺行為だと思うんですよね」

健吾の疑問には、伊佐崎も同意した。
「この事件では、少なくとも三つの組織が、策謀を張り巡らせている」
「三つの組織？」
「教団信者の山越房江は、南方殺害を自供しているが、私は、彼女の殺意の根底に、教団の関与を疑っている。そして、事件を隠れ蓑にした、警視庁公安部の暗躍も、想像以上に根深いものだ」
「教団は、教義の執行者として、田村や南方を殺害した。警視庁公安部は、教団を壊滅して力を示し、政界や警察組織内での権力を得る・・・これが事件の真相ですか？」
「あと一つ、『七つの弾丸』信奉者たちは、教団や公安部の思惑と異なった、事件の顛末を願っている。信仰的野心とも、権力への渇望とも異なる、第三のイデオロギーを感じないかね。そして、事件を陰から操っている、彼ら信奉者こそが、この事件の犯人に相応しい」
「教団や公安部、我々の捜査でさえ、犯人の掌の上ということですね。しかし、弾丸の信奉者とは、どんな組織なのでしょうか？　弾丸の信奉者が、教団の教義に準じている点では、教団に近い存在だと思いますけど」
「弾丸に交された約束事が、世界規模で信仰されているのなら、私たち日本の警察に、太刀打ちできる相手では、なくなってしまう。だが、南方が殺されたことは、教団や公安部の思惑と乖離（かいり）するはずだ。そのとき、彼らの行動により浮き彫りになる、犯人の尻尾を掴んでみせるよ」
「弾丸の信奉者の目的が、信仰の拡大でも、権力を手にすることでもなければ、二つの事件の顛末は、彼らの予想外のものになる。ここまで騒動を広げて、犯人は、何を得るつもりでしょうか？」
「私は、彼らの考えを探るべく、教団の教義に触れてみたが、どうしても納得が出来ない解釈があった。弾丸の所有者が現れて、教団が得るものは、信仰の拡大と新たなる指導者だが、指導者を自らの

手で生み出せるのなら、なぜ、教義で縛りつける必要があるのだ？」
「弾丸の資格者の条件が、殺人者だとすれば、教団は、新たなる指導者の弱味を握れます。そうした弱味に付け込んで、ときの権力者が教団の教義を裏切って、暴走しないようにコントロールしている。そんな感じでは、ないのですか？　あの南方ですら、ベトナム戦争で銃を持って戦ったと、明言を避けています。人を殺したという罪悪感は、それだけ強い拘束力を持っています」
　健吾の答えを聞いた伊佐崎は、後頭部を掌で三回叩くと、天井を見上げた。
「弾丸の約束事は、所有者に権力を与えること、弾丸を撃った者の罪を罷免すること、所有者に報復が許されない。この約束は、単純なだけに色々な解釈が存在するが、一番問題なのが弾丸を所有する限り、罪を裁けなくなっていることだ」
「どういうことですか？」
「『七つの弾丸』の物語を聞けば、弾丸による罪の罷免は、弾丸を撃ったときの一度きり、発動されるものだと思われるが、じつは、弾丸を最後に使えば、それまでの罪も問えなくなる。つまり、資格者が弾丸を所有した時点で、その者がどんなに横暴を働いても、教団が罪を隠し通さなければ、破綻してしまうものだ」
　伊佐崎の説明に、健吾は首を捻っていた。
「弾丸の所有者は、どんな罪を犯しても、何度も人を殺しても、教団が罪を問うことが出来ない。弾丸が放たれない限り、それが約束事になる・・・伊佐崎警部は、そんな恐ろしいこと、よく考え付きましたね」
「私が弾丸の所有者ならば、そのような使い方が出来ると、考えていたのだ。だからこそ、疑問が湧いてくるのが、権力者の裏切りで、自らの命や信仰が脅かされると知りながら、マゾヒスティックに所有者を送り出す信奉者たちは、大きな代償と引き換えに、何を得るつもりなのか？　弾丸の信奉者たちは、自らの命や信仰を犠牲にしてまで、手に入れたいものがあるはずだ」

伊佐崎は、額に汗を滲ませた。
「過去の権力者や、彼を支えてきた組織は、お互いを縛りつけるため、弾丸を二発ずつ所有していた」
「だからこそ、今回の事件では、七発目となる最後の弾丸が重要な鍵になる・・・」
「弾丸による報復は、罪が罷免されてしまうのだから、犯人が手に入れたかったのは、報復する権利さえ奪う、最後の一発だということですね」
「これが信奉者の望んでいた結末ならば、いずれ世界中の人間に、目に見える形で、この事実が明らかにされる。そのとき、世界各地でパラダイムシフトが起これば、もう犯人を捕まえることは、永遠にできなくなる」
「そんな・・・まるで、神様じゃないですか」
「鈴子さんが、異教徒のクシーベロ牧師に聞いた話が本当ならば、犯人がロゴスを手にしたとき、世界中の宗教は、その者を救世主と認めざるを得ない。世界統一宗教の教主となれば、神に等しい存在だろう。そもそも宗教は、人の信仰の上に存在し、神がいなければ人も生まれず、人がいなければ神も生まれない」
伊佐崎は、バスタオルで汗を拭うと、理解に苦しんでいる健吾の肩を叩いて、「私も信じていないがね」と、今の話は信奉者の代弁だったと言った。
慌てた様子の鈴子は、濡れた髪を乾かすのも惜しんで、床に滴の跡が残しながら、リビングに戻ってきた。
「ちょっと、二人とも聞いてよ。よく考えたら、最後の弾丸は、南方殺害に使われて、犯人も自供してるんだから、もう事件は解決してるのよ。南方が持っていた二発の弾丸は、昨晩の事件で、打ち止めになったわ」
鈴子は、二羽のツバメを見て感じた、違和感の正体に気が付いて、急いで二人の元に駆けつけた。彼女の言うとおり、南方を撃ち殺したのが、『伝説の弾丸』だったのなら、犯人の目的は潰えていた。

しかし彼女の言葉に、伊佐崎は驚くこともなく、首を大きく横に振った。
「前にも言ったけれど、我々に弾丸の真贋が見抜けないのだから、もしも、昨晩使われたのが、本物の『伝説の弾丸』だとしても、それを証明出来ない限り、そこに意味なんてないのだよ。警察が迷信や世迷い事の類を信じて、捜査をするわけにいかないからね」
「弾丸が存在しなくても、犯人が弾丸をもっていると言えば、それでも通用するの？」
「いいや、それは違う。我々に本物と判断する術がないなら、犯行に使われた弾丸は、偽物だと考えて行動しないと、最悪の事態が避けられない。犯行を自供した房江さんでさえ、弾丸が本物だったと、確信していたのか怪しいものだ」
「なら、真相を知っているのは、犯人だけってことね」
鈴子は、悔しそうに言ったが、彼女の吐き捨てた言葉に、伊佐崎が目を丸くした。
「そうだよ、確かに弾丸の真贋は、真犯人にしか解らないはずだ！」
伊佐崎は、鈴子の両肩に手を置いた。
「なんですか？」
「もしも、最後の弾丸が使われたと知ったら、その力を利用しようとしていた者が、真相を知らないのなら、どんなに落胆をするだろうか？」
伊佐崎は、健吾の方に向き直ると、悪戯に笑った。
「自分の欲しかった物が、この世から消え去ったわけですから、相当に落胆するでしょうね」
健吾が言うと、伊佐崎は「そのとおり！」と答えて、上機嫌に登庁の準備を始めた。
「クシーベロ牧師が言っていたとおり、弾丸という物体に囚われては、本質を見落とすかもしれない。君ら兄妹の話は、じつに面白いよ」
伊佐崎は、二人に向かって、本当に愉快そうな笑顔を見せた。

鈴子は、彼が何かを思い付いて行動したとき、それが徒労に終わり、落ち込む姿を何度も見てきた。彼が、何を考えているのか知らないが、見当違いだったら、どうなるのかと、呆れた顔をした。

第二二話　ユダ

「南方殺害に使われた弾丸が、偽物だとしても、その事実を知っているのは、犯人だけということだ。我々に真偽が解らないものの、物証となる弾丸は、我々の手にある。つまり、教団関係者や・・・麻子さんに、最後の弾丸が使われ、事件が終わったと、知らせてみようと思う。その結果、弾丸が消え去ったと、落胆をするようならば、そいつが犯人の可能性は、低くなると考えた」

伊佐崎は、警視庁に向かう車内で、犯人を見抜く方法を、岩壁兄妹に聞かせた。

「やっぱり伊佐崎さんは、麻子さんが犯人だと疑っているのね」

彼は、弾丸が無くなったと、容疑者に聞かせて、反応を見ることを提案したが、その中に、麻子の名前が含まれていることに、鈴子が反発した。

「君だって、麻子さんの無実を信じたいから、教団に潜入したのではないのかね？　私も、彼女を信じたいから、こんな踏絵を考えたのだ」

と、伊佐崎は、後部座席にいる鈴子に振り返った。彼女は、車窓に流れる街並みを見ながら、「そんなこと、解ってるわよ」と、不貞腐れて言った。

「しかし、問題がありますよ。我々は、本物の弾丸を知らないのだから、もしも、相手から疑われたら、そこで見抜かれてしまいます」

健吾は、信号待ちでサイドブレーキを引くと、助手席の伊佐崎に言った。

「弾丸の特徴なら解っている。スミソニアン博物館の収蔵品だった『傲慢』、田村殺害のときに見つかった『強欲』、これらの特徴から最後の弾丸には、鋳薔薇の紋様とラテン語で『嫉妬』と、彫られているはずだ」

「なるほど、最後の弾丸の特徴は、解っているのですね・・・でし

たら、南方殺害に使用された薬莢に、特徴が符合するか調べれば、我々にも弾丸の真贋が分るじゃないですか？」
「いいや、犯人も当然、弾丸の特徴を知っており、特徴が符合しても、それが模造品の可能性がある」
「では、田村殺害の弾丸が、なぜ本物だと解るんですか？」
「薬莢を見つけ出したのは、弾丸を研究していた学者だ。それに、弾丸の所有者候補だった田村は、犯人が資格者となるため、殺害（いけにえ）されたと考えている。犯人は、田村を殺して、資格者の条件を手に入れており、その際、残りの弾丸も持ち去ったと、考えているのだ。歌舞伎町の弾丸『強欲』は、本物でなければ、ならない理由が存在する」
「同じような理由で、南方殺害にも、本物が使われた可能性がありませんか？」
「犯人の目的は、最後の一発を手に入れることで、その可能性は極めて低い。ただし、今回の房江の行動が、犯人にとって不測の事態なら、最後の弾丸が使われた、可能性を否定できないがね」
「不測の事態だった場合、犯人の次の行動は、読めなくなりますね」
健吾は、クラクションに急かされると、車を発進させた。
「私は、房江さんが南方を殺したと、どうしても思えないのだ」
「彼女が殺していないのなら、誰が殺したのよ？」
鈴子は、相変わらず車窓を眺めていたが、二人の会話に聞き耳を立てていた。
「私が最初にあったとき、彼女は周囲を気にしながら、「犯人は教団関係者なのか」と、聞いてきた。彼女は、田村を殺害した犯人を、南方だと確信していなかった。むしろ、教団関係者の関与を疑っていたから、周囲を気にしていたのではないか。それが、なぜ突然、南方の犯行を確信したのだ？　彼女を唆したのは、教団関係者だと、考えているのだよ」
「どういう意味なの？」
「教団関係者は『強欲』を使って、残りの弾丸を持ち去った、新た

なる資格者を探していた。教団関係者は、田村を殺害した張本人ではないと、彼女は考えたのだろう。もしも、田村を殺したのが、教団関係者ならば、教団が資格者探しをするわけがないからね」
「教団は、二人が恋人同士だと知っていのかしら？」
「教団が二人の関係を知っていたのかは、解らないけれど、恋人を殺された彼女が、犯行を疑っていた、教団関係者に接触しないと、考える方が不自然だ」
「それでは、なぜ彼女が殺してないと、断言できるの？」
「彼女の行動は、予測可能だったからだよ。彼女が、田村殺害の資格者を熱心に探していたのなら、それを教義のためと受け取るか、復讐のためと受け取るかの違いだが、いずれにせよ、教団が南方殺害を唆せば、彼女が実行する可能性は、高かったということだ」
「教団が、弾丸の所有者だった南方を殺すのは、おかしいですよ？　教団は、南方を殺すことに、どんな意味があるの？」
鈴子は、伊佐崎の説明に納得が出来なかった。教団が、弾丸の所有者の南方を殺すのは、自分たちの教義を裏切る行為だと思った。
「ラスプーチンの話を思い出してごらん、彼は信者たちの殺されている。なぜ彼は、信者たちに殺されたのか？　教義では、教団の意にそぐわない、所有者を暗殺することを禁止していない。それに、弾丸を手放さずに、権力の座にしがみ付く者には、非業の死が待ち受けるとも、麻子さんが言っていただろう。それは、教団は、弾丸の所有権を力尽くでも取り上げれば、報復が許されているという意味だ。私は、教団が不必要だと感じれば、『伝説の弾丸』を回収して、所有権を失った権力者を歴史の闇に葬ってきたと、解釈しているのだよ。田村殺害により、新たな主が誕生したのなら、南方は、単なる前任者であり、生かしておく必要がなかった。老人は、『七つの弾丸』に纏わる教団の教義について、私の質問にも答えていたから、いずれ裏切るかもしれないと、殺されてしまったのだろう」
「衆人看取の中で暗殺された、ケネディ大統領と同じね。彼は『宇宙人の存在』を暴露する前に、暗殺されてとの噂もあったけれど、

本当は『七つの弾丸』の伝説に隠された秘密を、暴露する気だったのかしら？　彼の弾丸が歴史上ロストした弾丸と、呼ばれているのは、弾丸の所有権を取り上げられて、暗殺されたからね」

伊佐崎は、腕組みをして「でもね・・・」と呟いた。彼は、一つの仮説を立てていたが、それを立証することが難しいと思って、話を切り上げようとした。

「伊佐崎さんの考え、最後まで聞かせてください。自分の考えが、間違っていたら格好が悪いとか、思っているのでしょうけれど、それって、私たちに失礼だわ。私たちに話を聞かせれば、見えていないことも、見えてくるかもしれないでしょう？」

鈴子が言うと、伊佐崎は、しばらく考えた後、意を決したように話し始めた。

「房江さん・・・いや、教団が南方暗殺に動くことは、犯人にとって予測可能だとしても、教団が南方を殺害する確証はなかったはずだ。私は、房江さんをスケープゴートに、真犯人が老人を殺害したと、考えているのだよ。犯人は、教団が彼女に、南方の暗殺を命じたことを知って、彼女より先回りして老人を殺した。そうすることで、南方は確実に抹殺できるし、犯行を彼女に押し付けることもできる・・・でもね、教団が南方を暗殺したとなると、田村を殺した動機と、南方を殺した動機は、別の道理が働いてしまう・・・」

「南方を殺した動機は、田村を殺された報復でしょう？」

と、鈴子は、伊佐崎の真意を汲取ることなく即答したが、二人の話を黙って聞いていた健吾は、妹の話を遮った。

「田村殺害は、弾丸を奪うこと、資格者になることが動機ならば、南方を殺した動機が見えてきませんね。やはり、新たな資格者が現れたので、教団が裏切り者に報復をしたのでは？　田村殺害犯と南方殺害犯を同一犯と考えるのは、無理がありますよ。教団が南方の暗殺を企てていたのなら、その事実を知る人間は限られてきます」

健吾の疑問には、鈴子も「そうですよ」と同意した。

「君らの言うとおり、同一犯でないのなら、確かに二つの事件は、

別の道理で動いていると、考えて良いだろう。私にも、同一犯だとすると、南方を殺した動機が解らない・・・」
「一度しか会ったことのない、彼女の無実を信じるのは、どうしてなんですか？　彼女、そんなに美人でもなかったわよ」
　鈴子は、同一犯を頑なに主張する伊佐崎に、言い表せない不快感があった。
「彼女が警察ではなく、私のところに電話をしてきたのは、鈴子さんが言ったとおり、私に助けを求めていたと思う。彼女に送ってもらった、南方の寄稿文やインタビュー記事、ご丁寧に付箋が貼られていたが、老人の輝かしい歴史書というべき、それらを編纂（へんさん）してくれた彼女には、老人に対する愛情を感じた。私は、彼女が老人を本気で尊敬していたと思ったよ」
　鈴子は、南方殺害現場に向かう車中で、電話してきた理由を「助けてほしいからだ」と、慌てる伊佐崎に言っていた。
「彼女は、教団からの暗殺命令に、自分が応じなくとも、いずれ誰かに老人が殺されると、知ってしまった。それに、そんな重大なことを聞かされ、彼女自身も命が危険にさらされた。追い込まれた彼女は、老人を殺害しようとしたとき、既に何者かによって、老人が殺されていた・・・彼女は、私に復讐だと電話をかけてきたが、その理由を「私を騙した男なら、貴方にも」と言った。彼女の行動原理は、老人の教団への裏切りではなく、個人的な裏切りを意味している。彼女は、老人が自分のことを愛していると、知っていたからこそ、田村が殺される原因となった、弾丸の後継者に選んだことを、老人の裏切りだと見誤った。彼女にとって忌まわしい弾丸、それを田村に委ねた老人は、殺されて当然の報いだと考えたのだろうね」
「彼女が殺していないのなら、南方を殺した犯人は、恋人を殺した犯人かもしれないのよ？　なぜ彼女は、殺してもいない南方の犯行を自供したの？」
「二人の男を亡くして、自殺まで考えていたのだから、失望感や自責の念とも言えるが・・・彼女は、私の問いかけに「自分が殺した」

と、一度も答えなかった。そして、私なら、事件の謎を解いてくれると、言っていた。彼女は、『伝説の弾丸』を探っていた私に、事件の解決を託して、愛してくれた男たちと、舞台から降りようとしている」

伊佐崎は、房江の心情を読み解き、論拠に乏しい捜査を続けようとしていた。もしも、話を聞かせた相手が、西田山のような本物の刑事だったら、一笑に付していただろう。

「私、なんとなく、彼女の気持ちが解る気がするわ」

鈴子は、伊佐崎が事件絡みなら、他人の心情を深く掘り下げられるのが、不思議だった。そうした心理分析の一部でいいから、自分に向けられた想いを理解できないものかと、じれったい気持ちにもなった。健吾は、何も答えなかったが、伊佐崎の考えに同意していた。

「健吾くんの言うとおり、教団が南方を暗殺を企てていたと、知り得た人物は限られている。私は犯人が、弾丸の信奉者だと言ったが、それが教団関係者だけなのか解らない。『七つの弾丸』という名の教義が、『新宿の救いの手』だけの教義でないのなら、教団以外にも、視野を広げる必要がある」

「教団以外にも・・・犯人は、教団関係者ではないのですか？」

「教団には、クシーベロ牧師や、緒方くんのように、異教徒も紛れ込んでいる。教団関係者の中にだって、弾丸の信奉者がいるのは、確かだろうね。少なくとも犯人は、教団が南方の暗殺を指示したと、知っている人物なのだから、教団での地位を持っている可能性がある」

伊佐崎は、健吾に早合点しないように、釘を刺した。

「そういえば、ロシア人のチェコフ牧師は、ほかの牧師たちと、違った雰囲気だったわ・・・クシーベロ牧師から聞いて、私が異教徒だと知っているはずなのに、ほかの牧師たちが、教義を理解していないと、愚痴をこぼしていたわね」

鈴子は、唇に指を押し当てて、チェコフ牧師が片言に「ココノ、

ボクシタチハ、キョウギヲ、リカイシテイマセン」と、言ったことを思い出した。
「真犯人がいると仮定しても、南方殺害の動機が解らなければ、その存在を立証することが難しい。前任者の南方を殺すことで、犯人が得たもの、守りたかったもの、それを掴むことが当面の課題となる。君たちにも、私の捜査を手伝ってほしい」
伊佐崎の言葉を聞いた健吾は、単独捜査を好んでいる彼から、認められた気がして嬉しかった。彼は「もちろんですよ」と、機嫌よく応えた。
「私も手伝うけれど、条件があるわ」
鈴子は、手伝うことに異論がなかったが、どうしても伝えておくことがあった。伊佐崎は、彼女の申し出に身構えたが、
「これからは、隠し事を絶対にしないで、思ったことを何でも言ってください。私たちは、チームなんですよね？」
「そうだ、私たちはチームだ」
と、満足そうに言った。
健吾は、霞ヶ関の地下駐車場に、車を駐車した。鈴子は、警視庁の入口で、警備員に呼び止められたものの、伊佐崎と健吾が警察手帳を見せて、事件の関係者だと、そのまま捜査一課まで彼女と同行した。
健吾は、捜査一課の田上課長に挨拶をすると、伊佐崎と同行する許可を願い出て、自分の妹も紹介した。
田上は、岩壁兄妹に、曖昧な返事で応えると、伊佐崎を呼びつけた。
「伊佐崎くん、わざわざ長野県警の刑事と組まなくとも、南方殺害の捜査は、歌舞伎町の事件と別に、捜査一課でも担当するのだから、西田山くんたちと合流したら、どうなんだ？　それに、なんで彼の妹さんまで・・・まぁ、可愛らしい女性だから、君が連れ回したい気持ちは、解らなくもないが・・・公私混同は、いかんよ」
田上は、言った。西田山は、南方殺害を連続殺人だと認めず、捜

査一課で捜査本部を立ち上げていた。この手の根回しは、正論を振りかざす彼の得意技だった。当然、公安部は、田村殺害との関連性を主張し、捜査一課の捜査本部に、圧力をかけてくるだろうが、それまでは捜査一課の権限の中で、捜査もできるし、被疑者である房江の身柄も確保できる。

「私は、歌舞伎町の事件で、選任を命じられていると思っていたが？　西田山の捜査方針では、南方殺害と別件なんですよね」

伊佐崎は、自分が南方殺害と別件で動いていると、詭弁を使った。

「お前らだって、犯人が教団関係者だと、疑っているのだろう。それに、西田山くんが公安部に、被疑者の引き渡しを渋ってるのは、お前の入れ知恵だろうが、何の意味があるのか、ちゃんと報告しろうよ。社会人なら、報連相（ほうれんそう）だよ、報告、連絡、相談、報連相って言葉を知っている？」

田上は、意地を張り通そうとする伊佐崎に、呆れた口調で言った。

「課長！」

伊佐崎は、脅かすように叫んで、田上の肩を組んだ。

「被疑者は逮捕時に、自殺を仄めかしていましたが、このまま公安の連中に引き渡して、独房で自殺でもされて、その責任だけは、君に回されても良いのかね。降格くらいで済めばいいけれど、場合によっては、マスコミに吊し上げられて、懲戒免職だって有り得る。そうなったら、退職金ももらえないし、再就職だって難しい。西田山は、賢い奴ですよ。上司をかばって、進んで泥をかぶっている」

と、伊佐崎は、田上の耳元で、恫喝するように囁いた。

「そうなのかい？」

田上は、伊佐崎の顔を見ながら、真顔を聞き返した。

「そうですよ」

伊佐崎も、真顔で答えた。

「お兄ちゃん、伊佐崎さんと課長さんは、何を話しているの？」

鈴子が、健吾に聞くと、彼は両手を挙げて「さぁ？」と答えた。

「県警への捜査依頼は、君の名前を使っているのだから、彼を空手

で返すわけにも、いかないだろう？」
「わ、分ったよ、君の勝ちだ。岩壁刑事の捜査参加は、適当な理由を報告するから、君らのしたいように捜査すればいいさ・・・本当に、事件を解決できるんだろうね」
田上が心配したが、伊佐崎は両手を挙げて「さぁ？」と答えた。
伊佐崎は、自分の席に戻ると、岩壁兄妹を両隣の席に座らせた。
「私は、これから教団本部に向かって、事件が終わったと、教団の牧師たちに聞かせようと思う。もしも、彼らの中に犯人がいるのなら、弾丸が使われたことに、動揺をしないはずだ」
「伊佐崎警部、事件に無関係な人間も、動揺はしないですよね？」
健吾が言うと、伊佐崎は小さく頷いた。
「教団は、『七つの弾丸』の伝説を教義としており、自分たちの教義に準じて、南方を権力者に仕立てた。彼らが、弾丸の動静に、無関心なはずがない」
「教団は、房江に南方殺害を命じた時点で、弾丸が使用されても、構わないと思っているはずよ」
「いいや、彼らは、『伝説り弾丸』が新たな資格者の元にあると、考えていたはずだ。田村を殺した犯人は、田村から『伝説の弾丸』を手に入れており、南方の手元には残されていない」
伊佐崎は、南方を貫いた弾丸は、偽物だと確信していた。弾丸を偽物と前提しなければ、弾丸の系譜が途絶えてしまうからだ。
「けれど、房江は、凶器の弾丸が、南方の持ち物だったと、証言しています。彼の所持していた、回転式銃に込めて、使用したと言っていますよ」
「その証言を信じれば、田村を殺した犯人は、弾丸を持ち去っていなかったことになる。ここで明らかになるのは、房江に南方を殺させるのが、教団の総意だったのかという疑問だ。南方が田村殺害の凶器『伝説の弾丸』を所持しているのなら、田村を殺した犯人は南方だと、房江を焚き付けたのではないかね」
「恋人を殺した凶器ですものね・・・あれ？　それなら『伝説の弾

丸』の偽物を用意したのは、教団ですよね？　南方が弾丸を所持していなければ、房江に殺させることが、出来ないですよ」
「だから、教団の総意は、南方の暗殺ではなく、裏切り者に罰を与えることだった。教団の総意を捻じ曲げて、房江を唆した人物こそ犯人だよ。もしも、南方が弾丸を所持しており、『強欲』の使用を認めたのなら、弾丸を持っていない教団には、彼の罪を裁くことが出来ない。本来ならば、南方の手に弾丸が無ければ、殺せという命令だったはずだ」
「それを逆に伝えて、弾丸を持っているのなら、殺せと命じたわけですね。しかも、その弾丸は、犯人が用意した偽物だった・・・」
「『伝説の弾丸』による、新たな指導者を得るのが、教団の目的ならば、最後の弾丸を失うつもりは、少なくともなかったはずだ。だからこそ、教団の牧師たちは、南方の殺害に、弾丸が使われたと知れば、かなり動揺するはずだ。もちろん、真相を知っている犯人が、そこにいなければね」
「なるほど、確かにそうですね」
「偽物の可能性に、もっと早く気が付いていれば、回転式銃を公安の連中に渡したりしなかった。それに彼女が、本当に引金を引いたのかも、怪しいものだよ」
　伊佐崎は、悔しさを隠そうとしなかった。
「公安部は、同じ警視庁の組織なのに、なんで捜査情報を隠しているのかしら？」
　鈴子が言うと、健吾が「余計なこと言うなよ」と、田上が睨んでいるので、慌てて妹の口を塞いだ。
「君たちには、麻子さんと会って、最後の弾丸が使われたと、話してきてほしい」
「麻子さんを疑うような真似は、出来ればしたくないわ」
「事件が終わったと言えば、彼女は笑顔を見せるかもしれないよ」
　と、伊佐崎が言うと、鈴子は首を捻った。
「それって、麻子さんが犯人ってことですか？」

「違うよ。さっき僕が、事件に無関係な人間も、動揺しないって言っただろう」
健吾は、妹の浅はかさが、恥ずかしかった。
「それなら麻子さんに、最後の弾丸が使われたと伝えることに、どんな意味があるのよ？」
「麻子さんが、鈴子さんに『七つの弾丸』の伝説を聞かせたことに、何かしらの意味があるのなら、事件が終わったと伝えたら、次の行動に出るはずだ」
伊佐崎は、麻子が鈴子を利用していなければ、彼女の知識が、事件解決の役に立つとも言った。
「解ったわ」
鈴子は、電話の忠告で、麻子のことを遠ざけたことに、心の何処かで罪悪感があった。伊佐崎の提案どおり、麻子が事件に無関係なら、最後の弾丸が使われたと、報告することに抵抗はなかった。彼女は、研究対象だった、弾丸が無くなったと、残念がるかもしれないが、悲劇が続くことが無くなったと、笑顔で迎えてくれると信じていた。
伊佐崎は、三人の会話を盗み聞きしている田上のところへ、健吾だけを連れて行った。
「西川口のロシアンパブには、今でも通っているのかね」
「ロシアンパブ？」
伊佐崎の唐突な質問に、田上は眉を顰めた。
「あぁ君がロシア語の勉強と称して、通っていたロシアンパブだよ。課内の人間なら、誰でも知っていることだ。ロシア語で『クシーベロ』とは、どんな意味なのかね？」
伊佐崎は、鈴子から聞いた、異教徒の牧師の正体を探っていた。
「伊佐崎くん、発音は正しくクゥシービィロ、いやクッシィベロだったかな・・・『北』という意味だよ」
田上は、クシーベロを『北』と翻訳した。伊佐崎は、上司のロシアンパブ通いが、無駄ではなかったと褒めた後「相談がある」と言

った。田上は「さっそく報連相だな」と、腕組みをして頷いた。
「捜査四課の黒羽警部が、共助課に左遷される前に、『北なんとか』という名前の部下がいたはずだ。たぶん、現在は退官していると思うのだが、その人物の所在と、現在所属している組織を調べてほしい」
「『北なんとか』だな・・・よく、相談してくれたな。これからも、何でも相談してくれたまえ、報連相を忘れるんじゃないぞ」
田上は、伊佐崎の言葉をメモに取りながら、嬉しそうに言った。
伊佐崎は、岩壁兄妹に麻子の家に向かうように指示して、田上には「何か解ったら、すぐに連絡するように」と言った。そして、彼は、収監中の房江と話してから、教団に向かうと報告をした。
「わかった、ちゃんと連絡するよ」
田上は、捜査一課を出ていく、伊佐崎の後ろ姿に言った。
「上手く使われているだけじゃないか・・・」
神谷は、少し離れた席から、伊佐崎に丸め込まれた田上を見て、呆れたように言った。

第二三話　子羊の婚宴

伊佐崎は、取調室の前で浮かない顔をしている、西田山を見つけると、手を挙げて挨拶した。

「房江さんは、黙秘しているのかね？」

「南方を殺したのは、自分だと言ったきり、何も話そうとしない」

西田山を肩を窄めて、お手上げだと言った。伊佐崎は、取調室の扉に設置された鉄格子越しに、房江の様子を伺った。彼女は、姿勢を正して座っていたが、口を真一文字にして、何も語らないと強い意思表示をしていた。

「お前さんが話せば、何かを語ると思うか？」

「彼女が心を閉ざしていれば、私が何を聞いても、無駄だと思うがね」

伊佐崎は、西田山に素気なく応えたものの、目を背けたくなるような、房江の健気な態度に「やるだけ、やってみよう」と言って、取調室に入った。

「房江さん・・・私が何を聞いても、答えてはくれないのだろうね」

伊佐崎の言葉に房江は、寂しげな笑顔を浮かべたが、やはり何も訴えようとしなかった。彼女には、僅かに残されていた、活動家としてのプライドがあった。国家権力の象徴たる、警察に対する反抗心も、捜査協力を拒む一因だった。

「私は、南方を殺した真犯人が、田村を殺した犯人と同一人物だと、考えているのだよ。君が真実を隠しているのは、二人への贖罪のつもりだろうが、それが真犯人の思惑だと、なぜ気が付かないのかね？」

「・・・私が二人とも殺しました・・・真犯人がいるのなら、ここに連れてくるといいわ」

房江は、数時間ぶりに話したらしく、声がかすれていた。伊佐崎は、なぜ頑なに犯行を自供するのかと、説得を続けたが、彼女は「

私が殺しました」と、壊れたレコードのように、繰り返すだけだった。
「解った。君が二人とも殺したと言うのなら、きっと殺したのだろう・・・」
伊佐崎が音を上げたように、吐き捨てると、房江は不敵な笑みを浮かべたが、次の瞬間、彼は机を叩いて立ち上がり、彼女を見下げた。
「街金融の田村を殺した動機は、金でも借りていて返せなくなったのかね？　それとも見返りに体を求められて、思わず殺したと言うことか？　そうだろうね、田村という男には、殺されるだけの酷い理由があったはずだ。奴は、街金融の元締めと祭り上げられた、単なる成金の思い上がり、その本質は、女にだらしなく、金に意地汚い、下品下劣な男だ。しかも奴は、カルト宗教の信者から票を買い漁り、政治家になろうとした男だ！」
と、伊佐崎が田村の生き方を否定したとき、房江の表情が曇った。
「南方を殺した理由はなんだ？　君らは、『正南会』で寝食を共にしていたが、毎夜、車椅子の老人に、慰み者にされるのが、辛くなったのかね？　君のような年増女には、似合いの相手だと、私は思っていたのだがね」
伊佐崎は、口汚く罵ると、口角を上げてニタニタと、厭らしく笑った。
「田村も、南方も、そんな人間じゃなかったわ・・・貴方のような人間には、この事件の謎が解けるはずなかったわね・・・最低の男だわ」
房江は、伊佐崎を睨みつけた。
「ここから先は、君がどんなに強がっても、もう一人で進むことが出来ない。君が真実の追及を諦めれば、そこで事件が終わってしまう。それでも良いなら、先ほどの内容で調書を、でっち上げようじゃないか・・・君は、まだ闘う理由があるはずだろう？」
伊佐崎は、静かに椅子に腰かけた。

「復讐は、とても虚しいものよ。二人を殺したのは、私で構わないから、もう終わりにしたいのよ」
「それが君の本音かね？」
「伊佐崎さんは、嘘吐きで、ズルい男だわ・・・こんな私に、まだ闘えなんて、よく言えるわね？」
「真実は、勝ち取るものだよ。私には、君のような女性に罪をかぶせて、事件を終わらせることが、出来ないのだよ」
「私が二人を殺したようなものだわ・・・」
房江は、伊佐崎を見据えた目に、涙を浮かべた。
「南方を殺すように言ったのは、教団の牧師だったのかね？」
「・・・牧師を名乗っていたけれど、電話で指示されたので、誰か解らないわ」
伊佐崎は、涙を拭わずに話している房江が、真実を語り始めたと理解した。彼は、彼女に心を開かせるため、大袈裟に詰ったものの、態度を硬化させるかもしれないと、内心は不安でいっぱいだった。彼女が素直に答え始めたので、彼は胸を撫で下ろした。
「回転式銃Ｍ１８５１には、弾丸が二発装填されていたが、弾丸の入手先は、本当に南方が所持していたものかね？」
「一発の弾丸は、駅のコインロッカーを受け渡し場所に、牧師を名乗る人物が用意したものよ。そして、貴方が行方を捜していた、『乙女』は南方が所持していたわ・・・牧師は『乙女』と契りを交せば、罪が赦されると言ったけれど、結局は、二発とも引金を引く前に、貴方に取り押さえられたわ」
房江は、自供内容を否定した。
「房江さん、よく聞いてほしい。その牧師を名乗った人物こそ、田村を殺害した犯人で、南方を殺した犯人だと思う」
伊佐崎が言うと、房江は小さく頷いた。
「本当は、私にも解っていたのよ・・・南方を殺したのは、私に弾丸を渡した男だと、解っていたのよ」
「では、なんで虚偽の自供なんて、馬鹿なことをしたのだ」

「南方総帥が殺された『正南会』には、私と彼の二人しかいなかったのよ。南方総帥を殺そうとした私は、指紋の付いた銃を握りしめていたわ。私には、アリバイもなければ、殺害動機もある。私が、どんな言い訳をしても、警察が踏み込んで来れば、私を犯人扱いするでしょう・・・私の仲間たちも、そうやって逮捕されていったもの」

房江は、警察を信用していなかった。彼女の言葉に伊佐崎は、心が痛かった。

「すまなかったね」

「貴方は、本当に刑事なのかしら？」

房江は、教団から伊佐崎の素性調査を依頼されたこと、南方の裏切り行為を密告していたと言った。事件当夜は、牧師を名乗る人物から、コインロッカーで弾丸を受け取ると、『正南会』に戻り、老人が書斎に入るのを確認した。彼女は、シャワーを浴びて身綺麗にしてから、南方の殺されていた書斎に入り、まだ息のあった老人と会話したと、伊佐崎に話してくれた。

「君は、弾丸を二発込めたのなら、老人と心中するつもりだったのかね？」

「南方総帥を殺した後、私も『乙女』により、神に赦しを請うつもりだったわ」

房江は、袖口で涙を拭取ると、笑顔で答えた。伊佐崎は、呪縛を振り払った彼女に、微笑みを返した。彼は、彼女の心に触れたとき、それを利用した犯人を赦せないと思った。

「話してくれて、ありがとう。そして、年増女と罵ったのは・・・」

伊佐崎が言うと房江は、優しい声で「貴方、嘘吐きだから」と、彼の暴言を笑って許した。

取調室の扉をノックする音が聞こえると、西田山の後ろには、公安特課の女が立っていた。

「すまない、時間切れだ・・・房江さんの身柄を、公安部に移送する」

西田山は、伊佐崎に悔しそうな口調で言った。
「前田敦子(まえだあつこ)くん、公安部の人間が、殺人課の取調室に何の用かね？」
「目黒川明子(めぐろがわあきこ)です・・・伊佐崎警部、私の名前の事なんて、どうでもいいんですよ。山越房江には、南方殺害容疑のほか、騒乱罪の容疑がかかっています。現時点を以て、テロリスト山越房江の身柄は、公安部に引き渡してもらいます」
明子は、房江の腕を掴み乱暴に立ち上げると、移送のために同行した捜査員が、彼女に手錠をかけた。伊佐崎は、南方殺害を騒乱罪と言うのなら、公安部の教団壊滅作戦の全貌も見えてきた。彼らは、騒乱罪を持ち出すことで、事件から捜査一課そのものを排除するつもりだ。テロ事件は、公安部と捜査四課の専権となり、捜査一課の権限が及ばない事件になる。公安部は、教団壊滅作戦を開始する前に、障害となる捜査一課の退陣を迫っている。
「房江さんが、テロリストだと！」
伊佐崎は、取調室の入口に立ちはだかった。
「山越房江は、学生時代から極左集団の集会にも参加しており、学生運動に傾倒していました。公安部では、彼女がカルト宗教『新宿の救いの手』に入信し、政権与党の幹事長だった南方総帥の側近となったときから、マークしていた人物です。今回の事件は、カルト集団の内ゲバだと、捜査しているのですよ」
明子が言うと、房江は小さな声で「もう、いいわ」と、掴みかけた希望を目の前で砕かれた気がした。
「南方が殺されたのが、田村を殺された教団の報復だと、内ゲバだと言っているのか？　君ら公安部は、都合の良い事実だけを積み上げて、真実を覆い隠そうとしている。明子くん、愛する二人を失った彼女に、これ以上の責苦(せめく)を与える権利が、公安部のどこにあるのかね！」
伊佐崎は、西田山にも助けを求めたが、首を横に振って応じなかった。
「これ以上の妨害行為は、処罰の対象になりますよ」

明子は、伊佐崎を押し退けると、捜査員に房江を連れて行くように指示した。
「真実は、勝ち取るものだ・・・」
伊佐崎は、連行されていく房江の後ろ姿に言った。
「お前さんは、彼女から真実を託されたのではないのか？」
西田山の言葉に、伊佐崎は頷いた。
「お前さんの軽んじていた組織の力は、こんなにも絶大なのだよ。あちらさんが組織力を行使してきたのに、いつまで単独捜査で解決できると、思っているのなら慢心でしかない。公安部の小娘は、騒乱罪と言っていたが、その行き着く先には・・・」
「解っているよ。公安部の連中は、教団に破防法を適用するつもりだろ。国家公安委員会の勅使ならば、そんな隠し玉を持っていても、不思議ではないが、だかが新興宗教を掃討するため、破防法を適用するなんて、ナンセンスだよ」
伊佐崎は、西田山を睨みつけた。彼が、房江を連行する公安部に、何の抵抗もしなかったからだ。
「公安部は、捜査一課の西田山の元に、あんな小娘を使いに寄こしたんだぞ。私が悔しくないと、思っているのなら、お前さんの人を見る目も、怒りで濁ってるんではないか？　ここで小娘と争って、事件解決が出来るのなら、どんな手を使っても阻止しただろう」
西田山は、振るえる握り拳を伊佐崎に突き出した。
「私は、これから教団関係者に、会ってくるつもりだ」
「お前さんのことだから、何か勝算があるのだろうね」
「君は、どうするのかね？　このまま公安部に、席を譲る気ならば、これ以上は迷惑を掛けられない」
伊佐崎は、西田山の拳を見て、冷静さを取り戻した。
「捜査本部は、本庁の外に設置することになるが、この事件は、我々で解決しようではないか。今夜、烏にも声をかけておく、奴は昨晩の事件で、狙撃班からの情報を得たと言っていた。奴の情報が、私の想像通りならば、各部課の協力も得られるはずだ。公安の目の

届かぬところに、有志で集合しよう」
西田山は、いつになく真剣な顔で言った。伊佐崎は、彼が上司や権力に、阿るだけの男ではないと、知っていた。
「解った。今夜の集合場所は、私が決めて連絡しよう。君の行動範囲では、公安部に突き止められるのも、時間の問題だからな」
伊佐崎は、霞ヶ関周辺でしか飲み歩かない、西田山に警察関係者のいない店を探すのは、苦労するだろうと笑った。彼は、集合場所が決まり次第、メールすると約束した。
伊佐崎は、東京メトロの桜田門から市谷駅で、総武線に乗り換えると大久保駅に向かった。大久保駅に着く頃には、日も傾いて、暑さも幾分和らいだが、それでも『新宿の救いの手』教団ビルまで歩けば、汗が滴り落ちた。教団ビルは、周辺の雑居ビルと同様ひっそりとしており、ビルに掲げられた教団名が無ければ、そこが宗教組織の本部だと、誰が気付いただろうか。彼は、想像より小さなビルに、拍子抜けした。
教団ビルの入口に置いてあった、教団勧誘のパンフレットには『信者は世界各地に百万人います！』『神の言葉を聞いてください』『ヨガ教室も随時会員募集中！』など、いかにも新興宗教と言った謳い文句が並んでいた。伊佐崎は、教団の目指しているものが、メシアの再誕だとか、世界統一宗教などと聞かされて、もっと陰謀めいた秘密組織を想像していた。
「公安部は、こんな教団を相手にして、何を得ようと画策してるのかね」
伊佐崎は、教団ビルの警備員に警察手帳を見せると、責任者を呼び出してもらった。警備員は、牧師たちに内線を繋ぐと、礼拝堂に集まっているので、案内するように言われた。
「警察の者ですが・・・」
礼拝堂では、チェコフを中心に、五人の牧師たちが車座になっていた。牧師たちは、伊佐崎が現れると、少し慌てた様子を見せたが、若い牧師が立ち上がって、チェコフにロシア語で彼を紹介した。彼

には、ロシア語で何と紹介されたのか、解らなかった。
「ミナミカタサンノ、ソウギノ、ソウダンヲ、シテイマシタ」
チェコフは、笑顔で握手を求めてきたが、伊佐崎を見る目は、訝しげだった。
「南方氏が亡くなったのは、国家の損失であり、教団にとっても大きな痛手なのです。教団は、彼の政界進出とともに、成長してきましたから、同志のような関係でした。世界平和を理念に持つ、我々の教義にも理解を示し、賛同もしてくれました。本当に、惜しい男を亡くしました」
牧師たちの中で、もっとも年老いた男は、ほかの牧師に先んじて、伊佐崎に話しかけた。どうやら、彼は、牧師たちのリーダー格のようで、彼の一言一言に、ほかの牧師たちが頷いて、「そのとおりだ」と言わんばかりだ。
「南方さんは、亡くなったのではなく、何者かに殺されたんのですよ。犯人は、教団の信者で、南方さんの秘書をしていた、山越房江さんです。彼女は、教団から紹介された仕事だと言ってますが、皆さんご存知の方ですよね？」
「教団から紹介した仕事？」
「もちろん、南方さんの秘書の事ですよ」
「えぇ、信仰に熱心だった彼女が、どうして人殺しなんて、罪深いことを行ったのか。そのことについて、我々も話し合っていたのです」
伊佐崎の質問に答えたのは、やはり長老の牧師だった。
「警察としては、田村さんに続いて、南方さんまでも銃殺だったことに、疑念を抱いているのですよ。日本での銃犯罪は、昨年一〇件なのです。銃により死亡した日本人は、一億二千万人に対して一〇人です。日本人全体で見ても、その確率は一千二百万分の一なのです」
伊佐崎は、大袈裟さに同じ数字を繰り返して、わざと驚いた顔をした。

「・・・刑事さんは、我々に何が言いたいのかね？」
「銃で殺される確率は、全くの無関係に人間でさえ、何千万分の一と言うことです。教団の信者だったお二人が、銃で殺される確率は、限りなくゼロですよね」
　伊佐崎の挑発的な言葉に、牧師たちが色めき立った。
「信者の田村氏が殺されたことが、南方氏の殺された因果律にあるのなら、我々のように、神に仕える者は、彼の生まれ持った業（カルマ）だと、解釈するでしょうな」
「南方さんが殺されたのは、前世の因果応報ですか。いかにも宗教家らしい、宗教的な解釈ですね。業とは、輪廻転生により死でも失われず、永遠の因果律にあると言いますね。まぁ、いいでしょう、今回の事件で、その業も断ち切ることが、出来たのだから・・・」
　伊佐崎は、牧師たちの表情に注目した。若い牧師は、チェコフの通訳を務めていたが、ほかの牧師たちは、彼の言葉の意味を理解しようと、耳打ちを始めた。
「どうやって業を断ち切ることが、出来たのか興味深い話です」
　長老の牧師は、言った。
「今回の事件でも、例の弾丸が使われたのですよ・・・『七つの弾丸』の伝説に登場した、最後の弾丸が使用されました。この事件は、犯人も自供しており、無事に解決しています」
　牧師たちは、小声で話し合っていたが、伊佐崎が聞き取れたのは「そんな馬鹿な、なぜ彼女が・・・」「・・・彼が『乙女』を持っていたのなら・・・」「・・・何かの間違いだろう」だった。長老の牧師でさえ、動揺を隠せない様子だった。そして、若い牧師から通訳されていたチェコフは、一瞬だけニヤリと笑ったが、どの話に反応したのか、解らなかったので、伊佐崎は内ポケットに向けて、咳払いをした。
「刑事さんは、その意味を知った上で、我々に話しているのなら、教団の信仰を冒涜するものだ。『浄配』の候補たる『乙女』との契りが、女により執り行われたと侮辱するのなら、我々の教義を侮辱

するのに等しい！　貴様のような破廉恥な人間が、神聖なる礼拝堂に、足を踏み入れて良いわけがない・・・悪いが、今夜はお引き取り頂こう」

伊佐崎は、牧師たちの想像以上の動揺に、少し混乱してしまった。

「ち、ちょっと待ってくれ、弾丸で罪を罷免されたエヴァ・ブラウンも、女性だったはずだ」

「汚らわしい女が『浄配』の力を得ようなんて、生命への冒涜だと言っているのだよ。教義を解せない愚か者には、女が引金を引いた、事の重大さが解っておらぬようだ」

長老の牧師は、先ほどの警備員に、伊佐崎を摘まみだすように言うと、敵意を剥き出して隠そうともしなかった。彼らにとっては、南方が『伝説の弾丸』で殺されたことが、よほどの禁忌だったようだ。その様子をチェコフは、黙って見ていたが、警備員に羽交い絞めにされた伊佐崎に、舌なめずりをして見送った。

伊佐崎は、教団ビルから追い出されると、警備員に「令状を持って来い」と、不愛想に言われた。彼は、乱暴な扱いに戸惑ったものの、予想以上の収穫があったと満足した。彼は、内ポケットからICレコーダーを取り出すと、チェコフと若い牧師の会話を再生した。

『Этот инцидент также признался, уголовного【ゴホン】 и была успешно решена.』

伊佐崎は、咳をしてマーキングしたカ所、『признался, уголовного【ゴホン】』の部分を何度も聞き直したが、ロシア語を理解することが出来なかったので、田上に報告しようと考えた。

「あの外人牧師、何を笑っていたんだ？」

伊佐崎は、街灯の明かりの中、西田山との約束を思い出して、新宿の『馬小屋』に席を予約しようと思ったが、桜花に裏切られて、黒羽と鉢合わせしたことを思い出した。それに彼女の店は、人数が集まるに少々手狭な気がした。携帯電話で鈴子を呼び出すと、麻子

の家での話を終えて、本庁に戻っている最中だと言った。
「鈴子さん、今から予約の取れる会議室か、個室の用意できる店で、捜査会議を開きたいのだが、なかなか良い店が思いつかなくてね。学生の君の方が、色んな店を知っているだろう。申し訳ないが手配してくれないかね」
「構わないけれど、本庁の会議室を使えないの？」
「公安部の連中が、こちらに圧力をかけてきたので、彼らに行動を読まれたくないのだ。今後の対策もあるので、霞ヶ関から離れていて、新宿の教団に近い場所、いつでも集合し易い場所だと助かる」
「何人くらい集まる予定なの？」
「そうだな・・・西田山に確認して、折返しメールするよ」
伊佐崎は、鈴子との電話を切ると、携帯メールで西田山に参加メンバーを確認した。
西田山の返信は『お疲れ様です。参加者は、次の八名。捜査一課：西田山、神谷、関根、捜査二課：梶谷、捜査四課：黒羽、磯川、灰谷、鑑識：相場』とあった。
伊佐崎が注目したのは、参加メンバーに捜査二課の梶谷直美女史が、参加していたことだ。彼女は、疑獄事件のスペシャリストで、政財界の裏事情に精通した、伊佐崎や西田山と同期の出世頭だった。捜査二課を代表する名刑事として、辣腕を振るっている彼女をメンバーに引き入れたのであれば、西田山の公安部に対する怒りは本物だ。
伊佐崎は、鈴子に西田山のメールアドレスと、人数をメールで伝えると、彼女からの返信に苦笑した。
鈴子のメールは『お疲れ様です^^　すずこです★　お店決まりましたのでＢＣＣします。東京都中野区中野６丁目〇〇－〇〇　１５名まで個室有　駐車場有　２４時間営業　詳しくは【食べにＩＣＯブログ】サイトでチェック！　こちらは、お兄ちゃんと二人ですが、おがた先輩にＰＣを届けてもらいます^^　先輩は教団の元信者なので質問がある方は、ぜひ何でも質問してください。Ｐ．Ｓ．

チョコレートデニッシュが美味しいお店です。寝不足気味の方には超おススメです★』と、彼女らしい内容だった。
伊佐崎は、鈴子のメールから住所のみ抜き出して、黒羽にもメールした。
「ファミレスが捜査本部とは、さすがの公安部の連中も、見つけることが出来ないだろうね」
伊佐崎は、タクシーを捕まえると、早稲田通り沿いのファミレスに向った。車中で彼は、教団のパンフレットに目を通しながら、牧師たちが「汚らわしい女」と、言ったことに疑問を感じた。教団の牧師たちは、『伝説の弾丸』を失ったことより、女性が引金を引いたことに、動揺しているようだった。彼の偏見だが、女性に対しての戒律が厳しいのであれば、カトリックの神父に近いのではないのか。
「お客さん、『新宿の救いの手』に興味があるのかい？」
タクシーの運転手は、教団のパンフレットを眺めていた、伊佐崎に言った。
「運転手さんには、牧師と、神父の違いが解るかね？」
「神父は、旧教の聖職者で、牧師は、司祭職を否定した信者のまとめ役ですよね。詳しいことは、解らないけれど、もしも『新宿救いの手』の話なら、以前に女性の指導者もいたので、あそこは牧師でしょうね」
「確かに、女性の神父は有り得ないね」
「女性牧師が亡くなった後、旦那さんが牧師を継いでいましたが、後を追うように亡くなってしまってね。昔から私は、この辺りを流していたので、何度か乗せたこともありました。品の良いご夫婦でしたよ」
「夫婦で牧師をしていたのかね・・・ますます、女性を忌み嫌う理由が解らない。女性は、尊い存在だよ。イエス・キリストでさえ、マリアがいなければ、この世に生を得なかった。牧師たちは、男色家の集まりなのだろうか？」

伊佐崎は、チェコフ牧師の舌なめずりを思い出した。彼を吟味するような視線にも、何か意味があったのだろうか。

第二四話　最後の晩餐

帝政ロシアのニコライ二世は、第一次世界大戦がはじまると、内政をアレクサンドラ皇后に託して、戦線へと赴いていた。内政を任された皇后は、政府の人事や政治について、皇帝の高い信頼を勝ち得ていたラスプーチンに、助言を受けるようになったが、それが彼の企みだったことは明らかだ。皇后から権力を移譲された彼は、帝政ロシアの中枢を掌握した頃、弾丸の信奉者たちが「『浄配』に受胎告知の刻(とき)がきた」と、協約を果たせと迫ってきた。

ラスプーチンは、その手に『伝説の弾丸』を二発握りしめて、役目を果たすべき相手に、誰を選ぶべきかと悩みを抱えていた。彼の顔に刻まれた苦悩の傷跡は、弾丸の信奉者たちの声に、日々痛みを増していた。その間、信奉者たちの連れてきた乙女たちは、彼に手籠めにされ続け、その意味を知らなかった者から、肉欲に溺れた聖人と、揶揄されるに至った。それでも彼は、信奉者たちの連れてくる乙女たちに、責務を果たそうとしなかった。

アレクサンドラ皇后は、ヘッセン大公と英国ヴィクトリア女王の次女の娘。ルーテル教会を信仰していたプロテスタントだった彼女は、まだ皇太子だったニコライ二世と恋に落ちたが、帝政ロシアの皇后は、ロシア正教会の正教徒に限定する規定があり、二人の婚姻に宗教戒律が大きな壁となっていた。ヴィクトリア女王は、悩んでいた彼女と皇太子に「二人の結婚が英国王室、ロシア王室の双方の安全保障にもなる」と、婚姻の後押しした。

ニコライとの婚姻の後、正教徒に改宗したアレクサンドラ皇后には、四人の皇女と、皇太子アレクセイを授かったが、皇太子は酷い血友病を患っていた。皇太子の血友病を祈祷したラスプーチンは、血友病の遺伝子が皇后からもたされたと、彼女の自責の念を煽りながら、祈祷により皇太子の病状を和らげた。彼女は、信仰深く非社交的だったため、神の子を名乗る怪しげな祈祷師を神格化していた。

戦線に赴いて主不在の居城に、彼を招き入れるのにも抵抗がなかった。皇后は、素性も知れない男に、権力ばかりか、皇帝へ捧げたはずの貞操さえ、委ねることに熱心になっていた。

「ラスプーチンは、皇帝の寵愛を反故したばかりか、皇后と愛人関係になるなんて、許せない男だ」

表立って皇室批判のできない国民の不満は、側近だったラスプーチンや、アレクサンドラ皇后に向かった。そうした国民の声に、信奉者との約束を蔑ろにしていたラスプーチンも、判断が避けられない状況まで、追い詰められた。

アレクサンドラ皇后や多くの愛人たちは、彼の手で神聖が犯されており、ラスプーチンに残された手段は、ロシア正教徒であったオリガ皇女、タチアナ皇女、マリア皇女、アナスタシア皇女の四人の皇女たちだった。彼は、第一皇女オリガを憑代に、自室で行為に及んだところ、彼女の涙ながらの命乞いに、引金を引く前に神聖を汚してしまった。その後、もっとも美しい皇女と呼ばれた、第二皇女タチアナに恩寵を求めたが、やはり引金を引くことが出来なかった。

ラスプーチンは、タチアナ皇女の神聖な部分に、銃口を押し当てて、自分に課せられた役割を説明し、泣きながら同情を求めたが、彼女の青灰色の瞳に映る、愚か者に気付くと、引金を引くことを躊躇った。彼は、タチアナの神聖を犯すことなく、微かに鉄の味がする銃口に接吻すると、権力の座から退き、弾丸の所有権を放棄することを決めた。ラスプーチンは、マリア皇女と、まだ幼かったアナスタシア皇女に、別れを告げると、仮初の居城を立ち去った。

弾丸の信奉者たちは、多大なる犠牲と、惜しみない協力で祝福した彼が、後ろ足で砂をかけるように、逃げ出したと激怒した。彼らは、ラスプーチンの所有する二発の弾丸の返却を求めたが、一発だけを返却して、残った一発の譲渡を拒んだ。彼は、手元に残された一発が人質になると、協約を一方的に破ったにも関わらず、多くの愛人たちと怠惰な生活を送っていた。しかし、その浅はかな考えが、信奉者たちの怒りを増長させ、協約の一節「所有者は、報復されな

い」との約束事に、「弾丸による報復は、許される」と新たな解釈を付け加えさせた。
「アレクサンドラ皇后は、ドイツ人の娘だ！　皇后は、三国同盟との密約を交している！」
「ラスプーチンは、ニコライ皇帝を戦線に送り出して、帝政ロシア崩壊を狙っているぞ！」
　アレクサンドラ皇后は、母親アリスがヘッセン大公妃であったため、出自がドイツだと言われたが、彼女は、母親が死去した後、祖母である英国ヴィクトリア女王に育てられたため、イギリス人として育てられた。彼女がドイツとの密約で、帝政ロシアを崩壊を企んでいるとは、酷い言い掛かりで、悪意のある噂だ。
　弾丸の信奉者たちは、ラスプーチン暗殺の御膳立てを整えると、彼を食事に呼び出して、毒の食事で持成（もてな）した・・・。
【ラスプーチンは、青酸カリを盛られた食事でも、死なずに川に投げ込まれて、溺死させられた。彼を殺した信奉者は、『暴食』により罪を赦されたのですね】
　若い牧師は、蝋燭の灯りに照らされたチェコフに、ロシア語で話しかけた。
【そのとおりです。彼は、自らの使命を忘れたばかりか、彼を見守り続けた信奉者に、恩を仇で返しました。『浄配』の夫たる務めは、果たさなければならない、所有者の責務なのです。信奉者たちに与えられたのは、次なる後継者を探すことでしたが、彼が弾丸の譲渡を拒んだことで、諦めたのでしょう】
　教団幹部の部屋では、チェコフが若い牧師に、『伝説の弾丸』に纏わる真実を知るべきだと、教団が開祖と崇めているラスプーチンが、なぜ暗殺されたのかを聞かせていた。
【なぜ我が教団は、弾丸の信奉者にとって、裏切り者を開祖と崇めているのですか？】
【それは、彼が非常に人間的であり、教義を戒める背信の使徒だからです。彼がアレクサンドラ皇后の四人の皇女にとった態度は、神

に選ばれた弾丸の所有者に、有るまじき行為ですが、信奉者たちは、背信の使徒である、彼の人間性まで訴追しませんでした。この教団は、彼を殉教者として扱うことで、信奉者たちの寛大な処置を世に知らしめています】

チェコフは、若い牧師の手を取ると、指間に指を這わせた。

【彼は、背信の使徒でありながら、弾丸の殉教者でもあるのですね・・・】

【もっとも有名な背信の使徒は、イスカリオテのユダです。キリストは、彼の裏切りを知りながら、彼に「成すべきことを成すように」と指示しています。ユダは、キリストを捕えるために集まった私兵の前で、キリストに接吻をして「彼がイエスだ」と、合図を送りました。キリストは、ユダの裏切りを知っていたのに、それを咎めませんでした。『ヨハネによる福音書』を紐解けば、彼の裏切りが約束の日のために、必要な通過儀礼だとキリストが知っていたと、解釈が出来るのです】

『ヨハネによる福音書』には、使徒の裏切りが告げられており、正教会の機密制定の晩餐（最後の晩餐）で、キリストは「裏切り者は、私がパンを浸して与える、その人だ」と、ユダにパン切れを渡している。キリストは、ユダの裏切りを事前に知った上で、彼に裏切るように指示しているのだ。ユダは、十二使徒の中で、もっとも愛された弟子だったとの外典も存在している。

【ラスプーチンは、タチアナ皇女に引き金を引けず、銃口に口づけをしましたが、それが彼の『ユダの接吻』だったのですか？　私には、真理を目の前にして、臆したとしか思えません】

【ユダは、キリストの弟子の中で、誰よりも真理を授かった聖人なのです・・・ユダの背信行為は、彼が自殺したことです】

チェコフは、絡ませた指を強く締め付けると、若い牧師が表情を歪めた。チェコフは「ツライデスカ？」と、日本語で聞いた。若い牧師は「・・・神は、私をお救いになる」と、苦悶の表情を浮かべたが、痛みの中に恍惚の極みを探った。彼らは、互いに責め続けな

がら、神の御心に近付こうと、修行に熱心だった。
【もしも、ラスプーチンが引き金を引いていたのなら、タチアナ皇女は、神を宿したのでしょうか？】
　若い牧師が言うとチェコフは、彼を痛め付けていた指を放して、溜息を吐いた。
【皇女は、死んでしまったか、女性としての機能を失うでしょう・・・貴方は、残念なことに、まだ本質を理解していない。神の御心を理解するには、まだまだ遠く及びません。鞭身派の修行は、真理に至る過程であり、痛みが目的ではありません。痛みに快楽を求めるのは、求道者ではありません】
　チェコフは、金盥に注がれた精油に手を浸すと、シルクの布を握りしめた。彼は、その手を蝋燭に翳すと、布を炎が走って、一瞬にして手が火達磨になった。慌てた若い牧師は、水差しで火を消したが、チェコフが落ち着いた様子で、焦げた布を掃った。
【貴方は、老人が殺されたことに、罪悪感を抱いており、私の手に水をかけて、良いことをしたと思っている。そんな貴方の教団は、ラスプーチンを崇めるのに、とても相応しい存在だと思います】
　チェコフは、優しい笑みを浮かべると、若い牧師に自分の掌を広げて見せた。ゴツゴツとした手には、傷一つなかった。若い牧師は、チェコフの手を呆然と眺めていたが、彼の余所余所しい笑顔に気付くと、膝をついて水をかけて、火を消したことを詫びた。
【神の御心のまま、信じるべきでした。私は、俗世の人間です・・・お赦し下さい】
【貴方は、弾丸の信奉者になるべく、私の元で修行の身です。神の再誕は、我々の手で成すべきものではありません・・・ラスプーチンの裏切りも、老人の裏切りも、必要な通過儀礼なのです。我々は、見守ることしか、許されないのです】
　チェコフは、教団に乗り込んできた、刑事の顔を思い出した。彼は、教団の牧師たちに「最後の弾丸が使われた」と、平気な顔で嘘を吐いた。

【彼のような男は、弾丸の信奉者に相応しい。彼のような男が、婚姻の見届け人となるなら、教団の一つや二つ、神に捧げても惜しくない】

チェコフは、足元に平伏して詫びている、若い牧師の手を踏みつけながら、頭を撫ぜた。

【ラスプーチンも、ユダも、等しく神の子です・・・我々は、この世界の終末を、ただ見守るだけでいいのです】

若い牧師は、手の痛みに耐えながら、黙って頷いた。

中野のファミレスに到着した伊佐崎は、店員に鈴子の名前を告げると、店の奥まったところにガラスで仕切られた、個室に案内された。ガラス張りの個室は、店内から中の様子を伺うのに、何の苦労もないと思った。それでも外窓がないのは、外敵からの対処に適しており、まずまずの隠れ家だと、自分を納得させた。

ほぼ伊佐崎と同時に、ファミレスの個室に入ってきたのは、鑑識の相場だった。彼は、捜査一課の西田山に、連続殺人の秘密会議だと聞いてやってきた、ファミレスの違和感に、しばし言葉を失っていた。

「ずいぶんと早い、到着だったね」

「非番だったので、高円寺の自宅から駆けつけました・・・しかし、本当に秘密会議やるんですか？　ここファミレスですよ」

相場は、落ち着かない様子で、伊佐崎の隣に座ると、大きなアタッシュケースから、盗聴電波発見器を取り出して、個室内を歩き回った。店内にいた子供は、彼がヘッドフォン姿で、大きなアンテナを持って、うろつく様に指を指して笑った。

「はいはい、盗聴器の類は、ありませんでした・・・次からは、量販店で買った、小さい奴を持ってきますね。本格的な装備を持ち込んだ僕は、事情を知らない人から見たら、馬鹿みたい映るんじゃないですか。こんな店で仰々しく、盗聴器なんて探してたら、とんだ電波野郎だと思われますよ」

相場が言うと、背後から人影が近付いてきた。

「さすがの公安部でも、ファミレスが捜査本部とは、思い付かないわね。貴方も文句言わずに、これからも手を抜かずに、しっかり仕事なさいよ」

捜査二課の梶谷は、ブラウスの襟元を仰ぎながら、不貞腐れている相場に言った。

梶谷は、オフホワイトのパンツスーツに、真っ赤なルージュが映える、大人の色香を漂わせる女性だ。警察学校では、伊佐崎と西田山の同期生だったが、既に上級試験をパスした才女であり、二人のマドンナ的な存在だった。もっとも彼女は、警視以上の席が空き次第、司法警察員として警視となる身なので、二人が「マドンナ」なんて呼ぶのは、おこがましいことだ。彼女の年齢は解らないが、ノンキャリアの刑事が警視になるには、四十五歳が最短コースであり、彼女が「最短で資格を手に入れた」と、本庁で話題となった。年齢は解らないが、いかに優秀な人材なのか解る。そして年齢は解らないが、同期の三人は同い年だった。

鑑識の相場は、梶谷との直接の面識がなかったが、それでも捜査二課の才女、疑獄事件のスペシャリストと呼ばれている、彼女の登場に思わず敬礼をしてしまった。

「貴方と同じ事件を担当するのは、ずいぶんと久しぶりね。西田山から話を聞いたときに、また三人で仕事が出来ると、思わず胸が高鳴ったわよ」

梶谷は、捜査二課に転属する前、短い期間だったが捜査一課の刑事だった。同期の三人の中で、もっとも殺人課の刑事であることに、熱意と誇りを感じていた彼女は、『女性』という理由だけで、上層部の不当評価に苦しめられていた。警察組織では、保守的な思想が根強く残っており、捜査一課の女性刑事は、お飾りのようなポストだった。それでも彼女は、同期の三人で担当した殺人事件で功績を挙げて、有能な女性刑事の存在感を示し続けた。西田山は、組織内で孤立を深める彼女の良き理解者であり、伊佐崎は、何かにつけて手柄を譲ってくれた。そんな彼女が、捜査二課への転属に従ったの

は、自分を『女性』だと気付かせた、同期の二人の存在が大きかった。

梶谷は、同期の二人を「私を女にした男」と、紹介して物議を醸したことがあった。いつも仏頂面の西田山は、満更でもない様子だったが、伊佐崎と同格に扱われたことに、不満を感じていた。

「梶谷は、どうして今回の事件に、肩を貸すつもりになったのかね？」

「政治と宗教には、裏金が付き物なのよ。それに、公安部の動向にも、不審な点があるので、ちょっと気になるわ。捜査一課の名刑事、三十郎と西田山のコンビなんて、大きな事件に違いない。今回の事件には、〇暴の黒羽くんも、一枚噛んでるって話でしょう？　彼は、私たちの直系の後輩よ、どれだけの実力を付けたのか、興味もあるじゃない」

梶谷は、舌を出して悪戯に笑った。八咫烏の異名を持つ、黒羽を後輩扱いできるのは、本庁の中でも彼女だけだ。彼女が「直系の後輩」と言ったのは、彼らが警察学校の卒業配置で、同じ新宿警察署の交番勤務だったからだ。

梶谷は、黒羽のことを気に入っており、自分の部下に引き抜こうと画策していたが、彼は捜査四課を熱望していた。彼が捜査四課に固執した理由は、卒配での刺激的な新宿勤務が関係していると、もっぱらの噂だった。新宿界隈のヤクザ者は、当時の彼を『暴力警官』だと、所轄署の窓口に逃げ込んだくらいだから、きっと壮絶なエピソードがあったのだろう。

伊佐崎は、ディナーを楽しんでいたファミレス客が、ざわめくのを感じて、入口の方を見ると、西田山率いる捜査一課と、黒羽率いる捜査四課の面々が、お互いに肩をぶつけながら、狭い通路を我先に向かってきた。先頭を歩く店員の笑顔は、心なし怯えていたが、ファミレス客に不釣り合いな集団が、大挙して現れたのだから、致し方ないことだ。相場は「うわー、これは、不味いでしょう」と、言って笑った。腰に三段警棒を携えた、人相の悪い男たちは、違っ

た意味のファミリーにしか見えなかった。
「誰だ！　こんな店を選んだ、ポンスケは！」
黒羽は、個室に入ってくるなり、伊佐崎を怒鳴りつけた。
「公安部の裏をかく店ではあるが、ファミレスを捜査本部にするとは、冗談かと思ったよ」
西田山は、半ば呆れた顔で言った。
伊佐崎は、責められるがまま、愛想笑いで誤魔化していたが、梶谷は、不貞腐れている西田山に「懐かしいわね」と、思い出話を切り出して、煙に巻いてくれた。そして彼女は、伊佐崎を睨み付けている黒羽に「アンタも偉くなったわね」と、先輩風を吹かせて一蹴した。
「なんで、梶谷女史がいるんだよ？」
黒羽は、梶谷の態度に釈然としなかったが、女性相手に威嚇するのは、部下の手前控えることにした。伊佐崎は、彼女の仕切りに感嘆していたが、次の瞬間「ちゃんと仕切りなさいよ！」と、自分にお鉢が回ってきたのは、予想外で驚いた。
「私と、鑑識の相場くん、一課の四人、四課の三人、合計九人ね。これで全員なの？」
梶谷は、集まった刑事たちの顔ぶれを確認すると、伊佐崎に言った。
「いいや、長野県警共助課の岩壁刑事と、彼の妹が来る予定だ・・・それと、元信者だった青年が来るので、捜査協力を申し出ようと思う」
伊佐崎は、元信者の緒方の知識は、教団の教義を知る上で、欠かせないと考えていた。
「この席に着くのは、あと三人追加して、合計で十二人ね・・・」
梶谷は、指を折って人数を確認した。
「伊佐崎さん、この席に着くのが、十二人で良かったな」
黒羽は、人差し指で鼻の下を擦った。
「何が良かったのかね？」

「この晩餐会には、裏切り者がいないってことだよ、解らないのか？　レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』には、キリストと十二人の使徒が画かれていたが、その絵には、十三人目に裏切り者ユダがいたんだぜ。有名な話だよな？」

黒羽は、連れてきた二人の部下に同意を求めた。

「黒羽くんは、センスがないわね。私たち十二人を例えるのなら、『アーサー王伝説』に登場する、彼に仕えた騎士が相応しいわ。この個室に置かれた十三席は、事件解決のため集まった、強者だけが座ることが許された円卓、私たち十二人は『円卓の騎士』なのよ」

梶谷は、ここに集まったメンバーを『円卓の騎士』と、呼び合うことを提案した。これには、黒羽たち捜査四課の刑事が「遊びじゃないぞ！」と、猛抗議したが、西田山が「いいじゃないか」と、彼女の意見を後押しした。

「『円卓の騎士』の十三席目は、ユダの席として忌み嫌われ、魔術師マーリンの魔法により、その席に着こうとする者を寄せ付けなかった。しかし、呪いを恐れずに十三席目に座る騎士が現れ、新たな円卓の騎士が誕生する。私は、この空席に意味を与えるのなら、新たなるホワイトナイトの出現に、期待したいと思う」

伊佐崎は、言った。

「それに『最後の晩餐』は、いかにも不吉だわ」

と、梶谷が言うと、黒羽は「好きにしろ」と渋々同意した。伊佐崎は、梶谷に言いくるめられると、借りてきた猫のように、大人しくなる黒羽を見て、はじめて可愛い後輩だと思った。ただ、それを口にしたり、自分が先輩風を吹かせば、殴りかかってくるとも思った。誰にでも、苦手な相手が存在するが、暴力男の弱点が、年上の女なのは、嵌り過ぎて滑稽だ。

ガラス越しに岩壁兄妹と緒方は、本庁の刑事たちの口論を覗いていたが、落ち着いたところで個室に入ってきた。

「僕たちが最後みたいですね・・・真剣な話をしていたみたいですが、何を揉めていたのでしょうか？」

「つまらん話だから、気にする必要はない」
伊佐崎は、手の甲で煽って応えると、鈴子が頬を膨らませた。
「私たちは、チームなんですよね！」
鈴子が怒ったので、伊佐崎は仕方なく「チーム名で揉めていた」と説明した。
「へー、つまらない事で、揉めていたのね。いい大人が集まって、微笑ましいことだわ」
岩壁兄妹は、終わった話を蒸し返し、事を荒立てることにかけて、一流と言わざるを得なかった。

第二五話　神々の休息

鈴子と緒方は、集まった刑事たちのために、フリードリンクコーナーで、人数分のコーヒーを用意していた。彼女は、お茶汲み仕事を頼まれて、つまらなそうな顔をした。刑事たちは、捜査会議と称して、ガラスの向こう側で、真剣な顔で話し始めていた。この事件の主役は、自分のはずだったと、警視庁の刑事たちの参戦で、置き去りにされた気分だ。

「私はともかく、先輩までお茶汲み扱いなんて、あの人たちは、自分たちの部下と、勘違いしてるわ。それに、あの梶谷とかいうオバサンは、伊佐崎さんに色目使ったり、真面目に捜査する気があるのかしら」

「えーと、なんで僕は、この席に呼ばれたのかな？　彼らは、教団の何を調べてるの？」

緒方は、鈴子から預かっていた、ラップトップを運んできただけで、なぜ自分が呼び止められたのか、まだ理由を聞かされていなかった。彼は、ファミレスの常連客でもあるのだが、今夜ほど異質な集団を見たことがなかった。彼は、ファミレスの店員が、物珍しそうに覗き見る集団に、自分も含まれていることに、恥かしさがあった。

「歌舞伎町の事件では、教団の信者だった田村が殺され、昨晩の事件では、教団の支援者だった南方が殺されたのよ。二人を繋ぐ教団の教義『七つの弾丸』は、この事件を解く鍵だと、言っていたから、先輩に教義の説明でも、聞きたいのかしら？」

「あの教義は、僕のような一般信者が、聞かされる講話じゃないから、詳しく聞かれても困るな。芦木准教の弟子、岩壁さんの方が、僕よりも詳しいと思うよ」

緒方は、最後のコーヒーをトレイに乗せると、肩を落とした。彼は、教団との関わりを、断ちたかったのに、鈴子と知り合ってから、

ますます深みに嵌っている。彼は、彼女が論文とやらを終わらせて、すぐにでも青春を謳歌できる関係になりたかった。
「私に呼び出されたのが、迷惑だったのなら、このまま帰りますか？」
「えーと、鈴子さんも一緒なら、このまま帰りたいけれど、君が残るなら僕も残るよ」
緒方の答えを聞くと、鈴子は「コーヒー運んじゃいましょう」と、笑顔で言った。彼は、彼女が鈍感なのか、自分の恋心を弄んでるのか、笑顔の意味を考えていた。
「・・・以上の事から、犯人の狙いは、『新宿の救いの手』を掌握することではないと、思われるのだ」
伊佐崎は、コーヒーを運んできた鈴子が、全員に配り終えるのを待ってから、話を終えて席に着いた。
「お兄ちゃん、何の話をしていたの？」
鈴子は、隣の席で熱心にメモを取っていた、健吾に小声で確認した。彼は、伊佐崎が『七つの弾丸』の伝説を説明し、南方殺害が教団内の内ゲバではないと、説明したところだと、教えてくれた。彼女は、「そんなの当たり前じゃない？」と、解説してくれた兄に、ぶっきら棒に言った。
「田村が殺された理由は、南方の所持していた『強欲』『嫉妬』の弾丸を奪うこと、『強欲』を使用した理由は、弾丸の資格者となるためよね？　なぜ犯人は、『強欲』を使用して、彼を殺す必要があったのかしら。犯人にとっても、貴重な弾丸だったのに、資格を得るためだけなら、別の殺害方法でも良かったのよね？」
初めて捜査参加した梶谷は、捜査報告を時系列で追っていた。
「犯人が『強欲』を使用した理由は、自分が資格者であると誇示するほか、弾丸による犯罪が罪に問われない、報復が許されないと、この二つの解釈で間違いないだろう。もちろん、彼らの道理に縛られない、我々に向けたメッセージではないのが明らかだ。犯人が発信した情報は、『七つの弾丸』の伝説を信奉する、特定のグループ

に向けたものだと考えている。弾丸の信奉者たちは、田村殺しに『強欲』が使用されたことで、新たな所有者が正式な資格者だと、知ることになった」

伊佐崎は、梶谷の質問に淀みなく答えた。彼は、何度も自問自答したが、田村殺害が信奉者に向けた、メッセージ以外の答えが見つからなかった。だが、この犯行動機は、教義を解した者だけが、理解できるものであり、彼の話を聞いていた梶谷や、ほかの刑事たちが、納得出来なくても仕方なかった。

「『強欲』で銃殺する以外の方法では、弾丸の信奉者に、新たな資格者が誕生したと、伝えることが出来ない・・・そんな説明で、納得できるものなの？」

「しかし、犯人が『強欲』を使用したせいか、繁華街の銃殺事件にも関わらず、犯人像を掴むことすら、出来ない状況となっている」

伊佐崎は、西田山に続きを説明するように、顎を突き出して合図した。

「捜査一課が聞込みを開始したのは、田村殺害から二、三時間後だったが、犯行現場が繁華街だったので、目撃者が霧散していて、事件当夜に得られた証言は、ほとんど皆無だったよ。酔払いのサラリーマンが、歌舞伎町界隈の事件現場に、野次馬的に残っている訳がないのだから、仕方がないと思ったが、客引きや商売女は、現場周辺でいくらでも、捕まえられた。しかし、客引きの連中までも「銃声は、聞いたが犯人を見ていない」の一点張りだった」

「田村は、新宿界隈で街金融の元締めと、呼ばれた男だぜ。そいつが殺されたのなら、組織関係の殺しだと、考えるのが普通だ。客引きや商売女は、下手に関われば、どんな厄介事に巻き込まれるか、解っているから、口を噤(つぐ)んでいるんだ」

「・・・烏のいうとおり、事件当夜に目撃証言が得られず、翌朝から三日間、公安部の仕切りで、昼夜を問わずローラーをかけた結果、多くの目撃証言が集まった」

西田山は、神谷から聞込み捜査のリストを受け取ると、そこに書

かれていた、犯人像を読み上げた。
「性別不詳、身長一四〇～一九〇センチ、身体的特徴は、黒髪、茶髪、金髪、東洋人、白人、黒人・・・多くの目撃証言が集まったが、目撃証言と同じ数だけ、犯人像が出来上がってしまってね。正直、何が正しい情報なのか、さっぱり見当が付かない」
「弾丸の信奉者たちは、犯人のメッセージを受け取って、弾丸の資格者を守るため、しっかり機能したってわけね」
西田山の説明に梶谷は、伊佐崎の説明したとおり、犯人の罪が問われないように、弾丸の信奉者たちが、行動している現状を理解した。彼女は「聞込みの成果は、それだけなの？」と、西田山を問い詰めると、彼は、口髭を撫ぜながら、意味あり気に笑った。
「歌舞伎町の事件は、公安部と伊佐崎に引き継いだが、何も解らないまま引き下がるのも、悔しかったので、聞込み捜査は、神谷と関根に続行させていたのだよ。ここから先の話は、公安部に報告しておらんのだが、聞込み捜査の対象者から、数人に尾行を付けて、五人ほど教団関係者を特定した。彼らが偽証言者ならば、彼らの証言を真逆に捉えれば、犯人像が見えてくると、考えたのだ・・・」
「偽証言者の目的が、捜査情報のかく乱にあるのなら、犯人の身体的特徴は、男なら女、痩せ形なら小太りのように、真逆の偽証をすると、考えたわけです。これ、僕のアイデアですよ」
神谷は、西田山の話を横取りするように、口を挿んだ。神谷の手柄自慢は、いつものことだが、普段の彼を知らない、捜査四課の黒羽たちは「話を続けろよ」と、遅々として進まない話に、業を煮やしていた。
「教団関係者の儀証は、判で押したように、女性、十代後半～三十代、小柄で痩せ形、または、東洋人の外国人男性、十代後半～三十代、小柄で小太りでした。なので可能性としては、西洋人の外国人女性、十代前半、巨漢などの組み合わせも出来ますが、特異な犯人であれば、一般の目撃情報でも突出するので、それらを省いた結果、犯人像は、大柄な男性、三十代以上のマッチングが適当だと思われ

ます」
「なるほどね、教団関係者が弾丸の資格者（犯人）を特定していれば、逆説で犯人像を割出せる・・・なかなかのアイデアじゃない」
鈴子は、神谷の発想を褒めたが、伊佐崎は、納得が出来ない素振りだった。彼の素振りに気が付いた神谷は、何か問題でもあるのかと、食付いてきた。
「神谷の目の付け所は、正しいと思うよ。偽証ができるのは、犯人を知っているからだろうね」
「伊佐崎警部も、やっと僕のことを、認める気になりましたか？」
「私の考えでは、教団が犯人を特定出来ないから、私が「最後の弾丸が使われた」と伝えたとき、牧師たちが動揺したと思うのだ。そうであれば、犯人を特定しており、儀証を行った教団関係者は、弾丸の信奉者だと言えないかね？」
伊佐崎の言った意味が解らない神谷は、何を言ってるんだと、複雑な表情をしたが、彼以外の刑事たちは、今まで見つけることが出来なかった、弾丸の信奉者の片鱗が見えた気がした。犯人の身体的特徴を偽証できるのは、犯人を知っているからだ。教団の牧師でさえ、誰が弾丸の資格者か解らないのだから、偽証の出来た教団関係者こそ、陰で暗躍している弾丸の信奉者に違いなかった。
「そいつらを尋問すれば、犯人が逮捕できるじゃないか。犯人の身柄さえ確保しちまえば、『七つの弾丸』だとか、面倒な問題も片付くことになるぜ。俺たちは、犯人逮捕の仕事が済めば、世界統一宗教だとか、神を作り出すとか、奴らの妄言に、付き合ってやる必要も無くなる」
黒羽は、手っ取り早く、偽証言者の五人に任意同行をかけて、犯人の正体を突き止めようと、提案した。彼の提案には、問題があると、梶谷が食付いた。
「偽証言者に近付くのは、犯人の役回りが解らない限り、止めておいた方が賢明ね。彼らの信仰は、他者の生命を奪うことすら、正当化しているのだから、下手に頭を取りに行けば、どんな結果を招く

のか、予測がつかないわ。組織犯罪捜査においては、組織の全容が解明されないまま、リーダー格の人間を押さえることが、如何に危険なことか、黒羽くんなら解っているでしょう？」
　梶谷は、子供を諭すように言ったが、黒羽は、彼女が犯人と、弾丸の信奉者との関係を、理解していないと、自論を展開した。
「梶谷女史は、重要な点を見逃しているね。犯人と信奉者は、暴力団の親分と子分、軍隊の指揮官と兵隊のような、主従関係が構築された組織ではない。この事件は、犯人が逮捕されれば、彼を慕ってる奴らも、目的を失って瓦解するだけだろうな。奴らの行動は、信仰や教義に従って、行動しているだけで、犯人が偽証を指示したわけでも、奴らが田村殺害を望んだわけでもない」
　と、黒羽が言うと、意外なことに伊佐崎だけが、彼の意見に同意した。
「弾丸の信奉者たちは、過去の歴史を見る限り、約束を履行できないと判断した場合、弾丸の所有者を歴史の闇に葬っている。この事件は、犯人の身柄が確保できれば、黒羽の考えたとおり、組織的な関与の意味が消失して、計画半ばにして瓦解するだろうね。ただし、偽証言者が、弾丸の信奉者の操り人形だったり、末端の構成員だったら、犯人を知らない可能性も高い」
「偽証言者は、我々が表立って動けば、犯人を手の届かないところに、逃がしてしまうことも、考慮するべきだわ。『七つの弾丸』が教団だけの教義でないのなら、国内犯罪と考えるのも、早計じゃないかしら？　黒羽くんや三十郎は、信仰や教義を『ルール』と考えているけれど、人を殺すことを正当化している、彼らの信仰心を軽く、扱わない方がいいわ」
　梶谷は、宗教の歴史において、歪んだ信仰心が引き起こした、迫害や戦争を例えに、犯人を捕まえれば解決すると、二人が安易に考えていると諌めた。
「貴方たちだって、暴走した宗教組織が、この国で起こした毒ガステロを、忘れたわけではないでしょう？　狂人の教祖や独裁者は、

そのカリスマ性で、多くの信者たちを巻き込んだわ。信仰を背景とした、彼らの集団ヒステリーが、どんな結果を齎したのか、忘れたわけではないでしょう？」

梶谷は、事件の扱いを間違えれば、悲劇を繰返すことになると、言った。西田山は、彼女の話を頷きながら聞くだけで、深く考えている様子がなかった。彼だって本来は、犯人の確保を優先するべきだと、二人の意見に賛同したはずなのに、そんな考えがなかったかのように、白々しく彼女に同意して見せた。

「それから、現場周辺のファーストフード店や、居酒屋のバイトなど、偽証の可能性が低い、証言を抜き出したところ、現場付近から銃声とともに、走り去った二人の存在が確認されている。一人は、車椅子の老人で、この人物は、弾丸を渡しに来た南方だったと、考えている。あと一人は、若い女性だが、人物の特定に至っていない」

西田山は、梶谷の話す姿に見惚れていたのが、その姿を伊佐崎が覗いているのに気が付いて、慌てて追加情報を提示して、誤魔化した。彼の話に、鈴子は「麻子さんが現場にいたのかしら？」と、健吾に話しかけたが、兄は「いいから黙っておけ」と妹に、余計な発言を控えるように、忠告した。健吾自身も、銃声とともに現場から逃げた、女性がいたのなら、麻子以外に考えられなかった。

「では、俺からの報告は、南方殺害現場の向かいのビルで、磯川が狙撃班長から聞いた話だ。狙撃班は、公安部の要請を受けたのが、田上課長が伊佐崎警部から連絡を受ける前だった。公安部の連中は、事件前から『正南会』の動静を探っており、南方が銃殺されることを把握していて、見逃していた可能性がある。田村や南方を殺した真犯人は、誰だか解らないけれど、俺たち現場の刑事より、狙撃班の配置を優先したのだから、公安部が、南方殺害の容疑者を殺(け)すつもりだったのは、明らかだろう」

黒羽は、得意気な顔で席を見渡した。彼の情報は、公安部が南方殺害を知っていて、わざと放置したと、いうものだった。公安部が諜報活動で、手にした情報に基づいて、殺害を阻止できたのに、犯

人のされるがままに、放置していた事実を聞かされて、鈴子や緒方が驚いたものの、刑事たちは、動じる様子が無かった。彼女は「公安部は、なぜ殺害を未然に防げなかったの？」と、健吾に質問すると、兄は「盗聴は、違法行為だからね」と、しれっと答えた。

「『正南会』を探っていた公安部は、山越房江の口封じを狙って、狙撃班を手配していたと、考えられるわけだな。公安部の連中は、彼女の口から何を暴露されるのが、怖かったのだろう。彼女は、取調室で犯行を否認したとき、お前さんに何かを託しているのではないか？」

西田山は、伊佐崎の顔を見た。

「房江さんに弾丸を渡した人物は、教団の牧師を名乗っていたが、教団に南方を殺す理由が見当たらない。教団は、信者の田村が銃殺されたばかりで、昨晩のタイミングで、南方も銃殺されたとなれば、自分たちが疑われると、十分に認識していたはずだ。そうなると、公安部が房江さんを犯人に仕立て、銃殺を目論んだ理由は、教団からの南方暗殺指令が、実在したと思わせるためか・・・」

「それは、おかしいですよ。房江が教団の牧師から、依頼されたと自供したから、南方暗殺に教団が関与していると、解ったわけですよね。伊佐崎さんの話は、まるっきり逆じゃないですか？」

健吾は、房江の自供があったから、教団の関与が解ったので、むしろ彼女を生かしておいて、牧師から依頼されていたと、白状させた方が、理に適うと言った。

「私は、彼女の自供があったから、教団の関与が無かったと、確信しているのだよ。南方は、私に弾丸の資格を得るために、殺人を犯すことが必要だと、話してしまっている。これは、教義の本質を知る上で、重要なヒントだったはずだ。田村が殺された理由に、私が辿り付いたのは、老人の情報があったからだよ。教団が老人の裏切りに、何らかの制裁を企んでいたのは、事実かもしれないが、『最後の弾丸』を使用する必要がない。房江さんが生きたまま逮捕され、銃に込められたのが、『最後の弾丸』だと証言が無ければ、教義の

本質が露呈するのを恐れた教団が、口封じに老人を殺したと、考えただろうね」
「つまり、房江が口封じされれば、銃に込められた弾丸が『最後の弾丸』だったと、解らないので、教団の犯行を疑うこともあり得たと、そういう意味ですか？　伊佐崎警部は、房江に弾丸を渡した男が、南方も田村も殺しており、二つの事件が、同一犯の仕業だと考えている。それは、アリバイのない房江の証言を、全面的に採用するってことです。恋人を殺された犯人に、操られたという彼女の行動は、矛盾しているもので、信用に値するでしょうか？」
「南方に疑念を抱いていた彼女は、教団の牧師を騙る犯人に、利用されていたと思う。彼女が南方を殺しており、偽証の可能性がゼロでないことは、十分に理解しているものの、公安部が彼女の口封じを企んだのなら、南方が殺されたのは、公安部にとっても想定外だったのか・・・公安部が真犯人を庇っているとは、想像したくないが、公安部の目的が教団の壊滅にあるのなら、現時点で老人を排除する意味がない」
「公安部の教団の殲滅には、どんな意味があるのですか？」
「まだ解らないが・・・とにかく、公安部が口封じまで企んだ、彼女の証言は、信頼に値するだろう」
　伊佐崎の説明を聞いていた鈴子は、彼が房江の自供を信じて、教団の関与を否定するのが、とても青臭く感じた。普段なら犯人に同情的な健吾に、彼が慎重な捜査を促しているのに、いつもと立場が逆転してる。彼女の複雑な心中を見抜いたのか、隣の席に座っていた梶谷が、肩を叩いて呼んだ。
「聞いたわよ、犯人らしき男から、忠告を受けたそうね」
　梶谷は、周りに聞こえない様に、小声で話しかけてきたので、鈴子も黙って頷いた。
「三十郎は、普段なら徒党を組むような、男じゃないわ。けれど、この事件だけは、さすがの彼にも余裕が見られない、藁にも縋りたい気持ちでしょうね・・・貴女の命がかかっているのだから」

と、梶谷がウインクをしながら言った。
「えーと、僕が口出しすることでは、思うのですが、話を聞いていると、皆さんは『七つの弾丸』の教義が、強制力のある『ルール』だと考えていませんか？」
伊佐崎の話に割り込むように、おずおずと緒方が手を挙げて、遠慮がちに発言した。彼は、一斉に刑事たちが鋭い視線を向けたので、優しい視線を送っていた梶谷だけを見ながら、話を続けることにした。
「お姉さんは、刑事さんの中で唯一、『ルール』が重要だと、捉えてませんよね？　僕も信仰心は本来、規則や約束で縛ることが出来ない、人の自由意思に基づくものだと、考えているのです。刑事さんたちは、教義の側面ばかり論じていますが、『七つの弾丸』の本質は、権力を与えることでも、罪を赦すことでもなく、まして殺人を推奨するものではありません。彼らは、男性を象徴する『弾丸』を、聖母マリア『浄配』に例えており、引き金を引くことで得られた結果が、それがどんなものであれ、ロゴスだと考えているのです」
緒方の話には、ほとんどの刑事たちが、言葉の意味さえ理解できなかった。とくに、小難しい話が苦手な黒羽は、飲みかけのコーヒーを口元に運んだままで、目をパチクリせさた。
「学生さん、頭の悪い俺でも、理解できる言葉で、教えてくれないか？」
「えーと、『ヨハネによる福音書』の冒頭には、「はじめに言（ロゴス）があった。言は神と共にあり、言は神であった」と書かれています。教義より先に、ロゴスありきなのです・・・えーと、ロゴスとは、イエス・キリストの別称なのですが・・・この先は、宗教を理解していないと、説明が難しいですね」
「俺は、無信心なもので、さっぱり解らないね。弾丸の信奉者は、教義に従うのが目的じゃなくて、ロゴスとやらを手に入れるのが、目的だと言ってるのか？」
黒羽は、投げやりな態度で言った。

「哲学においては、ロゴスを論理と解釈して、論理と言語により神に触れようと、神学が発展してきたわ。哲学的な発想で考えればロゴスは、構造としての論理ではなく、世界の構成原理と、捉えられているのよ・・・弾丸の信奉者は、神様を誕生させて、新しい秩序を作りたいってことかな」

鈴子は、読み漁っている哲学書の一節を披露したが、途中で黒羽が睨むものだから、慌ててしまった。彼女は、彼の堪え性のない態度が、大人の癖に恥かしいと思った。

「学生さんたちは、事件を陰から支えている、弾丸の信奉者の目的が、神様みたいな絶対的権力を持つ、指導者を誕生させて、新しい世界を作ることだって、言っているのよね。私たちが『七つの弾丸』の教義に振り回され、その本質を忘れると、重要なことを見逃してしまうと、彼らは言っているのよ」

梶谷は、若い二人に理解を示した。伊佐崎は、彼女の言葉を反芻するように、頭の後ろを三回叩きながら、『七つの弾丸』の約束事を振り返った。そもそも罪を罷免する、権力を約束する、それらは弾丸の所有者が、与えられた役割から、逃げ出さないための縛りだった。彼は「弾丸が作られた背景と、弾丸が使われた背景は、異なっている」と、鈴子に言ったことを思い出した。

「世界情勢は、弾丸が作られてから一六〇年が経っており、一発の銃弾が持つ力は、既に陳腐化している。『七つの弾丸』の伝説は、一八五〇年代に誕生しているが、引き金を引くだけで、命を奪える弾丸が、神の御業に、等しかった時代の遺物でしかない。それでも弾丸の信奉者は、『七つの弾丸』により、新たな世界秩序なんてものを、夢見ているのなら、誇大妄想狂としか考えられない」

「だから僕は、あの教団の教義がカルトだと、何度も指摘したつもりです。狂人たちのルールには、彼らなりの解釈があると思いますが、刑事さんたちまで、カルト教団の信仰や教義に、振り回されているのは、おかしいと思います」

緒方は、鈴子の顔を見ると、一呼吸置いてから「岩壁さんが心配

です」と、言った。彼の重みのある言葉に、健吾が自分を指差したが、彼が首を横に振るので、妹の鈴子のことだと理解して、照れ隠しに鼻の頭を掻いた。

「僕が心配しているのは、アレの持ち主が、神を降臨させるため、神聖な女性を憑代に、どんな手段を用いるのか。男性を象徴すべき弾丸に、『浄配』と名付けている理由は、アレ自体に神が宿っていると、暗示しているのです。そして、アレが殺傷能力を持つ弾丸として、存在していることに、意味があるのなら、神の復活に必要なのは、生贄だと考えています。この件に岩壁さんが深入りすれば、いずれ教団や、アレの持ち主に、目を付けられてしまう・・・『七つの弾丸』の教義については、目的を達成するための手段であって、そればかり論じては、本質に辿り付けません」

緒方は、言いたいことを言い終えたのか、落ち着きを取り戻した。伊佐崎は、弾丸の信奉者たちが、何かを得るために、弾丸の所有者を求めていると、考えていた。だが、彼や梶谷の言ったとおり、信仰心のある者にとって、殉教することに歓びを見出す者もいる。あの日、地下鉄駅構内の毒ガステロ事件、実行犯だった彼らは、何かを得ようと、行動したわけではなかった。宗教家は、自分たちの作り上げた、信仰を絶対的だと、信じているからこそ、社会の脅威になることがある。彼が、熱心に自分たちの信仰を押し付ける、宗教勧誘に嫌悪感があるのは、そのせいだと思った。

伊佐崎は、空になったコーヒーカップを手に取ると、ドリンクコーナーに向った。彼が、新しいコーヒーを注いでいると、後から来た鈴子は、ティポットにお湯を注ぎ、怒った顔で話しかけてきた。

「警視庁の名刑事と呼ばれる、皆さんが集まったのに、たいした情報が出てこないですね。黒羽刑事は、頭悪そうな質問ばかりだし、梶谷ってオバサンは、ニコニコして座ってるだけ、チョビ髭に至っては、部下にばかり仕事をさせているわ」

鈴子は、元信者の緒方の話が、一番まともな情報だったと、刑事たちの程度の低さを批判した。

「まぁ、初回の顔合わせだからね、思惑の違うメンバーが集まったので、お互いに手の内を探っているのだよ。黒羽は、既に教団関係にパイプを構築して、私たちの誰よりも、教団の内情に精通しているだろう。梶谷が参加している理由は、教団の政治絡みの金の流れを掴んで、政界の疑獄事件を立件したいからだ。西田山は、上司の目を盗んで、部下を動かしているのだから、部下の手柄を横取りしないように、気を使っているのさ」

「そんな牽制し合うのなら、集まっている意味がないわよ。どうせなら、皆の持っている情報を共有して、捜査に当たればいいじゃない？」

「認識を共有できれば、いざと言うときに、個別に動くことが出来るのだよ。それに、お互いの思惑が違うのだから、必要のない情報が邪魔になることも、よく理解しているからね。今は、お互いの情報が足枷にならないように、距離を置いているのだ。私だって、芦木警視正の息がかかっている、二課や四課の刑事には、麻子さんの話題をしないつもりだよ」

伊佐崎は、ドリンクコーナーで、注いだコーヒーに口を付けると、鈴子が文句を言いたそうな顔で、睨んでいた。彼は「お行儀が悪かったかな？」と、両肩を上げた。

「伊佐崎さんは、黒羽刑事が教団にパイプがあるって、いつ気が付いたんですか？」

「ブラック・スネークとは、新宿界隈のヤクザ者が付けた、彼の古いニックネームだ。君を襲った、異教徒の牧師が、通信していた相手は、たぶん黒羽だと思う・・・彼が話さないのは、そこに彼の思惑があり、私たちが知ることで、目的が果たせなくなるのだろう」

伊佐崎は、そう答えると、個室に戻っていた。鈴子は、お互いの持ち球を隠して、捜査が進まないのが、汚い大人の事情だと、誤解して受け取った。伊佐崎は、集まったメンバーが、自分たちの思惑に他者を巻き込まず、必要な情報だけを共有していると、諭したつもりだった。

鈴子は、梶谷が配られたコーヒーに、一口も手を付けていなかったので、彼女の分もティカップ持ってきて、アールグレイを注いだ。彼女は、コーヒーが苦手なら、初めに言ってくれれば、良かったのにと思った。

「あら、鈴子さんは、ずいぶんと気が利くのね」

梶谷は、アールグレイに口にして「美味しいわ」と、にこやかに笑った。

「梶谷さんは、黒羽刑事がブラック・スネークって、呼ばれる理由を知っていますか？」

と、鈴子が聞くと梶谷は、自分の唇に指を立てた。

「女の子が、彼をブラック・スネークと呼んじゃ駄目よ・・・彼の足の間には、ヘビがいるのよ」

梶谷は、八咫烏の名前の由来と同じ、由来を教えてくれたので、鈴子は「黒羽刑事は、そこだけが自慢なんですね」と、赤面しながら言った。彼女は、黒羽の眼鏡越しに見える、細い目が厭らしいと感じた。

梶谷は、照れ隠しに笑った鈴子を見て「可愛いわ、ぜひ部下に欲しい！」と、心の中で叫んでいた。女性陣の会話に、なんとなく聞き耳を立てていた伊佐崎は、下品な会話で鈴子をからかう、女性が多い理由に首を捻っていた。

ブラック・スネークとは、黒羽武（くろはたけし）の名前『黒いハブ』に由来している。

第二六話　漆黒の影

鑑識の相場は、数枚の写真を鈴子と緒方を除いて全員に回すと、写真に振られたナンバリング順に説明を始めた。

「一枚目は、田村殺害に使用された銃弾ですが、これは鑑定の結果、弾丸に使われている金属の混合率から、かなり古い時代に作られており、年代測定は、一八〇〇年台と考えられます。ただ混合率を調べてみて解ったことですが、亜鉛の比率が非常に高く、それも混合方法を緻密でありません」

「緻密ではないとは、一体どういう意味なのだ？」

と、伊佐崎が言うと相場は、空のグラスの底から彼の顔を覗き込んだ。

「このように均整の取れた状態では、弾丸は一直線に飛びますが、不均等であれば弾道の中心がズレてしまい、大きなブレが生じてしまいます。つまり、狙ったところに着弾させるのは、難しいでしょうね」

「田村殺害は、ほぼゼロ距離射撃だった理由が、弾道の不安にあったと言うことかね？」

「そうです、昔の弾丸は、金属の混合技術が未熟でしたから、至近距離でなければ、まず的に命中させることが難しかったはずです」

「田村を殺害した犯人は、使用する弾丸が本物の『伝説の弾丸』だと、認識していたということだね」

伊佐崎は、納得したように頷いた。

「次に二枚と三枚目の写真ですが、南方殺害に使われたと思われる弾丸と、薬莢の写真です・・・残念ながら実物は、公安部の方で科総研に持ち込まれてしまい、僕ら本庁付きの鑑識には、写真しか回ってきませんでした・・・この写真すら持ち出すことが、かなり難しかったです」

相場は、前置きをしてから、三枚目の写真を指差した。

「南方殺害に使用された薬莢は、一枚目の薬莢と比べると、施条痕が不明瞭なので、この薬莢の金属硬度が固く、高密度ではないかと思われます。伊佐崎警部が指摘していたとおり弾丸は、『伝説の弾丸』の装飾を模した、偽物だと考えられます」

「そもそも房江さんが持っていた銃は、未使用だったとの自供があるので、相場の見立てが本当ならば、『伝説の弾丸』を偽装した銃弾は、一体誰が使用したのか？　ここでは、異論があると思うが、房江さんが犯人でないと、考えてもらいたい」

と、伊佐崎が言うと鈴子は「やっぱりね」と、房江を庇うような彼の発言に、文句の一つも言ってやろうと思った。梶谷も気になっていたのか、彼女の気持ちを代弁するように手を挙げた。

「容疑者（ふさえ）が、発砲をしていないのなら、なぜ逮捕直後に犯行を否認しなかったの？　それに公安部に移送される前に、硝煙反応を確かめれば発砲していないことは、捜査一課にも解ったはずでしょう。まさか、硝煙反応も確かめずに、引き渡したりしないでしょうね？」

「硝煙反応は、確認しているよ。ただ彼女は、南方の遺体に寄り添っていたからね、硝煙が遺体から付着した可能性もある」

梶谷の言葉には、西田山が慌てて言い返した。

「容疑者からは、硝煙反応が得られたってことでしょう？　ここで房江を容疑者リストから外すのは、視野を狭めることになるわ。三十郎は、ずいぶんとご執心のようだけれど、犯人でないと考える根拠が乏しいわね」

梶谷の的確な指摘に鈴子は、心の中で拍手を送っていたが、自分が何に嫉妬しているのか考えると、単なるヤキモチな気がした。ただ冷静に考えても、伊佐崎が房江を庇う気持ちは、理解しがたいものだった。

「田村殺害と南方殺害は、犯人にとって異質なものだと思う」

伊佐崎は、梶谷の方を見ながら言った。

「異質って何よ？」

「田村殺害には、犯人の動機が存在するが、南方殺害には、動機に

繋がる理由がない。弾丸の資格者だった南方は、犯人同様に正当後継者として、弾丸の信奉者たちが望んでいる、何かを得るために必要な存在だったはずだ。南方は、履行しなかったのか？　履行できなかったのか？　だからと言って、彼を殺す意味がない」
「だけれど、弾丸の所有者だった者は、過去の歴史でも殺されたことがあったのも事実でしょう？　ラスプーチン然り、非業の死を遂げているわ」
「そういう意味では、マフィアの報復のような非業の死が、弾丸の所有者に付き纏っているのは、認めるところだが、たぶん南方が殺された理由は、犯人を知っていたからだと思うね。本来は、犯人が特定されたところで、そのこと自体に意味がないのだが・・・」
「犯人は、弾丸の約束事で守られているから、南方を殺害する動議がない？　だけれど、それは信奉者たちの理屈で、やはり犯人からすれば、自分の犯行を知っている南方は、殺しておく必要があるわ」
「南方が弾丸の所有者だったのなら、彼も弾丸の信奉者であり、犯人が殺す必要がないはずだ。なぜ、南方が殺されたのか？　犯人は、弾丸の信奉者であるのなら、そこに合理的な説明がなければならないと、思っているのだよ」
　伊佐崎は、合理的な説明が出来ないと言ったが、それならば、房江が殺そうと銃に弾まで込めて、南方の書斎に乗り込んだ理由も、理解できていないのかと、梶谷が詰め寄ったものの、彼は「彼女には、老人を撃てなかったと思う」と、言い返した。
「俺も房江が犯人だとは、思えないけれど、アンタみたいに女の話に同情して、言っているわけではないぜ。房江に二発弾丸を渡した理由は、南方を殺させた後、自殺を促してのことだろう。ただ、彼女に老人が殺せないと踏んで、南方殺害を犯人自らが行ったのなら、彼女を生かしておくのは、ちょっとばかり行動に一貫性がない・・・アンタが疑いつつも、言葉に出来ないことを言ってやろうか？」
　黒羽は、伊佐崎が房江に同情していると断言してから、彼女が殺されなかったことに、意味があると言った。

「・・・公安部は、房江さんの狙撃許可を出している」
伊佐崎は、黒羽にバトンを渡すほど、信用をしていなかった。公安部が彼女の口封じを狙っていたのなら、弾丸の信奉者が警察組織内にもいる。彼は、狙撃命令を許可した公安部が、南方殺害にも関与していると疑っていた。黒羽は、その先まで考えているようだが、それを明かすのは、刑事同士の疑心暗鬼を招くだけで時期尚早だ。
「南方殺害は、イレギュラーな事態だったのでしょう？」
「南方が殺害されたことは、教団にとっても、公安部にとっても、不測の事態だったと考えられる。だが、犯人には、南方の存在が邪魔になっていた。色々と考えられるが、南方は、犯人を知っていたから、殺されたのだろう」
「容疑者は、田村殺害犯じゃないから、南方殺害犯ではないのね。黒羽くんの言うとおり、同情じゃなければいいのだけれど・・・」
梶谷は、伊佐崎に言い包められた格好で、発言を終えると、鈴子の煎れてくれた紅茶を口にした。
「教団との関係が浅からぬ芦木警視正も、事件の容疑者になるのか？」
と、西田山が言うと伊佐崎は、軽く頷いたものの、芦木犯人説の断定を避けた。
「弾丸の信奉者である可能性は、認識しておいた方がいいだろうね」
伊佐崎は、鈴子の顔を見ながら、彼女が余計なことを喋らず、黙っているように目で合図した。鈴子は、彼の目配せがなければ、「公安部に犯人がいるの？」と、要らぬ話をぶり返すところだった。刑事たちは、仲間内の不祥事を理解したから、話を深く掘り下げなかったのだ。
「そろそろ返ってもいいですか？」
緒方は、深夜近くまで話に付き合った上、警察内部の陰謀論なんか聞かされて、辟易していた。彼は、鈴子に詫びてから、退席する準備を整えた。
「学生さん、俺の部下に車で遅らせるよ」

黒羽は、部下の灰谷に緒方を送る様に指示すると、二人が出て行ったのを確認してから、磯川に耳打ちをして彼らを尾行させた。
「緒方くんの素性を探るなら、灰谷に任せればいいだろう？」
西田山は、二重尾行の意味に探りを入れた。
「アンタらは、諜報戦を理解していないらしい・・・確かに、この店に公安部の人間がいれば、すぐにでも気付いて対処できるだろうが、俺たちの格好を不審がる一般客の中に、教団の信者が紛れ込んでいる可能性を否定している。学生さんは、何度か個室の外を気にして、キョロキョロしていたが、彼が誰を探していたと思う？　教団を脱会した彼は、教団の信者に狙われていると、不安がっているのだよ」
黒羽は、後から尾行させた磯川に、緒方の警護を任せたのだ。こうした配慮は、暴力団など組織捜査を生業としている、彼らしい気の利かせ方だ。刑事たちは、それぞれの役割と、今後の捜査方法を確認し合うと散会した。
「今夜の話では、裏の探り合いばかりで、ぜんぜん進展がなかったわね」
帰宅を急ぐ車内では、後部座席の鈴子が不貞腐れたように、腕組みをしながら言った。ファミレスに集まった刑事の話は、彼女にとって無意味だった。
「そんなことは、ないと思うよ」
健吾は、今夜の話で事件が整理できたと、妹に説明したものの、鈴子は「お兄ちゃんは、まだ東京に来たばかりだから」と、捜査状況を聞いて新鮮だったのだろと、聞く耳を持たなかった。彼は、機嫌を損ねている妹に、手を焼いていた。
「鈴子さんには、退屈な話だったろうね・・・だけれど、今回が初参加のお兄さんや、梶谷女史には、事件を成立しておく必要もあったし、無駄な情報ばかりでもなかった。例えば、歌舞伎町の事件では、事件現場で南方のほかに、走り去る女性が目撃されていたけれど、君たちは、麻子さんだと直感したはずだ」

伊佐崎は、神谷の報告を聞いたとき、彼らが俯き加減だったことを指摘した。
「確かにあのとき、歌舞伎町で目撃された女性は、芦木麻子だと考えましたが、よく考えてみれば、房江の可能性の方が高いと思いました。彼女は、南方に同行して、歌舞伎町交差点まで行っています」
「そのとおり、彼女の自供を信用しないのであれば、彼女が田村を殺害した可能性が否定できないね」
伊佐崎が同意すると鈴子は、房江が犯人の可能性があると、彼が言ったことに首を捻った。なぜなら、先ほどのファミレスでは、彼が房江の証言を全面的に支持しているように、感じていたからだ。
「伊佐崎さんは、房江の自供を信じているわけではないの？」
「彼女の自供は、信頼に値するものだと、今でも考えているけれど・・・彼女が老人を殺そうとしたように、犯人の手先である可能性は、完全に払拭できるものじゃない。私の考えは、矛盾しているかもしれないが、犯行の可能性がゼロでなければ、容疑者リストから外すべきじゃない」
「さっきの話では、「房江さんが犯人でないと、考えて」と、はっきり言っていたわよ？」
鈴子が詰め寄ると伊佐崎は、気まずそうに後部座席に振り返った。
「私が容疑者の房江に同情した結果、堅物の西田山でさえ、公安部に疑いの目を向けた。黒羽は、もっと深い所で公安部の連中を探っているが、異教徒の牧師の存在とともに、まだ我々に提供する気がなかったみたいだからね」
「房江を庇ってみせたのは、ブラフですか？　西田山警部や梶谷警部が知ったら、絶対に怒られますよ」
健吾は、伊佐崎の悪戯っぽい笑顔を見ると、彼の遣り口に馴れてきたのか、仲間さえ騙すような言動を諌める気にもならなかった。
「やっぱり伊佐崎さんは、偏屈大王ですね。チョビ髭には、公安部が事件に関与しているって、ちゃんと言ってやればいいじゃないですか。貴方たち刑事の話は、回りくどくて、意味が解りません」

鈴子は、伊佐崎から顔を背けて言った。
「公安部に裏切り者がいるのは、あそこに集まった刑事なら、誰もが気が付いていることだよ。けれど、それを認めることは、なかなか難しいものだ。我々が警察組織の一員でいる限り、あちらが正当であれば、こちらが裏切り者だからね。西田山は、こういった事態に不慣れだから、警察上層部が敵になると、自覚させる必要があったのだよ」
「伊佐崎警部が山越房江の容疑を否定したから、西田山警部も公安部に目を向けたってことですね。話が堂々巡りになるより、手っ取り早いかもしれませんが、公安部に捜査対象を絞り込んで大丈夫ですか？」
「私には、犯人が弾丸の正当後継者となり、何を行うのかも解らない。ただ、一つだけ確信があるのは、犯人が弾丸を用いて、弾丸の信奉者たちの信仰心を利用し、何か企んでいるとことだ。それが神様を作るなんて神話めいた計画ではなく、現実的な計画だと考えている。ウチの田上課長は、警視庁にＣＩＡのような秘密組織の存在があると示唆したが、それが『公安特課』ならば、犯人が作り出そうとしている新たな秩序は、警察組織内に誕生する可能性が高い」
伊佐崎は、車窓に流れる夜景を見ながら、近いうちに起こるであろう、公安部の教団壊滅作戦について考えていた。

第二七話　十字軍の足音

伊佐崎と岩壁兄妹の奇妙な同居生活は、事件に何の進展も観ないまま、一週間が過ぎようとしていた。彼らは、パンと飲み物で軽い朝食を済ませると、鈴子を大学に送り届けながら登庁するのが日課となっていた。彼女が一人きりになってしまう大学には、事件解決まで休学させたいところだが、南方殺害の実行犯の絞り込みに手間取っており、捜査も長期化の兆しがあるため、やむなく登校を再開させた。

「伊佐崎警部は、寝てませんよね？」

「頭は冴えているから、心配しなくて大丈夫だ」

「いつからですか？」

「ここ二、三日、寝付きが悪くてね・・・」

伊佐崎は、この手の質問に答えるのが、あまり好きではなかった。相手からすれば、体を気遣っているのだろうが、この質問に続く言葉は「寝た方がいい」と、判で押したような返事が返ってくるからだ。

二人は、捜査一課に到着すると、田上課長が健吾に一瞥をくれたものの、何も言わなかった。

「田上課長、なんか不機嫌ですね？」

健吾が言うと伊佐崎は、自分の机からＩＣレコーダーを取り出して、そそくさと部屋を後にした。

「彼は、普段から不機嫌な顔をしているよ。君が上京して、一週間も過ぎたのだから、そろそろ良い顔をするのに、疲れが出てきたのだろうね」

「いつまでも、お客さん扱いは、しないと言うことですか」

「そろそろ、県警の方にもクレームが行くはずだ」

「いよいよ、時間が無くなりましたね」

彼らは、鑑識の相場が待機している捜査第二鑑識部に、依頼して

いた鈴子の携帯に残されていた音声データの解析結果を受け取りに来ていた。
「結論から言えば、音声データの再現が完璧ではありません」
「鈴子さんに忠告した男は、特殊な機械を使っていたのか？」
「そうですね・・・背景の音から、再現するのは、それほど難しくなかったのですが、携帯電話の受話音声というのは、ノイズがありますから」
相場は、パソコンから再現した音声を出力したが、声の主を断定するに至らなかった。そもそも、容疑者の候補が出揃っていないのだから、誰の声と照合して良いのかも分らなかった。ただ、少なくとも彼の知っている教会の牧師や芦木隆文の声とは、明らかに違っていた。
「この再現精度は、どれくらいだと考えて良いのかね？」
「抑揚や声の特徴は、十分に引き出せてますから八〇％でしょう。ただし、変声器を使って声色を変えている可能性は、否定できません」
相場は、自信がなさそうに俯き加減に言った。
「電話で激昂している声は、どこかで聞き覚えもある気がするのだが・・・」
伊佐崎は、電話の男が「肉欲に溺れた聖人、何百万人の命を奪った独裁者、彼らに遠く及ばない」と、早口で捲し立てる言葉を、つい最近に聞いたと思った。宗教家らしい口調は、教会の牧師だった気もしたが、彼らの脅し文句にしては、聊か安っぽい気がする。
「伊佐崎警部、この音声データを鈴子に聞かせてみましょう」
健吾は、相場から音声データをＳＤカードに移してもらうと、大事そうにハンカチに包んでポケットに仕舞った。
「それから頼まれていた公安部が入手した、例のＳＤカードですが、どうにか手に入りました」
相場は、教団に潜入捜査していた女性捜査員が、クシーベロ牧師から受け取ったＳＤカードの中身を手に入れたと言った。公安部自

前の鑑識班のセキュリティは、並みのハッカーならお手上げの代物で、彼のハッキング能力で入手したと思えなかった。
「協力者は、緒方くんかね？」
「彼のハッキングは、なかなかのものですよ。この事件が解決したら、技官候補で推薦しようかと思ってます」
相場から複製されたＳＤカードを受け取ると、伊佐崎の持っていたＩＣレコーダーに挿入した。公安部の女性捜査員が使用したＩＣレコーダーが官給品ならば、同じタイプのＩＣレコーダーで、限りなく実録のデータを再現することが可能なはずだ。
「公安部に宛てられたメッセージは、７トラックにあります。それより前のトラックのデータは、消去されており、復元できませんでした」
伊佐崎がＩＣレコーダーをチェックすると、確かに１から６トラックまで『ＥＲＲＯＲ』表示となっていた。単に削除されたデータなら、このような表示にならないので、クシーベロ牧師が復元できぬように細工したのが明らかだった。
「異教徒の牧師は、ずいぶんと慎重な男だな」
「ｔｒａｓｈ　ｂｏｘにデータが残らないように、わざとデータクラッシュさせたのでしょうね」
７トラックの音声データは、潜入捜査を試みた公安部に対する忠告と、特定の個人宛てのメッセージが残されていた。
『・・・これ以上、警視庁のイヌが嗅ぎ回るのなら、俺の計画にも支障が出るから、全面対決せざるを得ないんだわ。それでも捜査員を送り込んでくるのなら、次は容赦しないから、そこんところヨロシクね・・・。ところで、警視庁公安部のトップは、芦木さんだったかな？　確かアンタの両親は、教団の牧師だったはずだが、そんな理由で妨害工作を画策しているのなら、コソコソせずに俺のクライアントと話しては、どーなんだ？　俺たちは、歪曲された教義の押売りと、不自由な信仰が弊害となる偽りの平和、何の施しも寄越さない神様なんて、望んじゃいないんだぜ。アンタも神様を名乗り

たいのなら、まず礼儀を通すのが筋ってもんだろう』
　クシーベロ牧師は、笑い声をかみ殺すように話していた。異教徒の牧師と呼ばれる男は、教団の幹部に次ぐ役割をしていると、緒方が教えてくれたが、教団の教義に染まっていない者に、なぜ教団内での地位を約束しているのか。彼のクライアントとは、三課の黒羽ではなかったのか。
「この男の雇い主は、黒羽警部ではないようですね？」
　健吾が言うと伊佐崎は、口に手を当てて悩んでいた。
「鈴子さんにブラックスネークと口走ったのだから、黒羽に遠い人物ではないと思う・・・しかし、彼の雇い主は、芦木警視正よりも上の立場らしい」
「警視庁との対決姿勢を匂わせており、警察権力を敵に回しても恐れない人物です。もしかすると、殺された南方が、男の雇い主ではないですか？」
　大物政治家だった南方は、教団の出資者であり、彼のコネで潜り込ませた間者の可能性が高い。だが、南方が雇い主だった場合、大きな疑問となるのは、新宿の老人とまで呼ばれた信者が、なぜ教団内にクシーベロ牧師のような異端者を潜り込ませる必要があったのだろう。
　伊佐崎は、目を閉じると首筋を掌で叩きつけた。
「公安部の教団壊滅作戦の目的は、破防法適用による公安部の勢力拡大にあると、考えているわけですよね？　この忠告を聞く限りでは、公安部と別の組織が対立しているように感じるので、破防法適用を妨害する組織があるということですか？」
　健吾は、クシーベロ牧師が属している組織が、左翼団体とでも考えているのだろう。南方の秘書だった房江は、学生時代に左翼活動に熱心で、保守派政治家の看板を掲げていた南方も、平和活動を通じて裏で運動家ともパイプを持っていた。彼が公安部の敵対組織として、左翼地団体の存在を疑うのは仕方のないことだ。伊佐崎は「逆もある」と、一言だけ答えた。

「南方の導き手だった芦木文征が教団の牧師だったのなら、芦木警視正の教団への私怨とは、いったい何なのだろう。それに『強欲』を自宅に所持していた文征は、教団を裏切り者だった可能性が、非常に高いのではないかね？」
「芦木警視正に確認しますか？」
「まさか、そんなこと聞きに行けば、我々が島流しになるだけだ・・・私たちが嗅ぎ回っていると知りながら、黙って泳がせているのは、下手に動けば自分たちのボロが出ると、様子見に徹しているだけだ。公安部から動かない限り、無用な接触は避けるべきだ」
「そうですか？　犯人でなければ、話くらいできるかもしれませんよ」
健吾は、アッサリと言い返してきたので、伊佐崎は、思慮深さが足りないと思った。案の定、相場は、慌ててＳＤカードを返却するように言った。
「も、申し訳ないけど、データ流出が明るみになったら、僕の関与が疑われます」
「芦木警視正には、データ内容を公表して攻めるつもりなんてない」
伊佐崎は、健吾を睨み付けるように言ってから、ＩＣレコーダからＳＤカードを抜いて、手を伸ばしている相場に返した。
「文征と私怨の件は、麻子さんから聞いたことにすればいいですよ」
健吾は、ＳＤカードの内容を伏せても、確認することが可能だと主張した。伊佐崎は、健吾の実直すぎる考えに、頭の回転が鈍い男だと思った
「芦木警視正ではなく、先に確認する人物がいるだろう？」
「あっ、麻子さんですか」
「君と鈴子さんで、麻子さんに会ったとき、麻子さんが信用に足ると報告してきたが、その理由が単なる人物評価に留まっていた」
一週間前に伊佐崎が教団本部を訪ねたとき、岩壁兄妹には、麻子に会いに行くよう指示した。彼女は、意図的に情報を攪乱（攪乱）している節があったからだ。「七つの弾丸が全て使われた」と伝え

て、その様子を確認してきた健吾は、別段に変わった様子が無く無関心だったと報告していた。
「そうですね、最後の弾丸が使われて、もう新たな犠牲者が出ないだろうと伝えても、とくに驚きもしませんでしたよ」
「あのとき私は、鈴子さんの手前、彼女が関心を示さなければ、犯人ではないと言ったが、『伝説の弾丸』を研究していた彼女が無関心なのは、少し違和感があると思う」
「そう言われてみれば、多少の興味くらい示してもいいですね」
「それに彼女は、自分の祖父が牧師だった事実や、弾丸の系譜に『ロストした弾丸』が書き加えられていた事実も伏せている。まるで、文征が弾丸を欲していたのを隠すように、情報を隠蔽しているのだ」
「文征は、とっくに亡くなった人物ですよ？」
「いいや、文征が欲した二発目の弾丸は、南方のためだと推測できるのだが、彼女が伏せる理由は、自らも『伝説の弾丸』を欲していたのでは？　それが南方のためなのか、新たな所有者（はんにん）のためなのか解らないがね」
「あれですね、弾丸は二発ずつ所有されるべきだと・・・二発所有する意味は、よく解りませんけど」
「弾丸が二発必要な理由については、思い当るところもあるのだが、それを確認するにも、麻子さんに確認しておきたいこともある。鈴子さんに黙って、麻子さんに面会をするのは、忍びない気もするが仕方ない」
　伊佐崎と健吾は、駒込の芦木宅に、芦木家の教団に対する私怨を確認に行こうと、鑑識部を後にした。警視庁の正面入り口では、二課の梶谷女史が二人を待ち構えており、擦れ違い様に一冊のファイルを手渡した。
「一課に行ったら留守だったから、ここで待っていたのよ」
「このファイルは？」
「『正南会』と金銭面で関わりのある政治家と企業リストで、『新宿の救いの手』経由で動いた資金をピックアップしてあるわ」

「宗教を隠れ蓑にしたマネーロンダリングか？」
「これだけでも東京地検の連中は、動かせると思うけど・・・」
「資金の流れた先には、何があった？」
「ロシアから億単位で、何かを買い付けているわ。しかも、今も継続中なのよ・・・なんだと思う？」
「核爆弾でも買ってるんじゃないか？」
「・・・笑えない冗談ね」
梶谷は、健吾の肩を叩いて「三十郎を宜しくね」と、笑顔で去っていた。
「梶谷さんから受け取った物は、一体なんですか？」
健吾は、タクシーで芦木宅に向かう途中、ファイルに目を通している伊佐崎に尋ねた。
「田村が殺害されて、彼の多額の遺産が教団に寄付されたが、この事件が遺産（かね）目当ての犯行なら、教団の金の流れを掴んでおく必要がある・・・このファイルには、教団が政治家や企業のマネーロンダリングに利用されている実態が書かれている」
「不勉強で申し訳ないのですが、宗教法人だと無税ってことくらいしか解らなくって、どうやってマネーロンダリングに利用できるんですか？」
「教団は、教非課税制度を利用して集めた資金で、ブラックボックスとなっている海外（ロシア）の銀行と取引して資金洗浄を行う。集めた資金がまともな金なら、そんな手間のかかることはしないが、いわゆる裏金ってやつを集めて、表に出せる金にして還元してやるんだ・・・非課税の宗教組織は、総じて会計処理があまいからね」
「なるほど・・・そのファイルで、何か解るんですか？」
「少なくとも前任の神様が、弾丸の信奉者に与えた恩恵は、明らかになったと思うよ。そして、弾丸の信奉者が何を望んでいたのか、そんなことも見えてくるね」
「そのリストに書かれた政治家は、弾丸の信奉者ですか？」
「このリストにある政治家は、与野党問わず政党に左右されていな

いのが、すごく興味深いところだよ」
「『新宿の救いの手』は、宗教理念を掲げた政党がないですからね・・・どの政党に信者がいても、不思議なことではありませんよ」
「政党間に左右されない政治家が、じつは裏で繋がっているとすれば、少数で議会を運営することも夢じゃない。例えば、与党の法案に不同意ならば、与党の信者が反対して成立させなければ良い。逆に、野党の法案に信者が賛成すれば、可決させることも可能かもしれない」
「まぁ、確かに理論上は、各政党に信者がいれば可能かもしれませんね」
「現政権のように議席が拮抗していれば、ほんの一握りの票数で、議会を牛耳ることも出来る・・・それと悟られなければ、保守派政治家を演じていれば、少数野党に身を置くよりも有効だよ」
「南方は、与党の大物政治家ではなく・・・」
伊佐崎は、『七つの弾丸』により大勢を成したヒトラー率いるナチスについて、弾丸の奇跡を体現するに、もっとも弾丸の信奉者による神格化された存在だと考えていた。ヒトラー以降の所有者たちは、彼らナチスをモデルケースに、新たな神を作ろうと計画していると感じていた。
「信奉者が考えている神とは、やはり現実世界で権力を有する者だと考えているのだよ」
「それは、ラスプーチンやヒトラーが、そうだったからですか？」
「ヒトラー内閣が発足した当時、入閣したナチス党員三名だったので、保守派の政治家たちは、この程度ならば、革新的なナチスを抑制できると考えていた。だがヒトラーは、組閣後まもなく政権基盤を固めるために議会を解散して、次の選挙でナチス党が勝利して、独裁体制を強化していくんだ」
「それは、当時のドイツの民意が、ナチスを選んだと言うことですよね？」
「ヒトラー内閣では、プロイセン州内相に就任したゲーリングがい

たが、彼は、国土の過半数以上を占めるプロイセン州の警察権力を握り、ナチスの突撃隊や親衛隊を警察権力に浸透させた。三月に総選挙を控えた二月に、ドイツ国会議事堂放火事件が起こるのだが、このときヒトラーは「コミュニスト（共産主義者）の仕業だ！」だと叫んだそうだ」

「ヒトラーは、放火事件を敵対勢力に対するプロパガンダに利用して、選挙に勝利したんですね」

「この事件に深くかかわったゲーリングは、新政府に対する共産主義者の犯行として、共産党議員団長ら四名を逮捕した。そしてプロイセン州警察は、共産党議員や公務員の逮捕命令を出し、共産党系の新聞も発禁処分としている」

「ヒトラー内閣で警察権力を掌握されたのが、独裁の礎になってしまったのですね。警察権力の掌握と、政治力が独裁者を誕生させた・・・まさか、国家公安委員長が信奉者なんてことありませんよね？」

「本来ならば、南方を頂点にした独裁体制を目指していたが、それを老人が拒んでいた・・・新たな所有者は、老人のために用意されたレールを利用して、何かを企んでいるのだろう。このリストの情報は、貴重なものだが、犯人に直接繋がる物じゃない」

伊佐崎は、ファイルを無造作に仕舞うと、健吾の興味をファイルから逸らそうとした。ファイルのリストには、与野党問わず大物政治家の名前や、マスメディアの企業名が並んでいた。彼が最も注目したのは、ある医療法人の名前だった。東京都の医療法人は、警視庁が変死体監察で世話になっている団体だったからだ。梶谷は、この事実を知っていて、捜査に参加したに違いなかった。

「・・・なるほど、二課の権限を逸脱した事件だ」

と、伊佐崎が言うと健吾は、不思議そうな顔で覗き込んだ。

「殺人事件は、二課の範疇外だと言ったんだよ」

二人を乗せたタクシーは、芦木宅から数百メートル手前の本屋で停まった。

「ここで降りるぞ」

「どうしてですか、家の前まで行けますよ？」
「尋ねる理由が必要だからね」
伊佐崎は、本屋に立ち寄ると『宗教』と書かれた本棚の前で、宗教画の描かれた本を一冊購入した。『オステロフ』と書かれた本は、ロシアの宗教家が描いた画集で、立派な装丁をしていた。彼は、何ページが捲ると、その何カ所かに付箋を貼りつけた。
「麻子さんに、お土産じゃないんですか？」
健吾は、買ったばかりの本に付箋を貼る意味を尋ねたが、伊佐崎は「会うための小道具だから、余計なこと言うなよ」と、何があっても黙っているように口止めした。彼らは、芦木宅のインターフォンを押すと、在宅中の麻子が玄関まで迎えに来てくれた。
「刑事さん？　それから鈴子さんのお兄さんも？」
健吾は、胸ポケットから警察手帳をチラリと覗かせて、自分も刑事であるとアピールした。麻子は、その仕草にクスクスと口元を隠して笑った。
「何の用事かしら？」
伊佐崎は、先ほど買ってきた画集を見せると、頭を掻き揚げながら「ご意見を聞きたくて、お邪魔しました」と、困った顔をしてみせた。買ったばかりの宗教画の画集は、会うための小道具だと言っていた、事件のことを直接訪ねれば、警戒されかねないので吐いた嘘だった。
「その本は、ミハイル・オステロフの画集ですね。一九世紀末のロシア画壇における宗教的象徴主義の代表的な画家ですよ・・・どうぞ、お上がりになってください」
伊佐崎は、まんまと麻子の家に上がり込むことに成功すると、健吾にウインクをした。健吾は、彼の本質がペテンを弄することにあると感じて、素直に感心することが出来なかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6951u/

七つの弾丸

2011年10月20日03時18分発行